
武田信玄の欲望

雲流れ風安

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武田信玄の欲望

【Nコード】

N3434X

【作者名】

雲流れ風安

【あらすじ】

織田信奈の二次創作。オリ主が武田信玄の下にやってきた。どうなるこの人生？！

決戦！！設楽ヶ原！！

天正三年六月二十一日・長篠は設楽ヶ原したらがはら

「やれやれ、致命傷とは行かないが・・・大敗か。」

両手に長刀を持つ蜘蛛の兜をかぶる青年。名を武田、典厩、信繁と言う。甲斐を中心にする大大名・武田信玄の家族である。しかし、正史の武田信繁は川中島の戦いで戦死している。無論この青年は本物ではない。いや、この世界自体が青年の知る世界ではない。史実では織田・徳川連合軍が武田勝頼率いる甲州軍団を馬防柵を作り三千の鉄砲で撃滅して武田家に致命傷を与える戦いのはずだが、この青年が経験している戦いは織田・徳川連合軍が武田信玄率いる甲州軍団に一万五千の鉄砲と大筒二百をもつて包囲戦を行っている。

「オーバーキルつてか。」

そしてこの青年もこの世界に生きる人間ではない。本名を三条義信という本来なら平成の世を生きるはずであった。

「殿、いかがいたしますか？」

「決まっているだろう。俺達五千がここで遊ぶためにいるわけじゃない。」

「御意。」

部下に戦準備をさせる。それと同時に戦場から退き太鼓が響き渡る。「こつちにあわせてくれたのか・・・。そうでないか・・・。どちらか知らないがナイス判断だ。勝千代。」

蜘蛛をかたどった馬印に風林火山の孫氏の黒旗を掲げる。その間にも次々に味方が通り過ぎ武田領に退いていく。そして本隊もさがつてくる。

「おお、典厩殿！！！」

「修理殿か。皆は無事か？」

土や煙で煤や泥だらけになりながら話しかけてくるのは内藤修理亮昌豊。武田四天王の一人で抜群の働きをするのに勸状や褒美がなか

なかもらえない地味な将である。

「は、はい。お館様以下、主だった武将は無事ですが堀のほうは壊滅に近い模様です。負傷者としては山県殿と真田殿が重傷ですが命には問題はありません。」

「よし、このまま高遠に向かえ。数刻すれば高坂弾正と獅子殿が援軍に来るはず。」

獅子とは相模の獅子・北条氏康のことである。武田とは今現在では問題が無く同盟関係も良好である。

「し、しかし・・・お館様が・・・。」

「おおよそのことはわかる。あとはまかせるといい。勝千代のわがままにはなれているからなあ。」

ニンマリと重々しい雰囲気壊すように笑う典厩。内藤も安心したように部下をまとめに向かう。

「やれやれ。」

頭を二度二度掻き、もめているであろう本陣に向かう。

「あゝ・・・。飛んでいるな。」

本陣に着くと次々と味方の将兵が陣のそとに飛んでいく。信玄に投げられているのだろう。

「失礼いたし申す。典厩信繁まかりこしました。」

と、いつても聞いている人間はおらず中では予想通り

「ええい！！はゝなゝせゝ！！」

「・・・お館様！！落ち着き・・・ぎゃぴ！！」「」「」

暴れる信玄をなだめる将兵がいる。しかし力及ばず空へ昇ってしばらくして落ちる。

「おや・・・あゝ・・・かたさま・・・。」

四天王最強の馬場美濃守信房が羽交い絞めにしていながらこの惨状とはさすが武田信玄というべきか。

「信房、無事か。」

「てん・・きゅ・・。」「

「もうちつと早くしゃべれないのか？」

「う・・・ん・・。」「

「分かった分かった・・。」「

手を振りあきらめの意思を伝える典厩。言っていることは大体分かる。

「まあまあ、落ち着けお館様。」「

「あゝあゝ！！・・・て、信繁か。ちよつとまってる！！」「

「いい、いい。大体分かる。」「

その言葉を聞くとニンマリと豪快かつ美しい笑顔を浮かべる信玄。

「おお！！それなら話は早い！！殿は私に任せてい　　却下。

「なんだと！！！」

落ち着いたのもひと段落したのかまた信房を振り回し暴れ始める信玄。さすがに信房も目を回してきた。

「一番強い奴が殿を務めるのが当たり前だろう！！！」

「姉上。しかしながら総大将が殿などきいたことがりません。」「

瓜二つの双子の妹・武田‘逍遥軒’信廉が諫めるが信玄は

「ここにいろだろう。それに砥石崩れの時もあたしが殿をしただろう！！！」

「それでも姉上は甲斐武田家の総領主です。もしものことがあれば我々は空中分解します。」「

もつともな意見を言う逍遥軒だがそんなことは聞かない信玄。らしくも無く頭に血が上っているようだ。

「だったら誰が殿やるんだ！！！」

「俺がやる。第一なあ、勝千代。お前より俺のほうが強いだろうが。」「

コツンと頭を叩く典厩。

「それにな。俺の手勢五千は無傷の上やる気もある。最後に追手の織田軍の相良は俺の後輩だ。殺されることは無いだろう。な。」「

しかし信玄は反対する。

「い、いや。お前は客分つてあつかいだし、いまやってもいればあたしのほうが強いし、それに・・・えつと・・・それに・・・」
「はいはい、言い訳はいいだろう?」

「そ、そんなことは無い!! それにあたしの一番大事なものを!!」
「勝千代・・・。お前は勘助と弟の信繁を裏切るつもりか?」

「そ、そんなことはない!! でも・・・」
「子供みたくないことを言わない、言わない。約束は守るんだろう? さつさと行った行った。」

クイツとあごを動かすと向こうに砂埃が上がる。織田の追手だ。金の千成瓢箪の馬印だ。

「な。相良だろう? だったら俺に任しておけばいいの。わかった。」
それでも食い下がる信玄。

「それでも!!」
「でも。も、かも。も無い。必ず躑躅ヶ崎に戻るから待つてなつて。」

「でもでも・・・うぐつ。」

躊躇の無い手刀を首筋に入れる。そして唇に軽く口付けをして逍遙軒に

「あとは頼む。戻れなかつたら勝頼にまかしてあるから、な。」

「いいのですか? 姉上は典厩殿・・・いえ、義兄上が帰ってこなかつたら自我を失いかねません。」

「だいじょうぶ!! そんなに弱い頭首かい・・・。」

「かならず戻つてきてくださいよ。義兄上。」

「はっはっは。お兄さんに任せないってね、行った!! 行った!!」
はっはっはと笑い続けながらグイグイと陣からみんなを追い出す典厩。皆を追い出したあとに味方を陣中に集める。

「さて、皆々。貧乏くじを引かしてしまつたな。」

「いえいえ、そんなことはありません。」

「そうです。お館様と御子を守りきつたとなれば御家や後世に名が残りましょう!!」

部下達は覚悟を決めているようだ。ここで何か言つのは野暮というものだ。

「うつし!!なら・・暴れるだけ暴れたら逃げますか!!」

「○○○○おおう!!」「○○」

部下達は笑いながら武器を構え敵を迎え撃つ体制に入る。正面だけで敵は少なくみても二倍。

「さあ!!行きますか!!!!」

騎兵を駆り敵陣に突撃する典厩隊五千。

(やれやれ、まあ生きては帰れないだろうが・・がんばりますか!!!!)

典厩の敵との衝突までのわずかな時間、いままでであったことが頭の中に駆け巡った。

タイムスリップ！！変な戦国時代へ！！（前書き）

基本的に主人公は強いですが作戦立案能力とか中途半端です。

タイムスリップ！！変な戦国時代へ！！

「よいつしよ〜と！！」

道のない山々を後ろに大きな、とても大きなリュックサックを背負った坊主の黒衣の青年。名を三条 義信という。なぜこのような場所にいるかといえば家庭の都合としか言いようがない。

「次は甲州流の道場か……。やっと山梨か。ながかったな。」
ズシズシといった足音で山を走破していく義信。約一年をかけて九州は鹿児島から東京を目指して身内の各道場を倒していく三条家の代々の修行を行い、そろそろ約一年をかけてやっとこさ山梨県に到着した。

「あの親父・・・帰ったら覚えていろよ！！」

今思い出しても頭にくる。高校三年になる前日に目が覚めてみたら鹿児島に分家にいた。分家のおじさんに手紙を渡され読むと、

「全部の分家を足して山道を越えて帰って来い。」

b y 親父」

とだけ書かれたただけだった。家に電話したが帰ってこいの一点張りだった。自分の悪い癖とはわかっていながら意地になりこれまでやってきたが次が終われば親父をぶちのめせると喜ぶ義信だったが気を抜いたのが悪かった。

スルッ！！

と、足下がすべりすごい勢いで山肌を落下していく。そしてそのまま谷を流れる急流に

「ダ〜イブ！！じゃねえ！！たすけ・・・おぶう！！がぼう！！」

叫ぶ義信だったが道から外れている上に深い谷底で叫ぶ声など聞こえはしない。

「ぐぼぼぼぼぼ・・・」

そのまま沈んでいく義信。そしてそのまま意識を失った。

「姉上……。あの、父上も本意で言っただけでは……」

武田家次女・孫六は悲しむ姉・勝千代を慰めようとするが言葉がない。

「いいのよ。父上はあたしに対してあまりいい感情は持っていないわかつている。次郎が生きていればよかつたのよ。」

勝千代は齒をかみ締め感情を押し殺す。今日、たつた今しがた武田家長男・武田次郎信繁の葬儀が終わつた。しかし、その葬儀の終了後すぐに勝千代と孫六の父であり武田家頭首の武田陸奥守信虎がこともあるうに勝千代に対して、

「これでよかつたであろうが勝千代よ！！これで邪魔者が消え、貴様が次の頭首となる算段が上がつたのだからな！！」

と言い放つたのである。このとき家内にはこの突然死を勝千代による毒殺との噂があつたのだ。それを真に受け信虎はそう言つたのだ。そして家臣の大半がそれを信じ勝千代を責め立て陰口を叩いた。

「姉上……。爺隊が心配いたします。そろそろ恵林寺に……」

「いや、いい。しばらくここにいと爺達に申しておけ。」

一言勝千代に言おうとする孫六だが、それを見越して手で制す勝千代。

「分かりました。姉上。」

頭を下げる寺に戻っていく孫六。寺に入るのを確認すると同時にドン！！と地面を踏み締める勝千代。周りにある木々が揺れて大量の葉を散らす。

「次郎。お前の好きだった紅葉の代わりだ。色がまだ青くてすまないがな。お前が生きていれば、姉上力ずくはいけません。というの

だがな。」

墓に手を当てて泣き声をあげずに涙だけを流す勝千代。あしたからは勝千代ではなく晴信として公式の場に出なければならぬ。そしてこの陰口が消えるまで耐えなければならぬ。

「・・・・・・・・」

一通り思い出しに浸り気にしないように使用とするがしようとするほど涙が止まらない。

「誰だ!!」

チャプチャプと水辺から物音がしてそちらを振り向く勝千代。そこには体中に擦り傷を負った自分より一、二歳年上の男性がいた。警戒しながら近づく勝千代。なにせ名門で甲斐国主を務める武田家の子供である自分を暗殺しようとする人間はたくさんいる。もしかしたら父上が放った資格かもしれない。

「だ、だいじょうぶか?」

足先でつつくとうめき声が返ってくるだけで何の反応も示さない。

「お、おい!!だいじょうぶか?」

次はしゃがみこみ手でゆするが反応はない。体を返そうとするが背嚢が邪魔で返すことができない。小刀を使い背嚢の掛け部を切り、体を返すと枝が数本腹と肩に刺さって出血していた。あせった勝千代は

「おい!!誰かあるか!!誰か!!」

と大声で近くに誰かいないか声をかける。するとすぐに初老の男性が一人やってきた。勝千代はその顔を見て安心する。彼女の御守役の一人だからだ。

「姫様。なにかありましたかな。」

「よくきた、高白斎。これを見よ。」

駒井高白斎、武田信虎の軍師を勤める名臣で勝千代の味方でもある彼は傷の状態を見るとすぐさま小物と呼ぶ。

「高白斎様、お呼びで。」

「すぐさま徳本先生を呼ぶのだ。至急じゃ!!」

「御意に……。では……。」

小走りでかけていく小物を見送り高白齋は

「姫様。この者はすぐさま、この爺の屋敷に運びます。姫様はこちらで板垣殿と甘利殿とともにお屋敷に帰られませ。」

「いやだ。」

間髪いれずに断る勝千代に啞然とする高白齋。

「し、しかし、姫様にこのような者の心配をなされては……。」

「いやだ。あたしが見つつけて助けようとしたのだ。最後まで責任を持つ。」

「そのお覚悟は立派かと存じますが、しかしながら……。」

「そのものを運ぶのはあたしがやる。よこせ。」

高白齋が手に持っていていた男を着物を地や泥や水で汚れようと背中に背負う勝千代。それをみて大声を上げる高白齋。そんなのを気にせず高白齋の家に向かおうとする勝千代。

「お、お待ちください。姫様!！」

それをあたふたしながら追っておく高白齋。

タイムスリップ!!変な戦国時代へ!!(後書き)

少し短いかもしれない。かんばって書いていきましょう。

貞操の危機！！・・・そして大立ち回り（前書き）

現在オリジナル小説休止中の作者です。指導が終わり次第復帰します。

貞操の危機！！・・・そして大立ち回り

「む、むう。」

傷が痛むのかうめき声を上げる男。それを見て勝千代は布で額についた汗をふき取る。血まみれ泥まみれだが気にしない。一心不乱で看病を続ける。

「徳本先生、患者はこちらです。」

「そんなに急かさなくてもいいじゃないか。」

守役の駒井高白齋がふすまを開けて大柄の先生を連れてくる。彼は関東一円にその名を響かせる名医、名前を永田徳本という。

「うほっ！」

「先生？」

「いや、なんでもない。」

手を引き患者の側に徳本先生を連れて行く高白齋。早速診療を開始する徳本だが

「鍛え上げられたこの背中・・・・・・・・。そして、このそそるような足。なんていい男じゃないか・・・・・・・・。」

男好きという困った一面がある。

「せ、先生？彼の者の傷は足や背中ではなく腹と肩なのですが・・・・。」

恍惚として上気した顔をしている徳本に疑問の声をかける高白齋。

勝千代は水を取りに行っているため現在は離席中。

「なにを言っているだい。これは触診でれっきとした診療だよ。」
と、言いつつも男の腿や首筋を撫でまくる。そのたびにうめき声を上げて顔を悪くする男と興奮している徳本。

「このムチムチしたケツ・・・・・・・・。たまらない！！！」

「せ、先生、やはり診療には見えないのでございますが・・・・・・・・。」
男の尻に手を伸ばさうとした徳本を諫めようとしている高白齋だが
そんな事は気にせず手のひらが尻に・・・・

「あたしの部屋で怪我人に！！なにするか！！！！」

「おほう！！」

勝千代が水を満杯に入れた木タライを投げつける。徳本は叫び声を上げひっくり返る。そして水を浴びてびしょぬれになる男と徳本。

「まあ・・・傷のほうは軽いものだ一週間もあれば傷はふさがるよ。」

「

頭に大きなたんこぶを三つ作った徳本がまじめな顔をして勝千代に告げる。たんこぶの原因は木タライと診察の途中で盛ったため拳骨が二発だ。

「で、いつ目覚める？」

先ほどまでおとなしい格好をしていた勝千代も現在はもしものために備えて胡坐で待機している。

「そんなに身を構えなさんな。まあ、遅くても二日ほどは見えておいてくれ。早ければ今日の夜にでも目が覚めるだろう。」

「本当だろうな。」

「俺はいい男のことについてはうそはつかないさ。診療代金はいつもどおり十八文いただこう。」

高白斎から十八文もらうと薬を渡して屋敷から去っていく徳本。男の貞操は守られた。

「姫様。あとは爺に任せて服のほうをお召し返り下さいませ。」

パンパンと手を叩いて女中を呼ぶ高白斎。しかし勝千代は

「いや、この男が目覚めるまであたしはここで看病している。」

「し、しかし姫様。・・・わかりました。」

この姫がわがままを突き通すことをよく知っているため諫めることをやめる高白斎。変わりに

「お聞きしてもよろしいでしょうか？」

「なんだい。」

「なぜこの男にそのようなまで世話をいたします？」

理由を聞く高白斎。返ってきた言葉は

「次郎がな、次郎が生きていたならこういった流人坊主の男でも縁
とって世話をしただろうと思つてな。」

すこし遠く寂しい目をして勝千代が話す。

「分かりました。しかし姫様、護衛として御側衆を二名おいておき
ます。これだけは了承いただきませぬ。」

「わかった。勝手にせよ。」

勝千代の言葉に、では。と、返し部屋を出る高白斎。外に出ると同
時に女中に護衛をつれてくるように命じている。

「やれやれ。過保護だな。この甲斐では私は一番強いというのに。」
と、言いつつ心配してくれる者が少ない勝千代にとってはその心遣
いが嬉しかった。

そのまま夜は更けて月もない深夜になる。

「くっ、うつ~~~~」

鋭い痛みを感じ目を覚ます義信。周りを見渡すと真つ暗で何も見え
ないが周りに人の気配もない。体を確かめると傷の手当てがしてあ
り服も綺麗に換えてある。誰かが看病していたのだろうか。そう思
いつつ尿意を覚えてゆっくり立ち上がる。腹に鋭い痛みが走るが我
慢できないほどではない。歯を食いしばりつつ壁に手をつきながら
ヒョコヒョコと人を探す。

「ふう・・・ふう・・・」

浅い呼吸をしながら大きな屋敷に驚きつつ歩き回り厠にたどり着く。
(失礼だが使わせてもらうか。)

と、さつさと用を済まして厠を出て家人探しを続けようとする

「む、何者だ？家中では見ぬな？」

大柄の老人とであったため挨拶とお礼を言おうとするが

「うつ・・・うつ・・・おおお。」

と舌が回らない上に声が出ない。怪訝な顔をする老人に敵意がないと手を上げようとするがその行動が飛び掛ろうとするように見えたのか。

「おのれ！！曲者か！！」

腰に在った脇差を抜き放ち、お決まりの

「出会え！！おのおの方！！出会え！！出会え！！」

とセリフを言い放った。するとどこからかともなく何人もの侍が出てくる。

「どうしかましたか？ご家老殿！！」

「曲者じゃ！！姫様の命を狙おうとしておるに違いない！！斬つて捨てい！！」

その言葉に一齐に刀を引き抜く侍たち

「むがももが！！」

手を振り誤解を解こうとするが侍どもは気にせず切りかかってくる。

「でええええ！！」

「きえややああああ！！」

ヒュンヒュンと風を切る音が耳元に届く。一生懸命よける義信。

「ええい！！やるな！！」

「あ！！逃げたぞ！！増援を呼ぶのじゃ！！甘利殿にも伝えい！！」

「追え！！追え！！」

腹や肩の痛みを感じさせないほどの勢いでふすまを開けて逃げ出す義信。後ろからはふすまなど気にせず次々になだれ込む侍たち。

（何かないか？何かないか？）

ピンチの時の青いタヌキロボットのようにな一生懸命逃げながら周りを見渡す義信。すこしでも動きが鈍ったら刀でズンバラリンだ。

「ええい！！逃げ足の速い！！」

「槍隊がそろそろ到着いたします！！」

などと後ろから相変わらず物騒なことが聞こえる。次のふすまを開ける義信。するとそこには刀の大小が置いてあった。思わず飛びつき奪う。腰に刀を指し込みさらに次のふすまを開けて外にでる。

「もももああもあ!!」

後ろ振り向いて手を振ってもう一度敵意のないことを示そうとする殺気立った侍たちにはまったく意味がない。

「観念したか!!」

「姫様に手を出そうとしたものを許すわけにはいかぬ!!」

まったく聞こうとしない侍たちにさすがに勘袋の緒が切れた義信は刀の大刀を引き抜き左八双に構える。

「やはり刺客か!!」

「その首貰い受ける!!きえええええ!!」

切りかかる侍二人に対して左八双から左半身を前に出すように脇構えにゆっくり構えなおす。そして逆袈裟にしたから一撃を一人目に、そして上がりきった刀を振りぬくように構えなおし右足を前に出し踏み込みながら二人目を打ち倒す。

「もあつもももあ。」

安心しろ。骨折程度だ。と言いたかったが言葉が出ないため途中で言うのをやめた。それを挑発と受け取ったのか次々に更に殺気立つ侍たち。

「おお!!」

「着てくださったか!!」

歓声が上がリ侍たちが次々に道を開けていく。そして眠そうな長身の女性と口元が愛らしいとても小柄な女性が出てきた。

「どこの刺客は知りませんが言葉もしゃべれぬ者を送り込むとはよほどの念の入れようですね。さすがは勇猛で名を鳴らした甲州武士とでも言いますか。それほど要人が恐ろしかったのでしょうか?」

「か。も。ね。。」

「これでは依頼主が誰か分かりませんね。なら斬り捨ててあげるのが情けといえるでしょう。飯富源四郎昌景、参ります!!」

「教来。石。民部。景政。いく。。」

二人が同時に攻めかかる。義信は青眼に構えなおし、すぐさま下段

に直す。そして槍と大太刀の連続攻撃をいなし始める。

「なかなか・・・やりますね！！こちらも本気で参ります！！景政、続きなさい！！」

「お・・・お・・・お・・・」

さらに速度と威力が上がり義信が持つ刀が情けない音を上げて折れる。すぐさま脇差を抜き防ぎはじめるがリーチと重さ、速度にすべでで負ける義信はどんどん後退して土壁までおいつめられる。

「もうあとは有りませぬ！！覚悟！！」

「や・・・」

ふたつの武器が迫る中で義信は脇差を昌景に投げつける。とっさに払った昌景を無視して鞘を引き抜き景政に向かって突っ込む。そして大太刀を真剣白刃取り。

「お・・・お・・・」

眠そつな目を一杯に開いて驚愕をあらわす景政。そして一步踏み込み加減無しの拳を鳩尾に入れる。そして崩れかけた体に対して首筋に手刀を一撃。意識を刈り取る。そして手にあった大太刀を奪い取り装備する。

「な！！景政が！！」

すこし怯みながらも体全体の力と重さを入れて槍を振りぬく昌景。防ぐが思い切り衝撃を受けてしまい肩と腹の傷が開き出血が増える。「怪我をしながらもその動きとは感服します！！ですがこれで終わりです！！」

槍を左手で支えながら右手で刀を引き抜き首を刎ねようとす。

「があああああ！！！！」

出血などお構い無しで義信は大太刀をやりもろとも吹き飛ばす。恐ろしい馬鹿力だ。それでもヒラリと着地する昌景。

「すばらしい！！あなたが味方ならどれほど心強いか！！しかし・・・

・・・その出血では力も入りますまい！！」

止めと言わんばかりに槍を大上段に構えて振りぬく昌景。それにたいして義信は左八双に構えなおす。そして先ほどと同じように左半

身を前に出すように脇構えに移動する。そして逆袈裟に下段から振り上げる。

「甘いですよ。二度も同じ技を使わぬことです！」

軽くよけられるがよほどの自身と信頼がなければ最後の一撃は任せない。一念を籠めて先ほどの倍以上の速度で振り下ろす。

「えっ！！」

と、驚く声を上げるまもなく刀が額に吸い込まれ昌景は気を失った。この二段構えの攻撃は得意技の一つで名を雲竜剣と言う。

「はあはあ・・・」

大太刀を杖にして体支える義信。全身は血まみれだ。もう気力も体力もない。次がこられたら赤子でも間違いないと斬られるだろう。そう思っている

「なんの騒ぎか、これは！！」

「あ、晴信様。実は曲者が！！」

「それは爺から聞いておる。いつまで掛かっておるのだ。」侍たちの後ろから先ほどの騒ぎの原因になった老年の侍を引き連れた長髪赤髪の少女・勝千代が現れ義信を見ると周りの侍を見て

「どういふことか！！！！」

と大声で吼えた。腰を抜かす侍たち。うつけ、うつけと甲斐の国中に響き渡る気まぐれ姫の声ではない虎のような大声だった。

「爺！！どういふことか！！」

その剣幕に長い年月この少女を育ててきた板垣信方も言葉を失った。それと同時にドサリと何かが倒れた。後ろを勝千代が振り返ると血だまりとまではいかないがかなりの出血をして気を失っている義信と出血はないが同じように倒れている御側衆が二人いた。それで正気に戻った勝千代は医者を呼ぶように大声で言うのだった。

貞操の危機！！・・・そして大立ち回り（後書き）

三話です。私から見た武田信玄（信奈ver）はこんな感じですよ。

新しい名前・・・そして契約(前書き)

家の付き合いって大変ですね。・・・大事なのは分かるんですけど。

新しい名前……そして契約

倒れてすぐもう一度部屋に運ばれた義信は文字通り四六時中、勝千代に見張られ看病されていた。義信としては美しい女性に看病されるのはやぶさかではないが、まったく見知らぬ場所で何時なのか分からない上にたまにくる老人二人の殺気が恐ろしくて養生どころではなかった。声のほうも徳本先生の見立てにより腫れ上がっているだけとのこと。

「なおらなかつたらゆっくり家に来なさい。みっちりねっちり看病してやるよ。」

などといわれ背筋が違う意味で凍ったため首を振り続けたりもした。そのまま数日がたち

「あゝ……ガラガラガラ……ぷっ!!」

のどにたまった膿を洗い流し発音練習をする義信。水場まで勿論護衛+勝千代つきだ。

「ごほごほ……。うんん!!よしよし。」

「声は治ったみたいね。体のほうはどう？」

「少しばかり痛いけどまあ、日常生活には問題はないです。」

「そう、何かほしいものはない？」

親切にしてくれる勝千代に対して先ずはお礼を述べる。

「いろいろご迷惑をかけたことに申し訳ございません。看病していただきありがとうございます。」

「好きでやったんだから気にしないで。こっちも迷惑をかけたからお互い様と言うことで……。」

と、まあ、遠慮のしあいになってしまったが最終的に義信が折れた。そして部屋に戻ると

「自己紹介がまだだったね。私の名前は武田勝千代晴信。勝千代でいいよ。年は十五。」

「????……武田?」

「甲斐の国主をやつてるから結構有名だと思つたんだけどヤツパリこの田舎じゃ、あまり知られてないのかな？」

「もう一度聞いていいか？あなたは武田晴信でいいんだよね？」

「勝千代でいいって。まあ、元服したのもちよつと前だから知られていないけど武田晴信だよ。あたしは……なんだ？その顔は？」

頭を抱える義信。質問をもう一つした。

「いまは何時だ？」

「何時つて、たしか……弘治三年の七月だけど？」

「もう一度聞く。確かに弘治三年なんだな。じゃあ、平成つて聞いたことがあるか？携帯電話でもいい。」

「なんだそれは??？」

聞いたことも見たこともないような反応をする勝千代。そして義信は大声で

「タイムスリップなんあるのか〜い!!!」

と叫び勝千代は驚き後ろにひっくり返る。

「な、なに??」

「なんでもないよ。あとおかしな話をするけど聞いてくれるか？」と、前置きをして自分たちの世界のことや自分の知ってる歴史と違うと言つことを説明する。無論浅いところだけだが……。それを驚き、ときには呆れたように反応する勝千代。

「……と、いうことなただけど。」

「へえ……私はあんたの世界では男なんだ……。おかしな感じだね。」

あっさり一言だけ話す勝千代。その反応には義信のほうがびっくりした。

「え?……それだけ??」

「?……なにか。ぎゃ〜!!とか、わ〜!!とか驚いたほうが良かったの??」

「い、いや、あっさりしていたものでつい。」

足を崩し胡坐をかく勝千代。たまに見える艶かしい足が目にも毒だができるだけ気にしないようにしながら話を続ける。

「それで、あなたの世界のあたしの兄弟っているの？子供って？」

「えっと・・・たしか・・・」

次々に兄弟や子供の名前を挙げていく義信。

「あつと。最後に忘れちゃいけないお人がいた。武田典厩信繁。」

その名前を聞いたとたんに時間が止まったように固まる勝千代。

「ん？どうした？」

「い、いや。なんでもないよ。はははは・・・。そういえばあなたの名前聞いてなかったね。あたしだけ名乗らせる気じゃないだろうね。」

一瞬さびしい顔をしたかと思っただが気のせいかと名前を教える義信

「三条義信っていう名前だ。」

「三条？三条って都にいる公家の三条様？」

「いやいや、先祖代々水飲み百姓らしいから公家なんかじゃないよ。未来に明治って元号ができるんだけど、そのときにこの国の人全員に苗字が与えられたんだ。そのときにつけたらしい。」

「ふうん。でも三条って名前じゃこの甲斐の国じゃちょっと難しいな・・・。」

「なぜだ？」

「だって武田家と三条家って縁続きで付き合いも多いからもし名前がばれて騙りだって誤解されたらコレになるよ。あとで新しい名前でも考えてやるよ。」

「どうも、楽しみにしてるよ。へんな名前はつけないでくれよ。」

手を首筋で横に振り首が飛ぶと説明する勝千代。さすがに青くなりどうしようかと悩む義信。

「なあなあ、あなた未来から来たって言ったよね。なんか面白いものなんかあるの？」

「ちよつと待つてる。えつと・・・ここか？」

部屋に持ってきてあった特大リュックサックを漁り中から数点出す。

「なんだこれは？箱？」

「インスタントカメラっていうものでえっと、綺麗な絵を一瞬で作るカメラクリ。」

「へえ・・・やってみてくれ。」

ニヤニヤしている勝千代にインスタントカメラを向けてスイッチを押す

「うわ！！」

フラッシュはたかれ驚く勝千代。そしてニョキッと写真が出てくる。写真を振って冷やして渡す。

「どうぞ。」

「へえ・・・綺麗だな。まだ撮れるか？」

「まだ撮れるけど次の物品の紹介が終わってから。」

使いたくてウズウズしている勝千代だが今はおさめてもらう。義信はさすが鉄砲を関東で最初に城に配備した武将だな。っと少しばかりズレた感想を考えていた。

「次はコレ。」

「なんだコレは？袋？紙にしてはプヨプヨしている・・・。」

取り出したのはウエハースのポリ袋。バリバリと袋を破ってウエハースを一枚差し出す。

「・・・食わないのか？」

しげしげと上下左右から見る勝千代。そして

「どう食べればいい？」

「・・・バリッと齧って。」

覚悟を決めて食べる勝千代。口に含み数度噛むと目を見開き

「甘い！！美味しい！！もつとよこせ！！」

と手を出して要求してきた。十枚ほど渡したがあっという間に平らげた。

「ほかには何かないのか？こうビックリできるような、派手な！！」
すっかりこの道具たちの虜になっていく勝千代は幼子のように次は次はとせかす。義信も面白くなってきて次々に出していく。大抵紹

介し終わり最後に

「次はコレ。特大クラッカー。」

「喰らつかー？」

「食べ物ではないよ。ちよつと離れていな。」

素直に部屋の隅に下がる勝千代。そして特大クラッカーを引く

バアン！！！！！！

と大きな音が響く。勝千代は驚いて猫のように飛び上がる。そして何事かと多量の兵士がやってくるが

「なんでもない。さがってよい。」

という兵士たちはさつさと下がっていく。

「どうだ。ビックリしたか？」

「おお、おもしろい。どんどんやってみよう。」

「やめとけ。」

数に限りがあると諫めて最後のトリは日が暮れてからと説明して。

次はこの世界のことを教えてもらった。色々な状況・勢力・文化など。そのまま時間が過ぎていき日が暮れて夜中になる。

「じゃあ、夜中にコレだ。」

「花火？なんだそれは？」

きょうは二人とも疑問符の応酬だった。

「火は有るか？」

「無論。少々待っているがいい。」

そういつて勝千代は火打石と着木を持ってきて着木に火をつけて渡す。

「一間（約二メートル）ほど下がってるよ。」

花火に火をつけるとパツと美しい火が飛び散る。次々に色を変えていく花火に感動して言葉も出ない様子の勝千代。そして最後に大きな筒を持つてくる。

「上を見ているよ。」

火をつけると筒から花火が撃ちあがり三尺とまでいかないが大きな打ち上げ花火が満開の花を咲いた。

「どうだ・・・で、どうした？泣いて？」

「い、いや、なんでもない。」

グシグシと涙を隠すようにうつむきながら問うてくる。

「お前は何時までここにいるつもりだ？」

「何時までって言われても戻り方が分からないし何かの縁だからここに世話になるしかないだろう？それに多少商才と武芸の才はあると思うから役に立つと思うが。」

「そうか。ならお前はあたしの副将に、家族になれ。」

「は？信げ・・・いや、晴信にはたくさん将がいるだろう？」

「おらんのだ！！あたしが頼れるのは勘助と民部、そして孫六だけだ。爺たちや昌景でさえ父上を恐れて味方になってくれん。他のものは論外だ。誰も彼もがうつけうつけという。もともと当主になるはずだった次郎ももういない。」

義信は信玄が幼少のころ荒れてうつけと呼ばれていたことがあったのを思い出した。いまの勝千代もそうなのかもしれない。

「・・・わかった。できるかぎりやれることはやってみよう。」

義信はやってみたくなった。この綺麗で物悲しい少女が戦国最強の大名になれるのか。と、そしてこの信玄が天下を取れるかどうか。いまは名文はコレでいい。いずれ何か分かり悟るとだろう。と。

「なら今日からお前の名前は武田典厩信繁だ。これからお前のごことは典厩とよぶ。勘助と孫六。そしてお前が居るときだけあなたは勝千代になる。それ以外は晴信として次郎の代わり、いや次郎以上の将になつてやる。」

「かしこまりました。お館様。武田典厩信繁、お名前を謹んで頂戴いたします。」

この名前をいただいたことにより自信を慕ってくれた兄弟のような後輩、そしてその伴侶と血で血を戦いになるとは義信は思ってもいなかった。

新しい名前・・・そして契約（後書き）

無理矢理感MAXと、言い訳しながらの第四話っす。

初顔見せ！！・・・天魔外道参上。
(前書き)

顔見せプラス新キャラ登場です

初顔見せ！！・・・天魔外道参上。

傷が治るまで部屋に押し込められた義信はただ寝ているだけであったが、退屈というほどではなく書物や字を教えてもらうなどして時間を友好的に使うこともできたためあつという間に二週間が経ち傷も治り家臣たちに顔見せを行うはずであったが

「・・・なんだその道具は？」

いきなり部屋にやってきた勝千代は両手一杯に袋を抱えており部屋に着くなり袋の中身を引つ張り出した。

「ああ、勘助から借りてきた変装道具だ。客人扱いだけど、さすがに屋敷で大立ち回りをした者を簡単に使えさせるわけにはいかないから顔や体形変えてごまかすつてこと。」

「で？なぜ俺はグルグルまきの簀巻きにされて固定されている？」

「逃げはしないと思うけど嫌がると思ったから。あとあたしがやりたかったからやった。さて、動かないでくれよ。」

嫌がりながらも動かずにいる義信であったがさすがにくすぐつたい。それから数十分は経つただろうか？

「こんなものかな？どうだ？」

「ふむ・・・。」

失敗を重ねて二人で話し合いながら完成したのは包帯で目元と口元だけを出し、出ている肌には火傷痕のような薬を塗りその上から頭巾をかぶることだった。

「鉄化面でもいいでしょう？」

と、勝千代は言ったがさすがに重くて生活に難があるため却下した。

「あとは声を変えるだけだ・・・。」

「それについては問題はない。なぜなら俺は・・・変声の名人だからだ！！！」

ピシッと勝千代を指差し腹話術や変声術を試していく。

「す、すごいがそんなものお前の世に必要なのか？聞いているとこ

るだけでは平和そのものらしいではないか。」

すこし恥ずかしそうな顔をして義信が

「かくし芸大会のときに・・・」

といったときの大爆笑した勝千代は忘れない。忘れてなるか。

「まあ、いいか。」

やつとこと笑いを止めた勝千代は本題に戻る。

「コレでお前は武田典厩信繁だ。」

「おう。いいぜ。」

「これからあたしのことは晴信様か、新館様と呼ぶこと。」

新館とは跡継ぎのことで新しいお館様の意味でもある。

「かしこまりました。晴信様。」

「いいぞ。お前のことは典厩と呼ぶからな。間違っても人前で信繁

とは名乗るなよ。」

念を押す勝千代、もとい晴信。

「それでこれからどうするのでございますか？晴信様。」

「これから勘助に合流して二人を躑躅ヶ崎の本館で評定があるから

そこで紹介する。」

「いきなり出して大丈夫か？勝千代の立場は結構危ういんだろう？」

「言葉！！言葉を直せ。それがどうした。次郎のためにも勘助との

約束のためにここで退くわけにはいかない。次郎以外に家督は渡さ

ぬ！！！」

「精一杯、後押しさせていただきます。」

晴信が部屋を出ると三歩ほど間を空けて後に続く典厩。そのまま馬

屋について馬に乗ろうとするが

「どうした？乗らぬのか？」

「・・・・・・・・」

「まさか。乗ったことがないのか？」

コクリとうなづく典厩に思わず頭を押さえる晴信。晴信はあれほどの武芸の腕があるなら馬術ぐらいは学んでいると思っただが典厩はまったく馬に乗れなかった。しかたなく大型アラブ馬の愛馬・黒駒か

ら手を伸ばす晴信。

「掴まりな。後ろに乗せて行つてやる。」

手をつかみ後ろに乗る典厩。そのままゆっくりとパカパカと屋敷を出て躑躅ヶ崎の館に向かう。

「そういえば勘助殿とはどこで合流するのでございますか？」

「このふたつ先の落合で合流することになっている。そこにいるぞ。」

指差した先を見ると隻眼で足を悪そうに引きずる老年の男がいた。

「勘助め。馬に乗ってまっておればよいものを……。」

「それではしめしがつかないと思っておるのでございましょう。では……。」

馬から飛び降り駆け足で勘助の下に合流する典厩。

「お初にお目にかかります、私、武田典厩と申します。山本勘助殿でよろしいでしょうか？」

「……む。お主が晴信様が言っておった典厩殿か。挨拶はいらぬようだ。これからは同輩として気軽に勘助と呼ぶがいい。」

「なれば私も典厩でかまいません。さあ、馬にお乗りください。馬の手綱は晴信様の馬と両方、私が引きましよう。」

どうぞどうぞ。と勧められさすがに勘助も断るのはまずいと思い、馬に乗り晴信を待つ。

「おお、勘助。よく来てくれた。」

「拙者は殿の器量を見込み、殿もまた見込んでくれもうした。そのご恩だけでも返すに困るものをこのような表舞台に連れて行つていただけの喜びは素晴らしく存じます。それに……。」

典厩の方を見て勘助は

「天命を知り助ける者を従えておられるのです。断る理由はありませんでしょうか？」

「そうだな、お前たち二人には両輪としてしっかり馬車馬のごとくしたがってもらうからな。」

「ははっ」

典厩が手綱を引きながら和気藹々としながら館に向かっていく。しかし、いざ館に着くと雰囲気は霧消する。

「な、なんだ、このおどろおどろしい雰囲気は……。」

「聞いていたとはいえ恐ろしき氣の流れでございます。」

緊張からは唾を飲み込み冷や汗をかく二人。それ以上に黙り込み冷や汗をかく晴信。三人はそのまま館に入ってしまった。

正直なところ自分自身でも館に入った後のことは覚えてはいない。

気がつけば評定の間이었다。そこでは戦々恐々としながら上座に座る掘りが深く恐ろしい顔をした現当主・武田信虎がいた。

「ふんっ！！今回も貴様らは小県に出陣しても一勝も米一粒とて手に入れられぬのか……役立たずめが！！！」

大声が響き家臣たちがいつそう身を縮める。しかしその態度も氣に食わないように舌を撃ち直しジロリと晴信のほうを見る。

「晴信よ。」

「はっ。」

「難じゃ後ろの胡乱な者どもは？」

「今回私が召抱ええました賢者と芸者でございます。」

パチパチと扇子をじりながら信虎は

「いかほどで召抱えたのじゃ？」

と聞いてくる。一言一言に嫌味というか怨念というか……まあ、自分の子供に向ける感情ではない氣を放っている。

「こちらにいる隻眼のものには三百貫。こちらの頭巾のものには五百貫で召抱えました。」

三百貫は現在の貨幣価値で約一億一千万円、そして五百貫といえは二億円近い金額である。さすがに渦中の皆々も驚き感嘆の出ず。一番驚いているのは間違いない当人たちだが

「はっはっはっは……。そのような下賤で生まれも分からぬ乞食同然のものを貴様は八百貫も払い召抱えたのか？やはり貴様は先

が見えぬ愚か者よ。」

と、真つ向から否定する信虎。晴信がやることなすことが気に食わないのであろう。

「・・・父上には分からぬだけだと存じ上げますが。」

「なんじゃと！貴様はこの国の国主であり父であるわしに意見を、いや、抗弁をするのか！！」

扇子を投げつける信虎。とっさに前に出て立てになる典厩。ガンツ！！と鈍い音が響き額が割れて血が出る典厩だが一歩も退かずに信虎を見据える。

「えええい！！なんじゃその目は！！」

思わず刀を引き抜こうとする信虎だったが後ろから男が二人現れその手を止める

「おやめなさいませ、お館様！！」

「そのとおりでございます。いまここで争って喜ぶのは平賀の残党や諏訪の者どもだけでございます！！」

両職（武田家の最高家老職）の板垣信方と甘利虎秦だ。

「くっ！！命拾いしたな下郎が！！その鉄扇はくれてやる！！」

クルリと家臣たちを見据えて信虎は

「二月後に小島の禰津氏を攻める。これ以上働きもせず扶持を食らうことがあれば手討ちにするゆえ覚悟いたせ！！」

と言い放ちドスドスと足音を立てて部屋から去っていく。姿が消えたのを確認した家臣たちは気が抜けたように姿勢を崩ししばらく放心している。

「・・・帰るぞ。」

「はっ！！」

放心した家臣たちの脇を通って帰る三人。そして帰路の途中に

「父上はいつもああだ。力で攻め取ればいいと思うだけだ。見る！！」

指差す方向には荒れ果てた土地や泥によって飲まれた畑がある。

「先ずは人心をつかむことが大切なのに・・・くっ！！」

悔しそうに拳を握る。それと同時に後ろから声が聞こえる。

「晴信様!! お待ちを!!」

「しばし、しばし!!」

「姉上!!」

板垣、甘利、孫六が後から追ってきた。

「どうかしたのか?」

「は、はい。じつは姉上に相談したいことがありまして……」

「板垣も甘利もか?」

「は、はい!! 至急にて!!」

「わかった屋敷できこう……はあ!!」

馬の腹を蹴り屋敷に先行する晴信。そしてその後を追う勘助に拾われて後ろに乗っている典厩と板垣、甘利、孫六の三人。

「……やはりそうか。」

「はっ! 恐れ多いことなれど国人の中では謀反の芽が育ちつつ、領民の中では一揆が起こる日にちまで決まっておるとか。」

「いまここで晴信様が決起なさるは不義ではありませんせぬ。」

「そうです。姉上、父上を殺せとは言いません。せめて幽閉してでもこれ以上の疲弊は防ぐべきです。」

三人が口々に言うのは会の民衆全体が信虎に対して我慢の限界だということだった。晴信は熟考して目を薄く開く。

「立っても良い。」

「……おお。」

「しかし……だ。勘助。」

続きを勘助に説明させる晴信

「はっ、では。お三方も知つてのとおり信虎様の方針により現在武田家と周りの大名との関係は今川家をのぞき対立状態。今川家でさ

えも可もなく不可もないと言った状況でございます。今この状況で晴信様が立つてもそれに乗じて他家が介入しては武田家自体が消える可能性が強うございます。」

「では……このまま国が滅んでいくのを見るのみなのか?!」
頭を抱えてグルングルンとまわる三人。

「典厩。」

その名前を聞くと同時に三人が止まり晴信を見る。

「あ、姉上?あの者の名前を聞いてもよろしいでしょうか?」

「そういえば紹介をしておらぬな。そちらの隻眼のものは山本勘助。そして頭巾のほうが・・武田典厩信繁。」

「・・武田!!典厩!!信繁!!」

驚く三人。

「武田ですと!!御名を授けたのですか!!」

「うむ。彼のものはあたしの家族だ。義兄弟とも言うべきか。まあ、同格だと思ってくれてよい。」

「て、典厩ですぞ!!左馬頭ですぞ!!」

「こやつには期待しておる。それでも直接渡したわけでもない。唐名で渡したただけだ。」

「信繁つて姉上!!」

「忘れぬためだ。それ以上は聞かぬ。」

三人の質問に答えて典厩にもう一度問う。

「どうしたらいいと思う典厩よ。」

いままで学んできたこの世界の事と自分の世界で学んだ歴史を比べ、思い出し、組み込みながらこたえる。

「今川のほうはどうかなるでしょう。問題は上杉家と北条家でございませう。どちらかを味方につけて牽制させれば信濃の豪族や大名も行動ができなくなりませう。」

「どちらを味方につければよい?」

「恐れながら、相模の北条が良いと存じます。」

その意見に反対が起こる。

「いや、北条家はやめておくべきだ。氏綱が亡くなり次代の氏康は臆病者でうつけと評判がある愚物とのこと、いっそ長野信濃守に同盟を設けては？」

「それでも上杉家の当主である憲政よりは圧倒的にマシでしょう。」

「味方につける自信はあるか？」

「旗が十枚ほどあればよろしいかと。」

「わかった。期限は十日だ。成功しても失敗してもあたしたちは行動に踏み切る。」

「分かりましてございます。」

「では明朝に……。」

「と、言うわけだ。勘助。お前は恵林寺を通じて今川の雪斎殿に繋ぎをつくれ。板垣、甘利は国人と領民の指導者にこちらに付くか否かを聞け。そして集めれるだけ兵と資材をあつめる。孫六、お前はあたしの名代として諏訪の高遠に向かってくれ。諏訪頼重を止めればいずれ総領を主に渡すとな。」

次々に命令を下し部屋に戻る晴信。すぐさま行動を開始する五人。

「やれやれ、肩が凝って仕方がないわ。」

自分の部屋に戻って肩をグルグルまわす勝千代。こういう日はゆっくりと茶を飲んで猫を愛でて寝たいものだがこう肩が張っていては眠れないと下女を呼んで揉み解してもらおうと手を叩く。

「お呼びで？」

「あれ？義信？」

大根の漬物とお茶を持った義信が入ってきた。

「そこで会った下女からもらった。はなしついでに持ってきたんだ。」

「ちょうど良いとチヨイチヨイと呼び寄せる。」

「肩揉んでくれる？後腰も。」

「なんでだよ。」

「こつやつてまじめになつたのは久しぶりだったからね。次郎が元服してからの二年ほどは気を張つていなくても良かったから楽なのが身に付いちまったみたいだね。」

布団の上にごろりと転がりうつぶせになる勝千代。しかたがないなと枕元に茶と漬物をおいてしばらく待つてもらふ。そして数分がたった後に砂糖菓子とタオルとお灸に細い鉄製の針を持ってきた。

「コレでもつまんで体の力を抜け。」

腰の上にまたがり美しい赤髪を除けてタオルを置く。

「あれ？思つたより重くないな。」

「乗つてるわけじゃないからな。」

そついうとタオルを置いた腰と尻をグイグイつと押し始める。

「む……お……ぬ……ぬ……」

「思つたより凝つているな。足はそうでもないけど……腰が……な。」

手のひらから拳を握りまわすように揉みほぐしていく。そのたび、ぐつ。とか、ぬつ。とか息が漏れる声がある。

「あまり揉み過ぎると毒になるから背中……ぐぐい」と。

「む……お……お……ふう。」

下から上にすべるように揉んでゆく。一通りおわると

「体を起こして座つてくれ肩やるから。」

砂糖菓子とウエハースを食べて幸せそうにしている勝千代はいそいそと急いで座りなおした。

「それつと。」

首の付け根から肩の辺りまで大きくそれでも早く揉み解していく。

「おっおっおっおっお……かなりすうつとするな。」

「だろつ。子供のころから爺さんの体を揉んでいればうまくなるよ。」

手のひらで伸ばすように揉みながら

「おし、しめるから上着脱いで？」

「あ、うん。」

上を脱いで上半身裸になる勝千代、美しい裸体に見向きもせず、後ろに回り針をさしていく。そして肩の部分にはお灸をおいて火をつける。どうも二人とも異性という感覚はないようだ。

「なんか……じんわり……きくな。」

すこし眠そうに目をトロンとさせる勝千代。しかし意地っ張りであり遂げないと納得しない義信が

「ほれ、まだ寝るな。針と灸がすんだら次は耳だ。」

みみくつとぼけた声を上げる勝千代の服を直して胡坐をかいて膝と腿に頭をのせる。

「まあ、あまりたまつてはいないかな。」

耳かきをいれてサツサと軽く撫でるように終わらせる。コロリと頭を返して逆側も同様に。そして最後に足の裏を軽く揉み解す。

「す……す……す……。」

寝息が聞こえ始めると布団をかけなおして部屋から出る義信だった。余談だが後々このことが原因で疲れたことがあれば何かにつけてマッサージ等々を行うことになってしまった義信であった。

初顔見せ！！・・・天魔外道参上。(後書き)

今回は長かったかな？次は関東の王者が登場します。

関東の覇者・北条家当主登場！！（前書き）

作者が好きな大名五本指の一人です。無論郷土の大名の信玄も入っています。

関東の覇者・北条家当主登場！！

「行って参ります。」

と晴信と勘助に挨拶をして夜明け前に出発する典厩。実際は夜明けの予定だったが信虎の密偵がうるうるしているため三人で行動となった。その三人とは

「zzzzz・・・」

熟睡しているところを無理矢理連れてこられた民部こと教来石景政。「え、え、わたしでいいのでしょうか？」

こちらも当日に典厩が随伴を希望したため無理矢理連れてこられた全体的に影の薄い女性・工藤源左衛門祐長。寝ぼけながらあたふたしているが腰に綱をつけて連れて行く典厩。景政は馬にくくりつけている。そして元の世界から持ってきた荷物を数点持つて出発する。そして最初の目的地である平井の宿場に向かう。実際は晴信派の小山田信有の岩殿山城がある大月から上野原を経由して相模に入るのが一番速いが見張られているうえに街道が封鎖されているので進みようがない。なので別の目的もあるため北東に向かい平井から南下して小田原を目指す。その上に合計十日で北条と同盟か不可侵条約を結んで甲斐国に帰るといふ強行軍である。さらに

「土産はいろいろを頼む。」

「はっ？」

「宇野屋という店に・・・」

「宇野屋藤右衛門ですか？薬屋の・・・」

「知っているのなら話が早い。そこにある薬の透頂香とんちんこうのおまけで付いてくるという甘い口直しの食べ物一杯手に入れて来い。一杯だ。

「

「・・・晴信様。強行軍と知つての戯れですか？」

「いや、本気だ。北条との関係がどうなるうともソレだけは必ず手に入れて来い。」

などとサブクエストまでいたたきましたよ、こんちくしょう。ちなみに透頂香はものすごく苦いです。ものすごく。

「典厩様。平井の宿につきました。」

どうも北の方角の警備はいなかったようであっさり街道を馬で駆け抜けて一日で平井に到着した。ここは武田と敵対している扇谷上杉家の本拠・平井城がある。

「ちよつと調べたいことがあるからすこし、いや、すぐ済むから馬に乗ってまっついていてくれ。」

「はっ！！典厩様！！」

ペコペコ頭を下げる源左衛門。それを典厩は

「あんな、源左衛門。」

「はい！！」

「気合はそこまで入れなくていいから。力を抜いて、な。俺たちは今は武士ではなく漂泊の民で旅芸人なんだからそのように力を入れるとばれるから。民部のように熟睡してるとは言わないが肩の力を抜いて・・・深呼吸を・・・」

「すはすはすは・・・」

高速呼吸をする源左衛門。このような重要任務を任されるのははじめてらしい。

(コレが武田の副将・内藤修理亮昌豊なのか・・・)

と思ってしまう典厩だが自分自身もこの名を持つ本当の典厩は天下の副将と呼ばれていたことを失念しているのだった。あたふたしていながらも存在感が薄いという奇特な体質の人間だ。

「行って参ります。」

と晴信と勘助に挨拶をして夜明け前に出発する典厩。実際は夜明け

の予定だったが信虎の密偵がうろつろしているため三人で行動となつた。その三人とは

「zzzzz……」

熟睡しているところを無理矢理連れてこられた民部こと教来石景政。「え、え、わたしでいいのでしょうか？」

こちらも当日に典厩が随伴を希望したため無理矢理連れてこられた全体的に影の薄い女性・工藤源左衛門祐長。寝ぼけながらあたふたしているが腰に綱をつけて連れて行く典厩。景政は馬にくくりつけている。そして元の世界から持ってきた荷物を数点持って出発する。そして最初の目的地である平井の宿場に向かう。実際は晴信派の小山田信有の岩殿山城がある大月から上野原を経由して相模に入るのが一番速いが見張られているうえに街道が封鎖されているので進みようがない。なので別の目的もあるため北東に向かい平井から南下して小田原を目指す。その上に合計十日で北条と同盟が不可侵条約を結んで甲斐国に帰るといふ強行軍である。さらに

「土産はいろいろを頼む。」

「はっ？」

「宇野屋という店に……」

「宇野屋藤右衛門ですか？薬屋の……」

「知っているのなら話が早い。そこにある薬の透頂香とんちんこうのおまけで付けてくるといふ甘い口直しの食べ物を一杯手に入れて来い。一杯だ。」

「……晴信様。強行軍と知つての戯れですか？」

「いや、本気だ。北条との関係がどうなるうともソレだけは必ず手に入れて来い。」

などとサブクエストまでいたたまきましたよ、こんちくしょう。ちなみに透頂香はものすごく苦いです。ものすごく。

「典厩様。平井の宿につきました。」

どうも北の方角の警備はいなかったようであつさり街道を馬で駆け抜けて一日で平井に到着した。ここは武田と敵対している扇谷上杉家の本拠・平井城がある。

「ちよつと調べたいことがあるからすこし、いや、すぐ済むから馬に乗ってまっついていてくれ。」

「はっ！！典厩様！！」

ペコペコ頭を下げる源左衛門。それを典厩は

「あんな、源左衛門。」

「はい！！」

「気合はそこまで入れなくていいから。力を抜いて、な。俺たちは今は武士ではなく漂泊の民で旅芸人なんだからそのように力を入れるとばれるから。民部のように熟睡してるとは言わないが肩の力を抜いて・・・深呼吸を・・・」

「すはすはすは・・・」
高速呼吸をする源左衛門。このような重要任務を任されるのははじめてらしい。

(コレが武田の副将・内藤修理亮昌豊か・・・はあ・・・)
と思ってしまう典厩だったが自分自身の典厩という名前は正史では天下の副将と呼ばれていることをすっかり失念していた。あたふたしながらも存在感が薄い源左衛門と熟睡している民部をおいて場末の酒場に入り酒とつまみを頼む。客がいない時間帯だったためすぐさま濁酒と豆の茹でただけの物が出てくる。

「店主。」

「へい。なんでござえましょう。」

「実は町が騒がしいらしいがどうした？」

実際は町に入ってもいらないためカマをかけたのだが以外にもすぐ店主は教えてくれた。情報収集をするならば飲食店で酒を扱っている

ところがいい。という収集の基本にそつた方法だ。

「ええ、また戦らしいので、何でも相模の伊勢を討つて旧領を回復すると管領様がおっしゃったそう、今回の出兵はどうも大規模らしく陣屋や食糧の徴収が激しいのでございます。」

「ふうん、伊勢というが北条氏ではないのかな？」

「それが・・・」

きよろきよろと周りを見て外まで確認する店主。

「ここだけの話でございますよ。なんでも執権と管領では執権の方が権勢は強うらしく、管領様は血のつながらぬ浪人の伊勢時盛が乗っ取つた北条ではないと、その、対抗意識が強うございまして。」

「くだらないな。」

「そうでございますようがお侍様にはお侍様の矜持とやらがあるらしく。あ、そうそう、そうでございます。今回はどうも古河の公方様に要請したらしくどうも他の豪族たちも傘下に入るらしいとのことでございます。」

「なら巻き込まれぬようにさつさと目的地の常陸にむかうとすか。」

「それが良いでございますよう。」

裾から銀を二粒渡す。店主は驚き

「こ、これは多お、ございます。」

「いやいや、命の恩人にはコレくらいのお礼をしておかねばな。」

返そうとする店主に無理に銀粒を渡して二人と合流する典厩。

「典厩様・・・ん、酒臭そうございますが？」

「大丈夫だ、一杯しかのんでおらん。いますぐ出立するぞ。」

「はっ！・・・目的地はどこで？」

「二人はそのまま相模の小田原に向かつてくれ。俺は河越の城にむかう。ひとつ手は打っておくか。」

（やっぱりこの世界に来て学んだときに上杉家があつたからまさかとは思つたがどんぴしゃだ。）

作戦立案能力はあまり高くないが政治力や策謀をできるだけ使つていい方向に向かわせようとするのが典厩、いや義信の得意とすること

だった。ふたりと別れ河越城を目指す典厩。無論馬を潰さんとするぐらいの全速力で……

「何者だ!!」

河越城の門番はこちらに向かってくる一騎の騎馬に向けて槍をかまえて問う。

「急使でございますっ!! 多目周防守様の急使、福島孫二郎勝広にて候!! 城主、北条孫九郎綱成様に至急ご連絡したきことがございます。開門を!!」

馬から飛び降り嘘っぱちどころか名前まで偽る典厩。冷静に考えればいくら当主の軍師であろうと同輩であり城主でもある者に急使を送ることはできないが必死の形相で汗を流す典厩を見て重要なことだろうとそのまま駆け寄る門番。

「あ、ありがとうございます。」

泣いた振りまでしてフラフラしながら門番に掴まりながら客間に向かう典厩。元いた世界ならアカデミー賞ものである。そのまま疑われずに客間に通される。

「少々お待ちくださいませ。ただいま城主が参ります。」

水を出され一気に飲み干す。つかれていたことは確かなためコレはともありがたい。飲み干すと同時に扉が開き典厩と同じ年ほどの大柄の美男子が現れる。しかし顔には数箇所及ぶ向かい傷があり武者者としても一流だとわかる。

「孫二郎!!」

頭を下げる典厩に近づく綱成。そして耳元に口をあて後ろから見えないように右手逆手で脇差をつかむ。

「何者だ……。こととしいによつては……。」

こちらも小さな声で答える典厩。この部屋に入るときに武器になりそうなものはすべて預けている。

「落ち着きくださいませ。私は武田家の晴信様が家臣、典厩信繁と申します。ことは重大なため偽らせていただきましたが行動によって両家ともに被害をこうむることはございませぬ。」

「保障するものは……。」

「私を信じていただくはございません。」

その一言で鯉口切っていた脇差をしまつ。どうやら信じていただけたようだ。正面に座りなおす綱成。

「もうしてみよ。」

「では、扇谷上杉家と古河公方を中心とする関東豪族の計八万がこの河越城に向かっております。」

無論数字はでたらめだがコレくらい来るであろう数値だうそではない。無論その報告に驚き疑いのある眼でこちらを見る綱成。

「それを信じる証拠は？」

「後数日すれば分かりましょう。イナゴや雲霞のごとくこの城を襲いましょう。」

「……その目を見るとうそは申しておらぬな。」

殺気と害意を収める綱成。

「目的を聞こうか？」

「では、遠慮なく。扇谷上杉家の滅亡と北条家との同盟にてございませぬ。」

「……本気で言っておるのか？」

「無論にて。」

「……わかった。僕は信じよう。」

この言葉には典厩が驚いた。

「なにを驚いておる。おぬしの目には害意や疑心はない。それだけでも信じるに値すべきものだ。僕はおもつ。」

「……ありがたきことにて。」

「しかし、軍事の全権は新九郎が持つておるのでこの件を僕だけで済ますことは不可能だ。おぬしにはまた一芝居うってもらつぞ。」

屈託のない笑みを浮かべる綱成。それをみて典厩はさすがに闘将・

地黄八幡の異名を持つ英雄だ。器が違うと思った。

「かまいませんが。」

「いつては何だが儂と新九郎は仲が悪い。」

新九郎こと氏康と綱成は一時家督を争ったことがある。争ったといっても流血沙汰はなく二人の父である北条氏綱が迷ったため家臣たちが勝手に囃し立てたのだがソレによつて氏康と綱成の仲は最悪で険悪といつていいほどだ。じっさい常に前線に送られ続けているのがその証拠だといえる

「存じております。」

「むかしはな・・・仲が良かったのだが、な。つまるところ儂が援軍を要請しても無視される可能性が高いのだ。恥ずかしいことにな

「綱成さまを見捨てるということでしょうか？さすがに河越は要地にてそれはないかと・・・」

すると綱成は複雑な顔をして言う

「頭では分かつておるはずだ。こう言うのもなんなのだが今現在にうつけ、うつけと言われておるが新九郎は儂より君主の器は圧倒的にでかい。闘将だ。などといわれておるが戦術面では役に立つかもしれないが治政や財政、政略では儂は勝てぬ。しかしな、新九郎は女子だ。そう、すねた女子は鬼より怖い。というからな。」

「しかし一緒に育つた兄弟を見捨てる可能性はないでございませう？」

「たしかに新九郎はないだろう。しかし悶々と考え続けて気が付いていたら落城ということになる可能性が圧倒的に高い、そうなれば新九郎は本当にうつけになってしまう。ふぬけになってしまうだろう・・・。」

本当に我がことのように悲しそうな顔をする綱成。

「そうなれば北条家だけではなく新九郎の身も危うくなる。儂は武人ゆえ死ぬ覚悟はできておるが新九郎は違つ。義父・氏綱から、義叔父・箱根殿から、先の軍師・藤永殿から、守役の小太郎殿から。」

そう先代からの皆々が実際は期待を込められて君主として育てられた。戦場で死ぬべきではなく畳の上で死ぬべき人間なのだ!!!」
思わず熱が籠もる綱成

「……よろこんで協力させていただきます。一芝居どころか二芝居でも打ってみましょう。」

「そ、そうか。」

「この城なら半月は籠もれますな？」

「無論だ。」

「私の期限もあと九日でございます。必ずや援軍をつれてきましょう。」

「ありがたい!!!では新九郎をお願いいたす!!!!!!」

ガバッと土下座をする綱成。返礼をして急ぎ小田原に向かう典厩。

馬のほうも潰れず回復していた。さすが晴信の愛馬だ。馬にまたがり出発しようとする典厩に声が掛かる。

「典厩殿!!!コレをお持ちください。城主・綱成様の旗と書状にございます。」

黄色の八幡旗を背中に差し出立する典厩。馬も常に全力疾走だ。

河越 江戸 玉縄 小田原

「はあはあ………はあはあ………」

馬を飛ばして約一日、小田原に到着した典厩。直線的に移動すれば速かったのだがそうすれば山越えのため馬を捨てなければならなかったため少し湾曲した道を進んだ。

「典厩さま!!!」

「てんゝ．．．きゅゝ．．．」

源左衛門と民部が迎えるが今は説明している時間が惜しい。これが成功しなければ武田家との同盟はおろか北条家すらなくなってしまう可能性があった。

「源左衛門！お前は今すぐに宇野屋に向かつて風呂敷一杯にうるうをもらって来ること！！」

「は？．．．はっ！かしこまりました！！」

スツタタタタと駆け足で宇野屋に向かう源左衛門。そして民部には

「民部！！付いて来い！！」

「あゝ．．．い」

すたすたと早足に城を目指す典厩に、どうやってもノロノロ移動しているような緩慢な動きだがそれでしつかり付いてくる民部。

「開門！！開門！！至急、御本城様にお伝えしなければならぬ議があり、お目通り願わん！！」

「そこもとは？」

「河越城主・北条孫九郎綱成様の使者にて．．．」

「してそこもとの名前は？」

「さつさと開けぬか！！上杉軍十万が河越城に迫っておるのだ！！この書状をよめばわかるう！！」

ぱしつと門番に手紙を叩きつける典厩。手紙を見ていた門番の顔が一気に青ざめる

「し、しばしお待ちを．．．いえすぐさま本城へ！！」

大戸が開き本丸に一直線で民部を乗せて馬でかけていく典厩。周りは何事かと見ているが気にしない。馬のまま本丸に突っ込み飛び降りそのまま評定の間に駆けていく。

「お、お待ちください、こちらの部屋にてお待ちを．．．」

途中でさすがに呼び止められ評定の隣にある部屋に通される。それからどれほど経っただろう。

「なにかしら？河越の孫九郎から？」

ぼんやりとした民部とは違ってやる気のない顔をした日本人形のよ
うな女性が現れる。その後ろから十代前半の子供のような男性とち
よび髭を生やしたアスパラガスのような男性が現れる

「儂は多目周防守と申す。こちらは箱根殿の三郎長綱だ。してそこ
もとは？」

「多数のご無礼御免なれ。私は河越城主・綱成殿の使者で信繁と申
します。現在河越城に扇谷上杉を中心とする関東諸侯軍合計十万が
迫っており援軍をお願いいたしたくございます。」

「じゅ、十万だと！！！」

「はっ！こちらの書状に詳しく書いております。」
手紙を読み始める長細い男・長綱。読み進めるために顔が青くなっ
ている。

「新九ろ・・・いや、御本城様！！いかがします？」

それを聞いていた北条氏康はやる気がなさそうに

「・・・孫九郎ならうまくやるでしょう。わたしは中座するわ。」

あくびをしながら氏康は去っていった。そのあとを追う幼子軍師の
多目周防守。そして頭を抱える長綱がいた。

（な、なんだあ・・・この氏康う！！）

自分が持っていた氏康のイメージが一気に崩れていった典厩だった。

関東の覇者・北条家当主登場！！（後書き）

関東の皆さん御免なさい。氏康はこんなひとじゃありませんよ。いっておきますけど。民政家としては戦国最大と言ってもいい人物です。

不器用男と不器用女（前書き）

北条家は基本的に美男美女が多いらしい。武田家は女性はものすごく美人らしいけど男はあんまりらしい。

不器用男と不器用女

「使者の方。申し訳がござらぬ。御本城様はどうも．．．な。」
まことに申し訳がないと頭を下げる長綱。こちらも頭を下げてしま
うほどだ。

「綱成殿から聞いております．．．どうも、家督争いでどうこう
あつたとか？」

「孫九郎がそんなことを．．．。しかしですな。使者殿．．．い
え、信繁殿。兄上は、先代の氏綱公は御本城様の才能は自分以上だ
と思ひ後を継がせたのです。家督争いとはいえ血も流れなかつたの
ですからもう過去のことと割り切つてしまえばいいものを．．．
新九郎めが！！」

バシバシと床を叩き始めた長綱。その様子を見るにかなりあの態度
は長いのだろう。

「す、すまぬな。使者にこのようなことをいっても仕方がないのじ
やが．．．。」

溜息をつく長綱。そして外からも溜息をつく多目周防守が入つてく
る。いつきにドンヨリとした雰囲気になる部屋。

「どうじゃったか？周防よ。」

「どうもこうもないわ。あの馬鹿御本城め．．．。孫九郎ならなん
とかすると一点張りで部屋にこもつてしまつたわ。いまは清水殿が
ねばつておるわ。」

清水とは清水小太郎吉政とって氏康の守役だ。そしてその小太郎
も溜息をついて疲れ果てて入ってくる。さらに暗くドンヨリする部
屋。

「小太郎．．．。」

「聞くなつて．．．。」

三人が溜息をつくためどんどん暗くなる部屋。行灯でも必要なくら
い暗くなっている。

「えつと・・・私はこれで・・・」

(ごめん!!綱成殿・・・こりゃあ・・・無理だ)

早くもあきらめて次の手を考えるため勘助に手紙を送って策を教え
てもらおうと部屋を出ようとした典厩を

「まっただ!!!」

「ぐえ!!おぶ!!」

首筋と足をつかまれたため息が詰まりながらぶっ倒れる典厩。

「な、なにを?」

振り返ると土下座をしている三人がいた。

「信繁殿は・・・」

「このようなときに使者に・・・」

「送られるほど・・・」

「信頼されていると見もつした!!!」

ズズイツとせまってくる男三人。はつきりつて怖い。

「え、ええ。信じてはもらってますが・・・」

あきらめて帰りますとは言い出せない雰囲気である。いったら殺さ
れかねない。

「ならば御本城様の・・・」

「説得を・・・」

「お願いしもうす!!!」

と、こちらの了承を聞かずにグイグイとおして氏康の屋敷までつれ
てこられ

「あとは、まかせもうした!!!」

用はないとさっさと帰ってしまう三人。いい加減にしゃがれとい
たいがここまできたら仕方がない。中にいる確認するために戸を叩
く。

「えつと・・・氏康殿?」

中からコツコツと音が聞こえることがわかるが言葉は返ってこ
ない。

「綱成殿の使者でえつと・・・典厩信繁ともうします。」

コツコツと返ってくるだけだが反応はある。なるほどこれは疲れる。

「綱成殿は……えつと……城を死守するつもりです……援軍を待つておりますが……。援軍のほうは？」

コツコと反応が変わる。

「えつと……だめですか？」

コツコツと帰ってくる。どうもあたりらしい。

「理由のほうを教えてくださいませんか？」

反応がない。どうも「はい」「いいえ」「だんまり」しか反応がないらしい。さすがにカツとなり拳を握り振り下ろして叩いた。

「k x y s t g b ! ! !」

鉄板でできているのか折れてはいないがかなり掌の小指側が痛い。思わずしゃがみこむ。

「……なんて無駄な鉄壁具合だ。さすが北条とでも言うか……」

無駄に納得してしまった典拠はいつたん落ち着くために息を吐いて交渉を開始する。

「氏康殿。綱成殿はもう北条の家督を狙っていませんよ。」

コツコツと返答がある。分かっているらしい。

「では援軍を送らない理由をお答え願いませんか？」

無返答だ。次の言葉が続ける

「氏康殿？綱成殿はあなたのことを君主の器はすばらしく、自分はかなわないと言ってますが？」

コツコツと返ってくる。これも知っているらしい。

「河越が落ちればよいとお考えですか？」

コツコッ！と強く返ってくる。落ちることは論外らしい。つまり綱成殿は死んでほしくないという事だ。

「綱成殿は貴女の身を北条家より案じておいでですよ？」

コツコツと返答がある。すこし息を吐いて考えをまとめる

（死んで欲しくない・心配してもらっていることが分かってる・援軍をおくらない。だめだ・まったくわからない。）

雲をつかむような問題だ。質問を続ける。

「北条家がなくなるかどうかの瀬戸際かもしれないよ？早雲公以来の土地をなくすかもしれないのですよ？」

無反応。ガリガリと頭を搔く典厩。

「今川が問題で出陣できぬのですか？それとも武田家ですか？」

コツツコと違うと返ってくる。たしかに北条氏康の能力を考えれば今川はともかく信虎は簡単にいなせるだろう。

「はああ……。なんなんだよ。もう!!！」

またイライラしてきた典厩。爆薬で吹き飛ばしてこじ開けてやりた
いが火薬がないため我慢する。

（北条家……氏康……綱成……たしか義理の兄弟。氏綱の養子と実子。なにかわすれているな？）

のどに引っかかった小骨のようにすつきりしない。

（何か忘れているが……なんだっけな？）

北条家のことを色々と思い出していく。

（北条氏康。相模の獅子。妻は今川の娘。子供は多数。戦国屈指の内政家で臆病かつ勇猛で……）

次は氏康のことを思い出していく。そのつぎに綱成。

（北条綱成。北条最強の鬪将。妻は北条の娘。子供に猛将の康成。……ん？）

何かを思い出して考えを変える。

「綱成の本名は福島勝千代。北条氏綱の娘と結婚……北条と結婚？」

（そういえば綱成殿は自分が死ねば氏康殿がふねけになると言っていたな。悪趣味でこのやり方は好きじゃないが……）
まさかと思ひ発破とカマをかけてみる。

「氏康様。私実は本名を武田典厩信繁と申します。もうお分かりです
ね武田家の身内のものです。」

無反応。しかしつつける典厩。

「今回の目的はこうやって北条と同盟を結ぶことですが、もう一つ

「ございます。それは・・・」

一息ためてはつきり聞こえるように言う。

「もしもの時には有能な人物の引き抜きでございます。うつけの振りなさっているが聡明な氏康様にはこれだけ言えばわかりますな？」

しかし無反応。はずれかなっと思うが一応続けてみる。

「そう、武田家はもしもの場合援軍を出して多大の犠牲を払っても綱成殿を得たいのです。このまま援軍を出さずに川越の城が落ちることになれば責任感の強い綱成殿は玉砕して果てるでしょう。逆に武田が援軍を出して河越の城と兵を助ければ義理堅い綱成殿は氏康殿を見限り我が武田家えええい！！！」

とどめの言葉を言おうとしたとき鉄製の扉が開かれ寄っていた典厩は前のめりに倒れる。

「いったた。やっとあけてくれえええい！！」

やっと開いたとうんざりして前を向きなおすと槍を突き出してきた氏康がいた。とっさによける典厩。

「風魔！！」

殺気を纏った氏康が大声でその名を呼ぶと数名の黒装束が屋根裏から吹き矢や投剣で攻撃してくる。次々に除けていく典厩

(く、薬が効きすぎて俺が死ぬ！！)

「ま、まった。少し待った氏康殿！！」

制止の言葉を振り切り連続で槍を使っついてくる氏康。藪をつついて獅子が出てきた。その獅子は眠りを妨げられたうえに家族を狙った敵に対して集中攻撃を行う。

「風魔の皆さんも待って！！やめて！！」

次々に攻撃をよける典厩。逃げようにも鉄製の扉を閉められた上から外から押さえられてびくともしない。

「氏康どの！！まって言ってるだろうが！！！！」

ガシッと突いてきた槍を掴み止める。しかし肩に投剣が刺さる。それでも命がなくなりよりマシと今度は止める説得を行う。

「まつてくれ、氏康殿。私は綱成殿を引き抜くつもりはなく綱成殿に援軍を頼まれただけで・・・」

説得を聞き入れたのか槍を放す氏康。ホツとしたのも束の間で次は腰に差してあつた刀で斬りかかつて来る。風魔も典厩が槍を手に入れたことになるため攻撃が強くなる。

「まままままままま待ててて。」

氏康の目を見ると先ほどのやる気のないフヌケの目ではない。傲慢とも取れる意志の強さを秘めた英雄の目だった。獅子は獅子でも巨大すぎる獅子だったみたいだ。

「まつずはこの書状を読んでくれ！！綱成殿の直筆だ！！！」

槍を左手に持ち右手で書状を差し出す。綱成が援軍が必要と書いた書状だがいままで氏康は直接見ていない。

「動くな・・・いいでしょうね。」

それだけ言つと書状をみる氏康。そして読み終わると殺気がおさまつて風魔には合図を出す。周りにあつた気配が消える。そして典厩の前に座る氏康。

「すまないわね。さすがに冷静さをなくしていたようね。」

頭は下げないが謝罪をする氏康。強烈な意思を持つ目はそのままだった。

「も、申し訳ございませんでした。あそこまで激昂するとはおもいませんでしたので・・・。」

「かまわないわ。孫九郎の書状を読んで落ち着いたから。あとさっきのことは全部うそでしょうね？」

「は？」

「先ほどの引き抜きの話よ。」

本当だつたら九族皆殺しにしてやると言わんばかりの殺気をもつ一度放つ氏康。

「無、無論です。」

「ならいいわ。」

「そ、それで援軍のほうはいかがしますのぞ？」

それを聞くと急にウジウジモジモジし始める氏康。

「え、援軍は送れないわ。」

「なぜございませう？」

「え、援軍を送って孫九郎に会ったらどう対応しいかわからないわ！ー！」

などという氏康。

「……氏康様が行かずに長綱殿でもいいのでは？」

「いやよ。なんで綱成のことを他人に任せないといけないの？！」
なにを言っているの。と、言わんばかりにこちらを見る氏康。

（い、いや、そっちこそなにを言っているんだ？）

「で、では援軍を送らず綱成殿を戦死しさせるつもりで？」

「そんなわけないでしょうが！！助けたいけど自分が行くとどう対応していいかわからないし、周りには任せたくないのよ！ー！」

玉縄城において置けばよかったわ。父上がそんなところに配置するからよ。と亡き先代に文句を言い始める氏康。

「ではどうす　　」どうすればいいか聞きたいのはこっちよ！ー！！
逆ギレする氏康。そうとう綱成のことになると周りが見えないようだ。

（いやいや、氏康×綱成ですか？元の世界では腐女子が喜びそうだな……。そういえば正史でも氏康は一途で家族愛にあふれる人物だったな。それにしても今川つながりで綱成とは……）

「いつそ、ここで仲直りをして元の鞘に納まるというのは……」
「それができたら問題ないわよ。今じゃ二人きりであっても御本城様、綱成って他人行儀で呼び合うのよ！！そう簡単に直ったらやってるわよ。」

（親父に叔父さん。貴方たちが言ったように他人の色恋は見えていれば楽しいけど巻き込まれると厄介極まりないとのことですが、そのとおりです。勘弁してください。）

「え、つとまず……この援軍を契機にですね……なんという

か・・・個人的に恩を売っておいて・・・えつと・・・そして・・・えつと・・・」

しどろもどろに説明を続ける典厩。

「・・・それでですね。戦勝祝いときに孫九郎と呼べば・・・ですね・・・あちらも新九郎と読んでくれるのではないのですか？」

「確實？」

「か、確實とはいえませんが・・・あれほど心配していた綱成殿ですから・・・八割ほどですかね。」

「わかったわ。その案信じましょう。成功したら同盟でも不可侵条約でも結んであげるわよ。けど失敗したら死刑よ。」

ええー。つと言いたかったが我慢する典厩。

「あとあなた、武田の者って言ったわね。悔しいけど武田の将兵はものすごく強いから我が軍の一分を貸すわ。戦場に出て孫九郎を助けなさい。失敗したら殺すわ。」

ちよつとリスクが高すぎる賭けですよ！！といったかったが我慢。

「わ、わかりました。で、では出陣は？明日でしょうか？」

また氏康はなにを言っているのよ。と顔をしかめ

「今すぐよ。」

「ええ、兵は集まっていますよ！！」

そんな事は聞かずにズカズカと評定の間に向かい、評定を開始する太鼓がなる。

それからほとんど拍子に話は進み、評定は氏康に恐れをなした重臣全員の全会一致により即日出陣が決定した。城はうごいていないものがないほどの騒がしさになり

「河越の孫九郎を救うわよ！！あとついでに馬鹿どもを皆殺しにして領地を増やして内政するわよ。」

「・・・お、おお・・・？？」

「新九郎よ。これ以上爺の胃を痛くしないでくれ。」

「それに作戦はどうするのでしょうか？御本城様？」

「そ、そうでございます。我が軍は用意ができておらず三千ほど集

まったくただけでございます。」

「三人とも気にしないでいいわ。叔父上、私はうつけは卒業しますのでご安心を。周防よ、作戦は大体決まっているから気にするな。小太郎。兵のほうは安心せよ。風魔に手紙を持たせてもう送っている。江戸や玉縄、あと伊豆から続々に援軍がくる手はずよ。」

やる気がないのは終わりとはかりズカズカと単独で進めていく。しかし周りの意見を聞いてちゃんと聞いているからたちが悪い。

「……………」

さすがに勝千代はるのぶをみている義信てんぎんだが氏康ほどわがままでないことを祈っている。しかしその祈りは後々無駄になるが詳しいことは後々語る。

「出陣!!!!!!!!!!!!!!」

一人だけやる気や根気などがメーターを振り切っている氏康の号令により北条軍は出陣した。歴史に名高い奇襲の河越夜戦がはじまる。

不器用男と不器用女（後書き）

次は歴史に名高い河越夜戦です。かなりめっちゃくちゃにしますので・・・お気をつけて。

開始！！河越野戦！！（誤字にあらず）（前書き）

戦国三大奇襲戦の一つ、河越夜戦です。

開始！！河越野戦！！（誤字にあらず）

甲相同盟を結ぶために外交官の密令を受けて旅芸人として北条氏康に会いに行つた典厩信繁以下二人だったがひよんなことで玉縄北条氏の祖である北条綱成を助ける手はずをとつてしまい結果的に戦に参加する羽目になつてしまった・・・なんで？

「北条家の戦は北条でやつてくれよ・・・。」

「なにかいいましたか？」

「いえいえ・・・。」

最高速で移動を続ける騎馬の中で氏康がにらむ。それにげんなりしながらとぼける典厩。小田原から出発してもう二度ほど馬を交換して移動を続けている。その間に伊豆や玉縄、江戸からの援軍が合流して総勢八千になつていた。甲斐の馬に乗っていた民部景政や源左衛門祐長ですら一度馬を交換してある。していないのは典厩の黒駒と氏康の愛馬・「こゆるぎ」だけだ。その甲斐もあつて河越の城まで目と鼻の先の距離にいる。現在風魔を放つて偵察を行っている。

「し、新九郎よ・・・こ。これでは馬が全滅してしまうではないか・・・。」

老齢でありながら少々の疲れしか見せずにあとに続く氏康の叔父・箱根殿こと三郎長綱は問いかける。

「駄馬はいつでも代えれます。しかし、名將は代える事はできません。ましてや幼きころから兄弟として育つた孫九郎を見捨てては一生の負い目となります。」

そう言い放つ新九郎こと氏康。その言葉に長綱は感涙をぬぐいながら「兄上、見ておりますか。あのうつけと言われた新九郎が兄上の見立てどおり・・・。」

と感極まっている。本当のことを知っている典厩は言えるはずもななく長綱に同情することしかできない。まさか色恋沙汰で拗ねてうつ

けのふりや気が抜けていたとはこの状態の長綱に言ってしまったらよくて失神だろう。

「そういえばなぜ使者である信繁殿は旗差物をもっておらぬのだ？」

「叔父上、気付いてはいなかったのですか？」

あきれたような顔をする氏康をこちらも疑問な顔をする長綱

「この者は間違いなく孫九郎の使者だが北条の家中ではない。武田のものだ。」

「は？武田ですと！！兄上の代から敵対しているではないか？！」

「そうなのだが武田の晴信が跡継ぎにあるらしくひと悶着あるらしく北条を味方につけたいらしい。」

典拠は同盟を結びたいといったが誰が何のためにとは説明をしていないはずだが簡単に見破る氏康。

「内乱ということですか？ではそれに介入し甲斐を手に入れるのが得策ではないか？」

戦国に生きる者として当たり前の意見を述べる長綱だが氏康はその頃の大名としては異質だった。

「叔父上よ。私は箱根以西に興味はありません。そして將軍家に介入したり打ち倒して天下に号令をかけるつもりはありません。」

「な、なんじゃと？！」

「私の夢はこの関東全域を支配して平将門のように北条の安寧の王国を作るつもりです。」

「そ、そんなことをすればやまと御所の姫巫女様に討伐されかねませんぞ！！！」

恐れ多いと戒める長綱だが氏康は意に介さず反論する。そして置いてけぼりながら考え方にさすが氏康と納得し驚く典拠。

「あくまで王国といったはずよ。璽をいたたき王として預かる形にすればよい。聞いた話によれば今代の姫巫女は英明だと聞いている。民草に問題がなければ認めてくださるはずよ。」

その言葉にしぶしぶながら納得する長綱。そして今の状況の質問をする。

「しかしな、新九郎。それ以前にこの難関を突破しなければその夢もかなわぬぞ？」

「ふんっ、叔父上。私を誰だと思っているの？史上最大の謀将と言われはるか遠国まで聞こえる早雲公、そしてその早雲公を超える父上、その父上がすべてで上回るといったのよ。この氏康のことを！ならば上杉や、古河公方が十万の兵を連れてこようが雑魚なんざボコボコにしてやんよ！ためーら私について来い！って感じで私が最前線に立てば簡単よ。」

当たり前のことのように言う氏康。

「それにこの武田家の典厩信繁が何とかしてくれるために考えがあるらしいから万全よ。」

しなければ死刑よ。と目線で言ってくる氏康、思わず身がすくむ典厩だった。

(どうすつかな・・・、まあ、歴史どおりに夜戦を仕掛ければ勝てるはずだろう。)

実際は偽装退却を繰り返して油断したところを奇襲して勝ったのが失念している典厩。

「御本城様。」

「風魔か？河越城の様子は？」

「はっ、まだ敵襲は起きておりません。上杉の行動速度は遅くこの調子で行けば我が軍のほうに先に着き、なおかつ一日余裕があると聞いた様子で・・・。」

「聞いていたより愚鈍かつ暗愚な人物のようね。上杉の管領様は。その余裕を噛み砕いて飲み込んであげるわ。」

(・・・、たしか河越夜戦は攻城している連合軍を城と援軍で挟撃したんじゃないか？)

どうも自分の知っている歴史「こつちの歴史」と思い込んでいた典厩だが違ったためさきほどの余裕を改めて冷や汗をかきながら必死に考え始めた。

「その前に孫九郎に合流しなければ・・・全軍！！この速度を維

持しつつ河越城に入る。」

そのままの速度を維持しつつ城に到着した北条軍はまったく妨害なく入城した。

「おお、御本城様。」

「……綱成よ、大儀であった。」

（……急に雰囲気がどんよりしたぞ。）

綱成が敬意を込めて綱成を呼ぶと一気に機嫌が悪くなる氏康。こつちをみて恐ろしい殺気を飛ばす。

（戦勝祝いでですよ！！）

伝われ！！伝われ！！と必死の念を送ると分かったのか殺気を収めて綱成とこれからのことを対応する氏康。それをみて風魔に話しかけ、情報を教えてもらう。陣容から参陣した将まで事細かく書いてある。聞いた話によれば管領の側近を買収して聞いたという。

（……もしかして長野信濃守業正いがいは駄目な奴らしかないのか？上杉管領よ。）

敵ながら心配したくなるがその思いを振り切り考えをまとめ始める典厩。成功しなければ首が飛ぶ。成功しても功績がなかったら首が飛ぶ。あの目はマジだ。

（参陣しているのでヤバイのは……なんで佐竹や宇都宮、そして里見まで参加してるの？）

正史では参陣していない大名までいた。特に佐竹と里見はヤバイ。鬼が二人いる。

「まじで首大丈夫か？」

思わず首筋を確認する典厩。

「典厩様？首がどうかしましたか？」

「い、いや、源左衛門。だ、大丈夫だ。」

「そういわれましてもすごい汗ですが？ま、まさかお熱でも？」

「大丈夫。大丈夫。」

心配する源左衛門をなだめて氏康と綱成に作戦を確認する。

「は？敵陣に突撃して関東管領を討ち取る？」

綱成が立てた作戦に驚く典厩。しかし綱成は胸を張って

「うむ、それほどの大軍でまともな統制を取れるわけがない。なれば突撃して管領を討ち取ればいいだけだ。」

さすがに氏康もげんがりしている。こゝれはマジで突っ込みかねないと思う典厩。さきほど氏康が言ったのはあくまで覚悟の言葉であつて実際やるわけではない。

「この城に兵を残し我々は山に籠もつて挟撃するというのはいかかでしょう？」

正史の挟撃作戦を多少アレンジしたモノを意見としていう典厩。これには籠城作戦の好きな氏康は大賛成で迎えてくれた。さすがに敬愛する当主である氏康に賛成されては綱成も強くは言えず了承する。

「助かつたわ。」

「なにがでございます？」

「さっきの提案よ。私が籠城作戦が好きなることを知っていたとしても初戦で籠城を選ぶと兵たちの士気が目に見えて落ちるわ。しかし客分であるあなたが通した意見ならよそ者に負けるかということでも士気が上がるわ。もしかしてわからずにやったの？」

何時客分扱いをしたか小一時間問い詰めたかつたが不毛なためやめておく典厩。そして馬に乗り続けたため疲れが出たので本日は典厩を含めて全兵が泥のように眠り早朝に主力である八千を氏康自ら率いて近くの山に息をひそめて隠れる。念には念を入れて馬には猿轡をかませ足下には泥を作つて足音まで立てない準備でした。そのまま上杉軍が来るまで待つ、ただ待つ。

「……来ないわね。」

「ええ。」

しかし、到着が風魔の予想より遅く日が暮れてもまだ来ない。そのまま夜明けまで時間が過ぎ今日は来ないだろうと城に帰ろうとするとうとうから足音と砂煙が見える。

「やっとなつたわね。……だけど。」

「ええ。」

「あやつらはうつつけか？」

長綱の言葉もわかる。今から命をかけた戦に行こうというのに大半いや、ほとんどの兵がへべれけの泥酔状態だった。さすがにこれには北条軍全員が呆れ、その後に頭にきはじめる。

「作戦を立てたのが馬鹿だったかしら？」

「あの覚悟はなんじゃったのかな？」

「たしかにこれはないわぁ……。」

上から氏康、長綱、典厩だが言葉の端々どころかすべての言葉に呆れが入っている。

「あ、攻め始めましたよ？」

「正気かの？」

「あの、バ管領が救いようのない阿呆だと分かっただけでも収穫にしようかしら……。」

三人が頭を押さえ始めた。なにしろ、城を攻めているのに足がもつれて転ぶ、堀に滑って落ちる、近づく前に立てに隠れて動かないのでそこに行列ができるといった有様だ。しかも水筒に水ではなく酒を入れているため戦場とは思えない陽気さだ。

「あ、宇都宮が帰り始めましたね。」

「そのまま下野に帰ってくれないかしら……。」

「さすがにそれは……って……あつという間に見えなくなりましたね。」

数千の敵兵がいなくなったとはいえまだまだ大軍に変わりはないがこれではボロ勝ちが確定だと思っていた矢先にドーンと言う音が響いた。

「な、なにごと？」

「新九郎！！あれをみよ！！」

呆れや倦怠感を吹き飛ばす音の方角を指差し氏康に教える長綱。そして二人がその方角を見ると上杉のダメ兵隊に隠れたようになっている向こう側に素面かつまじめに城を攻める部隊があるではないか。

しかも兵力はこちらと同等といった数だ。城兵もその部隊には一生懸命に反撃を行い近づけさせない。

「あの部隊さえ倒せば勝てるわね。バ管領にもいい将がいるじゃない。多分あれが長野の爺ね。」

「いきますか？」

「無論作戦通りにね。」

馬に乗る典厩と氏康。長綱に打ち上げ花火を渡し発射させる。大きな音が響き敵兵が城攻めを中断してこちらに意識が向く。それと同時に城門が開き綱成率いる三千がバ管領軍本隊に突っ込む。酔っ払いやしいかない部隊はあつという間に混乱状態に陥る。その部隊救うため、まともな行動している部隊が援軍に向かい戦場は桶蓋を叩き割った味噌のようにグシャグシャだ。

「全軍！！突撃！！私に続きなさい！！狙うは両上杉家の当主のみ！！首はとるな！！斬り捨てていけばよい！！」

氏康を最前列に混乱の坩堝くわっぼにある戦場に突撃する北条主力部隊。そのままバ管領と

おまけの上杉当主がいる敵陣本隊を眼前にあらわれる。慌てふためくダブルバカ。逃げようとすが酔いすぎていたため足下がおぼつかずに動くことすらできない。後は討ち取るだけ、そのはずだったがすごい速度で間に割り込んでくる部隊がある。先ほどのまとも部隊だ。

「ちっ、さすがに対応が早いわね。さすが錬度がいいわ。」

槍衾に突っ込みかけた本隊を停止させる氏康。相手はその陣形のまま動きもせずに陣の後方から柔和な笑みを浮かべた無精ひげの老人。その後ろに超絶メタボ男がおり、逆方向からは気弱そうな優男が出てきた。

「なにようかしら？私はさっさとそのバ管領を討ち取って孫九郎と仲直りしたいんだけど。」

「さすがにその理由はないだろう。」

綱成がいなかったためズケズケと本音を言う氏康に自重しろと突っ込む

典厩。それに対して柔和な笑みを浮かべた老人が一步前に入る。そのまま後ろを振り返りすべての人間が安心するような声で

「さあ、管領様。急ぎ平井にお戻りを。ここは私におまかせください。」

部下に両手を持たれて二方向に分かれるバ管領の上杉当主とおまけのもうひとつの上杉当主。

「どきなさい。いますぐに通すのなら命は助けてあげるわ。」

すると柔和な笑みを浮かべたまま老人が振り返る。そして「命は助ける？なにを言っておるのだ？我々が見逃すならともかくそちらが見逃すと？成り上がりの謀反人、だまし討ちの代名詞たる北条を騙る伊勢氏の当主風情に・・・我が管領さまの命を奪い我々を見逃してあげると・・・舐めるなよ！！この下等種が！！」ギロリとこちらを睨み付け刀を抜く老人。

「我は！！権威の体現者にして！！処罰の執行者！！我が長野家の使命は管領職につくものの敵を肉片！！塵芥の一つまでも消し去ること・・・きええええええええええ！！！！！！」

関東管領家老・長野業正が突っ込んできた。

「あああああああうお！！！！」
後ろにいたメタボ男も奇声を上げるそれと同時に腹がへこみ筋肉が盛り上がる。そして北条軍に突撃する。そして同時に微動だにしない兵が大声を上げて突撃してくる。あまりにも異様だった光景に固まる兵たちがお構いなりしに長野兵が倒していく。

「な、なんなのあいつ！！」

「ちよつとキャラが違いすぎるぞ！！！！」

腰から刀を抜く氏康と典厩。そして氏康は

「者ども！！恐れるな！！最後の狂騒でしかない！！ひるむな！！我に続けい！！」

その言葉に闘志を取り戻し応戦する北条兵。どちらも退かぬ混戦模様だ。

「氏康殿！！！！」

援護に向かおうとするが巨大な棒が突き出され邪魔をされる。

「そ、そうはいきません。」

「邪魔をしないでくれ。」

「あの人を倒さないと……ぼくの国もとられると管領様が……」

「失礼だが……大名か？」

優男は少しオドオドしながら自己紹介をした。

「ぼ、ぼくは佐竹義重と申します。」

(はああああああ!!!!)

こともあるうに関東屈指の猛将・鬼義重だというこの少年。

「すまないが年は？」

「こ、ことしで十二になります。」

さらにビツクリ。まだ子供もいいところだ。

「すまないが少年少女を傷つけるのは趣味じゃない。下がってくれ
!!」

ブンと刀を振り下ろすとビクッと一歩下がるが意を決して振りかぶって襲ってきた。それを軽くいなし鳩尾に一撃を入れると嘔吐してぐったりと倒れこむ義重。氏康のほうを見ると兵たちは北条の方が優勢だが氏康は長野親子に苦戦をしてくる窮地だ。すぐさま向かおうとするが後ろから笑い声が聞こえ後ろを振り返る。

「ふはははははは……」

義重が空ろな目をしながら殺気を撒き散らしながらこちらをみる。

先ほどとは別人だ。

「な、何奴か？」

「ふははははははははは……気が高ぶる……溢れる……は

ああああああ!!!!」

体が変貌し白目をむきながらこちらに迫ってくる。

「バ、化けモンが!!」

刀を振り下ろすが生身の左腕で防がれる。

「化け物？ちがうな……俺は悪魔だ!!」

丸太のような太さになった右腕を振りかぶる義重。それを紙一重で

よける典厩だが風圧だけで吹き飛ばされる。

（ヤッベー・・・こりゃ死んだかな？？覚悟きめといてよかった。）
体は緊張で動かないわけではない。逆に頭はすっきりしてきた。

「武田典厩信繁・・・参る！！！」

刀を青眼に構えなおす典厩。初めての偉業と異形への戦いだ。不思議な恍惚感が典厩にはあった。

開始！！河越野戦！！（誤字にあらず）（後書き）

続きます。本日中に武田に帰れる様にしたいな。数話投稿する予定です。さすがに二日徹夜だと眠いな・・・。

結成！！甲相同盟・おまけもいるよ。(前書き)

投稿エラー七回・・・勘弁してくれ。

結成！！甲相同盟・おまけもいるよ。

「おおおおおおお！！！！」

もはや別物の怪物になった鬼義重こと佐竹義重。一撃食らえば跡形も残らないであろうその攻撃を不恰好かつ必死によける典厩。こちらからも切りかかるが生身で防がれる。

「ちよつとおおおお！！」

防がれたらすぐに筋肉をもって刀をへし折る。おかげで戦場に落ちている刀を何振使ったかわからない。馬に乗って槍でついてみたが、「俺を殺したければそのようなぬるい攻撃などせぬことだ！！！」と槍のほう折れてしまい借り物の馬を殺されるわけにもいかず馬ははるか後方に逃がしてある。

「ふははははははは……！！！！」

また刀を折られる典厩。頭の中はこいつをどうやって殺して氏康の元に急ぐかで満杯だ。幸いにも北条軍全体では管領軍を押している。しかし将同士の戦闘では異質とも言える敵将に押されている。特に上州の黄班こと長野業正とその嫡子・吉業を相手にしている氏康と、鬼佐竹の当主・佐竹義重を相手にしている典厩はかなり危ない状況だった。

「はあああああああ！！！！」

両手で持つている棒を振る義重。北条の兵を巻き込みながら典厩に迫る。その攻撃を両手で力を込めて両刀で防ぐ。しかし先ほどと同じようにひびが入って使い物にならなくなりまた近くに落ちているものを広い応戦する。

「はははははははは！！北条の将とは毛並みが違うな……。どこの将とてかまわん！！！！死ぬがいい！！」

「くう！！」

力負けしている上に速度でも負けておりしびれていく腕で刀を握り攻撃を防ぐ、こちらから攻撃しても人間の体とはいえないほどの硬

度を持つ肉体に阻まれ武器を失う一方だ。

(正史と違って規格外なのは知っていたけど・・・これは本当に鬼だ・・・)

「どうした、どうした!! 防戦一方か?」

戦う前にあつた恍惚感は減っていき、逆に不安と焦りが増えていく。自分自身でもまずいと思いついにかしようとするが頭が一杯一杯でどうしようもない。

「まだまだ!!」

「きかぬわあ!! そのような鈍刀では者の役にも立たぬわ!!」

また隙を見て脇腹に突きを入れるが肉体に入りもしない。また刀を拾い攻撃を防ぐ典厩。そこに援軍が現れた。

「武田の使者殿!! 御本城様はいずこに?」

「長綱殿!! あちらに!!」

視線でいる場所を指し示す。そしてこちらの相手を見るとあんどりと口を大きく開けて呆然とする。しかし、必死に意識を戻して

「種子島を構え!!」

直属の手勢・鉄砲隊三百に種子島を構えさせ、撃たせる。バンバンと大きな音が響く。

「ぬ、ぐうつわ!!!!」

さすがに堪えたのか倒れこむ義重。しばらく動かないことを確認して氏康の援護に向かう箱根殿こと長綱。まったく動かなくなった義重を見て典厩は惜しい人だったと心のそこから思い、次に

(これで佐竹三十六歌仙もなくなるのか・・・もつたない)

溜息をつき後の世でバラバラにされても一つだけでも国宝級の財物がなくなったことのもつたいなさを感じた。

「くくく・・・」

笑い声に一步下がろうとするが丸太のような腕に捕まり逆さ釣りにされる典厩。

「さすがに、さすがに痛かったが・・・この義重を舐めるでないわあ!!!!!!!!」

何事もなかったかのように立ち上がる義重に恐怖を感じる典厩

(こ、こいつは人間なのか!!)

「ふふふ……。いったであるう。俺は悪魔だと!!」

そのまま叩きつける義重。衝撃で息が一瞬止まり咳き込む典厩。

「なかなか頑丈ではないか……。ふん!!」

次の一撃。それにも耐える典厩。次々にドンドンと音を発てて地面にたたきつけられる典厩。

「こやつ、かなりしぶといではないか。そろそろ楽にしてやるか。すらりと腰から刀を引き抜く。今まで見てきた刀のなかでは数少ない青白く日光を反射した美しくも恐ろしく存在感がある刀だ。

「先ほど聞いた話だと貴様は武田の者だというではないか……。なら血統の誼でこの長船長義で葬ってやろう。」

刀を抜くと同時に正中線が空く。そこに体を思い切り捻りこみ頭突きをあとに叩き込む。

「なんだ。そのハエのような攻撃……。おお。な、何だ。体がくずれ……」

前のめりに倒れる義重。今度は起き上がる気配はなく、悔しそうに体に力を入れようとすが動けない。

「な、なにをしおつたか!!」

典厩は咳き込みながら頭から出る血をぬぐい義重に

「人間にはどうやっても後天的に鍛えられない場所がある……。げほつ、げほつ。そこを攻めたただけだ。」

それを聞くと悔しさをにじませた顔に悲しみを浮かべて

「ふふふ、これで俺も……。いや、僕も終わりか。」

正気に戻ったのか体が元の優男に戻る義重。そして憑き物の落ちたような顔になり

「さあ、戦国の習いだ。この首もっていくがいい。」

覚悟を決めた言葉を投げかける。しかし典厩は

「……。いや、持っていていかない。あんたにはこのまま本拠の城に帰ってもらおう。」

「ふ、僕が子供だからか？舐められたものだね……これでも戦国大名だ。恥をかかせるな！！」

激昂し始める義重に典厩はしゃがみこんで目線を合わせて話しかける
「舐めてるわけじゃない。お前はあの状態になると敵味方関係なく攻撃して傲慢になる。さつさと倒せた俺を倒さないで弄るようなことをしたのが証拠だろう。」

その言葉に目をそらす義重。本当らしい。

「おれも未熟者だから、よく分かる。力に酔うってことは、な。だから今回は遺恨無しでもう一回やるう。」

「しょ、正気でいつているのか？僕はあなたを殺そうとしたんだぞ。」

「人間ってのは危ういことや命の掛かったことをやると後々笑い話になるって父親がよく言っていたから問題はない。それにさつさと戻らないとまずいだろう？」

戦場の向こうでは綱成がおまけのほうの上杉当主を討ち取り、氏康たちも吉業に重傷を負わせて業正を退却に追い込んでいた。正史のとおり戦は北条軍の勝利に終わった。

「そのままここにいるとな、あんたも討ち取られてしまう。それはこちらにも不味いんでね。」

さすがに後々に北条家を苦しめて東関東の最大の大名になるとは言わなかったが正史を見ると武田と北条が戦になったときに恩を売っておけばいいと思っただ典厩だった。

「まってる、人を呼んでやるから。」

そういうと近くにいた佐竹の旗を持った兵を数名呼んでくる。心配そうに近づき数名で義重の体を持ち上げる。

「し、しばしまたれよ。名を聞いてよろしいでしょうか？」

「武田典厩信繁という。さつさと行った、行った。」

そういう典厩に対して義重が部下にささやくと部下の兵は驚くが義重の腰から大刀を引き抜いて持つてくる。

「殿がこれを、と。」

先ほど自分の命を奪おうとした刀を渡す佐竹の兵。

「これは受け取れない。こちらも思惑があるから見逃したのであつて。」

「それでも受け取ってもらいたい。命を助けてもらい次の機会と成長する時間をいただいたのだ。これでも足りぬぐらいた。」

受け取らねばここに残ると言い出しそうな義重に典厩が折れる。

「分かった。お預かりする形でよろしいか？」

「それでもかまいません。十分にお使いください。ものども引き上げだ。物資はそのままが良い。」

部下に命令を出す義重。そして部下に支えられながら頭を下げ

「典厩殿。またお会いしましょう。」

と別れの挨拶までして帰っていった。それを戦場でありながら見えなくなるまで見送る典厩。そして見送った後で刀を見直す

（佐竹義重の愛刀か・・・長船長義つてことはこれが名高い八文字の刀か。）

佐竹義重が敵の騎馬武者を鎧兜ごと真つ二つに斬り切り落としたほどの強度と切れ味を誇る名刀だ。

「個人的にもかなりの報酬があつたな。この戦。」

腰に有った中身の無い鞘を放り投げ名刀・八文字腰に差しなおす。

そして氏康達がいる河越城に帰還した。

「典厩様。ご無事でなりよりです!!」

涙を流しながら喜びを表す工藤源左衛門祐長。鎧も顔も血だらけで正直抱き疲れるのは勘弁して欲しかったがこれだけ心配させると何もいえない。

「源左衛門も活躍したようだね。」

「はい。地味なりがんばりました!!」

聞いた話によれば敵将四人を討ち取り三人を捕まえたという。地味

どころか大活躍だ。

「あれ？民部は？」

「あゝ．．．民部どのはあちらで．．．。」

上を指差すとやぐらの上で大いびきを掻いて熟睡している教采石民部景政がいた。

「民部は戦には出なかったのか？やけに身なりが綺麗だが？」

「いえいえ、とんでもございません。単身敵陣に乗り込み敵を蹴散らした拳句、撤退した宇都宮を追撃して先ほど帰ってきましたので。」

「血糊はおるか、ほこりもついてないように見えるが．．．」

「はい。北条の皆様も驚いていました。しかし私以上に活躍し証拠も持って帰ったため陰口も出ません。」

「そうそう。綱成殿と氏康様は？」

「あ、はい。そうでした。典厩様が戻り次第本丸に来るように。と仰せになりました。お待ちしていると思いますが。まずは身なりを整えませぬと．．．。」

源左衛門言うように先ほどの戦闘で鎧兜はへこみ崩れており小さな傷から血がにじんでいるためとても汚い。

「そういつても小田原にすべての衣類は置いてあるはずだ。このまま行っても問題はないだろう。」

とそのまま本丸に向かう典厩。去り際に源左衛門に民部の世話を押し付けておいた。

「失礼仕ります。典厩信繁入ります。」

鎧のまま本丸に入ると箱根殿がやってきた。

「典厩殿。このたびはまことにありがとうございます。さあ、御本城様と孫九郎が待つております。」

さあさあと手を引いて連れて行つてくれる。そして最奥の部屋に通されるがそこで分かれようとする箱根殿。

「あれ？長綱様はお入りにならないので？」

「僕はまだ仕事があるゆえ多目周防守と残務をせねばならぬ。あやつは怠け者でな、見張りがおらぬと逃げてしまふのだ。でわな。」
小走りで去つていく箱根殿。急いでいるところを見るとかなり怠け者なのだろう周防守は。後々聞いた話だが陣形や作戦の詳細、戦後処理と一番がんばったのが軍師でもある周防守らしい。気を使つてくれたのかもしれない。

「失礼いたします。」

「典厩か？はいるといいわ。」

氏康からの許可を得て入るとそこには氏康と綱成が楽しそうな雰囲気です話していた。典厩は氏康と目を合わせ

（成功ですか？）

（大成功よ。孫九郎も久しぶりに新九郎と呼んで切れたわよ。）

（よかつたですな。）

（これで・・・後はこちらのものよ。）

と目線で会話をした。最後の一言の内容が分かるまで時間はかからなかつたがこれは後の話。

「典厩殿。知らぬことはいえご無礼をした。」

頭を下げる綱成。だまされたとはいえ後には引かないらしくすがすがしい挨拶だった。

「こちらこそ、自分の目的のために北条全体を巻き込んでしまひもつしわけございませぬ。」

「よい。私達は結局その行動で助けられたのだ。問題はあるまい。」

「恐れ入ります。・・・それで私を呼んだのは何用で？」

頭を下げつつ問う典厩に上機嫌に答える氏康。どうも綱成と仲直りしたことが相当に嬉しいらしい。

（予想が当たつていれば直接言わないとわからなそうだからな。綱成殿は・・・がんばれ氏康殿。）

「うむ。これは正式に叔父上や周防と話して了承してもらったのだが同盟の件は了承できない。」

「は？は、はなしがちがうではありませんか?!」
思わず大声を出す典厩だが上機嫌な二人の様子に少し黙る。

「そうそう、話は最後まで聞くのがいいわ。確かに今言ったように武田と北条の同盟は認められない。それはあくまで武田家の当主が晴信ではないからだ。形式的には立場のあまり強くない後継者ではない上に諸国にはうつけとして名高い。しかし、私もうつけといわれつづけた者だ。あなたほどの人間が命をかけるだけの何かがあるでしょう。そして同行している二名も同じようだ。だからあくまで同盟を結ぶのは晴信が当主になってからということだわ。つまり、それまでは不可侵条約ということよ。そして、孫九郎。あれをみせなさい。」

「はっ、典厩殿。これを・・・。」
書状を渡す綱成。それ読むと中には今川の軍師・雪斎からの書状だった。その内容は北条との和睦が掻いてあった。

「これは？」
「駿河の大馬鹿姫からの手紙でもあるわ。あの馬鹿は戦と政治が苦手なのだけども蹴鞠と金稼ぎは得意なのよ。ふふふ。」

「楽しそうに今川の当主・義元のことを語る氏康。聞いていれば公家や大商人としては一流だが争いにかかわる戦国大名や戦国武将には圧倒的に、壊滅的に向いていない性格に能力らしい。」

「（この世界の義元はどうもかなりの馬鹿らしい。多分この世界はイメージと能力のバランスと知名度によって変わるらしい。第一病弱で裏切り上等、弱肉強食な武田信玄が活発かつ約束を守り続ける人物だもんな。佐竹義重も政治に十歳になる前から関わっていたって逸話からかもしれないがかなり若いし。）」

「そう考えている典厩は何事もなかったように手紙を返して氏康の言葉を待つ。」

「つまりね。私達北条家は今川と武田と同盟を結びたいのよ。」と、

「いつでも今川はおまけだから実際は甲相同盟つてことになるわね。」
「では……。」

「今は秘密裏つてことで公式の文面にはできないけど密書を渡すからそれを晴信に渡しなさい。晴信が家督を得てからよ。後の話はね。まあ……獲るのかもしれないけど。」

くすくすと笑いながらも先を読み続けて生き馬になるうとする北条氏康に多少恐怖を覚えるがこちらが約束を守っていれば敵対することは無いと安心もした。

「それだけじゃないのよ。ここに呼んだのは。」

「は？」

「武田家のあなたにはこの話はいいでしょうけど。旅芸人として参陣したあなたに褒美を上げないといけないわ。孫九郎。あなたはなにがいいと思うかしら？」

「見たところ刀を使うため銘の入った刀をお授けになればいいと思う。」

その言葉に嬉しそうにうなづく氏康。

「さすが孫九郎は私のことを良く分かっているわね。ちょっとまってなさい。」

部屋を出ると隣の部屋から紙と一振りの刀を持ってきた。

「孫九郎。あなたはこれから玉縄の城に詰めてもらうわ。これから私の側で支えなさい。」

「かしこまりました。」

「そして信繁。あなたにはこれをあげるわ。」

そう言つて刀を渡してくる。

「これは？」

「長船長義の刀で渾名を山姥切やまんばぎりとでも名づけましょうか。」

その名前を聞いて噴出す典厩。即座に断る。

「少しお待ちください。私は先ほどの戦の際に同じ銘の入った刀を手に入れました。さすがにこのような名刀を二振りも手に入れては不気味です。」

「そうは言っても今あげられるものはこれ以外にはないわ。それに下した物を断ると縁起が悪いわよ。黙って受け取りなさい。」

「そうだぞ、典厩殿。さあさあ。」

二人にそういわれると断るわけにいかなくなった典厩は謹んで受け取った。

個人的にも主家的にも大いに実りある戦だった。

結成！！甲相同盟・おまけもいるよ。（後書き）

くそう。目が覚めたら日を越していた。十五時間以上寝るなんて・・・。

甲州武田の乱・史実には無い大事件（前書き）

史実に無い事件発生

甲州武田の乱・史実には無い大事件

「むむむ……」

「先ほどからどうしたのですか？典厩さま？」

相模から駿河を経由して甲斐に帰る途中、するが都会の国境沿いで工藤源左衛門祐長が典厩信繁に問いかける。

「ん？」

「いえ、相模からここまで人目が無ければ、ずっと唸っているではないですか？」

「え……そうか？」

「自覚が無いのですか？」

溜息をつきながら答える源左衛門。

「何か心配事でも？」

「うむ。源左衛門の存在感なのさにな。」

「そうですね……。私ったら雪斎様に気付かれず弾き飛ばされてしまいましたからね……。」

駿河の今川館に寄ったときに出迎えてくれた今川の軍師・太原雪斎様だ。最初は外交官も兼ねているので温厚そうな人物を想像したが実際は崩壊した世紀末で巨馬にまたがっているような霸王だった。先行していた源左衛門が馬ごと弾き飛ばされたのは記憶に新しい。

「って！！違いますよ！！その前から唸っているのですよ。」

「あ……。たいしたことじゃない。気にしないでくれ。」

「私はいいのですが。民部殿は夜中も唸っているためすっかり寝不足で……。」

後ろを振り向くと目を閉じて馬の上でカクカク舟をこいでいる教来石民部景政がいる。よく落ちないものだ。

「うん……。実際くだらないことだしなあ。男にはあるんだよ。くだらないことで悩むのは、な。」

腰から水筒を取り出し口に含み飲み始める典厩。それをみて考えて

いた源左衛門はハツツとして赤くなり答える。

「ま、まままま、まさか典厩殿は女日照りで溜まっておられるのですか！？それでどうやって私たちを気にさせず抜け出そうと……」

「ぶほう！！！」

まったく見当違いの反応を示す源左衛門に水を思いつきり噴出す典厩。

「な、なんてことを口走るかぁ！！！」
「ガァーと吼える典厩。」

「え、違うのですか？私は兄上に下らないこと。と言われれば、そういうことだと思えといわれましたから……。てつきり……。」

「違う！！違う！！！」
「それでは？」

頭を二度三度掻いてあきらめたように話す典厩。

「実はな。同じ銘の刀をふたつもらってな。片方は賜ったものだから使わないわけにも行かないし、逆にもう一本は預かり物みたいなものだけ使ってくれと言われてるから使わないわけにもいかない。だからどうしようかと。」

「え、そんなことですか？」
呆れたような顔をする源左衛門。

「そんなことって言われてもな。たとえば源左衛門、あなたが晴信……様から刀を賜ったとしたらどうする？」

「無論、戦場で使い常に身に着けています。」
当然の様に胸を張る源左衛門。

「なら將軍から刀を賜ったとしたらどうする？」
「え……。それは……。ちよつと……。うむむむ……。」

比べるわけにいかないため悩む源左衛門。
「なあ。そうだろう。」

その言葉に納得したように頷く源左衛門。そこに光明を与えるものがいた。熟睡中して馬にもたれかかっている民部だ。

「りよゝ・・・ほゝ・・・使っ・・・ぐ・・・。」
寝言で答える民部、その言葉に仕方ない。がんばるかと覚悟を決める典厩。

「そ、そんなんでいいのですか？」

「まあ、くだらないことはくだらないことで解決するものさ。」
と、言いながら両腰に大小四本差込む典厩。

「バランス・・・いや、均等が取れてこれはこれで。」

などと納得してしまうほどしつくり来たため良しとした。悩みがなくなりすつきりする典厩と、それに対して考え始まる源左衛門。どうも苦勞人になりそうな感じだ。

「そつえばこの旗はどうしましようか？」

必要だと思つて持つてきた武田の旗も使わなかつたためそのまま持つて歸つたのだつた。

「これを北条に上げて同盟の保険というか、裏切つたら攻めていいという約束をする予定だつたがまさか男女の人間関係で解決になるなんて予想しなかつた。」

「ええ！そのような危険なまねをする予定だつたんですか？」

「そこまで譲歩しないと同盟なんて結べないと思つていたんだよ。」

「し、しかし・・・旗を与えるということはやはり危険かと・・・。」

「まあ、使わなかつたんだからいいじゃないか。これは晴信様に返せばいいことだしな。」

「まあ、そうですね。使わなかつたんだからいいですよね。」

ごまかそうと笑つ典厩に忘れようと笑つ源左衛門だつた。

「ん？」

甲斐の国境に着くと関所でなにやら問題があるようだ。何人もの行商人や浪人が列を作つて関所に並んでいる。

「ならんならん！！現在、甲斐の国に入ることが出来るものは何人たりともおらぬ。さあ、戻った！！」

十五名ほどの兵隊が槍や弓を突き付けて追いつ返しをはじめている。しぶしぶと帰り始める行商人と不満そうに戻るうとする浪人たち。

その様子を見ていた典厩はすぐさま民部をおこして自分は頭巾の上に笠をかぶった。

「その騎馬の者も戻った戻った。先ほどから申しているように甲斐の国には何人たりとも入れるわけにはいかぬ。」

こちらに近づき槍を向ける兵士。しかし、馬に乗っている人物を見て驚く。

「こ、これは教来石さま。」

「ん〜。」

伸びをする民部。そしていつものユツクリかつボンヤリとした口調でたずねる。

「ど・・・しい〜・・・た〜・・・。」

槍を下げて答える兵。典厩たちの中で唯一信虎の直臣なのだ民部はしかも官職までもらうほどの活躍をしている家臣でもあり有名なのだ。

「はっ！！こちらに・・・。」

三人を関所の中に連れて行く兵。どうも大きな声ではいえない内密なことらしい。

「実は現在甲斐の国は信虎様と晴信様が戦を行ってまして・・・南の大部分は晴信様に御味方いたしたため他の国に迷惑をかけてはいけないと仰られました。そういうわけで我々は関所で人を返しております。」

その内容に三人は驚き声も出せない。

「じよ〜・・・きよ〜・・・？」

「状況でございますか？何せ、信虎様が奇襲を仕掛けたため新館はあつという間に落城し、晴信様は御坂城と本栖城に兵を配備して下山城にて指揮を執っております。それに前もって調略しておいた

穴山様と小山田様の援軍によって盛り返しましたが悔しながら戦況はすこしばかり晴信様が不利といった模様でございます。」

（信虎と信玄が内乱？そんなものはなかったはずだ・・・いや、あちらの常識にとらわれたらいけないのは分かっていただろう。）

「それで主だった将はどうなった？」

自問自答していたがさすがに我慢できなくなったため口を出す典厩。「えっ、そういわれなくても。なにせ私は命令しかされておりませぬ。細かいことに関しては分かりかねます。先ほどの状況も先ほど甲斐から出た行商から聞いたもので・・・確か南北に分かれていますとは聞きましたが・・・。」

（数日ってまだ俺たちが甲斐から出て五日と立っていない。まさか入れ違いざまに内乱になったのか？）

「晴信様は下山の城でいいのか?!」

「は、はい。そこにおられるのは間違いございません。」
馬の腹を蹴り上げて急ぎ関所を突っ切る。精子の言葉も何のこもあろう。

（ここで晴信が負けても俺たちには関係ないかもしれない。しかしもしも俺たちの世界に関係が出たら・・・。）

武田信玄が関係する物事は多い。もし負けてしまったら戦国時代が終わるのが遅くなるかもしれない。治水技術も落ちるかもしれない。徳川家康が天下を治めないかもしれない。織田信長が不利ゆえに機転を利かせることもなくなるかもしれない。などなど頭に浮かぶがなにより命の恩人で信賴して典厩の名前をつけてもらったことに対する裏切りかもしれない。

「先ずは状況だ。状況を知らないと・・・。」

馬を飛ばして下山城を目指す典厩。典厩。いや義信が知っている限り下山城はたいした防備もない屋敷に毛が生えたようなものだったはず。まだ御坂城や本栖城の方が楼上には向いているはずだ。とにかく馬を飛ばす典厩。目の前が見づらくなるため頭巾はもうしばらく前に捨てた。駆ける駆ける。そして常人では驚くほどの速さで下

山城に到着する。

「なにものだ!!」

「じゃまだ!!……うおつと!!門番!!典厩信繁が来たと伝える!!」

馬で城門を抜けようとしたが数日前まで馬にすら乗れなかった者の馬術ではなく勝千代の愛馬・黒駒に乗せてもらっただけだ。黒駒がひっくり返ると落馬しながら門番に掴みかかり言上を伝えてもらう。ど、どうぞ。晴信様がお待ちでございます。」

イライラしながら案内の兵に連れられて部屋まで通される典厩。そして中央に位置する部屋に通されるとその奥の部屋からドスドスと荒々しい足音が聞こえてきた。

「おう、どうした?典厩よ?」

余裕そうな獰猛な笑みを浮かべた晴信が出てきた。あわてているのが馬鹿らしくなるような余裕をまとっている。それを見て今までの緊張が切れて溜息とともにへたり込む典厩。それを見て爆笑する晴信だった。

「し、心配して損した気分だ。」

「いやいや、まあ、よく来てくれた。民部は?」

「ここでも忘れられる源左衛門。不憫すぎる。」

「後から追ってくるはずだがな。」

「なにを怒っている?」

「別に……!!」

あわてていたのが恥ずかしくなり照れ隠しのように怒り興奮する典厩。晴信の後ろには山本勘助がいる。

「勘助殿。状況は?」

「ぼちぼちといったところでしょう。今は不利ですが晴信様がこのような戦で負けるわけがありません。」

「そうだ。このあたしが負けるか。あははははは。」

「すげえ、自信だな。まあいい。こっちの将は?兵力は?」

この質問にも勘助が答える。

「そうですね……。主だった将だけを上げれば大抵はこちらに付いておりますが、逆にあちらは兵力がこちらの十倍強ありますな。」
「主だった。ってことは向こうにもいい将はいるんだな？」
「無論です。と、言ってもこの数名だけです。」
出された紙を見る典厩。その紙には

小幡山城守

原美濃守

横田備中守

多田淡路守

秋山伯耆守虎繁 別名・信友

とここまででも甲斐の国の超一線のメンバーだ。しかしその後の三名がかなり問題だった。

真田弾正幸隆

真田兵部昌幸

飯富兵部少輔虎昌

とかかれた三人だった。

(……………あれ？見間違いかな？)

と思いつつも見渡すが変わり様がない。そして

「はあああああああ……！！！！」

と大声で叫んでしまう。それに驚く晴信と勘助。叫んだ典厩は放心しながら、終わったかもしれない……。と呟き始めた。さすがにまずいと勘助に下がってもらい二人だけになる晴信と典厩。二人だけなので晴信と典厩といえはいいだろうか。

「はああああ、肩がこったな。さすがにまだなれないな。この演技には。おいっ、おい。」

パシンパシンと少し強めに頬を叩くと正気に戻る義信。

「あ、おお、ホル信様。」

「だれだよ。ホル信って。今は勝千代でいいよ。勘助も下がっているからな。」

多少おかしいがタメ口で話し始める義信。

「それで。何で叫んだんだ？」

「いいや。なんでもない。」

それに怪訝そうな顔をして勝千代は

「お前の知っている未来に関係あることか？」

思わず身をそらしてしまふ義信。

「ほう。細かいことは教えてもらつたらつまらないから教えなくてもいい。誰が気になった？秋山か？飯富の爺か？」

「いや、この真田つて奴。」

「そんなに驚くことか？真田なんて可もなく不可もない人物と聞いているぞ？娘のほうも目立たない人物とのことだが……」

その言葉にカツと目を見開き義信は

「そんなわけがない!!!」

と叫んだ。ビビる勝千代。

「そ、そんなに優秀なのか？」

「細かいことは言わないほうがいいみたいだから言わないが……親のほうは勝千代が落とせなかった城を一日で落としているし、子供の方はなんと言うか……」

「い、いいよどむなよ。」

「四万の兵を二千で撃退したり、国力が百倍違う大名が恐れて暗殺しようとしたり逸話には事欠かない人物だ。」

ポカーンと間抜けな顔をしている勝千代。しばらくして乾いた笑い声が響く。二人が笑っているのだがかなり怖い。

「味方に引き込んだほうがいいと思うんだが……」

「あ、あたしもそう思う。すぐさま使者を送ろう。」

外にいる勘助に念には念を押して味方に引き込むように念を入れて頼み込んだ。さすがの勘助も事の重大さを感じたのか重々しく承る。「できるだけ直接戦わないのがいいと勘助と相談して切り崩し作戦をしておいてよかつたかもしれない。」

勝千代は肩を動かしながら安堵した顔をした。それをみて

（まあ、実際は信玄のほうが強いしな。織田信長公の野望をやると

真田なら粘れても信玄が攻めるとこつちの兵隊が溶けていくからな。あれはトラウマだった。」
などと発破と保険をかけたことを安堵した義信だった。あとの武将もできれば全員仲間に入りたいと思いつながら勝千代を見ると肩と首をしきりに揉んでいる。態度を見ると意識的なのは分かるがこつちも連続で行われるとさすがに気になる。

「そんなに凝るのか？」

「触ってみれば分かるさ。ほれ。」

背中を向けて触れという勝千代。呆れながら肩を触るとガリゴリと音がしそうなほど凝っていた。驚きながら首と腰を触ると同じような感触だった。

(ど、どれだけ凝ってたあ！！数日前にほぐしただろうが・・・)

「はあああ・・・。分かった後で揉み解してやるよ。」

「いやあ、悪いね。」

「あれだけ態度に出していれば、なあ。」

「荷物は全部持ってきたから安心してくれたまえ。」

はいはい。と生返事をしながら部屋に凝りの対処法を考える義信だった。

甲州武田の乱・史実には無い大事件（後書き）

くそう、オリジナル作品の方がぜんぜん完成しない。約束の一週間まで後二日なのに。と、自分自身を追い詰めないとやる気が出ない作者です。こういうのはできれば毎日更新しないとやる気がなくなっていく感じがするので徹夜しても書いてます。

人員募集・典厩信繁隊（前書き）

調略が得意な将といって武田信玄が上がらないのはなぜだろう。やはりBASARAの影響が強いのかな？

人員募集・典厩信繁隊

「む、む、む。」

勝千代の声が途切れ途切れに聞こえる。別に疚しいことはしていない。ここ数日は凝り固まった体をほぐすのが義信の役割になっている。義信自体はやりたくなかったのだが勝千代がわがままを通すため仕方なくやっている。

「・・・なあ。」

「むう。なんだ？」

極楽状態の勝千代とその上にまたがり背中をもんでウンザリしている義信。

「今は、内乱状態だよな？」

「あ、当たり前のことを聞くな・・・。もつと下の腰だ。」

「真田のほうもいまいち反応が薄いんだよな？」

「そうらし・・・い。どうも使者の甘利の爺がしくじったからなおかげで・・・爺は部屋に謹慎してしまった。」

グリリリとかなり強めに押す。

「ちよ、ちよつと痛い。」

「それで戦力差は広がる一方だよな。」

「う・・・ん。なにせ、信濃の豪族を味方に引き込んだらしい。」

「・・・それなのに・・・」

思わずまぶたを押さえる義信。悲しくなってきた。

「こういうときは余裕を持たないと・・・な。」

「持ちすぎだろう・・・はあ。」

背中を揉み終えて次は肩だ。普通ならやめるが染み付いている上に性格もありきつちりやる。

「それで何か考えはないか？義信。」

「なんで俺任せ？」

「言っちゃ何だが、あたしはこの二年間ボケ気味だったせいかな。」

どうもズレがあつてな。戦のほうはともかく政治力がもどつていないらしい。勘助が言うにはあとすこし経験とつか刺激が必要らしい・・・なあ。」

（せ、政治力が低い信玄っていったい。戦馬鹿つてことか？だめじやん。）

「で？俺に何をしろと？」

「そこなんだよねえ。戦の作戦なら勘助。実践なら甘利の爺がいなくても板垣の爺がいるからいいしな。」

「あれ？高白斎さんは？」

「駒井の爺なら民の慰安に行っているからおらん。だから・・・。」
「呼吸ためて勝つ千代はいう。」

「調略をやってもらおうと思う。別に謀略でもかまわんよ。」

「は？」

目が点になつていているだろつなあ。と自分自身思つてしまつがさつさと答えないと全部負かされそうなのですぐさま。

「引き抜きやります。から、勘弁して。」

「そうか、そうか。では人員や目標は義信に一任するからがんばれ。」

コンビニでパンを買う軽い感じで答える勝千代。あきれながらもすっかり引き受けマッサージもしっかりやる義信。そのまま勝千代が寝るまでマッサージは続く。

翌日

「と、晴信様に任されたのでがんばりましょうか。」

「どつという意味かわかりませぬが、拙者に何か御用でしょうか典厩殿？」

説明を一字一句間違えずに勘助に伝えるが昨日の自分のように頭を

抱える勘助。

「実はこれから調略に行かねばならぬので人員を補充してほしいのですが？」

「人員の関係は高白斎殿が行っておりますのでそちらにいかれてはいかがかな？」

「いやいや、武士はいいのですよ。私がほしいのは三ツ者さんざなのですが……。」

「そういうことならば……人員の特徴と名前を書いてありますゆえこちらをお読みください。」

紙に書かれた人員名を確認していくと……ある名前があった。

「望月信永？」

「ああ、そのものですか？実は……。」

説明しようとする勘助を手で制して言葉を続ける典厩。

「佐久の望月家でしょうか？あの甲賀で勇名をはせている。」

「知っておるのですか。なかなか博識でいらっしやる。さすが天命の者ですな。」

ハツハツハと笑う勘助を見て頭を抱える典厩。なんか癖になってきたのかな？頭を抱えるのは。と思う。

（な・ん・で。典厩信繁の三男がいるんだよ！！！！）

頭痛がしてきて更に頭を抱える典厩。自分の名前を持つ人間の子供がいれば頭が痛くなるはずだ。

（じ、時代考証なんてないのかなあ？）

遠い目をし始める典厩を勘助がたしなめる。

「すみませぬ。」

「望月殿でよろしいでございますか？」

「あ、はい。お願いし申す。できれば民部殿と源左衛門にその望月殿以外にあと一人お願いしたい。」

少数精鋭で行きたいので五名で敵地潜入すると決めていたため三名は決定したので最後の一人はお任せした。実際はこの頭痛を治めたのでバフリンを飲みたかったので丸投げしたのだが……。

「かしこまりました。では・・・」
対話を終えて分かれる二人。結果・夕方に出発することになった。

「人員確認!!」

前日に必要なものを用意しておいたため人員のみを確認する。確認
といっても自分を含めての点呼でしかない。

「一! 典厩信繁!!」

自分を指差して次に前に並んだ四名を次々に呼んでいく。

「二!」

「く、工藤源左衛門。ここにいます。」

「三!」

「zzz・・・」

「よ、四!」

「お初にお目にかかりますのじゃ。望月八千代信永なのじゃ。」

「・・・五!」

「豊富村の宗助です。の、農民ですががんばります。」

(な、なんだこの濃いメンバーは・・・)

上から超絶地味・のんびりノッポ・のじゃロリ・金髪少年。前半二人は実際にいるかもしれないが後半二人が実際に中世日本に居るか? いや、いない。特に金髪少年。

「え、えつと。はじめまして・・・。先ほども言った様に私が典厩信繁です。」

屈んで挨拶をする典厩。二人とも中学生か小学生高学年ぐらいの慎重しかない。

「は、はい!! 勘助様から推挙いただきました。足を引っ張らないようにがんばります!!」

ガツチガチの宗助とは逆に

「うむ、うむ。宗助とやらがんばるがよいぞ。」

人員募集・典厩信繁隊（後書き）

宗助の正体はわかる人は一発でわかる人物です。オリジナル小説のほうも復活しました。こちらはプロットを治しながら書いていくので二日に一回更新します。

狂気の勝負師・真田弾正（前書き）

本日から二日ほど出張します（自営業なので仕入れ視察。）今の時代珍しく携帯電話を持っていない作者はもしかしたら更新できないかもしれない。

狂気の勝負師・真田弾正

「やれやれ……。」

目的地である真田屋敷を目指して出発した一行。途中で十名ほどの山賊に襲われる事態があつたが源左衛門と宗助にあつという間に倒された。勇名高い内藤昌豊である源左衛門ならともかく、ただの農民出身の宗助があそこまで強かつたのは意外だつた。頭も切れるよつたので思わず出が武士か医者かと聞いたが先祖代々農民とのことだつた。

（直属の部下じゃないけど内藤・馬場という一国クラスの名将がいるとは男冥利というか武将冥利に尽きるといふものだなあ。それにしても農民出身の將つて武田にあまり居ないけど、誰かな？失礼だけど高坂弾状つて感じなほどいい男でもないし。多田満頼あたりかもしれないなあ……）

などと自分の知る武田の將と宗助を比べていた。相変わらず顔隠しの頭巾と化粧をしているが楽しそうに宗助を見ている雰囲気がある。典厩に対して源左衛門が質問をしてきた。

「典厩殿？なにか面白いことがありましたか？」

「実はな、あの宗助を武士として取り立てようと思つていんだよ。五百貫ももらつていて勘助殿と違つて俺には直属の部下つていないしな。」

「ええつ！！私はずっと典厩様の直属だと思つていましたよ！！」
シヨックそうに顔を青くして源左衛門は叫ぶ。

「え？？」

「え？じゃないですよ！聞きましたよ、典厩様が願つて私を呼んだのだと。」

そういえばそうだつたと今頃思い出した典厩。

「なので私は工藤の家から分家した形をとつてしまいました。それに晴信様も扶持ふちは典厩様から天引きと聞きましたよ。」

「だったら直属の部下だったね。完全に忘れてた。」

はっはっは。と笑う典厩だが冗談にならないほどシヨックを受けている源左衛門をみてさすがに悪いと思いつ話を交える。

「あゝ……。分家すると何か悪いことがあるの？」

機嫌が悪い源左衛門だったが直属の上司にたずねられたら答えないわけにはいかず答える。

「・・・分家すると本家、実家から独立したことになって自分の財産以外もつていかれるんです。なので私の全財産はこの身と晴信様の屋敷にある部屋の私物だけです。」

(それって早い話が無一文に近いつてこと?)

ヤッペーともはや癖になった頭を抱える行動をとる。そして源左衛門にたずねる。

「源左衛門は大体どれぐらい扶持がほしい？」

まだ内乱中のため実際は空約束になるかもしれないが一応書類上では五百貫もらっている大身なので塗りでない給料なら払おうと思っただ。

「え?どれぐらい……。えっと……。典厩様におまかせします。いきなり言われましてもよくわかりませんので……。」

「じゃあ百貫ぐらいでいい？」

百貫とは今の日本円にして約四千万円ほどの収入だ。ちなみにこのころの工藤家は作者の調べでは約十五貫ほどだ。

「ひゃ、ひゃ、ひゃ、百貫?!」

「安かったのか?けどな……。これから人材を……高すぎるんですよ!!!」

言葉を切つてまで叫ぶ源左衛門。

「じゃあ五十貫ぐらいでいいか？」

「それでも高いですけど……。用人という形でお願いします。」

用人とは陪臣(家臣の家臣)の家老みたいなものだと考えてくればわかりやすい。要は副官や補佐官だ。

「かまわないが……。」

それでいいのかと目で問ってしまふ典厩。なにせ武田四天王の一人をわずかな額で雇ってしまふのにはさすがに抵抗があった。

「で、では名をください。苗字を変えるのは晴信様が許可を下さるねばいけません。名をいただければ幸いです。」

（と、いつてもきまつてるよなあ・・・けど苗字を変えるときにまた名前を変えるから慎重に考えよう。）

としばらく頭をひねってかんえがる典厩。そして

「祐長から‘長’をとって信繁の‘信’はさすがにあげたら不味いから‘繁’とって繁長ならどうだ？」

（上杉に似たような名前のやつがいた気がするけど、まあ、いいか。）

などと簡単に決めだが源左衛門はかなり喜んでいゝ。どうも親と兄以外に物をもらうというのがはじめてらしい。相変わらず不憫すぎる。

「わ、わかりました。確かに受けます。受けさせていただきます。では、苗字が変わったときも名前をお願いします!!」

それから鼻歌を歌いながら飛び跳ねながら行動する源左衛門。頭の中を見たら間違いなく花畑だろう。そんなこんなことをやっているうちに目的地に到着した。

「兄上、晴信様から典厩信繁殿が使者としてまいられましたが？」
顔に十字の傷がある中年の男性・矢沢源之助頼綱が苗字が違う実兄に伺いを立てる。

「ククク・・・、そんなに緊張することはあるまい・・・。なあ、源之助・・・。お前の見立てではどう・・・だ。」

それに対して数歳ほど上の白髪総髪（おんがみ）の男が答える。この屋敷の主人・真田弾正幸隆だ。もともとは信濃の、いち武士団の頭だったがいろいろな理由があり信虎（しんこ）に使えることになった。

「私めには皆目……。現在喜兵衛が対応する予定ですが……。」
その言葉に幸隆は暗い笑みを浮かべたまま一言。

「派手にやりな……。派手にな。」

クククと笑う幸隆を後にして部屋を出る頼綱。

（わが兄ながら恐ろしい人物だ。周りから物の怪扱いされるとい
うのに実にうまく溶け込む。もはやこの武田家では兄上を見切る人間
はいるまい……。）

「喜兵衛には兄上の言いつけどおり……。やってもらおう。」
そのまま門に向かう頼綱。

「晴信様の使者・典厩信繁殿でございますな。私はこの真田家の用
人を務めさせていただきます、矢沢源之助頼綱と申します。」

「こちらとて……。私は典厩信繁と申します。このたびはこちら
のわがままを通していただき、ありがたく……。」
お互いに挨拶を交わすと頼綱が周りから見られては困りますと中にい
れる。

「刀は預けなくてよろしいのですか？」

普通なら刀を預かるところだがこの真田家では問題がないように頼
綱は手を振り刀を受け取らない。

「何があるかわかりませぬから……。どうぞ。」

などという意味深な言葉を告げる頼綱に警戒心が最大になる工藤源
左衛門祐長もとい繁長と宗助。少し身構えながら動く信永。それに
比べてまったく緊張していないように見える典厩と民部。民部のほ
うは寝ぼけているのが正解で、典厩はといえば

（ははは……。戦国有数のチート一族だ。何がっても不思議じゃ
ないや〜い。）

と諦めがあり、どうにでもなれといった感じが本当だ。そのまま屋敷
の敷居をまたぐ使者団。

「父上に仇成す者か！先日の者のように成敗してくれる！！」

と大声が聞こえ名乗り始める。

「わが名は真田兵部昌幸なり!!」

「おなじく伊豆昌輝!!」

「そして安房信綱!!われら三兄弟をおそれるならかかってくるがいい。」

まったく同じ顔の三人の少女が現れた。少女といっても鉄砲・斧・三尺刀を持って鬼気せまる迫力を放っていれば恐ろしくなる。寝ぼけていた民部ですら刀を抜いてしまうほどだ。

「両者そこまででございます。」

その対応を見て間に入る頼綱。三つ子姉妹も武器をしまつ。

「典厩様をのぞく皆様はあちらでお待ちを兄上に会う資格があるのは典厩さまだけでございます。」

「な、何故ですか?」

疑問を口に出して怒る源左衛門。それに答える頼綱

「よく御覧なさい・・・。」

三姉妹から武器を受け取り源左衛門に渡す頼綱。その武器を見て驚く。なにせ今まで鬼気せまる迫力で持っていた武器がすべて木製の偽者だったのだ。

「お分かりでございますか?このような状況下でも相手を見れぬお方に兄上に合う資格はございませぬ。この前の甘利殿はこの試験の後、怒り攻撃してまいりましたが丁重に反撃して追い返しました。あなた方も恥をおかきなさいますか?」

そう言い籠められる源左衛門。何か言おうとするのを手で制する典厩に一礼をして案内の女中に従って部屋に入っていた。

「さすがにございますね。さすが晴信様に五百貫で迎えられる有才のものです。胆力もすばらしい。さあ、こちらに兄上がございます。」

「

感心したように案内をする頼綱を追う典厩だが、あの場面では実際は（真田三兄弟が逆!!それで三つ子?!）

と驚愕していたため反応できなかったというのが正解だ。それを冷

や汗を隠しつつついていく典厩。そして陽のあたりにくい一室に通される。

「どうぞ……」

と自分だけが通される。その奥にいた人物に恐ろしいまでの恐怖という感情を覚える。佐竹義重にあった肉体的な恐怖ではなく精神的な、なんともいえない不可解な恐怖だった。

「さあ……。かければよいではないか。座らぬのか？」

「申し訳ございません。では……」

恐怖を押さえ込み座る典厩。しかし圧迫感によって座ると同時に冷や汗が吹き出る。

「ククク……。どうも顔色が悪いようだが……？」

「いえ、失礼を……。早速本題を　　「私を調略しに参ったのであるう？」

本題を告げる前に本題を答えられうなずくことしかできない典厩。

「そう硬くなる事もあるまい。このような時期に参られる用件とはこれ以外にありますまい。」

「そうでございますな。それお返事は、いかが？」

「……そちらの条件は？」

「お望みしだいのできることは……。」

途中まで言いかけるとするとひどくつまらなそうな顔をして迫力が強まる。

「失礼を、なれば何がお望みでしょうか？」

「ククク……。」

笑うだけで答えようとしない。

「どうだ？当ててみるがいいさ？そのために使者になったのだから？」

「そのとおりで……。なれば。少し時間をいただきたい。」

それにうなずく幸隆。考えはじめ典厩。

（真田幸隆か……。恐ろしい人物だ。よく考える、俺。）

しばらく考え続ける典厩。そしてある考えにたどり着く

「では賭けをしませんか？」

「ほう。なぜだ？」

「真田の家紋は六文銭。これは三途の渡し賃と聞きます。それほど覚悟がありながらなんのよくも示さないとすれば楽しみがほしい。それも命を懸けるにふさわしい大勝負が！と思ひまして。」
ニヤアと恐ろしくも愉快そうな表情を浮かべる幸隆。どうやらあたりらしい。

「ククク……。その考えにたどり着いたのは父上と昌幸だけが……。他人に知られたのは初めてだ。」

「ありがたき。」

「なら聞くが俺を真剣に楽しませる方法、勝負とやらはあるのか？それを言われると典厩はずねる。」

「あなた様の得意なものは？それであなたを負かしましょう。」

「大きく出たな……。いいだろう……。。」

スツと立ち上がり隣の部屋に行く二人、そこには普通の将棋盤のかるく十倍は大きさはある将棋盤があった。

「将棋でございますか？」

「ああ、大局将棋……。だ。」

上座に幸隆が座り下座に典厩が座る。大局将棋とは将棋で一番大きい将棋だ。終わるのに一日以上かかる規格外の将棋。

「それで？ただするのではありますまいな。」

「クク……。よくわかつているな。ただ将棋をするのはつまらぬ。なのでこの将棋は駒に賭けを入れる。この多量の駒から一割、四十枚にかけてるものを決めておく。それは紙に書いておくからごまかしはきかん。」

「かけるものとは？」

「好きに賭けるといい。俺は家族と命をかけてこの遊びをしているがな……。ククツク……。狂気の沙汰ほど面白いと言うではないか。一回の勝負ではつまらない。どちらかが倒れるか狂うまで続けるのだ。それまでは賭けたものも取りはせん。さあ、一刻後行う

とする。」

心底楽しそうに笑って部屋を出る幸隆。典厩も準備をしに部屋に戻る。会談ではどうだったと聞く皆を無視して食事と賭けの紙を書いて一刻後部屋に戻る。

「ほう、よく退かなかつたものだな？」

「これに負けて真田殿が仲間に入らなければどの道すりつぶされるのがオチでございます。命を助けていただいた晴信様のために、自分自身が生き残るために退けませぬ。」

「よい覚悟だ。」

狂気の将棋の対局が始まった。

狂気の勝負師・真田弾正（後書き）

首が痛い。なんか体調が悪いな、明日から出張なのになあ

調略？無理？全て押し通す！！（前書き）

イヤッホーイ！！！！PV一万 ユニーク千突破！！

調略？無理？全て押し通す！！

パチリパチリと駒を打つ音だけが聞こえる。そして、

「これで俺の勝ちだな。」

「まだ一度目が終わったばかりです。まだまだですよ。」

一回戦を終えてすぐさま続きを行う二人。戦法は二人とも大きく違う。真田弾正幸隆は攻め弾正の異名に恥じない異常なまでの攻めの将棋。対して典厩信繁はすべての駒を受ける待ちの戦法でいなしている。この一回戦を終えるまでちょうど一日が経過している。二人とも水分以外は持ち込んでいない。

「なかなかの腕前だがそれでは俺に勝てない。」

「かまいません。私のほうが体力もあり若いですからそちらがつぶれるまで我慢すればいいことです。」

「ククク……、そんな悠長ことを言っていていいのか？この間にも信虎様は下山に攻め込んでいるかもしれんのだ……。」

二人で圧力を掛け合う。相変わらず異常なまでの圧迫感がある幸隆に意地と体力が尽きても気力で暗いつこうとする典厩。そして二回戦が始まった。

「それにしても丸一日がたつというのに父上はまだあの者を倒せぬですか？」

「そういうな昌幸。見たところあの典厩という男は実戦の経験は少ないようだ。訓練の経験や気力はあなどれん。」

「しかし、父上が負けるところなど考えられません。あの信虎や上野の長野業正でさえ父上に勝つことはできませんでした。あのような男に……。」

数部屋離れた一室で幸隆の嫡子・昌幸とその叔父である矢沢頼綱が語り合う。

「昌幸よ、兄上も言っておるであろう。そのように自身の父を信じるのはよい。しかし、そのようにすべての者に兄上がすべてを勝るとはありえぬことだ。信綱や昌輝のように自分に才能がなくとも努力で兄上に追いつこうとするものがあるのだ。現に信綱は個人的武力に限れば兄上を越しているであろう。」

その言葉に掌をたたきつけ反論する昌幸。

「それは父上が手加減しているからに過ぎませぬ。」

「昌幸よ。いい加減人を認めることを覚えることだ。おぬしは兄上をゆうに超える器と才があるのにそのように兄上の真似だけでは意味がない。」

「お言葉ですが叔父上、この昌幸は上野での記憶から父に勝ったものをみておりません。」

「はあ……。意固地じやのう。」

あきれ頼綱に、父上に勝る武将などいない。とすねた態度をとり自身の部屋に戻る昌幸。

「このまま昌幸、いや喜兵衛が跡を継いだら真田は滅ぶ。かといって武と直感に頼る信綱や巧うまさと情報に偏る昌輝に任せたとてこの家は無様な息か確かできぬかもしれん。せめて三人を足して埋められていれはな。」

悲しそうに、つらそうに顔を伏せる頼綱。大きすぎたのかもしれんと自分の兄を思う。

「さて……。そろそろ限界ではないか？さすがに……。？」

二回戦の途中だが幸隆が話しかけてくる。

「さあ、なぜですか？まだまだですか？」

「ククク……。そう意地を張らずともいい。かなり参っているのはわかる。顔を見れば驚くであろう。」

「その様な戯言は別にしてつつけましよう。」

そう言っただきなひょうたんに入れた飲み物を飲む。中身は水でな

く栄養ドリンクとコーヒーの混ぜたものだ。ばれたら水とは言ったが純水ではないと屁理屈を言い張るつもりだ。この豪傑を逃せば信玄の覇業もここで止まる。これは戦だ。

「ふん。まったく動じぬな。」

「どうも。」

またぱちりと駒を動かす。今回も一回戦と同じで幸隆が押している。典厩は長引かせることだけを考えて粘るだけだ。

（ああは言ったがさすがに中年になるとこつ気を張っているのも楽ではない。この野郎はかなり凶太い肝か、ふざけた意地があるんだろうな。）

圧倒的に圧力を相手にかけている幸隆も実際は相手と自分に気を張り続けているため消耗していた。真田の忍びに作らせた液体薬も飲んで体力維持に努める。そのまま時間は過ぎて二回戦は終わる。また幸隆の勝ちだ。

「さあ、次に行きましょう。」

すぐさま用意をする典厩。それに笑いを浮かべて答える幸隆。そのまま二回戦・四回戦と終わり完全に徹夜と絶食を行って四日がたった。

（さすがに栄養ドリンクとコーヒーでもやばい。頭がジリジリと焼けてきそうだ。）

三回戦の途中で鼻血を噴出した典厩だが自身で顔面を叩きわざと鼻を腫らして出血を止めた。

（この坊主……。これだけ粘ったのは長野の糞爺だけだ。どうして・・・見た目通りのガキかと思えばその実は大蜘蛛やすっぱんのようなしぶとさとしつこさだ。）

こちらも年のせいもあり鼻血や顔に出てはいないがかなり疲労している幸隆。

「次ですね……………」

それでも用意をする典厩に驚く幸隆。思わず聞いてしまう。

「ちよつとまで……………。お前は晴信の使者だったな……………」

。なぜ、ここまでする?」

「急になんですか? 時間稼ぎですか?」

「違う! ！なぜそこまでやる?」

「さあ、なぜでしょうね? 放っておけないからでしょうか?」

それにニヤリと笑う幸隆。

「惚れたのか?」

「まさか。命を助けてもらっただけですよ。それにこれからどう伸びていくかわからないですけど間違いなく戦国有数の、いや、十本の指に入る大名になりますよ。」

「すごい自信だな。おまえ自身のこともないの……」

さすがに歴史を知っているとはいえない。なのでごまかしている典厩。

「強いて言うなら、私は流人です。そんな俺は拾ってくれて自分で看病してくれたのですよ。それに典厩信繁なんて名前ももらいましたし、それにこう見えても俺は家族仲がかなり良いでしたからあの信虎を見ると頭に来るんで……。それも理由ですかね?」

「ふん、つまらないやつだな。腫れた惚れたならからかう材料になつたてのに……」

「話はここまでですよ。次です。」

用意を終えて手で進めるが幸隆が手で制す。

「このまま行けば間違いなく両者ともオシャカになっちゃう。」

もう笑う余裕もなく重々しい雰囲気も消えてしゃべり方も変わる幸隆。

「では、そちらの負けでよろしいですか?」

「いや、お前が晴信を信じているのはわかる。だが自分自身が本当に信じられるか試す。話は変わって悪いが受けてもらう。しばらく動けなくなるかもしれないがな。」

「かまいませんよ。調略上手の真田家ですから味方になってもらえば私は楽ができますから。どうぞ。」

すると将棋盤から駒を手で弾き飛ばす幸隆。そして手を置くように

促す。そして典厩が手を置くと同時に手の甲から将棋盤に深く突き刺さるほど刺す。激痛で頭のジリジリ感が消える典厩。

「後々に後遺症が出ないように差し込んだがその分痛みと出血はすごいぞ。」

実際腱や筋肉にはあまり支障がないのが典厩自身でもわかる。

「このまま日暮れまでの約二刻耐えてもらう。」

その提案にコクリと頷くことしかできない典厩。そして幸隆は一眠りすると部屋を出る。

（さて賭けを自分で投げている時点で俺は晴信につかなきゃならねえ。しかし、こちらの面子も保たせてもらう。）

自分で原因を作っておきながら倒れているということで一勝一敗にするつもりだったが………。二刻経って部屋に戻って見たものは

「二刻たちましたか？」

「お、おめえ……な、なんで自分の肩に刺してやがる。」

自由な手で肩を数度刺した後がある典厩だった。

「これで俺の勝ちでうぎゅ……。」

最後は言葉にならないまま自分で小刀を引き抜き倒れる典厩。それを見て完敗だと悟った幸隆は部下に医者を呼ぶように頼みこれからの展望を考えることにした。

調略？無理？全て押し通す！！（後書き）

出張している先から更新中。毎日アクセス数を見るのが怖くてしようがない。

一万PV記念・下山城(仮居城)の一日(前書き)

典厩たちが北条から帰った数日間の短編。その？

一万PV記念・下山城（仮居城）の一日

？勝千代って強いの？

ブンブンと風を切る音が聞こえる。現在夜明けの一時前、義信が毎日の日課にしている素振りが始まった。振り続けられるだけ振るという元いた世界では非科学的な根性修行だがこの素振りだけはずっとそうしてきたためいまさら変えるつもりは毛頭ない。

「……ふう。」

限界が来たところで大きく息を吐いて木刀を脇に直して一礼する義信。そして腕と腰を冷して汗を流そうと井戸のところに向かうと

「義信？」

「勝千代じゃないか？こんな朝早く珍しい。」

武田晴信こと勝千代がいた。基本的に夜明けを少ししてから行動をし始める勝千代がこの時間に動くのは珍しい。

「木刀を持っているってことは素振りしてたんだ。」

「一応。ここのところ忙しくてやってなかったからな。」

「もつと忙しくなるから今のうちやっておいてねえ。」

カラカラと笑いながら告げる勝千代に頭を抑える義信。兄弟のような、悪友のような関係も慣れてきた。やはりこの少女が信玄になるとは考えにくいと思っただが失礼だと思っただけで顔に出さず思考から消す。

「そういえば最近やっていなあ。稽古は。」

「昔はやってたのか？」

「あたしは結構好きだったから勘助に色々と武具の扱いは習ってきたぞ。」

エヘンといった感じで威張る勝千代に、はいはい。と生返事をする義信。そんなときにあることが思いついた。

「なあ、暇なら朝餉の前にやる？稽古？」

「まあ、いいけど。武器はどうするの？」

「それは任せるよ。あと勘助殿も読んだらいいんじゃないかな？」

「それはいいな。勘助にどこが鈍っているか聞けるしな。」
嬉々とした顔をして部屋に戻る勝千代。本当に体が動かせるのが楽しいらしい。

「それでは晴信様に典厩殿。準備はよろしいですかな？」

勘助が縁側に座って稽古の合図をしようとする。しかし義信が待ったを入れる

「ちょ、ちよつとまった。ソレは何だ？」

勝千代を指差す義信が見た物は大きな斧だった。

「なにつて稽古用の斧。見てわからない？」

「それぐらいわかるわ!!！」

「だったら問題はないわ!!ええい!!！」

開始の合図もなしに遠心力をつけて横に薙ぐ勝千代。ゴオ!!という洒落にならない音が聞こえ飛んでよける義信。目標を失った斧は木製でありながら土と瓦の城壁を吹き飛ばした。

「こ、殺すきか!!！」

「あれ？結構手加減したんだけど・・・、ゴメンゴメン。」

軽い感じで言う勝千代に本日二度目の頭を抱える義信だった。ちなみに勘助は城壁の修理を命じに普請方に出向いていたためもういなかった。さすがに仕事が速い。

結果・馬鹿力なため稽古での測定は不可能。

？義信つて対したことない？

今朝の稽古から数刻たち昼前になる。本日は敵方も動きはないらしく珍しく平穏だった。しかし義信の身の回りは騒がしかった。

「で？これはなんでございましょうか？晴信様？」

「うむ、今朝は一撃で勝負が終わったため、典厩の強さを測りかねてな。それで家中の腕自慢を集めて乱取り稽古をやってもらおうと思つてな。」

典厩の周りには数名ほどの体格のいい男と見たことがある将の女性と同じ数ほどいた。今回は二人だけではないため公式の呼び合いだ。「この勝負で勝ち残ったものには金一封をやるう。」

その宣言に俄然やる気の出る参加者だが典厩だけはなんとなくやる気にならなかった。しかしそんなことはお構いなしに開始が宣言され各自獲物を見つけた戦いあつた。典厩のほうにも二人が勝負を挑んできたが

「あゝはいはい。」

といった軽い感じで脇と肩を打ち据えて倒す。そして次々に倒していく。

「あ、あれ？典厩は思ったより強いようだな。勘助？」

晴信の横にいた勘助が説明を始める。

「どうやら典厩殿は中条流か京八流の流れを汲んでいるようですね。動きが対応しやすいように最小限です。ご覧ください、更に三人倒しましたぞ。」

「う、うむ。」

感心する勘助と流れとは違うことに戸惑う晴信だった。結果的には典厩一人が何事もなかったようにのこり賞金も受け取らずほかに者に分けるように進言して去って行った。

結果・典厩はよしのぶかなり強い。家中で有数なものを打ち据えて無傷でいるほどの有力者の可能性が高い。

？典厩の本気？

さらに時間が経ち昼が過ぎて昼飯を終えて仕事をしている典厩のところに勘助がやってきた。

「勘助殿？」

「おお、探しましたぞ。典厩殿。仕事がひと段落着いたら頼みたいことがございます。」

「はあ、この書類も終わるのでしばしお待ちを……」

と、さつさと仕事を終えて勘助に連れていかれる典厩。到着した場所は勘助の部屋だった。どうぞ、どうぞと上座に通される典厩だったが白湯を出すといきなり勘助が頭を下げた

「典厩殿にどうしても、どうしても頼みたき儀があります。」

「そんなにかしこまらなくとも私にできることなら。」

破顔してこちらを見る勘助だったが次に出た言葉に力が抜ける典厩だった。

「実は肩こりがひどくて推拿すいなをしていただきたく。」

「あ、ああ。そんなことでしたらいつでも……」

真剣な表情でお願いといわれてしまい典厩は今川にでも行って外交してこいとも言われると思ったが大した用事ではなく気が抜けるような安堵したような気分になりマッサージを始める。ひどい凝りでの年のせいもありかなり梃子摺ったが日暮れと同時に解決した。部屋から出ると勝千代がいた。

「あれ？」

「義信、何で勘助の部屋にいるのよ？」

「勘助殿なら寝ているぞ。さすがに疲れがたまっていたのだろう。さすがにあれだけの凝りをほぐすのは本気を出したからな。」

その本気という言葉に興味を示す勝千代。

「じゃあ、いつもあたしにやっている推拿は本気じゃないの？」

「そりゃ、そこまでするほど年も取って否ければ凝っていないいな。」

「納得いかないな。今からやりなさい。本気で!!!」
これは命令とばかりに無理やり部屋に連れ込む勝千代。

「か、勘弁してくれ。俺だって仕事や勘助殿を揉んだので疲れてるんだぞ?」

「そういわれると・・・じゃあできる範囲でいいからやって。やめてくれる。とのいう判断はないのかと言いたくなかったがまあ、いいや。とマッサージを始める義信。今回は勝千代の頼みもあり道具も使用しての最大戦力を使つての本気だった。

「うづうづ・・・・・・」

「や、やりすぎたかな?」

結果的に勝千代は揉みすぎたため蛸のようにダラーッと緩んでしまった拳句に神経が過敏になり歩くだけでも体中がしびれたような痛みに襲われて仕事にならなかつた。そのため義信の仕事が増えた拳句に自分自身も寝過ごしてしまうという失態を犯してしまつた。勝千代には回復したあとウエハースと砂糖菓子を持って機嫌をとらないといけなくなる羽目になつてしまつた。

結果・本気を出すべからず(勝千代) 若返つた気持ちですぞ!!

(勘助)

一万PV記念・下山城（仮居城）の一日（後書き）

即興で書いた上に徹夜なためわけわからない文に……。明日の朝にもうちよつとましな文を書こうと思う。これを見ている知り合いに「まだ主人公と信玄はラブラブしないの？信奈とサルだって最初から意識してギクシャクしてたじゃん。」とか言われましたけど予定としてはこの甲州の乱のあとの信濃攻めの途中からする予定です。あくまで予定。プロットでは三種類あるからどれにしようかな。

反抗準備開始・帰還&日常（前書き）

出張終了。そして作者の体調も終了。

反抗準備開始・帰還&日常

「うづうづ……」

真田家を仲間に入れて屋敷から出て下山城を目指す典厩一行。負傷はしたがそれ以上の成果を手に入れて後は晴信に報告すればいいのだが典厩は腹を押さえて教来石民部景政の馬に同乗している。

「典厩様？お腹をどうかされましたか？ま、まさかお手の傷から……！！」

「な、んでもないよ。」

少々お待ちをと言つて宗助の背負った荷物から薬を出そうとする工藤源左衛門繁長を手で制する典厩だがその顔は無事とはいえないほど青い。別に手の怪我や徹夜のほうは幸隆の医師のおかげであとは自然治癒を待つだけと言う状態だったのだがこの胃腸の痛みの原因は後ろにいる一人の人物だった。

「殺殺殺殺……」

ドドドドドドツと効果音が聞こえそうなほど殺気と怒気を一転集中させている真田昌幸の嫡子・兵部昌幸。通称・喜兵衛だ。完全に典厩に感情の攻撃をしているので周りの人間は気づかない。若干勘のいい宗助が違和感を感じて青い顔をしているぐらいだ。こちらがたずねてみても

「なんでもありませんよ。勘違いじゃありませんか？」

などとニコニコと返してくる。しかし前を見直すとまた感情の攻撃をはじめ、胃がキリキリと締め付けてくる。このやり取りを何度も繰り返してしまったくボロを見せない笑いを浮かべる昌幸はさすがに後世に‘表裏比興’の者と言われる謀將の面影がある。これで自分より年下とは恐ろしい。どんどん青くなる典厩の顔に違和感の正体に気づき始めた宗助が近づいてきて、

「典厩様……。まさか、後ろの昌幸様ですか？」

と典厩にしか聞こえない声で自然に歩きながらたずねてくる。

「よ、よくわかったな。」

「さすがにわかりますよ。さつきから後方からピリピリした嫌な気がきますから……。幸隆様が別れてから強くなつた気がしますが……。」

典厩との勝負に納得した幸隆は途中の街道で一行と別れてほかの豪族の説得に向かった。それまでも少し痛いぐらいの感情の攻撃を続けていたがいなくなると鉄砲が大砲になつたぐらい急に大きくなつた。

「下山城まで残りは数刻の距離ですが……大丈夫でございませうか？」

「あと数刻か……。長い旅路になるな……。」

どんどん痛くなる胃に思わずうずくまりそうになるが馬を御している民部が背中を貸してくれたため何とか醜態を見せずにすんだ。

「民部どの……。すまぬ。」

「ん……。。」

痛み能耐え切つて体を戻すと同時にまた馬にもたれかかつて眠り始める民部。そして宗助からは胃薬を見えないように投げ渡されそれを飲み干す。それを隠すように昌幸と典厩の間に入る繁長。

「ど、どうも、三人とも。大丈夫だから……。」

ウプツとなるが根性と意地で耐える典厩。この痛みは下山城に帰るまでつづいた。

「ゴフツ!!!。」

城に到着して真田一行と別れると同時に馬から崩れ落ちる典厩。あのまま感情の攻撃は大砲から大和型主砲の三連斉射に代わり民部以外の全員が原因が人的要因のなぞの腹痛に襲われ宗助と典厩は何とか大丈夫だったが望月八千代信永は即効でダウンして源左衛門も城が見えたときに安心したのか失神した。気絶した者を馬に乗せて典

厩は一步步くごとに拷問のように半端じゃない腹痛にたえながら城に着いた。最後に別れる寸前に舌打ちをした昌幸の顔は般若だった。そして気絶した者は医務室へ運ばれなんともない民部は自室に寝に戻り、無事だった典厩は崩れ落ちそうになるのを宗助に運ばれて自室に戻った。

「典厩様。どうぞ。」

「す、すまん。」

白湯を渡してくる宗助に礼を言う典厩。今回一番体力的に疲れている宗助はそれをおくびにも出さずに典厩の世話をしてくれる。

「いろいろすまん。」

「いえいえ、私は農民ですから武家に仕えるのは当然です。」

「じゃあ農民でないなら仕えないのか？」

と、少々答えに困る答えを返してみる。それにしどろもどろになる宗助。

「い、いえ、どんな人に仕えるわけでは……、しかし、なれど、武士と農民では大きな差がございますゆえ。いくら農民ががんばっても勝てるのは作物を育てることだけですから……。」

「まつさか」。大体兵の大半は農民だろう？だから基本的に冬にしか戦をやらないだろ？」

農業が経済の中心だから何も無い冬に基本的に戦をするのがこの時代の基本だ。常備軍を作るのは金がかかるためによつぽどのことがないとできない。まあ、織田信長がちゃんとした常備軍を作るまでは、な。とはさすがに言わなかったが。

「そんなに大きな差があるっていうなら、武士になってみるか？」

「え?!」

「そんなに驚くことはないだろう？有能そうな人材を集めるのは基本だろう？」

典厩はそう言うが実際はこの時代宝くじの一等が当たる確立ぐらい農民が出世するのは難しい。農民から出世した人間を上げてみると言われたら上げられる人間は思ったより少ない。

「え、でも?! よろしいのですか?」

「かまわんよ。色々気が利くし体力もある。さらには機転も利くからな。さすがにいきなり武士身分は無理だから中間身分の若党ってことでいいか?」

「よろしいので?」

「いいよ。だめなら提案しないぞ。」

「よ、よろしくお願いします!!」

「そういえば身分が中間だけど武士ツとことは苗字が必要だな。あとは名前も。」

「お、恐れ多いですが、よろしく願います。」

もはや宗助は喜びと緊張でガチガチと音が出るぐらいの固まりっぷりだ。

「出身は豊富村だっけか? はかにその領主と、特長とか、分るものならいいや。」

「えつと、領主は飯富三郎兵衛様で、特徴と言えば……えつと大きな柿の木があります。三つに分かれた見事な木があります。あとは長講寺堂ってお寺があります。」

(さてな……。まあ、まさか俺が人の一生を決めるような名付けをするとはなあ。源左衛門の時は名前だけだったけど今回は苗字もあるからな。さてさて……)

脳みそを完全回転させて考える典厩こと義信。そのまま考え続けて豪族の一覧帳に載っている苗字を候補からはずしていく。そして姓名できた。

「三枝宗吾昌貞でどうだ。いやならかえるが?」

三つ又の柿の木から二十四将一人を思い出してパクツた名前だが宗助もとい宗吾昌貞は感涙を流して感動していた。勝手にパクツた名前なのにここまで感動されるとさすがに悪い気がする典厩だったがさすがにそういうことを言える雰囲気ではない。

「宗吾昌貞! 一命をとってがんばりたいと思います!! では父上にお話してくるので二日ほど暇をいただきます!!」

「お、おう。ゆっくりしていい……」
「では!!!!!!」

思いつき走り走って視界から消えていく宗吾昌真。さすがにまずかつたかなと思わないでもない典厩。自分は晴信に報告しに行くことにした。

「失礼いたします。典厩信繁、もどりました。」

「おう、入れ。」

中から許可をもらい晴信の自室に入る典厩。そして扉を閉めて晴信の前に座る。

「それで首尾は？」

「まあ、上々つてところだ。何を食ってんだ？」

勝千代は紙袋からヒョイヒョイと口の中に黒い物を投げ込んで食べている。

「なに？つて相模土産のういろ。腐つたらまずいと思ったから。

けどさすがに白湯だと口の中が甘ったるくなるな。なんかないか義信？」

「なんかつて何だよ。」

「口の甘みを消す方法。」

未来から来たネコ型ロボットかと突っ込みを入れたくなったが反応が分るため突っ込まずにそのまま返すことにした

「茶でも飲めばいいだろうに……」

「あきた。お前が真田を調略しにいつてから、ういろつと茶を飲み続けているからな。」

ムッフ〜と自慢げに胸をはる勝千代。それに対して腹痛は治まったが次は頭痛がしてきた義信。

「で、なにかないか？」

「はいはい……」

がさがさとリュックから何かを探す義信。そして奥から紙箱を取り出す。

「なんだ？」

「薬缶はあるか？」

その言葉に棚から大きな筒状の薬缶を取り出す勝千代。そして扉を開けて庭に出てマツチで火をつけてお湯を作り始める。でき終わって少し冷やしたお湯に紙箱から葉っぱを取り出して入れる。

「ちよつと待つてる。」

グルグルと薬缶のそこをまわし始める義信。それを不思議そうに見つめていた勝千代だが

「お、なんだかいいい香りが……。」

「湯飲みを出して。」

湯飲みの中に薬缶の口にさらしを巻いて葉っぱが入らないようにしながら紅茶を入れる。その紅茶を親の敵のように凝視する勝千代。

「な、なんだこれ……。」

「緑茶の親戚で紅茶つてもんだ。さめないうちに飲んだ飲んだ。」

作法もなしにグイグイのむ義信にまねをしてこちらも飲み干す勝千代。

「にが〜!!」

といった感想を述べる。

「に、苦すぎるよ。なんだこれは……。」

「だから紅茶。普通に入れたのなら苦くはならないけど今回は苦くなるようにしたから。」

舌を布で拭いていろいろを口に入れて苦味を消す勝千代。

「なんかイガイガするよ。」

「だからそう入れたんだって。甘さは消えただろ？」

ニヒヒと笑う義信に手刀を入れる勝千代。どうも口に合わないようだ。

「苦すぎるわ!!ほかにないのか?!」

「仕方がないな。これならどうだ。」

別の紙箱から細い緑色の袋をだして水に溶かしていく。すると水が深緑色になる。

「さ、ぐいっといきな。」

「な、なんか毒々しいんだけど・・・。」

「まあ、のんでみる。」

義信は美味しそうに飲むので勝千代も一気に湯飲みを啣あおる。

（ククク・・・、だまされたなつ。これは青汁だ！！俺の知り合いでは俺以外には美味しいと言うやつはいない。）

噴出すことを予想していた義信だが飲み干した勝千代はスッキリした満面の笑みで

「美味い！！すごくいい香りだ！！」

とっておかわりを要求してきた。啞然とする義信

「え、えつと・・・。大丈夫なのか？」

「なにがだあ？」

二杯目をゴクゴクと美味しそうに飲む勝千代に同類がいたと喜べばいいのか悪戯が失敗したと悔しがればいいのか分らない義信だったが三杯を要求する勝千代にやれやれといった感じでもう一杯注いだ（もしかしたらこの時代の人はこういうのがすきなのかな？あとで皆にも配ってみるか・・・。）

と思いつつ真田幸隆が帰ってくるまで青汁を飲んでいた二人だった。

「コッココブフツ！！」「」「」

「うむ？どうかしたのかのう？皆々よ？」

後々知り合いに配った青汁だったが勝千代と義信以外に大丈夫だったのは望月信永だけだった。民部にいたってはあまりの不味さ一口飲んだ瞬間に立ったまま気絶していたという。そのため青汁禁止令が発令されたことは言うまでもなかった。

「いくら禁止されようが体に良く美味しいものを絶滅させれない。」

「義信、薬用菜園で量産できるほどの量があるぞ。」

「さすがだな勝千代、さすがに勝千代の専用農園には手が出せないようだ、」

「このまま量産を続けて青汁をのみほっだいにしてやるっ。」
「くっくっく。」
「と勝千代と義信が量産していたことは最後まで家中に知られることがなかった。」

反抗準備開始・帰還&日常（後書き）

出張から帰ってきた作者ですがまさかの発熱して寝込むとは・・・。
。おかげで新作をあげるのが一日遅れてしまった上にオリジナルの
小説のほうは書く暇もなかったというお粗末さだ。皆も気をつけよ
う季節の変わり目に。

準備完了・躑躅ヶ崎へ(前書き)

最近体調の良くない作者です。二つ同時に進めるべきか悩んでいます。

準備完了・躑躅ヶ崎へ

下山城に戻って一週間がたち、城内の準備が整い、兵を徴兵し始めたところに真田幸隆はやってきた。

「しばらくぶりでございます。典厩様。そして、晴信様。お初にお目にかかります。真田源太左衛門幸隆と申します。」

「むう？お主は弾正ではなかったのか？」

官職で通称でもある「弾正」が変わっていることに怪訝な顔をする晴信。

「それでございますが私は晴信様に仕えるために戦に必要な物以外はすべて捨ててまいりましたゆえに……。」

などと言う幸隆に啞然とする晴信と典厩。典厩は大慌てで

「幸隆殿、そ、そうあわててはいかぬ。官職に関しては今まででよいとの仰せであるゆえ。」

と言う。そして頭巾に隠れても見える目で晴信に対して同意を促す。晴信も頷き「弾正」のままで良いとのことになる。

「そうでございますか。ならばこれからも真田弾正、晴信様に忠心させていただきます。それとこれが手土産になります。」

横にずれて手を叩く幸隆。すると扉が開き5人の男女が入ってくる。そのまま晴信の数歩前にひざまずき頭を下げる。

「小幡山城守虎盛。」

「原美濃守虎胤。」

「横田備中守高松。」

「多田淡路守満頼。」

「秋山伯耆守虎繁。」

「……このたびは帰順の機会をいただきまことにありがたく存じます。」

入ってきたのは信虎の五功臣と呼ばれる人物たちだった。思わず嘖出しそうになる晴信と典厩に、してやったりと目を輝かせる幸隆。

(やりやがったな。 幸隆殿。)

(さあ、私は調略を命じられただけゆえ……)
などとすぐさま目で会話する典厩と幸隆。 威厳のある格好をしている晴信だが実際はいまだに呆然としているので典厩が進めることにした。

「ごほん……。このたびは御味方いただきありがとうございます。
この若輩わたしは晴信様の副官と祐筆をしている典厩信繁と申します。」
正面に出て頭を下げる典厩だが一人をのぞいて見下してくる功臣たち。それを無視して話を続ける典厩。

「このたびは外様衆筆頭・真田殿からお話は聞いていますゆえ、雑多な話は省略させていただきます。 単刀直入に聞きます。兵はいかほどお持ちになられましたか？」

いきなり筆頭に祭り上げられた幸隆は食えない坊主だ。と苦々しい顔をするが満更でもないようだ。その態度が気に食わないのか功臣の一人が吠えようとす。

「おぬしに答え 「合計で四千ほどでございます。 我が原家は七百ほどです。」

小幡山城の言葉をさえぎり一歩前に出て典厩に告げる原美濃。 人の良い笑顔を浮かべている。

(これが猛将・原美濃か。)
体中に多量の傷を受けながら敵陣を突破し分断する先方を得意とする甲斐屈指の名将でもある。

「原殿!!このような新参者に!!」
「新参といっても立場があるであろう。 晴信様が次のお館様になるのであれば、この典厩殿は将来の次席でありましょう。 立場を控えるのはこちらであろうよ。 ただ……」

「なんでありませんよう?」
「そのような頭巾をかぶって顔をごまかそうするのはいただけませぬ。」

典厩は驚き言い訳をしようとするが原美濃に

「いくら顔に傷を作ってみたところで偽傷だと分らぬほどの原虎胤、老いぼれておりませぬ。」

と言われればこちらの非礼をわびて頭巾と包帯をとり化粧をふき取る。

「これでよろしいでございましょうか？」

すると原美濃は驚いたような顔をした。

「こ、これは思ったより若い。まだ十七といったところでしょうか。」

「はい。年のほうが何か問題がありませんでしょうか？」

そついうと笑いながら原美濃は言う。

「はっはっは……。いや、すまぬことをした。拙者も戦場に出たのは十四の時でございますからな。年は関係ありませんな。はっはっはっは……。。」

こういわれたら周りの将も何もいえない。ただ黙っているだけであった。そのまま典厩と原美濃だけがしゃべり続ける。

「とても信虎も立て続けに良将を引き抜かれては困りましょう。」

「いえいえ、まだあちらには甲州最強の赤備えがございます。更には関東でも有数の要害である積翠寺城がございます。晴信様はその堅固さには一番知っておるはずですが？」

「はい。伺っております。晴信様が生誕された場所とのこと。」

「あの時は今川の一万を大きく越す大軍を防ぎきりましたからな。」

「福島殿でしたな。」

「ほお、典厩殿は博識でございますな。これは良い副将を手に入れて晴信様も将来が安泰ですな。」

はっはっは。と笑い続ける典厩と原美濃だが心の中では

（友好的だが勝千代にそぐわなかったらすぐさま切り捨てるつもりだったな。このご老体……。）

（まずは合格点をあげても良いか。偽名や顔を隠してまで晴信様に近づき害をなさぬとは限らぬからな。顔も出したのだ忍の類ではないな。）

とせめぎあっていた。そのまま細かな作戦以外を決めて晴信の解散の命令をもつて解散となった。

「な、なんだ。あのご老体は……。」

自室に着くとグテと倒れこむ典厩。中には典厩の直臣になった工藤源左衛門繁長と三枝宗吾昌貞に熟睡している教来石民部景政がいた。

「ど、どなたでしょうか？」

「ここは典厩様のお部屋でございます！！」

入ると同時に刀の鯉口を切り構える二人に頭巾をはずした顔を見せたのは始めてだと思ひ説明するとしぶしぶ納得する二人。

「なんでそんなにしぶしぶといった感じなんだよ。」

「だって……。」

「典厩様と証明する物がありませんし……。」
ため息をついて説明をしようとする典厩だったがいつの間にか起きていた民部が真後ろに立っていた。

「民部殿？」

「いつかの晴信様への曲者……覚悟！！」

寝ぼけているのか、本気なのか分らないがとにかく極上の殺気をまとって攻撃してくる。そして源左衛門も宗吾もその言葉に反応して抜刀する。

「……曲者！！」「」

「またか！！」

城内で刀を抜くわけにもいかずある目的地を目指して逃げる典厩。周りに人がいなかったのが幸いして増援はないようだが三人は周りに遠慮なく刀を振り回す。それを次々によける典厩だが農民であった宗吾の攻撃は真つ直ぐなため避けやすいが源左衛門と民部、とくに民部の攻撃は恐ろしいまでに的確ですでに着物はズタズタだ。そのまま城の再奥に逃げてある部屋に飛び込む。

「そこまで……で……す。」

「くせ……も……の。」

言葉がとまる源左衛門と宗吾。そして二人を吹き飛ばして突入する民部。その奥にいたのは

「何事だ!!!」

と大声で威圧する我らが当主・武田晴信とヘッドスライディングして晴信の後ろに滑り込む典厩がいた。

「城内で抜刀することはいかぬとあれほど申し付けたであろう!! 殿罰は覚悟しておろうな!!!」

源左衛門は青くなり雲の上の存在にあつた宗吾は泡を吹いて倒れ、

民部は狸寝入りをする。気丈にも青くなりながら説明をする源左衛門「そ、それがその曲者が典厩様の部屋に勝手に入りまして……それに教来石殿が晴信様を襲った賊徒だと……。」

その説明にあきれる晴信。典厩がやるように頭を抑えて、すぐさま元に戻り……

「何を言っておるか!こやつが典厩以外の何に見えると言うのだ! !家臣であるなら声や雰囲気で分らぬか!!!」

ガァ!!とその声は竜の咆哮か獅子の鳴き声か。と、言わんばかりに吠える晴信。

「追つて沙汰を出す。自室で謹慎しておれ!!!」

そう一言言つと源左衛門も気絶して民部が急いで二人を回収して部屋に逃げていく。

「まったく……。もう行つたぞ。いつまで突つ伏しているのだ?」

「す、すまん、勝千代。」

「気にするな。顔を隠したほうが言いといったのは勘助で賛同したのはあたしだからな。」

ペチペチと後頭部を叩く勝千代。ゆっくりと座る義信。

「それで逃げてきただけじゃないんだらう?」

「あれ?わかつた?」

「そりゃあ、ただ逃げるだけなら勘助の場所でも良かったわけだ。ここに逃げるのは一番安全だが勘助の部屋のほうが近いだろうに……」

「やれやれといった感じで肘掛を枕にして横になる勝千代。
「つかれてんのか？」

「いんや、これからどうするか考えているだけだよ。ほんとに厠に籠っているのが一番いいんだけど……」

信玄は六畳もある厠を作ったという話は有名だな。と思いつく義信。
「どうする？」

「そりゃ、躑躅ヶ崎を攻める。あそこが一番守りやすいし何しろ大きな商業も行政もやりやすい。けどな……問題は積翠寺なんだよな。要塞山って異名があるほど堅牢だからなあ。」

ゴロゴロと寝返りをうつ勝千代。どうやらかなりの難題らしい。

「勘助殿には聞いたのか？」

「たずねたら、いまの晴信様にはちょうどいい問題になるでしょう。ボケを直していただかないと我々が困ります。なんていうから切欠も教えてもらえなかった。」

一緒に考える。と言う勝千代に同じように考える義信。

「兵糧攻めは？一番被害が出ないだろう？」

「一番に考えたけどあの父上が黙っているわけない。行おうとした瞬間に玉砕覚悟で赤備えで突っ込んでくる。それならまだしも食料を略奪される可能性も十分あるからだめ。」

「力攻めは論外……。攻城兵器も山が険しくて使用できない……」

「内応もしそうにないし、時間をかけるとしても兵糧攻めや包囲はだめ……」

「うん……。と考え込む二人。」

「内部かく乱は？」

「忍びや三ツ者の数が少ないから無理……。それに父上の兵は間違いない恐怖で縛られているから無理。言い忘れたけど長期戦

になれば信濃や上野の豪族ほかどもが父上を利用してやってくる。政務と軍務ができないと困る。いくらなんでも内乱をしながら政務を行えるわけないしなあ。」

「確かに拠点がここだと信濃の豪族が攻めてきたと連絡が来てもまにあわないからな。本当に躑躅ヶ崎に戻ればいいんだけど。」
さらに頭が痛くなる二人。

「せめて躑躅ヶ崎が城砦ならな。本当に名前通りに屋敷だもんなあ。どうして城にしなかつたんだよ、勝千代。」

「あたしに言うな。父上が作ったんだから城砦は積翠寺があるから籠ることは基本的には考えてないだろうよ。まったくあたしなら・・・えっと・・・城？」

何かを思いついた勝千代。起き上がり頭を抱える義信の顔をはさんでこちらを向ける。

「なあ、義信。こんな作戦考えたんだけど・・・ちよつと教えて欲しいことがある。」

「ふぁに（なに）？」

勝千代の説明を聞いて驚く義信、実際この作戦が行われたのはこの時代では少なく後世に数件あるだけの作戦だった。

「た、たしかにそれはできれば他の国に介入されることも防ぎなかつ信虎に拠点を攻められないたてにもなる。てもそんなことできる奴いるか？」

「なに言つてんだ。義信がいるだろ。」

「はあ？」

「決定だから反論は受け付けけない。準備をしてくる。勘助にも相談しないとな。」

義信が反論しようとするがまったく聞かず部屋を出て行ったしまう勝千代。間違いなく負かされることにかけていた瞬間だった。

「話を聞けや！！！！」

思わず肘掛を蹴っ飛ばしたが足が痛くなるだけだった。そのまま勝千代に会わずに三日がたち召集された軍議では作戦は説明されて責

任者は案の定に義信に決まった。

「まじかよ……」

「いざ行かん!!古府中へ!!」

ノリノリの勝千代が軍議を切り上げて出陣を始めてしまった。全軍は義信を残して先行して躑躅ヶ崎に出発した。

準備完了・躑躅ヶ崎へ（後書き）

さいきん体調が悪いうえにノリは悪くなってきた。何か言い音楽はないものか・・・。

民は味方につけるべし

下山城を出発して北上する晴信軍は小さな砦や武家屋敷を大した抵抗もなく次々に攻略して目的地である躑躅ヶ崎に向かう。道中降伏する国人や志願兵になる農民を吸収して兵力は現在も増え続けている。

「高白斎殿、兵力が倍近く膨れ上がりましたが……」

「安心をなされよ典厩殿。これぐらいの予想はしております。勘助殿は相手の動きを読んでいようだ。さすがといふべきかな？」

高白斎に目録をもらい読む典厩。確かにこのまま増え続けても一万以上の兵を二ヶ月ほど食べさせる量の食料がある。現在典厩は行軍の後方、輜重隊しじゆうたいを率いている。目をこらして前を見ると相場・黒駒にまたがり威風堂々としている晴信がいる。勘助の話ではボケの方はあと少しで取れるとのこと。

「やれやれ……、さすがに格好がつかないな。」

一人だけ馬車に乗っている典厩。今までの任務は黒駒が自分に合わせてくれたので騎乗できたが現在は、馬に限りがなく自分が乗れるような馬がないため馬車に乗ることになった。

「典厩様？後ろにお乗りますか？」

元・農民の部下である三枝宗吾昌貞が言うが二人で乗れば機敏な動きができないと断る。後ろから次々に前線争いをしようとする豪族や武士には笑われ、農民にはおかしな顔をされる。針のムシロとはこのことだ。

「それに典厩様の格好は戦場に出る装いよういではありませんから……」

工藤源左衛門繁長が一言。典厩の格好は鎧は着ずに手甲に厚手の打掛。それに脚甲と金鉢巻といういたって軽装で戦に出る格好ではない。打掛にいたっては女性用の平時の服だ。

「あんなガチャガチャした物着れるか。こっちのほうが動きやすい

し急所は防げるぞ。」

「そういうことではないと思いますが・・・」

源左衛門が何か言おうとすが馬車の上にゴロリと横になる典厩。不貞寝を始める。

「いゝ・・・いゝ・・・なゝ・・・。」

のんびりした声で近づいてくる騎馬武者。教来石民部景政だ。民部は馬から降りるとフラフラトテトテとやってきて隣で横になる。

「おいおい、それでいいのか御側衆？」

「まゝ・・・だゝ・・・いゝ・・・。」（以下略）

まだ戦のにおいがしないから大丈夫。とのこと。ちなみに典厩を追い回してくらった沙汰は三人とも敵しいものではなく戦場で功績をたてる事らしい。

「やれやれ・・・。。。」

熟睡する民部に打掛を貸して馬車から降りて民部の馬に近づいて馬を引く。それに驚く武田武士団。

「て、典厩様?!」

「なにか？」

「典厩様の方が身分が上ではないのですか？」

宗吾は訪ねるが要領を得ない顔で典厩が

「さあ？」

と答える。そして更に信じられないことをした。

「おゝい!!!晴信様!!!」

「ひい!!!」

君主を遠くから呼びつける典厩。どれにおの懐く宗吾と源左衛門。いつもの臣下の秩序ある典厩はどこにいったとびっくりもしている。

「なんだ、典厩!!!」

と普通に返す晴信。それには全員啞然。

「俺の立ち位置ってなんになるんだ!？」

「一応、私の副将ってことになる!!!つまりは次席だ!!!」

「わかった!!!・・・と、いうことだ。つまりは身分は上だがい

いじゃないか。やりたいからやっているのだから。」

などと簡単に返す典厩に一同が啞然とする。このような態度をとったのは勘助と板垣の爺の提案だった。時は出発前にさかのぼる。

「そういえば典厩殿の地位はみなに発表しておりませんか？」

「そうだが？何かあるのか。爺よ？」

すると横から勘助が会話に入ってくる。

「おおいにございます。このまま地位を明らかにしなければ客将身分と思われるか、運が悪ければ胡乱な者と暗殺されかねません。」

「そういわれても五功臣には副将として発表したから皆々も知っているはずだが？」

「原美濃守さまは部下に言われておるかもしれませぬが他のものどもは納得しておりませなんだったことは明白で……。」

「つまり典厩があたしとどのような関係でどういう地位かはつきり諸将や兵に知らせねばならぬということであるう。」

「その通りでございます。なればこの信方の爺に妙案がございます。」

「珍しいな、爺が案を出すとは……。」

意外そうな顔をする晴信だが提案を聞く気は満々であった。

「典厩殿は苗字を隠し典厩という通り名で通しております。なればこの際武田の苗字を発表し戦場や兵站などで活躍させればよろしいかと……。そして一芝居打っていただきます。こうしてゴミヨリゴミヨリ……。」

耳元でささやく信方が説明をすると面白そうな顔をする晴信

「たしかにそのような態度でおればうつけうつけと馬鹿にしていた者はさらにうつけと思うであろう。しかし、典厩が活躍してあたしがうまくそれを使い、父上に勝てば……。」

「その通り。もう晴信様をうつけと言い、傀儡にしようとする者は野心を出して自滅するか。もしくは従属するかのどちらかになりましょう。」

「その策にはこの勘助も同意しております。」

と、いった具合にきまり、こうやってな(・)(あ)(・)(な)(・)(あ
(・)(・)に話すことになった。結果は

(ヤツベー・・・大半が勝千代をうつけとののしってやがる。ちゃ
んと忠誠を尽くしているのは豪族では真田殿と原殿ぐらいだ。ほか
は良くてもフヌケ程度にしか見てないな。)

前途多難な武田家だがこの戦で晴信を見る目も変わるだろう。そう
思案をしていたら・・・

「おい!!典厩!!」

「はっ!いますぐ・・・」

馬を宗吾に預けて駆け足でうまをすすると抜けて晴信のところに
向かう。晴信は顔を下げてヒソヒソと首尾を聞いてくる。

「・・・どうだった?」

「・・・忠誠を誓っているように見えるのは真田殿と原殿だけ
だ。」

「・・・ほかは?」

「・・・良くてもフヌケか間抜け。野心の強い奴は多分婿を入
れて乗っ取るつもりの奴もいるだろうな。」

「・・・そこまでか。まあ、その考えも徒労に終わらせるさ。」

パシン!!とコブシを掌に打つ晴信。気合は十分だ。

「・・・それで例の物品はどうなってるんだ?」

「・・・坂田屋の当主・坂田源右衛門のおっちゃんが大鼓判を押
して保障してくれたよ。まあ、見返りは御用商人にしるってことだ
っただけだな。」

「・・・いつ届くって?」

「後ろの輜重隊にもう積んである。しっかりと護衛をたのむぞ。典厩。」

「はいはい。」

話を切り上げもとの位置に戻る典厩。そして馬を宗吾から返しても
らおうとした瞬間に民部が馬に飛び乗り槍を構えて一定の方向を見
続ける。

「どうした？・・・いや、説明しなくてもいい。こっちが聞くから答えてくれ。」

「ん〜。」

のんびりしているが民部にいつものためが少ない。

「敵か？」

うなずく民部。指を二本出す。

「二十か？」

うなずく。そして七箇所ほど指差す。どうやら指差したところに敵兵が伏せているらしい。

「民部殿。あなたの手勢で左側は任せます。私は右を・・・。」
民部はうなずき自分の隊に戻る。そしてそのまま騎兵百を率いて左側の伏せている場所に突撃準備を開始する。それを確認した典厩は槍兵百を率いて右側の伏兵に槍袋を用意する。準備が終わるかそうでないかの瞬間左右から敵兵が襲い掛かってきた。

「伏兵とは稚拙な手を！！」

無論この中で一番戦のにおいに敏感な晴信や勘助が気づかないはずもなく。後方の左右は典厩と民部に任せて自分は前方の敵に対応するように指示をだす。先陣争いになり正面の敵は見るも無残に追い散らされていく。そして後方は民部の騎兵に追い散らされた敵兵が同じように典厩隊の槍に突付かれる敵兵とともにサンドウィッチのように味方（民部）・敵・味方（本隊）・敵・味方（典厩）といった感じにはさまれ次々に倒されていく。

「武器を捨てた者に手出しはやめい！！！！」

武器を捨てて命乞いをする兵に手出しをすることを禁ずるが興奮した兵は攻撃を続けようとする。

「やめよといっているのがわからんか！！！！」

大声でほえて手近にいた暴走兵を一人鋼鉄製の手甲で顔面を強打して殺す。するとそれを見て数名の兵が襲ってくるがそれも打ち殺す。それを見ていたほかの兵はそくさと元の隊に戻っていく。鉄の軍律までとはいかないが厳しい軍律と正しい褒賞が与えられれば人間

は納得する。元の世界の軍隊を思い出し慣れない人殺しを行う典厩。そして武器を捨てた敵兵の元に行き

「おぬし名前は？」

「い、い、伊代平と申します。」

「出身は？」

「か、か、桂川（相模湖の河川）のあたりで……」

「すると農民か？」

「へ、へい。ど、どうかお助けを……」

ガクガクと震えながら頭を下げてくる伊代平と周りの農兵たち。それをみて雰囲気を和らげて膝を突いて目線をあわす。

「心配することはない。晴信様はこの荒れた甲斐の国を父に反旗を翻してもなおそうとするお方だ。国の根幹であるおぬしら農民をこのような馬鹿げた内乱で死なせるような真似はせぬ。」

その言葉を聴くと涙を流しながらこちらを見る農兵たち。信じられないといった顔だ。

「このまま我が軍に来るもよし、村や里に帰って戦乱が終わるまで待つもよし。晴信様はそうおっしゃておられる。」

「おいらたちは村に帰ってもいいのでございますか？」

「いいといったであらう。ただし村に帰ったら晴信様はこのようなお人だと村の皆々に伝えてくれるだけでよい。」

腰から小さな麻袋をだして渡す

「この数ならばこの銀子ぎんすがあれば桂川まで帰れるであらう？」

「も、も、も、もちろんで……それに多すぎます……」

「まあ、よい。これからは晴信様が作る豊かな甲斐を作るために協力してくれば良い。」

我ながら茶番もいいところだ。とおもいながら続ける典厩。

「わ、わかりました。おいらは軍に入らせていただきます。」

「おいらは腕を折つちまったから里に帰って晴信様のことを道ながらつたえていくだ……」

んだ。んだ。と納得して軍に志願したり里に帰る元・敵軍。これで

晴信の評判が上がり向こうの兵力や士気が落ちるはずだと思いが
ら軍列に戻ると感涙の涙をながしている源左衛門と宗吾がいた。

「な、なんでお前たちも泣いてんだ？」

「い、いえ、この貧しい甲州で晴信様がそのようなことを……
おいおいおいおい……」

「感涙で前が見えません……おいおいおい……」

なんかわざとらしい泣き方をする二人だがマジ泣きのようだ。二人
をなだめつつ晴信のほうを見ると勘助と板垣の爺が涙を流していた。
それで晴信に目線で話しかける

（どうした？）

（義信があたしが言ったなんていうから二人とも天下泰平がどうと
か立派になられましてとか言いはじめたんだ。）

（あ……）

（あ……ってなんだよ。收拾つける！！）

と会話をするが典厩が我関せずとそそくさと戻ろうとしたため軍配
を投げる晴信。後頭部に言い音がしてあたった。その様子は啞然と
していたため典厩と晴信しか覚えていなかった。

民は味方につけるべし（後書き）

くそ。自営業だから平均十一時間労働は当たり前になってきたな。これで給料が上がらないとはちくしょう不況め！！・・・などと愚痴を言っている作者ですがパソの外付けハードがクラッシュして書きだめが全滅する始末です。これからかけるときに徹夜で書いていきます。毎日はずすがに無理ですが投稿は毎日したいと思う。

躑躅ヶ崎の合戦

道中で伏兵に襲撃されたが被害も無く、そのまま進む晴信軍。投降した農兵から聞いても指揮をした将は特定できず、どこか勝っているのに順調に進んでいるのに気が抜けない状態が続いている。

「典厩殿、ちよつとよろしいか？」

「何でございましょうか？勘助殿？」

躑躅ヶ崎を目と鼻の先に捉えた小さな窪地で典厩信繁は山本勘助に呼ばれた。どうも人のいる場所では話せないような内容らしく列から少し離れる。

「それで？」

「実は思ったより悪い状況におちいつている可能性があります。」

「どういふこととございますか？うまくいっているとおっしゃっておられたではないですか……。」

「確かにうまく入っております。しかし、よく考えてください。相手は敵を一气呵成に倒すことを良しとする信虎様でございます。こつも動きがないと……。」

「……何か策を考えて一撃でこちらに致命傷を与える方法があるかと？」

「板垣殿や甘利殿、駒井殿の三家老も晴信様もそう考えておられます。」

その勘助の言葉に元の世界の知識を思い出して考えるが信虎がそのような待ちの戦法をしたとは思いつけない。

「私に思いつくことはないのですが……勘助殿にはなにか？」

「それが信虎様自慢の馬廻衆（うままわし）なら動かないのは分りますが、甲斐の最強部隊である赤備えを率いる飯富様たちの動きがわかりませぬ。・奇襲をしようにも、もう躑躅ヶ崎は目と鼻の先で奇襲を掛けられる場所はありません。しかし、奇襲で無いとしたら盆地の中心である躑躅ヶ崎で何かあるはずでございます。」

「晴信様は？」

「無論、警戒しております。しかし現在の最大の問題はその動きの見えない信虎様の勢力ではなく。晴信様を侮っている豪族衆でございます。先ほどの典厩殿の働きにより三、四割ほどはこちらに忠誠を誓つと誓詞を渡してもらいましたがのこりが動きが変わりませぬ。」

「わかりました。十分警戒しておきます。晴信様のことはお頼みします。」

勘助は了承の意を込めて一礼して晴信の脇に戻る。そして全軍が躑躅ヶ崎に到着する。しかし動きはなく屋敷内をくまなく探したが猫の子一匹いないとのこと。

「不気味すぎる。あの戦狂いと言っていいほどの父上にしては……。」

「晴信様、そのようにおびえているような態度をしておれば付け入る隙ができます。自重を……。」

「すまないな、板垣の爺。少々弱気になっていたようだ。」

「しかし信虎様もこの状況でいかがするつもりであろうか？家宝の物品は持ち去っているようだ……。」

武田家重代の家宝である御旗と楯無の鎧は持ち出されていることは確認されている。そして信虎自身も積翠寺に居ることは確認されている。

「そうはいうが板垣殿。あのお館様がここまで動きがないと不気味ではないかと思わぬか？」

「そうは言うが駒井殿。この城下町に敵一人も折らぬのは確認しておるし民草に聞いて信虎様が積翠寺にいることも確認してある。警戒はするべきでも無暗におびえるのはどうかと……。」

「すまぬ、甘利殿。どうもお館様に対する恐ろしさが抜けていないようだ。今日はゆっくり休んで明日に備えるとするか。」

「そうしよう、そうしよう。とあてがわれた部屋に向かう三家老。接収された躑躅ヶ崎には豪族たちが部屋分けされて本日の宿としてい

る。兵士たちも躑躅ヶ崎の内部と外部で宿泊することが決まっている。

「晴信様。」

「勘助……。やはり父上が動かないわけは無い。」

「確かにそうでございます。それに信濃の豪族たちも、諏訪と禰津以外は援軍を送る気は無いとの情報を得ております。そしてその二家も援軍を送るのに二週間ほどかかるということです。」

「そうだ。そういう情報があるのに父上が動かないというのはおかしいと思ってしまう。」

「板垣様が申したように警戒することは大事でも怯えることはいけません。本日はゆるりとお休みください。明日は積翠寺を攻めなければいけません。お館様が考えた秘策もございましょう。それが成ればいくら信濃の豪族が攻めてきても少数の兵で信虎様を抑え大多数の兵で信濃の者を撃退できましょう。」

それだけを告げると勘助は身を反して兵たちの配備に向かった。そして晴信は近くにいる近習の者に典厩を呼ぶように命じた。

「いったい何用だ？ 評定や公式の場では無く私室に来て。」

昔の新館が焼き討ちされて消失しているため現在の晴信の私室は今亡き実母の大井の方がいた部屋を使っている。信虎の部屋とは近いが更に奥になる。刀を入り口の刀掛けに置いて中に呼びかける典厩。

「お呼びでしょうか？」

「おう、典厩か。入れ。」

晴信の声に応じて入る典厩。なかには刀に手を掛けている晴信がいた。

「な、なにをやったんだ？ 勝千代？」

「気にしないでくれ……。どうも……。な。」

トストスと軽く足音を立てて勝千代に近づいて正面に座る。

「なんて顔色してんだよ。そんな土気色の顔色して……。」

汗が体中から出ているのか良く見れば敷いている座布団もぬれている。どうした事か。と更に近づき方に手を当てると小刻みだが確かに震えていた。

「勝千代、体がどうかしたのか？体の調子が悪いなら医師を呼ぶぞ？」

その言葉に刀を握りながら顔を振る勝千代。だが汗や震えは止まるどころか増えているようだ。

「義信、手を貸してくれ……。」
義信が手を差し出すと勝千代は刀を放り投げて両手で義信の手を握る。

「なあ、震えがとまらないんだ。恐怖こわおじゃない、武者震い（たのしいわけ）でもない。なんだか体の奥底から何かが上がってくるんだ。何が上がってくるか分らない。上りきつたらうれいんだと思う感情だけど……。逆に上がると嫌なんだ。」

さすがの様な、にらむ様な目線を送ってくる勝千代に驚く義信。驚いた顔を見ても言葉を続ける勝千代。

「なんて言えばいいんだろう。ただ一人でいると飲まれて元に戻れないような気がする。戻れるけど戻れない様な、自分でも何を言っているか分らないけど落ち着かないんだ。落ち着くまでここにいてくれ。」

年相応な少女の顔をする勝千代。それに親戚の女の子を思い出す義信。思春期特有の情緒が不安定なその女の子は誰かが一緒にいればしばらくすれば落ち着いていつもどおりになるため勝千代も同じようにすればいいと思っで一緒にすることにした。

「とにかく、とにかく落ち着こう、な。布団を持ってきてやるから横になつてろ。」

布団を持ってこようと立ち上がるうとするが震える勝千代は離そうとしない。

「えっと……離してくれないと……動けないんだが……。」
「動かないでいいから、落ち着くまででいいから!!」

梃子でも離すつもりは無いようなので仕方なく座る義信。少しの間たてばいいだろうと思っていたがそうではなかった。

「あの勝千代さん？」

「な、なんだ。」

「かれこれ三刻（六時間）たつのですが・・・さすがに手や足が痺れてきたんですけど。」

「もう少しでいいんだ。もうすこしだから・・・。」

などというやり取りが何度続いたことだろう。途中勘助や三家老がやってきたが部屋の外で待たせて対応したほどだ。そして義信が医者を呼ぶと言ったのも断った。

「そろそろ、日が暮れるのですが・・・。」

「それでも、もう少しだから!!！」

「えっと・・・あの・・・。」

なんといいていいかわからない義信だがそろそろ戻る口実を考えないと同室の三枝宗吾昌貞や工藤源左衛門繁長が心配するため口実を探して戻らないといけない。少し考えるとある考えが浮かぶ

「勝千代。そろそろ湯に入らないと俺もおうし・・・勝千代もさつきすごい汗をかいたから汗を流してすっきりすればいいと思うぞ。それに総大将が汗のおいがするなんて格好がつかないぞ。」

そういうと勝千代も同意したようにうなずき立ち上がる。これで終わりかとやれやれと息を吐いて力を抜くがグイグイと引っ張られる。

「あの、勝千代さん。なんでしょうか？」

「おまえも来い。」

大声を出しそうになったが口を押さえ何とか抑える。声を小さくして「何言ってるんだ・・・。男女七歳にして席を同じうせずって礼記らいきにもあるだろうが・・・。」

礼記とは紀元前中国で書かれた日常生活や礼儀が書かれた本だ。この時代には学んでいる人も多い。

「いいから!!来い!!！」

グキンと嫌な音がしたが勝千代は気にせずズルズルと引っ張る。必

死に抵抗するが力はあちらが強いよう動きを遅くすることはできないが綱引きならぬ腕引きの状態になりながら通常の十倍以上の時間をかけて風呂に到着する。無論義信は蹴っ飛ばしてでも逃げるつもりだったがすべての攻撃を先読みするように防がれとどめに股間を蹴り上げられ悶絶して連れ込まれた。

「んで？これからどうするつもりだ？」

激痛を訴える股間を押さえながら怒ったように勝千代に尋ねる義信だが気にせず脱ぎ始める勝千代。別にマッサージで見慣れているため気にしない義信はつかんでいる手を離さないと着物を脱げないため手を離れた瞬間脱出するつもりだった。そして手が離れる。

（いまだはあ！）

それを見越していたかのように後ろ回し蹴りが後頭部にあたり倒れた義信の手を再びつかみ湯に入る勝千代。勝千代は湯衣を着ているが義信は着てきた服のまま。その義信を温泉に放り込む。

「ぶぶつ、何考えてやがる勝千代！！！」

大声で怒鳴る義信だが気にせず湯に入る勝千代。更にたずねる義信に対して

「頼むから……落ち着くまで一緒にいてくれ……。」

と涙目で告げる勝千代に最終兵器を使われてしぶしぶされるがままにすることにした義信。

「わかったよ。そっちが満足するまで我慢してやる。」

「うん。」

ただ一言言つとおとなしくなる勝千代だが震えは止まらない。少しずつ弱くはなっているらしいのだが義信には代わらないように感じた。

「……怖いんだけど楽しいんだ。」

風呂に入って十分ほどたつと、不意に勝千代がこちらも向いてる告げる。

「ん？」

「怖くも楽しくも無いんじゃないか……怖いけど楽しいんだ……。」

「どういうことだ？」

「多分、父上を認めさせるためにはこうするしかなかったんだと思う。力いっぱい戦える相手がいるってのが楽しいんだと思うし、もしも父上が認めてくれなかったらと思うと、父上を殺してしまうと思ってしまうと怖いんだ。あの父上もあたしが生まれ物心がついて二年ぐらいはやさしかったんだ。民衆には道を作ったり開墾したり、城下町も整備して中部で犯罪が一番無い領国と言われたこと、あった。」

確かに歴史上の信虎も内政に力を入れていた時期も確かにあった。

講談にかかれるように夏桀殷紂の暴君であった事実は史実には無い。「でも孫六や次郎が生まれてから周囲の国に攻められ、攻めてを繰り返してから変わってしまった。・・・父上を倒してもあたしがそうなる可能性が無いってことは無い。もしもそうなってしまったら・・・。」

「うらうら。」

ビシャっとお湯をかける義信。

「言っちゃ何だが、俺が知っている武田信玄は内政家として俺の世代でもこの甲斐の国では神様仏様のように尊敬されているんだ。同じ歴史って分けじゃないけど多分お前がそうなくても支えてくれる部下や親族がいるはずだ。」

武田信玄が佐久でかなりひどいことをやったり謀略や裏切りを重ねたところはぼかして勝千代を慰める義信。柄じゃない事をやってると思えば自分自身かなり恥ずかしい。

「そうかな。そうだろうね。あたしらしくなかったかもな。」

「そうそう。先を恐れることは誰にでもあるある。この時代なら俺の時代よりあるかもしれないけどそんな心配なんて後々考えていけばいい。」

「そうだね。義信と話すと軍略や政治なんかじゃ解決できないことも解決できるよ。爺もいつも遠慮していて一歩ひいていたから・・・」

・寂しかったのかな。」

中国の魏の曹操も後漢の劉秀も同等に見てくれる家臣や友人、家族がいるから飲まれず天下を取った。義信は自分自身の考えを告げると、うんうん。とうなずく勝千代。震えも止まったようだ。

「じゃあ、俺は出るよ。」

さすがに服を着た間はあると服が張り付いて気持ちが悪いらしい。のぼせてきたため出ようとするが、勝千代に引き止められる。

「なんだ？もう震えは止まっただろう？」

「うん。のぼせたんなら、体を冷やすついでに体をながしてくれない？」

「ことわつてもさせるんだろ……。はあ、いいよ。」

石鹸を渡してもらい手ぬぐいに擦り付けて背中を流す。ゴシゴシと力を込めて洗い流す。いつものマッサージの感じで力加減は場所場所を変えていく。

「へえ、下女に任せるより体がすっきりする感じがするな。今度からもやつてもらおうかな？」

「勘弁してくれ、結婚相手や下女に教えるからそいつらにやってもらいな。」

「結婚相手つて言つてもまだ相手がいないからな。」

「まあ、まだ十五なんだからゆっくりしていればいいさ。いずれは決まるだろう。」

「そうだね。ゆっくりするか……。」

と、いつも通り悪友のような対等な関係に戻った二人がゆっくりしている。バーンと扉を力任せにあける音が聞こえ後ろを振り向くと槍を装備した兵が五名居た。湯衣で体を隠す勝千代と前に立つ義信。

「何者だ？」

「武田晴信様とお見受けします。」

「だったら……。」

「お命頂戴いたします。」

槍を突きつけてくる敵兵はそう言い放つと狭い浴場では槍が邪魔になるため槍を捨てて刀を抜く。

「動きが遅い!!」

抜き終わる前に片手で泡立てた石鹼水を顔面めがけてかける義信。ただの水だと思いきになかった敵兵だが激痛に見舞われる。

「な、なんだこれは!!」

「石鹼水は目にしみるだろう?! 勝千代、これを水に溶かして床にまけ。」

「はいよ。」

もったいないとは思ったが予備もたくさんあるし命には代えられないと貴重な石鹼水を溶かしてもらい床にまいてもらう。義信自身は砂がないため濡らした肌着や着物を下に置いて足場にして相手に襲い掛かる。

「て、敵か・・・うわ!!」

濃度の高い石鹼水に足をとられて転ぶ敵兵から刀を取り上げて次々に刺し殺していく義信。三人を倒すと入り口から更に増援が数名入ってくる。

「十名とはいかないが・・・厳しいな。」

刀を構えなおす義信。自分の刀は晴信の部屋に置いてきたため鈍らで敵を切り続ける。更に二名を切り殺すと相手が弓を射掛けてきた。勝千代に多い被さり盾になる義信。肩と背中に刺さるが浅手で動きも鈍らない。相手が構える前に斬り殺す。残った敵兵は増援を呼びに戻ったため今のうちに味方と合流することにする。晴信の部屋に向かい刀と勝千代の服に鎧を手に入れないといけないため危険を承知で部屋に戻る。

「居たぞ! はる・・・ぎゃ!!」

「こ・・・ぎひ!!」

背中に勝千代を匿いながら上手いことに敵に少ない通りを通って敵を切り倒していく。そして部屋に着くと

「は、晴信様。」

「勘助！！民部！！」

完全武装の勘助と教来石民部景政がいた。

「典厩殿、お怪我を！！」

「なんでもない。浅手だ。勘助殿、晴信様をお願いいたします。」
女物だが服を借りて鈍ら刀を捨てて自分の刀である八文字と山姥切を腰に差して自分の部屋へ飛び出していく。民部が居れば大体の敵はどうにかなるだろう。

「じゃまだ！！」

鈍らと違い鎧武者をかぶると鎧ごと斬り殺したという逸話を持つ八文字は敵を次々に斬り殺していく。そして中庭突っ切り自分の部屋に戻る。敵はかなりいるらしい。自分の部屋に飛び込むと数名の敵の死体と源左衛門と宗吾がいた。

「無事か二人とも。」

「典厩様こそ、良くぞご無事で！！」

「宗吾。敵は？」

「は、はい。敵は城下町の民草を脅して城下町の各部屋に隠れていた模様です。日暮れと同時に攻めてまいりました。どうやら完全に包囲されてこちらの兵力はズタズタに分散されて恐慌状態です。」

「まとまった兵力はないか？源左衛門？」

「典厩隊五十と山本隊百五十に御側衆に先駆け衆の合計五百は善戦している模様ですが・・・」

「あ、赤備えだ！！！！」

源左衛門の報告が終わるか終わらないかの瞬間に外から驚愕した声が聞こえる。外を見てみると赤一色の具足を着た部隊が流れ込んでいた。それにより味方の今日は極限まで上がり戦わずに服も着ないで逃げる味方まで現れた。そして焦げた匂いがする。だれかが屋敷に火を放つたらしい。

「源左衛門、宗吾。」

「はっ！！！！」

「お前たちは晴信様と合流して先駆け衆とともに兵を立て直すよう

に晴信様に伝えてくれ。」

「典厩様は？」

「この腐った士気を取り戻す。さっさといけ！！」

「はっ！」

「御意に！！」

二人が敵兵を倒しながら外に向かって出発する。

「八千代。」

「なんじゃ？」

スツそこに居たかのように現れるのは望月八千代信永だ。

「お前はすぐに小山田殿と原殿に場内に火矢と投石で徹底的に攻撃するようにお願いしてくれ。そして真田殿に敗残兵をまとめて晴信様に合流するように伝えてくれ。」

「御意に……。」

スツと消えるように駆け出す八千代。人柄は良く分らないが命じられたことは完璧にするようだった。今言った作戦も作戦という物ではなく被害を最低限に食い止めようと思いついたことだった。自身自身考えたりする参謀タイプでないと自覚していたがこういうときに動ける行動家だとも自覚していた。そして自分自身は中庭に飛び出して赤備えを数名切り倒す。そして大声で

「我が名は武田典厩信繁なり！！赤備えの将よ！！我が首がほしければかかってくるがいい！！」

と叫びさらに数名の赤備えを切り倒す。そして騎馬武者が現れる。

一人は見知った顔だ。

「我が名は飯富三郎兵衛昌景なり！！」

「ワシはその叔父にして飯富兵部少輔虎昌だ！！お主か、先ほどの大音声と我が手勢を切り倒しのは！？」

「無論！」

「そして何用だ！！」

「冥土の土産に、いや、この戦の手柄にお主の身柄がほしいと思っただまで！！飯富兵部少輔虎昌よ！！」

「ほう、三郎兵衛ではなくこのワシの身柄と申したな？このワシを生きて捕らえるつもりか？」

殺気が強くなるがかまわず続ける。

「おう！三郎兵衛殿はすでに新館で倒しておりますゆえ、次はお主の番ということだ！！」

その言葉に三郎兵衛を見る兵部小輔。その目線にうなずく三郎兵衛。「どつやらその言葉にうそはないようだ！！良からう！！相手になつてやるう！！」

馬から降りると一間半（約3m）ある鉄製の棍を構える。

「こちらもお主の首を取って手柄と三郎兵衛の仇をとってくれるわ

！！」

「意気やよし！！勝負！！」

躑躅ヶ崎の合戦（後書き）

ちよつと長いかな？しかも中途半端に終わった。・・・現在ハードクラッシュから復旧して創作・二次創作の両方のプロットを書き直している作者です。がんばっていきます。

飯富兵部少輔VS典厩信繁(前書き)

朝寝て夜起きる生活がつづく。

飯富兵部少輔VS典厩信繁

「ふうう……。」

「……。」

ゆつたりと構える飯富兵部少輔虎昌。その周りをぐるりと回るように動く義信。

「……ふん。ワシの身柄を捕らえるのではなかったのか？」

「……。」

こちらもすぐにはかからずに時間を稼ぐようにゆつたりと動く。時間さえ稼げば真田と原に小山田がなんとかする。

「ふんっ！！三郎兵衛を倒したと言うから武辺一辺倒の猪武者かと思えば……、矛先をずらす為の策を考えられるとは！！」

踏み込むと同時に槍を突き出す。上下と槍が頭の横と足元を通る。

「今のははずしてやった。これ以上腑抜けた戦をするようならこの屋敷と同じように焼き尽くしてくれる。」

「くっ……。」

刀を下段に構える義信。それに対して青筋を立てて槍の石突を地面に突き立てる。

「貴様も……武士にあらずか……。武器を構えながら逃げに走るとは……。」

殺気が消えるようにピリピリした空気がおとなしくなる。そして槍を構えなおす虎昌。

「ぬん！！」

今までとは雲泥の差と言っているほどの突きが来る。それを刀で防ぐ義信。虎昌は足を開き腰を落とすように槍を払って首を飛ばしにかかるがそれも防ぐ。

「……はああ！！」

手ではなく体全体で弧を描かずに直線的に攻撃が来る。直線的といえば簡単に思えるが弧を描くはずの長柄武器の薙ぎや払いを突きよ

り鋭く速くするのは恐ろしいの一言。

「よつと・・・やつと・・・そいつと。」

攻撃が来る一瞬前に息を吐くように刀で攻撃を防ぎ続ける義信。さらに動きが速くなり、こちらでも防ぐのではなく弾くように対応する。「・・・ふん!!」

突きからの上昇攻撃で刀を腕ごと上げられて胸元が空く。そこに突きが来るが尻餅をつくように横に転がり倒れる。

「無様な。」

「なんとでもいえ。こちらら生き残るので精一杯だ。」

起き上がり虎昌の言葉に対応する義信。

(こりゃ、防いでいて時間を稼ぐどころじゃないな。恐ろしい槍捌きだ。)

虎昌が言ったように逃げるつもりだった義信は相手を倒すために構えを左八双に構えなおす。気迫を込めて大声を放つ。

「ちええええええい!!」

「やつとやる気になったか・・・いや、言動に責任をとってもらわないとな。しっかりわしの身を捕らえてみせい!!できぬのなら・・・死ぬい!!」

槍を足元に突いてくるがこちらでも高速の切り上げを行い槍先をずらす。槍は勢いのまま上がり義信の二段目の攻撃が腹部を切り払うなずだった。そう、相手が並みの相手なら・・・。

「・・・防ぎやがった。」

「危ういな・・・」

虎昌は槍があがると同時に槍を捨てて脇差を抜き放ち義信得意の剣術を防ぎきった。これを防いだ人間が数えるほどいないため戦場でありながら啞然としてしまう。

「なかなかの速さとキレだな。なんという名の剣だ?」

虎昌の後ろであがった槍がカランと音を立てて落ちてくる。それに目をくれずに尋ねる虎昌に

「・・・我流というやつだな。一応流れは中条流らしいがな。」

「師は？公明な人物であろう。これほどの門人を育てるのであれば、脇差を直し馬の場所に戻り馬の鞍にある使い慣れたような薙刀を抜き取る虎昌。」

「いまの世に師はいない。」

「ほう。なれば父祖直伝とでも言うべきかな？いやいや、おぬしは武士ではなく武芸者といったところか……。なれば手加減はいらぬな。」

ブンブンと恐ろしい音を立てて構えをなおす虎昌。義信の目の前には怒りも侮蔑もない。ただ敵を倒すことだけに全力を尽くす甲斐最強・赤備えの総大将がいた。

「ぬむん!!!」

ドオンと振り下ろした先が土がえぐれ矛先が突き刺さる。

「ぼおつとしていれば切り倒すぞ。」

「ぬ……。う。」

刀を構えなおす義信。完全に空気はあちらのものだ。

(流れを変えないとな)

「せえい!!!」

八文字を脇構えに直しこちらから攻撃する。横払いからの上下横の連続攻撃。

「でやあ!!!」

「おおい!!!」

義信の攻撃をすべて防いで薙刀を振るう虎昌。それを体全体を使って抑える。鏝迫り合いが起こりギャリリ……。と鉄と鉄がこすれる音がする。

「どうしたことか……。逃げずに戦ったほうが時間が稼げるのではないか?!」

「皮肉か!!!そちらこそこちらに策や罠があると知っていてなぜ戦う?!」

全力をもって薙刀を押さえ込み一歩一歩進む義信。

「どのような策があるうとそれごと食い破るのが我等の赤備えの心構え!!」

「戦狂いが!!」

近づかれては不利と半歩下がりに払いあげるように刀の押さえを払う虎昌。離れずに刀を青眼に構える義信。

「それは心外だな!!おぬしも男であり武芸者なら・・・強き者と戦うと心が昂ぶるであろう!!」

義信を撃ち殺す勢いで力任せに薙刀に対して柄でそれを防ぐ義信。かなり手がしびれるが刀は放さない。

「ちっ、真性の戦好きかよ!!」

「ふん!!」

上下に連続して攻撃する虎昌に対して一歩ずつ進むが防ぐことしかできない。

「なら・・・おぬしは三郎兵衛と戦ったときに高揚感はなかったのか?!」

「生き残ることでいっぱいだったぜ!!」

「なら・・・おぬしは戦場では生きのこんぞ!!」

体を一回転させての全力の払いに刀を弾き飛ばされる義信。すぐさま山姥切を抜き次撃を防ぐ。

「ほおう、なかなか良い刀を持っているな!!」

「もらいものでな!!」

また防ぎながら虎昌に近づいていく義信。そして自分の得意な距離で戦おうとする虎昌の攻防が何度も繰り返される。防ぎながら迫る義信と攻めながら退く虎昌とおかしな構図が続く。

(このままだと体力がもたないな。)

(それにしてもこの若者・・・一合防ぐたびに反応が早くなる。)

義信進むのをやめて構えをなおす。それを見計らい上段から振り下ろす虎昌。

「あまいわ!!」

先ほどは呆然と見送った一太刀を左手一本でいなす。

「ぬう・・・。」

（やはりこやつは天才ではないが・・・秀才でもない。あえていうなら・・・最下位の天才で別格の秀才とでも言うべきか。）

（やっと対応ができるようになったか？・・・ちっ・・・まだだな。）
ギンギンと刀と薙刀が競り合う。先ほどと同じように一回転しての払いを行う虎昌。それを両手と足を使って防ぐ。峰が足に食い込み痛みを訴えるが無視して脇差を抜いて片手で突く。

「とんだ見込み違いだな！！」

「なにが・・・だ！！」

「最初は腑抜け。次に武芸者。今ではワシに戦いを学ぶ生徒とでも言えがいいか！？見抜けるが見抜けない。矛盾した強さと才能に努力だ！」

「才能なんて・・・ねえよ！！」

再び鏢迫り合いになるが二刀を使った攻撃にすぐに解除される。

「ふふふ・・・。これほどの戦いをして才能がないと申すか！」

「無才だから努力したんだってんだ！！才能の一言で片付けるな！！」

（踏み込みが浅いか！！ならっ・・・）

（ワシに一太刀・・・頬に掠った程度とはいえ当ておつたか！！）
脇差の一太刀が頬に掠って軽い出血をする虎昌。それに対して赤備えが槍を構える。

「やめぬか！！ワシの面子に傷をつけようものならその者は斬罪にするぞ！！」

虎昌の一言に槍をなおす赤備え。

「こちらも策があるのだから・・・手助けしてもいいんだぞ！！」

「ワシを侮るでないわ！！若造があああ！！」

再び大上段からの振り下ろし、それをいなして地面突き刺さる薙刀。

「スキあり！！」

「こちらがじゃ！！」

地面に突き刺さったのを見計らい斬りかかる義信に地面ごと吹き飛

ばし不完全な体勢ながら横薙ぎを行う虎昌。鈍くいやな音が響く。
「ぐうのおう……。つ、捕まえたぞ!!!この薙刀!!!」

左手がグミヤリといやな方向に曲がり重度の骨折を表しているが義信は折れた左手を使い薙刀を掴む。とんでもない痛みが走り目の前が白くなるが動かすことによる更なる痛みで気絶もできない。そして掴んだ薙刀を足を使って踏み込む封じ虎昌の腕を峰で叩き薙刀を離させる。

「くむ。」

そのまま飛び掛り首筋に山姥切を当てる。

「ぬかつたわ……。」

「飯富兵部少輔!!!召し取った!」

刀を当てつつ回りを見渡す。

「叔父上!!!」

馬から降りて槍を構える昌景。それに対して虎昌は

「止めぬか……。いくら手傷を負っているといつても今のおぬしにはこやつは倒せぬ。槍を引け。」
と告げる。

「しかし……。」

「しかしもかかしもない。槍を引くのだ三郎兵衛。皆も槍を引け。」
そう言うと赤備えは全員が槍を下げる。

「このまま首を取るのか?」

「いや……。このまま表に出てもらう。そして勝千……。晴信様に帰順してもらおう。」

「ワシにお館様を裏切れと?」

歯を食いしばりながら喋る義信。

「そ、そういうわけではない。後は積翠寺しか拠点はない。援軍も期待ができない上に援軍が来たあと何を要求されるか分かったものではない。……。ふう……。はあ……。このまま信虎に任せていたら外から崩れる前に中が崩れる。」

「確かにそうだが……。ワシ達は拾ってもらった恩がある。」

「なら・・・和睦できるように仲立ちを頼む。このまま長引けば晴信様は父親を殺す可能性がある。」

「そう簡単にお館様は退かぬぞ。」

「晴信様の策が上手くいけばどうにかなる。」

「・・・それで・・・それで和睦した後にお館様はどうなる？」

「信虎には京に行ってもらおう。そこで朝廷に工作をしまらう。」

「お館様を利用するということか？」

「そうとってもらってもかまわない。命も地位も金も保証される。」

「確かだろうな。」

「約束はできないが精一杯してみる。」

「・・・分かった。晴信様に降ろう。」

虎昌の目には信虎様が死んだ場合はおぬしもただではおかない。と言っていた。

「じゃあ、さっさと出よう。このままだと石礫や火矢で殺されかねないからな。」

刀を引いて飛ばされた八文字を拾い収めると虎昌を先導して正門を屈指した。

飯富兵部少輔VS典厩信繁（後書き）

徹夜で分が散発過ぎる気がするが・・・一応終わりです。

城攻め前日・序（前書き）

なぜか前日と前々日にログインできなかった。なぜだ？

城攻め前日・序

「いぎぎぎぎ……」

「赤備えの武具はすべてが鋼鉄製って聞いていなかったんですか？典厩さん。」

グルグルと添え木と包帯代わりの布切れを巻く勝千代。……に似た少女・武田‘逍遙軒’信廉。通称・孫六がやさしく丁寧に治療をしてくれる。赤備えの将を捕らえた。もとい、客将扱いで戻った際に二人を連れて陣屋に入っつてびっくりしてしまったものだ。見た目は何せ瓜二つ・同じ背格好とっていい顔かたちだった。まあ、見た目は、な。

「まさか、すぐにわかるなんて……。爺やおじさま達にも見分けがつかないのに……。わかるのは父上と……。次郎だけだった。」

「本物の典厩か……」

「本物って？」

「いや、いんや。おっと、どもども。」

グルグルと巻かれて五倍以上の太さになった腕を回しながら礼を言う。多少テンションと言動がおかしいのはまだ気分が昂っているからだ。

「徳本先生のところに行かないで大丈夫なの？あの先生は男の人で若いけど色眼鏡で見たりしないわよ？」

「けどね……。あのお　「義信はな、あの徳本が苦手なんだよ。」幕をくぐり入ってくる武田勝千代晴信。顔にはいたずらが成功した子供のように無邪気な笑みを浮かべている。赤備えの将二人との対面は終わったらしい。雰囲気から見ると結果は良かったようだ。

「勝千代か。」

「姉上。」

「それで義信の容態は？」

歴史上では絵画など芸術に優れていたようにこちらの逍遙軒は医術

と忍術を修めている。

「粉碎骨折のようです。」

その報告に眉をひそめる勝千代。義信のほうを見て

「まったく・・・無理か無茶か知らないけど、やっていいことと悪いことがあるだろう。」

首を振りながらため息をつく勝千代。

「うるせえな・・・。つたく、あの条件ではああいうやり方しか思いつかなかつたんだよ。」

「まあ、それは認めるがな。それに敵将を帰順させたんだから褒美はやつてもお叱りはなよな。」

「え？手柄になんの？」

「手柄も手柄、大手柄ですよ。何せ相手の最強部隊を丸々手に入れたのですよ。勲功第一と言つてもいいほどのお手柄です。」

「孫六の言つとおり。だが・・・。」

「だが・・・なんですか？姉上？」

「報いるものがない。早い話がこちらについた豪族衆に上げる報酬でいっぱいはいないんだよな。事情が分かっているうえに跡継ぎ問題が解決できる穴山や小山田は領土はなし、真田は信濃の一群でいって話はあるが残りの連中が大なり小なりほしがっているからな。」

「別に領土がほしい訳じゃないから別にいらさないけど、なあ。」

「それじゃあ、こまるんだよ。こっちは・・・。」

「何ですよ？」

「立場も姉上が当主になれば副将、つまり家臣としては最高格、しかも俸禄は陪臣またものとしては最高峰であり全体で約十八万石ほどです。

その中で五百貫といえ、だいたい四千石。表石高みせかけだけとはいえ全体の三分ほどがあなたの俸禄です。これ以上あげることになれば何を褒美で与えていいのか。」

「説明ご苦労。孫六の言つとおりに甲斐の国は隣国の信濃のようにもともと肥沃な土地でもない。まして駿河や相模のように漁業や塩

など貿易するにも特産品がない。」

「十八万石は最大であってそれ以下はあってもそれ以上はないのです。」

ものすごく悩み始める当主姉妹。それをみて思わず口が滑ってしまふ義信。

「えっ、でも甲斐の国って鉱物がたくさん……あ……。」

その言葉を聴いてグルンと顔を向ける二人。目が据わっているためかなり怖い。

「……いまなんと。」

「もう一回言おうか……。」

一歩下がろうとするが座っているうえに逍遥軒に腕を掴まれて逃げることもできない。

「え……と……。ナンデモナイデスヨ。」

「さあ、もう一度言おうか。」

スラリと腰から刀を引き抜く勝千代。

「ちよつと待った。勝千代!!!」

静止して勝千代だけが見えるように口だけを動かす義信

(未・来・の・事・は・聞・か・な・い・ん・じゃ・な・か・つ・た・の・か?)

(細・か・い・こ・と・は・聞・か・な・い・か・ら・い・い・ん・だ・よ。場・所・は・い・い・か・ら・採・れ・る・か・採・れ・な・い・か・だ・け・を・お・し・え・や・が・れ!!!)

向こうも口だけを動かして答える勝千代。逃げられないと悟った義信は答える

「たしか金と砂金に水晶も取れるはず。銅も鉄もあつた気がするな。」

そう答えるとコブシを天に掲げ喜びを表す二人。気炎が上がっているのに恐ろしさも数倍になる。

「「つやた〜!!!」」

この後は歓喜の声を上げる二人が狂喜乱舞したのは言うまでもない。

城攻め前日・序（後書き）

そして投稿しようとするたびエラーが起きてやってられない作者です。今回は中途半端な上にリハビリで短いですが、これからは前のよつに更新していきます。すいませんです。

城攻め前日・序 その2 (前書き)

不定期・不条理・不規則の三重苦。仕事変えようかな？

城攻め前日・序 その2

気炎を上げていた二人をさつさとなだめ話を元に戻す。

「まったく……。喜ぶのはいいが取り乱すなよ。」

「ごめん。」

「すいません。」

拳骨でたたかれて赤くなつた額を押さえて謝る武田家当主（予定）の武田晴信こと勝千代とその妹にして影武者兼忍頭の武田道遙軒信廉こと孫六。

「はいはい。話を元に戻すぞ。恩賞の件は？」

「それなんだけど先ほど言ったようにあげれる物がないんだよ。」

「……ほんとどうするかなあ。」

腕を組んで首をひねる勝千代。

「領地がだめなら武具や馬でもいいんじゃないのか？」

「五百貫相当の馬や武具なんてこの甲斐にそうそうあるわけじゃない。金といつても金山もまだないからたくさんはむりだな。まあ、あることはわかつたんだ簡単に当ててやるよ。」

ハツハツと笑う勝千代にその方法を問う典厩。その答えは

「勘一発で。」

「おいおい……。」

あきれてうんざりする典厩だったが孫六が

「姉上の勘はすごいんですよ。数年前には温泉を数個掘り当てましたから。」

というと素直に感心してしまう。

「それまで恩賞は無しってことにはできないのか？」

「そんなことをしたらほかの豪族たちが恩賞をもらいづらいたろうが。」

「なら官職は？武家官位つてやつは？俺は無官だろう？」

「何を言っているのですか？典厩さん、あなたは姉上から典厩とい

う左馬頭という官職をもらっているのですから姉上が国主になり、やまと御所'から官位をいただいたとしても正五位上の大膳大夫が左京大夫をもらえるのが精々です。従五位下の格を持っているのですから典厩さんはさすがにもらえないですよ。」「
そう説明する孫六も典厩と同位の刑部少輔を持っている。こちらは正式にもらったものであくまで武田家中では同格でも全国的に見れば無位無官な義信とは天と地の差がある。

「なんでさ？まだ間があるじゃないか？」

「そうなんです、ええと……」

「不文律か、なにかはしらないけど跡継ぎ以外には無理ってことになつてんだ。それでなつとくしてくれ。」「

こまる孫六に助け舟をだす勝千代。

「わかった、わかった。別のやつを考えるよ。」「

「すまないがそうしてくれ。……つていまさら言うが、まだ父上にも勝つていないのに皮算用していちや意味がないな。」「

「そりゃそうだな。勝つてから考えるよ。」「

問題を先延ばしにすることで問題を解決する三人だった。

（それにしてもマイナスで困るんじゃなくてプラスの面で困るとは……なんとまあ。）

やれやれと肩をすくめて評定に向かう三人。陣をくぐってすぐに勘助が現れた。

「晴信様。少々よろしいでしょうか？」

「勘助か。戦のことならこれから評定の予定だろう。そのときにでも……」

「いえ、実はよくない知らせが……。竜王川が……」

勘助の言葉に心当たりがあるのか晴信は顔色を少し悪くして勘助に二言三言伝える。

「かしこまりました。」「

立ち上がるとすぐさま既に駆けつけていく勘助。どうやらすぐにごどこかに行くらしい。

「勘助が・・・なんだって？」

「竜王川が、笛吹川と釜無川が決壊したらしい。」

「雨季でもないだろうに？どついうことだ？」

「勘助が言うには前日に仕掛けがしていたらしい。たぶん父上が起こしたのだろう。」

「あ、姉上、さすがにそれは・・・。あそこまで狂気に飲まれておりますが、いくら父上でも・・・。」

信じられないように孫六が訴えるが勝千代はしっかりとした口調で孫六を戒める。

「孫六。父上はあたしに勝つためなら甲斐国を焦土としてもかまわないのだろう。」

それほどあたしが憎いか。と勝千代の目にも今までになかった恨みや悪意の負の感情が表れる。相当に頭にきているようだ。恐ろしいまでの存在感を放ちながら武将が並ぶ陣に入ってしまった。

城攻め前日・序 その2（後書き）

一週間以上文面をまったく見ないだけでわけがわからなくなっている筆者です。そのせいで今までは一回で書けた話が分割して書く始末です。リハビリを続けてうまくならないとなあ。本日が明日の明朝にはもう一話更新します。

城攻め前日・後（前書き）

昨日更新しようとして何を書こうか忘れてしまった作者です。若年性健忘症か？関係ないけどマブラヴとオルタがセットで発売するらしい。どうしようか・・・。

城攻め前日・後

「これより軍議を始める。各々（おのおの）、何か意見があれば述べるように。」

逍遙軒信廉こと孫六の宣言から軍議兼評議が始まった。ちなみに孫六は頭巾と大きめの服装に声を変えているため勝千代こと晴信とは似ても似つかない格好になっている。

「まずは先だつての躑躅ヶ崎での一戦。赤備えの奇襲からあたしを守りきつた上に二将をとらえ帰属させた典厩の働きは見事であった。」

「ありがたきお言葉にてございます。」

深々と頭を下げる典厩信繁こと三条義信。内心は

（行動で、いつでも行き当たりばつたりだしな。もしももつと時間がかかっていたら投石や弓であの世にいきところだったな。）

今思い出しても背筋に鳥肌が立つ。

「こちらに褒美の書いてある書状がある。謹んで受け取られよ。」

膝立ちのまま進み逍遙軒から書状をもらう典厩。無論褒美が決まっていなかったため中身は白紙だ。受け取るとそのまま頭を下げながら立ち上がり晴信の横に置かれている席に座る。

「評議はこのあたりで終わる。では次に軍議を行う。」

淡々と進行を続ける晴信。そして多数の妬みややきもち視線を受ける典厩。どうせ内容はたいしたことがない。

（新参者風情が・・・とか、胡乱なやつ。とか思われてるんだらうな。）

ヤレヤレと頭を数度掻く典厩。そういう間にも軍議は続く。

「先ほども逍遙軒も言ったように忌憚のない意見を述べよ。遠慮はいらぬ。」

作戦自体は大まかに決まっていたが味方の国人・豪族からもつと良い意見が出る可能性があるため意見を聞く晴信。そして三人の人物

が前に出てくる。そしてさらに一人が前に出る。

「晴信様。良ければわれらの愚考をお聞きくださいますか？」

意見を述べる男性。名前を小山田出羽守信有。後ろに控えている少年二人は息子の越中守信有と越前守信茂だ。相模との国境に面する要害・岩殿城の城主で晴信に一番最初に味方した豪族の一つ、小山田氏の当主だ。

「ほう、珍しいな。」

晴信が驚くのも無理がなかった。この出羽守信有は常日頃から「城攻めは性に合わない。野戦で功名を立ててこそ……。」という根っからの野戦武将だ。

「驚きのことと存じますが、私の策ではございません。ここに居りませぬ穴山殿から預かった策にて……。」

「玄蕃げんぱから？」

晴信の従姉妹に当たる穴山家当主・穴山玄蕃頭信君は陣には居らず躑躅ヶ崎館の修復と先だつての戦いにおける被害を計算している。

「はい。お聞きくださいますか？」

「かまわぬ。続けよ。」

晴信からの了承を得ると頭をあげて説明を始める出羽守信有。

「現在私の旗下に穴山の金堀衆がございます。それをもってモグラのごとく地下から奇襲をしてはいかがかと……。」

そう意見すると豪族の一人から横槍が入る。

「そのような時間がかかる上に穴を掘ったところで中に入れる人数はたかが知れておる。そのような危険が大きい策は認められん！」

「まだ某それがしは説明を終えておりませんが……、晴信様……わかりました。つづけます。」

晴信は豪族に下がるように命じる。不服そうに下がる豪族を見て説明を続ける出羽守信有。

「そのまま掘り続け城の真下に行く必要はございません。正面に掘り続けある程度進んだところで山の斜面に沿る様に掘るのございます。そのまま」

「やれやくれ。やっぱりなれないな。」

陣に戻るとゴロリと兜を放り投げてねっころがる晴信。

「そう、お言いになさいますな晴信様。あなたは天下を取るといったではありませぬか。」

「げっ、勘助。」

「げっ。とは何です。まあ、いいでしょう。大体勘も態度も戻ってまいったようでございますな。」

「わかつているよ。天下一の大名、そして武将になつてやるよ。」

「拙者もこのようなみすばらしい老いぼれのために一命をかけてくださる晴信様に命をかけますれば。」

深々と頭を下げ感謝の意を伝える勘助に手を振り「よせよせ。」という晴信。

「おまえのことは親代わりだと思っているんだ。爺たちはあくまで爺でしかないが、お前は親身になっていろいろ教えてくれたからな。・・・天下を取るまで死ぬんじゃないぞ。勘助。戦に戦を重ねて内政に内政を重ねて二つとない大名になつてやるよ。」

「無論にございます。なにせはじめであつたときに某は『天下を取らせてやる』と申しましたからな。では失礼を。」

（壊すことと、作ることの大きく違う二面性に才能があるものを見かけで判断しないこの人間性。必ずこの恩を返し天下一の将にしてみせる。）

九州の果てから蝦夷地までを巡りめぐり人を見てきた勘助だが見栄えが良くない上に病気で目も片方すしなつたため損を続ける人生だったが六十を過ぎ甲斐国で行き倒れていたところを勝千代に助けられてから彼女の忠臣になり天下を取らせることだけが生きがいになっていた。自身の部隊に戻ると一人の女性を呼んだ。

「望月よ。かの御仁は？」

典厩信繁の部下であり忍者でもある望月八千代信永。彼女は勘助の命を極秘に受けて典厩信繁こと三条義信を伺っていた。

「そうか。そのまま続けよ。」

「わかつたのじゃ。」

影のように消える八千代。典厩の陣に戻つたのだろう。

「……………」

(いくら天命を知り助け導く者といえ、自身の弟の名を与え、厚遇を重ねる少年、いや青年か。天命を壊す者も現れるとある。いくら有能で善良であつても晴信様の害悪になるようならば……………)

大げさだが人の生き方・才能を見抜く力を持ち陰陽道にも通じる勘助は味方を装いつつ。いや、味方でありながら三条義信のことを警戒していた。もしものときは斬つて捨てるほどに。

「おう、お疲れ。勝千代。」

「姉上。」

勘助と入れ違うように義信と孫六が入ってくる。

「ん。」

「見事にだらけちまつて……………」

「仕方がないだろう。肩がこるんだよ。まったく……………、まだまだ切り替えができてないんだろ。孫六、ありがとうな。」

ゴロゴロ動く勝千代に羽織をかける孫六。本当に良くできた妹である。

「姉上も義信さんの言つとおりあまり陣中でそのような態度はやめたほうがいいですよ。誰が来るかわかりませんから。」

「はいはい。」

寝転がりながら力なく手を振るだけの勝千代。どうも明日の戦に柄にもなく緊張しているらしい。

父親のことになると先日の躑躅ヶ崎での一件のようになることがあるように鬼門というか、よほど抑圧されてきたのだろう。ほかの面々には物怖じすることを知らない人間がここまで感情や行動をコン

トロールできないのはどうかと思ひ複雑な感情を浮かべる義信。

「なに難しい顔をしてるんだよ、義信。そんな顔をしているくらいなら疲れているあたしの肩を揉み解すという崇高な仕事をしろ。」

あ、孫六。あとで白湯を用意しておいてくれ。三人で戦が始まるまでゆっくりしてような。」

「はいはい。わかりましたよ。勝千代様。」

「わかりました。陣中ですので大したアテはありませんが用意しますよ。姉上。」

ぐったりしている勝千代に激痛マッサージを行うため近づく義信と陣を出て食料の中から食べ物を用意する孫六だった。

明日は命がけの親子喧嘩の開始日だ。

城攻め前日・後（後書き）

開始日といっても決着はまだですけどね。なんだか寝不足と疲れで
テンションがジェットコースター気味です。勉強で新田次郎の武田
信玄とさいとう・たかをの二作を読み返している作者です。

要塞山攻略戦・前（前書き）

親友に進められてハーツオブアイアンというゲームを買ったが日本
のものと勝手が違う上に説明書が説明になっっていないため四苦八苦
で練習中。そいつが言うには二週間やったら覚えるとのことだが無
理っばい。

要塞山攻略戦・前

「さあさあ、準備をおこたるでないぞ！」

パンパンと手をたたき足軽と農兵を叱咤する典厩信繁。典厩の前には合計二百の兵がいる。無論自分だけの兵ではなく大半が小山田と武田晴信本隊からの借り物だ。一人一人が縄と丸太を一本ずつ持っている。

「典厩様。用意が整いました。」

「丸太隊を含む工作隊に護衛部隊も仰せのとおり用意いたしました。」

「偵察隊も準備ができておるぞ。」

上から工藤源左衛門繁長、三枝宗吾昌貞、望月八千代信永。

「よし！われら典厩隊は東の部分を受け持つ。西にいる先発の山本・穴山・小山田・板垣隊八百五十名、南にいる次鋒の甘利・横田・工藤（繁長の兄・長門守昌佑）・小幡隊九百七十名に続く中堅だ。われらが敵が攻めにくくこちらにも攻めにくいとはいえ兵が一番少ない。気を引き締めていけ。」

「くくくくくおつ！！」「くくくく」

典厩隊を含めて東を任された部隊の兵数は七百名。東側は斜面が険しく行動が制限されるとはいえ兵数が一番少なく一点突破されやすいことに変わりはない。

「典厩殿。このたびは軍監・寄騎として参りました。よろしく願いいたします。」

脇に現れて頭を下げるのは小山田氏の嫡男・小山田越中守信有。通称を弥三郎という。昨日あったばかりだが年が同じということもあり典厩も気軽に話せる同等の同輩として付き合うようになった。馬が合うというのはこういうことだろう。関係ないが、ちなみに父親も爺さんも曾祖父もその先代も信有という名前だ。

「弥三郎殿。こちらこそよろしく願いいたします。」

こちらも頭を下げ、感謝をしめす典厩。この弥三郎をはじめとして同軍で典厩の指揮下に入るのは教来石民部景政・原美濃守虎胤・真田弾正幸隆・秋山伯耆守虎繁の四名。そして北に配備されるの武田晴信の本隊三千。対する信虎軍は総数二千強と数では圧倒している上に甲斐国オールスターなこちらの将たちがいる。しかし相手は長年甲斐国を實力で従えて来たうえに甲斐国一・関東有数の要塞が相手だ。不覚を取る可能性がないわけがない。

（なにせこちらは連合に近いうえに当主である勝千代をなめているやつもいるからな。・・・まったく。）

「真田殿と原殿も用意が済んだとのことですよ。」

「ん？秋山殿と民部は？」

「それが若輩の、さらに新参者に挨拶するいわれはない。と、申ししておりますので皆目わかりません。民部殿は寝ております。」

「民部殿はともかく。あゝ・・・秋山殿は指示には従わないと？肩をすくめる弥三郎。どうやらそうらしい。」

「・・・まあ、いいや。弥三郎殿。もう一度秋山殿のところに伝言を頼まれてくれないか？」

「かまいませんが。・・・なんと？」

「お手前の手勢は好きなようにお動きください。制限はいたしません。」

驚いたような顔をするが納得して伝えにいく弥三郎。

（やれやれ、まったく秋山信友・・・いや、虎繁か。猛将かつ有能で一国の将としては非の打ち所がないが・・・認めない人間には立場があっても従わないとは・・・。）

正史の勝頼も苦労しただろうな。と、思ってしまう典厩だった。

「典厩殿。すこしよろしいか？」

「何でございましょうか？弾正殿。」

「そのような顔をするとはつれないではないか。・・・ククク。」
相変わらず平時というか擬態というか。あいかわらずつかみ様のない薄暗い笑みを浮かべる真田弾正幸隆。

「で？」

相手にするだけ疲れるのでさっさと用件を聞く典厩。

「前線からオレを下げた上で兵を五十ほど貸してはくれぬか？」

「は？！な、何を言っただ。あんたは旗下にいるとはいえ原美濃が前線指揮を執ることになっているから、中衛を任せてもらう。と言ったじゃねえか。」

「たしかに・・・たしかにいった。だが、機を見て動かねば戦ではすべてを失う。秋山の猛牛が従わぬうえに動きがわからないとなれば・・・誰かがその役目を引き継がねばならん。」

「それであんたがやるつてののか？ たった五十でか？」

「狂気の沙汰ほど面白い。」

「頭が痛くなってきた。・・・で、それだけじゃないんだろう？」

「ククク・・・よくわかってるな。ならば五十名にあるものをくれぬか？」

耳元でささやくと典厩は、はいはい。と承った。そうして後ろを向いて去ろうとする幸隆。数歩進んで何かを思い出したようにこちらを向いて

「オレがいなくなった真田党を率いてもらうのは喜兵衛だ。しつかりたのむぞ。大将さん。クククク・・・」

「てめー！！」

大声で叫んでしまったので周りがこちらを驚いたように見る。恥ずかしくなり民部のところに向かう。

「んんんん？？あ、あ・・・。」

ゴロリと陣で寝ている教来石民部を起こす典厩。まわりを見ても民部が寝ているのは当たり前のようにだった。

「な～あ～に～。」

「準備はできたか？」

「んん〜……。ね〜……。む〜……。」
うんうんとうなずく民部だがうなずきながら寝ることしか考えていないようだ。

「わかった。準備はいいんだな。」

もう一度フラフラしながらうなずく民部。これがのちの馬場美濃守とわかっていなければ典厩、いや、義信とてこつもゆつたり構えていられないだろう。

「ぐ〜……。ぐ〜……。」

もう熟睡している民部に羽織をかけて陣から出る典厩。そのまま真田のところに向かった。

(いきたくね〜な〜。)

あの真田喜兵衛昌幸の殺人的な視線を思い出すたび足取りが重くなつていく。そして数分の距離を倍の時間をかけて陣につく。

「あ、典厩殿。お待ちしておりました。どうぞ、どうぞ。」

陣に入ると同時に喜兵衛昌幸が笑顔でやってきて導いてくれる。どうやら取り越し苦労かと思つたが昌幸の横を通ると同時に怒気と殺気を当てられた上に耳元で

「いつか殺す。」

といわれれば気が重くなつていった。ちなみに準備は文句がつけられないほど完璧だった。

「さていきますか。」

バキバキと手や指の関節を伸ばし、足先を回して緊張を解きほぐす。手甲と脚甲を着け、刀を抜いて日にかざして刃こぼれとねじれがないか確認する。最後に厚手の打掛をはおつて準備を終える。

「典厩隊。小山田隊と協力して作戦通りに作業を行う。前線は原美濃どのと教来石どのに任せ、護衛は真田隊が何とかしてくれる。われらはゆつたりと作ればいい。よいな。」

「……はっ!!!」「……」

気負った雰囲気がなくなり震えが止まり笑みが浮かぶ典厩隊五十名。「よしよし。いくぞ。」

馬に乗れない典厩にあわせて徒歩で目的地に向かう典厩隊。それと前後するように狼煙のほしが上がり戦の準備が終わったことが本隊に伝えられる。そしてちょうど三十分たち勝千代……いや、晴信から大音声が放たれる

「かかれ〜い!!!」

びりびりと大気を震わせて身が引き締まるような掛け声が出た後、要塞山を囲むようにしていた晴信軍が戦を始めた。

「……………うおおおおおおお……」

!!!!!!」「……………」

「飛んで火にいる夏の虫とでも言うのか……。晴信のようになうつけに手を貸しよって……。身の程を覚えてくれるわ!!!」「バキリと鉄製の火箸をねじ切る信虎。そして皆々に下知をだす。

「室住豊後よ。兵二百を率いて正門から南方の有象無象を蹴散らしてまいれ。」

「はっ！ただちに!!!」

「石黒将監、石黒五郎兵衛!!!貴様らは弓隊百ずつを率い各方面に矢数を気にせずうちまくれ!!!」

「……御意に!!!」

「内藤修理虎資!!!貴様は槍足軽三百を率いて決して攻めず盾を置き、矢や礮を防ぎ攻め手を防ぐことのみ考えよ。敵が攻めてきたら、いなし、防ぎ、少しずつ敵兵を削ることのみにせよ。もしものときは太鼓をたたくがよい。追加の援兵として油川刑部信守を控えてお

く。」

「仰せのとおりに!!!」

「加賀美虎光、逸見信親、浅利虎在、跡部信秋、曾根虎盛、長坂光堅、跡部信秋、金丸虎嗣、油川信高、今井信元、加藤昌頼、荻原昌勝。貴様らに対して細かいことは言わぬ。一隊兵八十騎兵五を率いて存分に暴れよ!!!」

「はっ!!!」

腰から刀を引き抜き槍を脇に構えて信虎が最後に一言。

「残りはわしに続け!!!西の雑魚どもを蹴散らし南、東と蹴散らし最後に晴信をこの国から追い出してやるう!!!」

守備兵を五十だけ残して全軍突撃という籠城という選択ではなく、敵が集まったところを一網打尽する作戦を行う信虎軍だ。

「て、敵が攻めてまいったと!!!」

思わず立ち上がり大声を出してしまったがすぐさま首を振って感情を戻す勝千代。

「それで詳細は!?!」

「はっ!!!西方と東方は五分で持ちこたえており作業のほうも遅々ながら進んでおりますが南方は六分四分で押されておりますゆえ作業班にも被害が出ております。北方はひどい有様で、統制が執れていないのか、取れているのかわからぬ面妖な動きをする部隊に翻弄され被害も増える一方でございます。」

その報告を聞くと勝千代はギリギリと歯をかみ締める。そして相手の陣容を数名の物見から詳細を聞く。報告を聞き軍配で口元を隠しながら考えをまとめると軍配を投げ捨て愛用の斧を持ち部下に命令を出す。

「飯富よ。おぬしら赤備えと馬廻りの半数を率いて北方の部隊を足止め、そして一つずつ風漬しで潰していくこと。特に加藤昌頼と荻

原昌勝、浅利虎在、加賀美虎光の四名には特に気を張って戦うことだ。あやつらは武勇と小規模戦闘と得意としておる。甘利や板垣の爺より強いゆえな。」

「ええ！・・・し、しつれいしました。ご無礼を。」

大声を出してしまった飯富三郎兵衛昌景だがすぐさま非礼をわびた。「驚くのもむりはない。甲斐国といえば板垣、甘利、駒井の三名が勇名をはせているが、この四名はこと戦、特に戦術級では恐ろしい相手だ。父上は小規模の戦を繰り返してこちらの作戦を潰してしまうつもりだろう。」

斧を思い切り振り下ろして感情を発散させる。そして勝千代から晴信になり改めて命令を出す。

「飯富よ！！命令は先ほどのとおりだ。大まかのことしか言わぬ！」

「はっ！！」

「伝令！！」

数名の足自慢の伝令が現れる。

「西の山本と板垣には戦況の現状維持を厳命。穴山には作業の続行。小山田自慢の投石部隊にどんな方法でもかまわぬから敵将を捕らえるか討ち取れと伝えよ。」

「はっ！！」

「南には多田淡路守に私の馬廻り半数を率いて救援に向かえと伝えよ。そして後方部隊の八分を甘利の爺に渡し指揮を執るように伝え、そのまま西の小山田隊と合流して城に対して回るように攻撃をせよ。父上が出ているはずだが全軍に・・・いや、教来石隊と典厩隊を合流させて対応させよ。東方は大規模な戦闘ができる場所は少ない。父上もわかつておるはずだから戦線の維持と迎撃しか行わないはずだ。」

「「仰せのままに！！」」

「そして残りの二分の兵はあたしが直接率いて戦況を掻き乱す伏兵を叩き潰す！！全軍に総攻撃を行うのではない。あくまで敵を追

い返し敵味方の被害を減らすように厳命せよ!!!」

「て、敵もでございますか？」

「そつだ!!!このまま両倒れに近い状況になれば間違はなく信濃の豪族・大名が攻めてくるに違いない。最悪の場合には上杉の管領おおももがくるであろう。それに対して後々のことも考えなければいけぬ!!!」

「わかりました!!!」

すべての伝令が出発した。こうして戦場は味噌樽を叩き割ったように混戦模様を呈していった。

「伝令です!!!典厩さまは教来石さまと合流して信虎さまの隊を発見し対応せよとのご命令です。」

「対応とおっしゃられたのか？」

確認を取ると伝令は確かにと念を入れる。

「わかった。おぬしは後方に下がり作業班と合流し回りに目を配っていてくれ。」

「かしこまりつかまつった。」

伝令のなかでも有能なのだろう健脚をいかして混戦の敵味方を避けて弓矢を避けて陣に戻っていった。

「源左衛門!!!宗吾!!!八千代!!!」

「!!!はっ!!!」

「聞いたとおりだ。われわれは作業班を除く典厩隊五十と教来石隊百二十の計二百弱で信虎隊に対応する。」

その言葉を聴いて三枝宗吾昌貞が質問する。

「ま、まさか倒すのですか？」

「いや、あくまで対応するだけだ。」

「対応でございますか？」

要領を得ない宗吾に源左衛門が説明する。

「つまり柔軟に敵に対応して相手の動きにあわせて行動するということです。まあ、早い話が行き当たりばったりに行動する。もっと

早く言えば策がないので全部任せる。といったところでしょう。」

「おいおい。無策はひどいんじゃないかな？」

「こ、これは失礼を。」

「まあ、いいさ。八千代。おぬしには今回は動き詰めてもらうぞ。」

「わかっておるのじゃ。まあ、これも仕事じゃからな。なにをすればよいのじゃ？」

「簡単に言えば伝言番をしてもらう。言うことなすことをすべて民部殿と晴信様、勘助殿に伝えるのだ。そうさな、将棋のこまが動くのを上から見るようにわかったことをすべて伝えるのだ。わかったか？」

「む、妾は子供ではないのじゃよ。まかせてたもれよ!!！」

ドンと胸をたたく八千代に頼もしさを感じてしまふ典厩だった。

「さてさて、民部殿も来たことだ。行くかね。」

（やれやれ、こんなときに幸隆殿と秋山殿はどこで油を売っているのやら。）

ガンガンと手甲をぶつける典厩だった。

要塞山攻略戦・前（後書き）

・・・・前書きが後書きみたいになってしまった。エラーが多
いな。一回スキャンして直してみるか。がんばって更新していきま
しょうか。

唐突!!!人物紹介!その一(前書き)

作者です。時間が三十分ほど余ったので人物紹介を簡単に・・・。
本編と紹介その二は近日あげます。

唐突!!!人物紹介!その一

本編とはあまりかんけいがありません。

「作者の思いつき!!!」

「簡単人物紹介!!!」

「「「「わ〜!!!」」」」

二人の少女が両手を挙げて声を並べて言うと周りにいた老若男女がまわず合いの手を入れる。

「皆さん。お久しぶりね。北条新九郎氏康よ。」

「始めましてかしら。私、わたぐし東海一の弓取りと異名をとる名門・今川家の当主・今川治部大輔義元ですわ。」

「ふふん。相変わらず名門意識が高いやつね。」

「体が貧相なあなたは考えも貧相ですものね。我が家みたいに風流でありながら勇猛さを兼ね備えて見ればわかるかもですわ。」

「ほう……。わが北条家が貧相で貧弱と申したか?!」

「いえいえ、北条……。いえ、伊勢家の皆々に言つたままで北条家の家臣たちには非はありませんわよ。現にそちらの武の要は我が福島家からの出でありますからね。」

「……。ちつ、我が軍に対して敗北を重ね泣き付いてきたのは誰かしらね?」

「ふふ。面白いことを言うのですわ。もともとは我が家に流れ着いた食客が運が良かっただけでしょ?」

ほほほほ……。ふふふふ……。と目が据わっているのに顔は笑っているという恐ろしい状況を家臣団は恐れ慄きガタガタ震えていた。数名を除いては。

「「殿!!!」」

「「「げっ!!!」」」

二人をいさめようと前に出てきたのは北条孫九郎綱成と太原崇孚雪斎の側近二名だ。

「箱根様と多目周防様が政務が忙しくこの場に出れぬので若輩ながら拙者が出ているのです。お二人に、北条家に恥を書かせるおつもりでしょうか!」

「そのとおりであるぞ! 芳菊丸よ! 我に、今川家に、そしてお主の名に恥をつけるおつもりか!」

「す、すまぬ。」

その後、数十分の説教が終わり紹介に戻る。

「やっとおわったわ。……この人物紹介は作者の時間が余ったのと前回述べた親友たちが「人物紹介なくねえか?」といったから簡単に書いてあるものだから異論や意見があるだろうけど。まあ、そこは博愛の精神で流しておくことね。」

「受けるたびゴリゴリとおもいますわ。各家ごとに数名の簡単な紹介と能力値が書いております。こちらも博愛と慈悲の心で受けてくださいませ。」

心を落ち着かせるために本を片手に、蹴鞠をしながらしゃべる二人。家臣団はさつさと去り、この場にいるのは当主二人とその見張りである側近二名だ。

「では気を取り直して行うわよ。」

「ではまずはこの人からですわ。」

カンペを取り出し読み始める二人

「武田典厩信繁。えつと本名? 本名は三条義信というそうよ。」

「はるか未来の平成の時代からやってきた未来人であり異世界人ですって!! なんて私のところに来なかったのですわ!」

「……こんど三国で会談があったときに聞くからそれまで保留でいいのではないのかしら?」

「ゴホン。そうですね。では……。事故により知らぬ間に武田家世継ぎの武田勝千代晴信のところに流され助けられた少年。詳細はこの「ほあいとぼーど」なるものを書いてあるからよみなさ

い。」

名前・武田典厩信繁（本名・三条義信）

性別・男性

年齢・十七

身長・182cm

体重・81kg

職業・武田家当主（予定）副将（予定） 元の世界では高校生と

農業

好きな物事・食事、実戦

苦手な物事・堅苦しい席と脇道それること

好物・青汁、甘味

嫌いなもの・豚肉、しいたけ

特技・按摩、針、手品、実戦

弱点・要領が悪く作戦や軍略など予想を含む不確定要素が多いものが苦手。

武器・刀と格闘術

統率・70

武力・89

政務・89

智謀・12

魅力・75

成長率・77

器・88

「簡単な感じね。ほかにも書くでしょ？普通は。ちなみに最大値は120ね。」

「簡単って言うてるのだから良いのはいいのではないですの。次は

？」

「武田家当主予定の武田晴信ね。親に嫌われ自分に自信がもてない天才。ですって。」

名前・武田勝千代晴信

性別・男性

年齢・十五

身長・179cm

体重・59kg

職業・武田家当主予定

好きな物事・動物をめであること・戦国大名

苦手な物事・孤独なこと・戦国大名

好物・甘味、青汁

嫌いなもの・味噌漬け、とち餅

特技・戦国大名、甘え上手、人好き

弱点・酔狂が過ぎるうえに野心家で気分屋

武器・斧

統率・110

武力・95

政務・105

智謀・107

魅力・119

成長率・50

器・119

「す、すごいわね。この能力。さすが公式最強の戦国大名。でもこの特技・戦国大名って？」

「えっと戦国大名に必要なものとのことらしいわ。」

「つぎは？あ、我が北条家ね。」

「我が家は？いつ紹介されるのかしら？」

「次ですって。」

「えっと、戦国最大級の内政家で元・臆病者で関東が誇る英雄ですって。べた褒めですわね。」

「とうぜんよ。」

名前・北条新九郎氏康

性別・女性

年齢・十五

身長・152cm

体重・ひみつです

職業・北条家当主

好きな物事・内政、だらけること、前線突撃、孫九「わー！わー！わー！」

苦手な物事・無駄に騒がしいこと、体つきを比べること

好物・甘味、かつお

苦手なもの・苦味、酸味

特技・内政・謀略・人身掌握

弱点・プライドが高く防御が過ぎることがあり玉におおほかをする。

武器・槍

統率・101

武力・90

政務・120

謀略・101

魅力・118

成長率・70

器・117

「ふふん!!」

「な、なんですのこの能力は……。」

「実力よ!!」

ふんぞり返る氏康をながして次にいく義元

「つぎは気が優しく力持ちを地でいく無骨者。ほめているのか微妙ですわね……。」

名前・北条孫九郎綱成

性別・男性

年齢・十六

身長・177cm

体重・74kg

職業・北条家一門衆家老格・玉縄城城主

好きな物事・武勇、武略、前線突撃

苦手なもの・喧嘩、内政、多雑なこと

好物・かつお、茶

苦手なもの・甘味、豆

特技・戦術・個人的武勇

弱点・武勇や政略は得意だが風流や飾ることができない

武器・金棍棒

統率・88

武力・88

政務・65

謀略・27

魅力・70

成長率・80

器・75

「・・・つく！さすが福島家といって誇るべきか・・・、北条家は反則だというべきでしょうか？」

「ほめなさい。たたえなさい。次はあなたの今川家ね。（うつけと名高いあなたの能力はいかようでしょうね。）」

「恐れ入りなさい。名門・今川家の当主の能力を」

「ええつと、風流上手な空気を読まない公家大名。言いたい放題ね。ふふふ。」

「な、ぬあんですって！！」

名前・今川治部大輔義元

性別・女性

年齢・十七

身長・166cm

体重・53kg

職業・室町幕府要職兼今川家当主

好きな物事・風流、剣術、くじ

苦手な物事・乱雑な物事、意見がましいこと

好物・甘味、お茶、花鳥風月

苦手なもの・味噌、ざくろ

特技・内政、強運

弱点・空気が読めずわがまま放題、うつけ見えるが繊細かつ流されやすい

武器・剣

統率・110

武力・93

政務・99

謀略・10

魅力・119

成長率・77

「……（予想と違いすぎて啞然）」

「ふふ。恐れ入って声も出ないようね。見たかしら華麗かつ有能な能力を！」

「何かの間違いじゃないのかしら？わ、わたしが能力で負けているところがあるなんて……。」

「む、私をそんなに馬鹿にしていたのかしら？」

疑問をぶつけるがプイと顔を背ける氏康。しかし上機嫌な義元は紹介を続ける。

「つつきましては私の師匠・太原雪斎ですわ。剛力千人力・その才は天下有数の生臭坊主。すこしひどい気がしますが……まあ、いいでしょう。」

名前・太原崇孚雪斎

年齢・六十二

身長・193cm

体重・130kg

職業・今川家軍師兼筆頭家老

好きな物事・鍛錬、真剣勝負

苦手な物事・貧弱さ、蛇蝎なこと

好物・イノシシ、鯨

苦手なもの・精進料理

特技・謀略、教育

弱点・苦勞性で何事も背負いやすく無理をしやすい

武器・拳

統率・99

武力・98

政務・99

謀略・105

魅力・79

成長率・5

器・78

「さすが師匠ですわ!!ほっほっほ!!」

「高らかに笑っているところ悪いですが成長率が低いですわね。」

「ふん。嫉妬は見苦しいですわよ。今回は主要な大名と側近だけですかね。」

「まだまだ話が続くからこんかいはこれぐらいですわね。」

閉めに入ろうとした二人と側近二人を黒子が呼びつける。四人がこちらを向いた瞬間に大きなフラッシュがたかれ四人が倒れる。隣の部屋には同じように倒れた両家の家臣団がいる。数刻後目が覚めるがどうしてここにいるか分からず頭をひねりながらも同盟締結の祝いで盛り上がったという。

唐突！！人物紹介！その一（後書き）

今回は短めかつ番外の番外です。ではでは

要塞山攻略戦・中（前書き）

い、一日で十件近くお気に入り登録だと・・・？ヒヤハー！！！！つと仕事の付き合いで飲み会から帰ってきて大声を上げて叫んだ作者です。近所の皆さんすいませんでした。かなり関係ないけど深夜番組で大河ドラマ・毛利元就を見てその見た話が隆元暗殺だったのでショックだった。マイナー武将が好きです。

要塞山攻略戦・中

「じゃあ陣頭指揮と部隊指揮は源左衛門。お前に一任するからな。よろしく。」

ポンと肩をたたくと飛び上がるように背筋を伸ばし驚く工藤源左衛門繁長。

「え、え、ええ〜！な、な、なんで私が？典厩様が今現在ここにいるのですから典厩様が行えば！」

「はい、注目。」

主だった武將たちに見えるように左腕を上げる。そこにはぐるぐる巻きに固定された粉碎骨折したうだがあった。

「この腕で指揮を執ると足手まといなうえに部下が気にして存分に働けないだろう。だから典厩隊の中で一番経験があつて指揮の才もある源左衛門。お前が指揮を頼む。いいな？これは指揮を預けたという証しの太刀だ。」

そう言つて典厩は源左衛門に八文字。宗吾に山姥切を渡す。

「じゃ、頼むよ。」

そういわれては後に引けないと背筋をキチンと伸ばし最敬礼で頭を下げながら

「この工藤源左衛門繁長！！確かに承りました！！」

大声で宣言する。普段の地味さからは考えられないほどの存在感に満ちた声だ。

「では典厩様は後方にて作業班の　　後は任せたからな。え？」

後方に連れて行くこととした兵を無視して単身で敵味方が行きかう戦場につつまむ典厩。しばし呆然としていた典厩隊だがすぐさま気を取り直し大声を上げて敵に突き進んでいった。

「典厩様の大馬鹿野郎〜！！」

宗吾が典厩隊すべての気持を代弁してしまった。

「まさか単身突撃とは主様も無茶を、無謀をしなさるものじゃ。後ろにびったり伝言番の望月八千代信永が付き添う。」

「単身じゃないだろう？後ろにはお前百歩先には教来石隊、後方二百歩に典厩隊がいるではないか？」

「なんとという屁理屈じゃ。まあよい。妾は何をすればよいのじゃ。はじめの指令をしてもらわなければ伝言番も見付役も出来はせぬぞ？」

「そうだな。まずは真田弾正殿を見付けてくれ。たぶん全軍の位置を把握できる場所にいるはずだと思う。あの捻くれ者ならそうするはずだ。後は知らん。まかせろ。」

「……主様は有能なのか無能なのか分からぬのじゃ。まあ、任せておくのじゃ。」

トントントンと飛び上がり敵兵の頭や槍先を足場にして移動する八千代。その姿はムササビのようだった。

「あとは目立つだけ目立つて生き残るだけだ。ってね!!」
こぶしを握り締め相手の顔面や側頭部を狙ってジャブやフックの要領で打ち込む。殺したり倒したりする必要はなく体制を崩したり一時的に注意をずらして敵陣を突破することだけを考える。弓に対しては近くに落ちていた死体を蹴上げて掴み盾にする。

「飛燕疾風脚!! って無理よね!!」
空中二段蹴りを行おうとしたが出来るわけもなく一段目で相手の胸元を打つ。そして走る走る。目的地まで走る走る。

「てん……きゅ……?」
「どうも!!」

目的地に向かう途中に教来石民部景政と合流する。周りをぎっしり囲まれたうえに弓矢まで射掛けられているにもかかわらず傷一つ負わないどころか死体の山を作り出す民部率いる教来石隊。その精強さには敵兵もおびえているようだ。

「ここはまかせましたよ、民部どの!!」
走り抜ける典厩に対して手を振る民部景政。それを見越して敵兵が踊りかかるが槍の一振りて体を両断され貫かれるだけだった。そして大あくびを一つして民部は槍を振って死体を飛ばし部隊に反転して典厩隊と真田隊と合流する命令を出す。

「ん！」

陣頭で戦う民部景政を生き残り投降した敵はのちに「鬼や夜叉」と述べたという。

教来石隊から離れ敵陣の真ん中といつてもいい位置に突入した典厩はキョロキョロとあたりを見渡す。目的の人物を探しているのだ。

(第一に信虎だ。負傷でもさせれば戦況は一変するはずだ。)

考えながら回りも見ていても敵兵は遠慮なく襲い掛かってくる。さすがに敵陣なので弓はないが……。しかし本人はまっすぐ来たつもりだったが実は

「その若党よ!!命が惜しければ降伏せよ!!我が名は室住豊後守が配下・岩手治部信友なり!!」

「おなじく岩崎八郎吾勝秀!!」

騎馬武者が二人現れて名乗りを上げる。

「あれ?室住豊後配下つてことは南にきたのか?」

南についてしまつていのだ。森の中をまっすぐ歩いたつもりだったのに元のところに戻つてしまつたのと同じ原理らしい。

「ええい!!貴様も名乗らぬか!」

どうやらあちらからは典厩が無視されたように感じたらしい。

「む。少なくとも若党ではないぞ。こちらも失礼して……」

大きく息を吸つて腹のそこに響くような大声で名乗りを上げる。

「我が名は武田典厩信繁なり!!つてな。」

「おのれ武田だと!主家の名をかたるとは不届き千万!!」

「手打ちにしてくれるわ!!」

お決まりの台詞を放つ二人に頭を抱えなくなる典厩。

「あゝ……はいはい。」

（なんでこうも、まあ、ステレオタイプというか、個性というものはいいのか？）

「むむむ……。愚弄しよってからに！！」

馬上から槍を構えてこちらに迫る敵将二人。

（相手にしたくないな……。死ぬのは絶対いやだから精一杯戦うけどな！！）

馬が加速する前に槍を掴み地面に足で押し付けその力を利用して飛び上がりかかとおとしを延髄に打ち込む。さらに打ち込んだ反動を生かして後ろ回し蹴りを打ち込む。とっさの行動かつ見たこともないような軌道を描く攻撃に驚く暇もなく二人は絶命した。

（なんか身体能力が上がった気がするな？こんな動き異世界（ちゅうち）に着いたときにはできなかつたぞ？あと人を殺すことにこなれてきたみたいだな。気持ち是最悪だけだな。）

空中で回転するまでの余裕を見せて着地して倒した将の部下を見て一言。

「首を取り手柄とするのが武門の定めとはいえ討ち死にした御二人をねんごろに弔い嫡子に継がせるが良からう。」

「個」が中心の元の世界なら復讐されても仕方がないようなことを言うが「家」が中心のこの時代の世界ではあいては頭を下げて感謝の言葉を述べて城にさがっていった。

「我ながら反吐が出るような対応だな。」

チツツと舌打ちをして目的の信虎探しを再開した典厩だった。

ところ変わりこちらは西方戦線。山本勘助・板垣信方・穴山信君・小山田親子が主だった将のこの隊は当初は五分以上の戦いをしてきたが不規則な攻撃を仕掛けてくる弓部隊がこちらを集中的に攻撃をしてきたため将と将の連携が崩れ連合の弱みといえるつながりを切

られ各個撃破の危険を帯びた戦いになっていた。それでも完全に分断されないあたり各将の能力の高さが伺える。

「勘助様。」

「八千代か！ちようど良いところに来た。小山田殿に我が隊が壁になるゆえ投石を続けるように　「伝令！！」なんじゃ！！」
指令を行おうとしたところに伝令が飛び込んできた。

「はっ、伝令でございます。北方の敵将は三々五々で各方面に撤退。赤備え率いる飯富さまは三郎兵衛様に半数を任せ、追撃のために二隊分けて東西に援軍を送ることでございます。晴信様が率いる部隊は北西にて敵と戦闘中とのございます。」

「いかん！すぐさま隊を合流するように飯富殿に、晴信様にはすぐさまその場から退くように伝令を送れい！！晴信様が危ういぞ！」
「は？」

「ちぎれた粘土が集まるように逃げた。いや、隠れた敵部隊が合流して晴信様を狙う！！」
合点がいったように頷き伝令が向かおうとするが矢の雨が伝令を貫く。

「くうう！！八千代！すぐさま東方の部隊と連絡をとりすぐさま救援に、いや、遠すぎるか！・・・八千代よ。西方の部隊全部に強行突破して晴信様の所に向かうように伝令を！そしてすぐさま飯富殿にも伝令を伝えよ。」

「はっ、かしこまったのじゃ。」
失礼するのじゃ、と一声かけて来たように足場のない足場を使って味方に伝令を送りはじめた。

「山本隊！！強行突破じゃ！すぐさま晴信様のもとにむかうぞ！！」
老体に鞭打ち槍を振るい奮戦する勘助。

（考えが凝り固まっていたのかもしれないのう。この戦に勝ったら。いや、生き残ったのなら直さねばならぬな。）

「敵がもろすぎる？……しまった！ワシとした事が勝ちのにおごってしまったのか！もしくは降将としてあせっていたのかもしれん！すぐさま三郎兵衛を呼び戻せ！戻らねば！」

陣を立てなして晴信の援護に向かおうとした飯富兵部虎昌だが……「そこにいたか！裏切り者めがああああ！……！」

「ぐがあああ……！」

武田家最強の赤備えを吹き飛ばしながら一騎の騎馬武者が虎昌の肩に槍を突き立てる

「お、お館様？！な、なぜ？」

「晴信風情に尻尾を振る裏切り者の駄犬が！！身の程を教えてください……！」

「ぬづづ……。」

「殿！お下がりを！」

「お早く！」

虎昌を危機から逃がすために数十名の赤備えが信虎の槍を自らの体を盾にして時間を稼ぐ。

「す、すまぬ。」

「どこに行くか……！」

いくら豪勇で名高い赤備えといえども狂気の暴君というべき信虎の前には時間稼ぎにしかならず次々に倒されていく。しかし虎昌はその時間で部隊を立て直し晴信の救援に向かった。

「そう簡単にいくと思うか……！」

おおおおおおおお！！と雄たけびを上げると遙か向こうから散ったはずの部隊が集まり赤備えの前に立ち邪魔をする。それと同時に三郎兵衛が率いた半数の赤備えが到着し混戦になり晴信のもとに向かうことが不可能になる。

「ん？」

「民部さま……？いかがしましたか？」

同じように混戦中の典厩・教来石・真田隊。少し先にはさらに激戦の原・小山田寄騎隊がいる。その激戦の中戦い続けていながら後ろを振り向く民部景政。それをおかしく思い問いかける三枝宗吾昌貞だが民部はじつとある方向を見ながら顔を動かさそうとしない。数秒ほど見つめた後、途端に馬首を北西に向けて十名の騎兵と一緒に敵を突破していった。

「民部さまあ？！」

驚いた宗吾は源左衛門に相談すべく合流したがその源左衛門も東方の山場にぶち当たっていた。

「ここから先は決しておさぬぞ。工藤の娘子よ。」

「内藤様……。おひきくださいませぬか？」

父親の親友で父が信虎に切られた後でも世話をしてくれた人が相手だった。

「くだい。おぬしも武士、いや、戦国の将なら敵に情けをかけるべき時を見誤るな。わしはおぬしを斬る。」

「おじ上様……。兄上に伝えることはありますか？」

「……………ない。」

「源左衛門殿助太刀します。」

「お願いいたします。」

二対一だがくぐってきた修羅場が違うのか吞まれ始めている二人だった。

「しまったなあ。ここはどこだ。せりや！！ん？」

片手と思えない働きをする典厩信繁だが後方から尋常じゃない殺気と闘気を撒き散らし邪魔するものを粉碎し虐殺する少数の部隊が迫ってきた。

（味方か？旗印がないからわからないが……………まるで重戦車だな。んん？あれは民部どの？）

「民部どの……………おおおおおお！！！」

呼び止めようとしたが通り過ぎると同時に民部の後ろにいる二騎につかまれ宙吊りになる。

「な、な、何だつてんだ？」

「ご無礼をお許しくださいませ典厩様。それがしは米倉重継と申します。肩を掴んでいるのは勝津野昌世と申します。民部さまの側近をおおせつかつてます。」

「一体どうしたんだよ？」

「それが晴信様に何かあったようなのですが・・・民部さまが何もおっしゃらずに行動しているので何がなんだか分からずじまいです。」

申し訳ありませんと頭を下げる米倉重継だがまあまあと慰める典厩。ひよいひよいと並列している民部の馬に飛び乗り民部に話しかけようとするが形相を見て一息もつけないことが分かりおとなしく従うことにした。

（やれやれ、五分と五分の戦いだ。勝千代、勝手に死んでもらったら困るからな。）

要塞山攻略戦・中（後書き）

酔っ払い作者です。奈良漬で倒れる作者ですが今回は無理して焼酎を一杯飲んで一時間倒れてました。続きは今書いてます。いつになったら京の都訪問や信濃攻略や川中島がかけるのだろうか。先は長いねえ。

要塞山攻略戦・後（前書き）

四万PV・五千ユニーク突破。ありがとうございます。前から言っている並列更新ですが、まあ、すいません。一つ一つがんばってきます。

要塞山攻略戦・後

先の場面の最後から数十分ほどさかのぼり、こちらは武田晴信率いる部隊。大将自身が槍を振る激戦となつて、晴信や馬廻り衆にはつかられ見られない。いまも味方を次々に弓による奇襲で混乱させていった石黒兄弟の部隊を撤退させた。報告によれば典厩が石黒兄弟を討ち取つたとの報告があつたが確認は出来ていない。その後、赤備えが蹴散らした少数部隊を次々に四散させた晴信の馬廻り。

「晴信様、我がほうは各方面で五分以上の戦いをしております。このまま作業部隊が作業を終えて参戦したのであれば敵を一気呵成に追い返しあとは持久戦に持ち込めば最小限の部隊で信虎様に対応できます。」

豪族の数名がやってきて異口同音で話しかける。

「そうは言うがやけに敵の動きがおかしいと思わぬか？」

「気にしすぎでございましょう。……まさかここまできて臆病風に吹かれたと仰せか？我らは行きますぞ！！ハア！！」

馬の腹を蹴飛ばして自分の部隊を率いて敵陣に向かう豪族達。晴信旗下の部隊は特に言うことを聞きそうにない部隊で固めていた。なぜなら晴信自身が見張っているので勝手な判断が取れないだろうと思つての配置だが、こう相手を追い散らしていけば調子に乗つて行動する豪族・国人たちが多く晴信の部隊はその部隊たちを補佐、支援して引つ張られる感じで敵に対応していった。

「晴信様。典厩様が逍遥軒様、もしくは駒井様をお呼びになられては？さすがに勝手が過ぎると存じますが？……殺つちまつていいでしょうか？」

馬廻り衆筆頭・五味与三高重が物騒なことを含みながら尋ねてくる。忠義心が高く、軍事・政治に強い上に財政にも明るいという能力だけを見れば有能な武将だが……。しかし、この五味高重は副官の飯尾与四助友・補佐の名和惣兵衛宗安とあわせて三馬鹿と呼ばれて

いる。なぜなら何でも暴力で解決しようとする高重、他人に仕事を押し付けるうえに博打狂いの助友、教来石民部景政と違い仕事でも寝続ける宗安と性格や言動、行動にかなりの問題があるのだ。そのため十家以上の家から追い出され、測定不能なほどの仕官構い（たちいきんし）を受けているいわくつきの人材なのだ。

「そのあたりにしておけ。あやつらも好んであたしに従っているわけではないのだ。多少のわがままはゆるしてやろう。・・・お前達もそうだがな。」

「はっはっは。」

一言皮肉を言ったつもりだが堪えていないどころか聞いていない高重。そして敵陣のど真ん中で大暴れしている助友。そして最後の宗安は馬の上で熟睡している。

「まあ、よいわさ。ものども続け！！敵を打ち倒し甲斐の皆々を暴君の手から救うのだ！！かかれ！！」

「「御おおお意！！」」

陣頭に立ち暴れまくる三馬鹿の二人。

（作戦はうまくいってるな。読みどおりだな。）

晴信は片手で軍配を持ち直しグルグルとまわす。次の段階に移動しようとする。しかし・・・

「穴が開いたぞ！！かかれい！！」

部隊が動きを変えた瞬間に敵の長槍が命を捨てた突撃を行う。そして大きくなつた穴に抜刀隊がなだれ込んでくる。どうやら豪族・国人衆と晴信本隊が間が開きなおかつ晴信隊が突撃命令を出すのを待っていたようだ。次々に開いた穴に敵がなだれ込んできて晴信に刃が届きそうになる。

「あまいわ！！」

「晴信様？！ご無事で？！」

しかしすぐさま馬廻り衆が駆けつけ敵を次々に倒していく。

「すまぬな、大事は無い。態勢を立てなお・・・なんだ？！」

「て、敵の総攻撃でございます。前方の部隊は分断させ壊滅状態か

と……。」

「ちい、全軍集結！！その後、赤備えと合流する。」

「……ははっ！！」「」

晴信の命令ですぐさま部隊が再集結し魚鱗の陣で一転突破を図る。しかし次々に小部隊が突撃し一撃当てると逃げていく。それが何度も続く。

（生皮を裂くようにこちらを疲弊させるつもりか？その手には乗らぬわ！！）

「総員！敵の一番厚みのある場所に突撃せよ！！」

「一番暑い場所でございますか？」

「そうだ。死中に活を求めよ！！我に続け！！」

晴信は一騎駆けの要領で槍を振るい敵を打ち倒す。

「晴信様を死なせるでない！！続けえ！！！！」

「……」

「……」

「おおおおおお！！！！！！」「」

晴信を死なせまいと部隊の兵が最大限の気迫をもって厚い層になっていた敵を次々に倒し、次第に敵を押し始める。信虎勢は押され始めるとすぐさま四散し、相手が止まると合流・攻撃していたが一転突破した後ですぐさま分断された部隊を各個撃破するという晴信勢の攻撃によりズスタにされていた。

「よし、このまま赤備えの場所まで駆け抜ける！！」

「させはせぬぞ！！」

部隊が転換を終えたその瞬間に真後ろから部隊が突撃。いや、突進してきたのだ。晴信の部隊に文字通り肉弾となって突っ込む部隊。すぐさま晴信は相手の旗指物（軍旗とも）を確認する。すると旗の横には白駒と書かれた大きな将棋の駒。馬印が見えた。

「室住豊後か？！」

混戦に次ぐ混戦で東方戦線以外は蓋をわった味噌瓶のような配置も戦法もない殲滅戦になっていた。

「白駒の異名に負けるでない！！香車のごとく敵に突っ込み相手のはらわたをかき破るのだ！！」

完全に不意をつかれるような形で混乱のるつぼと化した晴信隊に更なる混乱の元がもたらされた。

「晴信さま!! 赤備えが信虎様の部隊に足止めされていおります。また、信虎さ・ひい!!」

報告の途中で獣の咆哮のような、狂人の絶叫のような大声が響き伝令を含めた混乱状態の部隊が次々と四散して討ち取られていく。

「みな!! 絶対に分かれるでないぞ! 窮鳥とて群れにいれば猛禽が襲わぬ!!」

「晴信様!! ご覚悟を!!」

槍と槍がぶつかりあう。そのまま何合も打ち合い、互角の戦いを繰り広げる二人。その間にも室住隊は次々に少数ながら援軍がやってきており晴信隊を精神的にも肉体的にも追い詰めていった。

「高重!!」

近くにいた与三高重を混戦中ながら呼びつける

「はっ!!」

「すぐさま助友、宗安の二名と三十名の兵を連れ囲みを突破せよ!!」

「援兵をお求めになるのでございますか?」

「いや、そのまま突破したら室住豊後を押さえよ。かのものを抑えて形勢を変える。」

「かしこまりました。すぐさま……。」

馬を駆って敵陣に突っ込む与三高重。すぐさま二人と合流し再度突撃を行う。この間わずか数分だった。

(……少々まずいことになったかもしれない・ぬな。)

「ご報告申し上げます。秋山伯耆守、真田弾正の両名の部隊はいまだ動きませぬ。」

「よろしい、ご苦労。・・・と、民部殿は落ち着きましような。」
八つ当たりで近くにあった木々を吹き飛ばしながら息を荒げている民部景政をなだめつつ自分自身も少しばかりイライラしているのを自覚していた。

（真田のおっさんは何考えてるか分からないけどな。あゝきゝやゝまゝ！！！！）

おおきな舌打ちをして思わず右こぶしを握り締める。

「て、典厩殿。」

小山田弥三郎信有が驚いたような声を出した。

「弥三郎殿？どうかしましたか？」

「手甲が・・・。」

手を確認してみるとバリリと硬いものが碎ける音がしながら握りの部分が碎けていた。

「ちよつと、鍛鋼製だぞこれ。」

「連戦続きだったので疲労がたまっていたのでは？赤備えの飯富殿の槍を防いだのですから。」

「そ、そうかもしれないなあ。」

（つつてもなあ。左手なら碎けたあとに簡単な修復したんだから拍子でつい碎けたってんなら分かるんだけど・・・右手はつかつてねえぞ、あんまり。やっぱ、体がおかしくなってるのかな？）

壊れた手甲に左手の手甲を縄でくり付けて左手をしっかり固定する。

「もつまつてはいらねえな。何とか集まった手勢三十で晴信様の援護に行くぞ。野郎どもつづけい！！」

「て、典厩殿？」

「典厩様！？」

いつもの慇懃な典厩から面倒になったのか義信の口調に面をくらった面々。

「弥三郎殿。部隊の指令はすべてお任せします。民部どの・・・あれ？民部どの？あれ？」

「大変でございます。民部景政様、単騎にて敵陣に突入いたしました次第で……。」

「「はあ?!」」

「も、申し訳ございません。気がついたときには敵を蹴散らしおり……。」

米搗きバツタのように平伏する米倉重継と勝津野昌世。

ブツン……

と布をねじ切ったような音が二人の正面からした。二人が恐る恐る顔を上げるとガリンガリンと歯を砕けんばかりにかみ締めている典厩がいた。

「全部隊に伝達しやがれ!! 正面突破で目に付くものすべてぶっ飛ばして晴信のところに行くぞ!!」

「「「は、ははっ!!」」」

乗れない馬にまたがり腹を蹴つ飛ばし暴走させて敵陣に突っ込む。

そしてその馬鹿に続く部下たち。

次々に眼前に現れる敵を無視。または蹴飛ばし穴を作る。その穴から部下たちがなだれ込む。要領よく行ったためか被害はまったくない。敵の追撃はおるか迎撃すらなかった。ふと気になったのである方向を見る典厩。

「ん?……弥三郎殿。兵のほうは任せていいか?」

「は、はい。典厩殿は?」

返事をせずに馬方飛び降りて目的まで全速力で走り抜ける。どんどん加速していき目的のある人物に攻撃が届くと判断するや否や、

「そこにいやか!! 信虎ああ!!」

馬を蹴飛ばし信虎を叩き落した。かに見えたが大柄の体に見合わない身軽さですぐさま立ち上がり

「下郎が!!」

と大音声で吼えてくる。近くには肩を貫かれ太もから出血している赤備えの将である飯富兵部虎昌と叔父をかばうように前に立つ飯富二郎兵衛昌景。さらにそれをかばうように大多数を失った赤備え

が
いる。

「飯富殿、ご無事で？」

「典厩殿か……。なんとかかといつたところか……。」「
ゼエゼエと切れ切れの息で答える虎昌。

「ここは任せていただきたい。ちかくに弥三郎……。いや、小山田
越中殿がおります。」

その提案に頷くこともせず、三郎兵衛昌景は意識の朦朧としている
叔父の馬を引いてここから離れる。数名の赤備えが十数歩先に残っ
ただけで典厩と信虎の場所だけぽっかりと空いていた。

「さて、さつさと降伏してくれねえかね？」

「下郎が！その首を差し出すか、晴信の身柄を差し出せ！！」

「交渉どころか話すこともできやしねえなあ。こういうヤカラは
ぶちのめすか……。何でこつも苦勞というか災難を背負い込むの
かな、うちの家系は……。はあ。」

右手をぶんぶん回して指でクイクイツと挑発して戦国時代には珍し
い一騎打ちが始まった。

要塞山攻略戦・後（後書き）

中途半端もいいところだな。次か次の次で内乱編は終わらせませう。
その後の話はさくさく進むと思います。・・・この話は納得でき
ないところがあるのでおりを見て直そうかな？酔っ払っているから
ボケ気味作者より。

甲州内乱終結（前書き）

信奈の野望7巻ができました。ヨンダゾカラー……。すいません、ここ最近テンションの上がり下がり異常な作者です。皆さんも信奈の野望のアニメ化期待しましょう。

甲州内乱終結

「そいつと!!」

「がああ!」

信虎が振った槍を後ろ回し蹴りで防ぐ典厩義信。ビリビリとした軽い痺れが足に響く。前転する要領で右手で体を支えてカポエラのごとく上下を反転して蹴りを続ける。

「面妖な技を使いよって!! むん!!」

蹴りを槍で防ぐのではなく足を砕くつもりで振る信虎だったが埒が明かないと見るや腕を払いにくる。腕に迫る槍をドロップキックを打ち込み避ける。典厩の両足蹴りを転がるように避ける信虎

「下郎が・・・国主であるワシに土を付けおって・・・その命で謝罪するがよい!!」

片手で振るっていた槍を両手で持ち直し恐ろしい音を立てながら攻撃を続ける。

「いい加減に!! しろおおい!!」

下段の攻撃を右ローキックで防ぎその動きを利用して左後ろの回し蹴り。そして空中回転からのかかと落としと流れるような連続攻撃で信虎を攻め立てる典厩。最後の空中殺法は周りの敵味方の戦いを一時的にとめるほどの驚きをもたらした。一番驚いているのは典厩自身だったが・・・。

（本当にどうしたんだよ。俺の体は、本当に恐ろしい身体能力だな）
フワリ・・・とまではいかないまでも簡単に着地し態勢を立て直し蹴りつづける。

「ぐううううううう!!! があああああ!!!」

恐ろしい大音声で吼え槍を振りぬく信虎だがカポエラやムエタイのような軽快な蹴技しゅうぎから一転して腰をしっかりと下ろして右手を握り締めて打ち貫く。爆砕するような音がして信虎の槍が砕け散る。

「甘いわ!!」

脇差を抜き放ち突きをいれる。全力で打ち貫いたせいで対応が送れ左肩に突き刺さるが齒を食いしばって耐える。

「心の臓を突き刺してやろうと思うたが・・・しくじったか。まあよい・・・、そろそろあちらも終わるようだからな。」

「?!」

典厩が視線を追うと晴信の隊が多数の兵に押しつぶさそうになっていた。晴信自身も出血しているのか鎧が赤く染まり顔が青くなっている。教来石民部景政も多数の敵を屠っているが次々に槍襖で壁を作っているため少ししか進んでいない。

「下郎・・・。貴様には、この兼定で試してくれよう。」

脇差を手放し太刀を抜く。後の正史では千両兼定と呼ばれ、その後には最高の実用刀の一本とまで呼ばれた名刀の、実戦刀の代名詞が青白い刀光を放つ。

「しえええええい!!」

槍とは比べ物にならない気迫で迫る信虎に思わず防御の構えをとってしまふ典厩。脇差を腰から引き抜き防ぐがチーズを切り裂くようにスパンと切られる。

(・・・・・・はいい?!)

「・・・・・・はいい?!」

思わず信じられずに間抜けな声を出したうえに阿呆な顔をしてしまった。

「おとなしくしおれば苦しまずに一撃で葬り去ってやる!!」

「ちよつと死ぬのは簡便だ!!」

切られた脇差を投げつ刀の攻撃範囲のさらに中に入るべく前進する典厩。信虎もそれを知っていて攻撃する。手甲や脚甲と名刀の打ち合いが響く。一合ごとに緊張は増していく。

(勝千代の場所に行くにもこの爺。なんて爺だ・・・。こっちは頭が痛くなってきたのに、まだ鋭くなるか!)

(下郎にしてはやるではないか・・・そろそろ仕留めておくか。)

一本の刀に三つの鈍器が打ち合うが実戦経験の差か、気迫の差か。典厩が押され始めた。しかし状況を変えるような報告が響きわたった。

「見る！！城が、積翠寺の城が多数の敵に攻められているぞ！！」その声に死合をやめて二人は城のほうを見る。城は黒煙を上げて数百の兵に攻められている。

「ど、どうしたことだ！！」

さすがの信虎も驚きを隠せず近くの兵を問い詰めるが分かる訳もなく兵はおびえるだけだった。そして典厩も構えを解いて啞然として周りを見る。味方も敵も時が止まったように城を見ていた。

「ど、どうということだ？あ！！民部どの！！」

正気に戻り民部景政に一声かけると民部は分かったように呆然としている敵を薙ぎ倒して晴信のところに向かう。

「晴信様！！」

民部がたどり着くと緊張が切れて気を失ってぐったりしている晴信を支えて生き残った部下とともに陣を再編する。

「ものども！！何をしておるか！！城を落とされてはならぬぞ！！我に続け！！」

やっと我に返った信虎が馬に乗って城の救援を行おうとしたがしばらく進むと城の方から百騎ほどの部隊が立ちふさがった。

「痴れ者が！！蹴散らせ！！」

信虎が敵の騎馬隊に自慢の馬廻りをぶつけるが相手の武将は斧を一振りすると前方の半数が生き物のように陣が動き一瞬にして分断して三倍はいる敵を一蹴した。恐ろしいまでの練度と統率力だ。

「きさま、何者だ！！」

信虎が兼定を突きつけ相手に名乗るように促すが相手の武将は斧を掲げる。それに呼応して後方の騎馬隊が一斉に大旗を掲げる。そこには青地に金の風林火山が書かっていた。そして武将が兜を取ると名乗った。

「我が名は清和源氏が嫡流にして甲斐守護・甲州武田家十九代当主、

武田大膳大夫晴信なり！！民草を省みない先の守護・信虎よ！！尋常に縛につき沙汰を待て！！」

武田勝千代晴信が名乗りを上げた。味方も敵も数度目の停止だ。

「な、な、な、な！！」

信虎は怒りと悔しさで口が回らない。そして同じことを思った典厩が質問をする。

「なんでここに勝千代が？！」

斧を肩に担いで典厩を見る勝千代。そして気絶してるもう一人の晴信を指差し、

「典厩。あれをしてみる。」

という。そして民部に担がれている晴信を見ると違いが分かった。

「孫六か？」

「そのとおり。やはり分かるか？」

「そりゃあ、違いがあるからなあ。」

はっはっはと笑いあう二人。戦場というより友達同士が問答をしている雰囲気といったところだ。

「き、きさま……！！父に逆らいおって！！そこになおるが良い！！」

その空気に馬鹿にされたのか、相手にされていないと思ったのか刀を向ける信虎。

「黙れ！！子を子と思わず、民を民と思わぬ貴様など父ではない！

！沙汰を待てというのが分からぬか！！」

「ぐぐつぐぐ！！なぜ貴様がここにいる！！城攻めるのはまだ後ではなかったのか！！」

狼狽したように問う信虎に哀れみを浮かべた顔で勝千代が答える。

「父上……、いや信虎よ。貴様がなぜこちらの状況を知っている？代わりに答えてやろうか。それは我が勢力にいろどつちつかずの愚か者から聞いたのであろう。」

「ぐ？！！」

語るに落ちたとはこの事だ。といわんばかりに態度に出す信虎。

「貴様のことだ。愚か者の晴信が考えた作戦だ。そんな策など碎いてやろう。とな。ちがうか？」

問われるが悔しそうにこちらをにらむだけの信虎。

「なら続けてやる。貴様は晴信が自慢げに陣に作戦を触れ回っている。と、考えなしにこちらを馬鹿にしていたんだろ。こつちの作業班なんてものはない。よく考えるがいい、火薬なんて高価なものをそう漢単に城を吹き飛ばせるほど買えるものか。そして秋山がいうことを聞かずに勝手な行動をしているとでも聞いたのであろう。してやったりとでも思ったか？愚かなることきわまりとでも思ったか？」

「だまれ！だまれ！：

「そして各方面が膠着状態になるようにもってやってやったのにそれに気づかず喜び勇んだのか？それだけの時間があれば諏訪や信濃の者の援軍でわれわれを殲滅できると思ったのか？」

我慢が利かなくなったのか刀を振り下ろす信虎だが晴信の斧に簡単にはじかれ首元に斧を突きつけられる。

「残念だが信虎よ。貴様という役者はここで終わりだ。仮にも我が親だ。殺しはせぬ。」

斧の腹で力いっぱい頭をたたく。ドサリという音とともに信虎が馬から落ち、それを見ていた信虎側の部隊がすべて武器を捨てて座り込んだ。

「全軍。これで戦は終わりだ。すぐさま自陣に入れ。よいな！！」その一言に馬鹿にしていたように視線は大半が消えて駆け足で陣に戻っていく晴信軍。すべてがこの晴信の手のひらで躍っていたと分かれば分らないこともない。

「勝千・いや、晴信様？私までお騙しになるとはお人が悪い。」
「すまぬな。敵をだますには味方からというではないか。この作戦を知っていたのは秋山と真田に孫六だけじゃないといけなかったのだ。」

納得行かない顔をしていた典厩だが少ししてまあ、いいやといった

感じて自分の陣に戻っていった。最後に視線で

（キチンと説明してもらうからな。）

と語りかけ勝千代も頷く。

こうして信虎を捕虜として城を丸々手に入れた晴信軍の勝利で甲州内乱は終了した。

甲州内乱終結（後書き）

今回は少し短め。しかしやっぱり表現力が低いというか作文能力が低いというのが皆さんは面白く呼んでいただけなのだろうか？

後始末（前書き）

今回は説明みたいなモンです。酒の付き合いは注射のアルコールでさえ禁止奈自分には地獄です・・・でも断れないのが自分の家業。

後始末

「・・・事情は分かった。」

ムツスと顔をゆがめている典厩ごと三条義信。

「まあまあ、勝ったのですから典厩殿も落ち着きなされよ。」

「怒っちゃいねえよ。気に食わないってわけじゃないしな。」

なだめる山本勘助に対して怒ってないとは言っていないでも顔が怒っているため子供のような態度をとる典厩。

「まーだ、拗ねてんのか？」

「晴信様。」

「勝千代か。なんかようか？」

入ってきた武田勝千代晴信にもぶつきらぼうに対応する。ため息をついて勝千代が勘助を部屋から出るように促す。

「では・・・」

素直に勘助は部屋を出て行く。

「なあ、なあ。気を直してくれよな？」

「事情は分かったって勘助にも言ったから安心しろよ。」

「納得してない顔だな。まったく、工藤も、三枝も納得しているんだから・・・な？」

ポンポンと肩をたたく。グルリと体をずらす典厩。もはや子供のただをこねるような態度だ。

「・・・はあ。大人のような、子供のような態度をしやがって。」

いい加減気を直せよなあ。このやる・・・そりゃ!!!

後ろを向いている典厩に拳骨をぶち込む勝千代。後頭部をたたかれ顔面から床に突っ込む。

「・・・はあああああああ。」

起き上がると長く大きなため息をついて振り返ると顔はムツツとしているが雰囲気は和らいだ。

「で？なんか用なのか？」

「これから評議が始まるから呼んだんだよ。どうせむくれているだろうと思っただ。」

「むくれてなんかいいえよ。」

はいはい。と典厩の言葉を流して部屋を出て行く勝千代。そしてゆつくりと立ち上がり後についていく典厩。

「みなのもの、此度の戦はご苦勞であった。早速だが此度の戦功を
発表したいと思う。」

入ると同時に晴信が述べると小姓がやってきて座ると同時に数通の飾り紙で彩られた書状が置かれる。

「このたびの戦功第一は数名の敵将を倒し戦力を保った。そなただ。教来石民部景政。」

膝立ちのままゆつくりと晴信の前に現れる民部景政。だが書状を受け取るうとしない。

「いかがしたか？」

ただ首を振るだけで受け取るうとはしない民部に何か事情があるのだろうと典厩が近づき事情を聞く。

「・・・ふむ。御屋形様、私が代弁いたしてもよろしいでございます
ようか？」

「かまわぬ。」

「では、民部殿が申されるには逍遙軒信廉様を傷つけてしまい、申し訳なきことにて辞退したいとのことですよ。」

「む、その心がけは殊勝だがおぬしを置いて戦功第一をあげるものはおらぬ。受け取ってはくれぬか？」

晴信の鶴の一声がでるがそれでも首を振り頭を下げる民部景政。仕方がないと代替案を出すことにした。

「では家を継いでくれぬか？甲斐の名家だが数年前より跡継ぎがおらず絶家状態なのだ。武家の家名としては十分だと思いが・・・。」

「

その提案にうなずく民部景政。

「よし決まりだな。教来石民部よ、本日より馬場民部景政・・・いや、あたしの名を与えて信房と名乗れ。よいな。」

また頭を下げる民部景政改め民部信房。そして典厩の腕を引き一言告げる。

「御屋形様。民部殿がいまさらなれどある物がほしいとことです。」

「申してみよ。」

「うんうん・・・、民部殿が申されるには強力な武具がほしいとのこと。ふんふん、丈夫で威力が高いものが良いとのことなので鈍器がよろしいかと。」

「よし。すべて民部にまかせる。御用鍛冶に行き好きなものを頼むがよい。」

すぐさま頭を下げるなり中座する民部。その無礼とも取れる態度を気にせず、次に呼ばれたのは赤備えの次将・飯富三郎兵衛昌景だ。

「戦功第二は三郎兵衛。おまえだ。」

「私も民部殿と同じく辞退させていただきますわ。降将のうえにこのような惨めな戦いをいたしては甲州武士として華麗さのかけらもありませんから。」

「三郎兵衛・・・おまえもか。つたく、素直という言葉はないのか？お前達は？」

片膝を立てて腕を乗せる晴信。扇子をいじりながら舌打ちをするが機嫌が悪いわけではないようだ。

「民部のように代替案ならを受けてくれるのか。」

「そちらもお断りいたしますわ。私はまったくといっていいほど役に立っておりません。先ほども申し上げたとおり、このようなことで褒美などいただけません。」

「やれやれ・・・、おい。典厩。」

「なにか？」

「この頑固者を納得させるような案はないか？まったく我が家中の者どもは無欲すぎてやる気がおきぬ。」

さつさと案を出せといった感じで言ってくる晴信に多少考える典厩。
(いきなり言われてもな。さてさて……。)

首筋をなぞり考えをまとめていく。そして答えを出した。

「ご無礼を申し上げてよろしいのであればございますか？」

「あるならさつさと見えよな。別に何でもいいぞ。」

「なら申し上げます。現在の両職(主席の左右家老)は甘利様と板垣様でございますが、ほかに役職を作りその役目につかせれば良いのではないのでしょうか？無論、飯富殿は飯富家の次席でありますので別家を次がせてということになりますか……。」

「それで？細かい案があるんだろ？」

「はあ、では。この際に両職は家老職と軍事の補佐職として確定して新しい役職としてある程度の軍事の統帥権を与え独自の軍事行動を取れるものがよろしいかと。」

(どつっすか？)

さすが緊張する典厩。なにせあの武田信玄に意見を申し上げたうえに案まで出したのだから緊張するのも無理はない。

「ふん、まあいいだろう。何名ほどがいいか？」

ニヤニヤと試すような悪友の顔をしてこちらを見る勝千代にこちらも悪い顔をして申す。

「御屋形様が旗印としている風林火山に陰、雷をつけて六名といったところでしよう。それにその数ならば信濃や上野に飛驒を狙うとしても二名ずつ配置することも、統治するために配備することもできましよう。いかが？」

「よろしいが、候補案はあるのか？」

この名前を挙げるということは責任と周りからの嫉妬や妬みを一身に受けるといふマイナス要素以外ない行動になる。しかし命を助けてもらったうえ場所までくれた勝千代に、立場までくれた晴信に何もしないということは男が廢るし苦勞ばかりを受ける自分の生き方にも反する。との想いから名前を挙げた。

(我ながら格好を付けた生き方だな。まあ、いつ元の世界に戻る可

能性もなくはないからどうにかなるだろうからいいかな。」

「では細かいことは決めかねますが決定事項になる可能性が高い人物は馬場民部、飯富三郎兵衛で決まりかと、ほかにはまだ候補は決まっておりますが、あえて挙げるとなれば小山田越中守かと。」

「うむ。細かい草案はこちらで決めよう。三郎兵衛よ、後日に呼びつけるがよいな。」

「かしこまりました。」

頭を下げるとこちらでも中座して評議の間を出る飯富三郎兵衛。

「では次に……」

といった具合で次々に呼び上げられる戦功のある者たち。数刻が経ち最後の者が終わり評議の間で解散が告げられ皆々が解散する。

「……不満そうな顔だったな。一部のやつら。」

「いい気味だ。いいたいがな。これからのことを考えないといけないからな?。」

ごろりと横になった勝千代が扇子を投げ渡す。扇げということだろうと義信は仰ぎ始める。

「あゝ、らくらく。」

「ご苦労さんといいたいが捕虜のほうはどうすんだ?」

「さてね、帰順したいやつはさせてそれ以外は放逐かコレ……さ。」

首を親指で横に切る。つまりは打ち首ということだろう。

「親父さんは?」

「………義信。お前に任せる。」

さすがに自分の親を罰することはためらわれたのか丸投げにする勝千代。

「わかった。貸しだからな?」

「助かるよ。」

そうつとそのまま自室に向かう。そして義信は城の奥にある石牢に向かった。

「信虎殿。」

頑丈に作られた牢からさらに数歩ななれた場所から中に話しかける。

「ふん、晴信の、いや、勝千代の腰巾着か。何用だ？」

狂気や覇気が消えてただの人となった信虎が反応を示す。

「あなたの処分を一任されましたので挨拶に。」

「勝千代の事だ。わしの首を欲しているに違いなかるうな？甲斐の国のために戦い続けたワシが甲斐の民に攻められるとは、な。皮肉なものよ。」

自嘲した笑みを浮かべこちらを向く信虎。

「どうした？ワシに何か用があつたのではないのか？」

「じゃあ聞くが何で勝千代に当たるようなマネをした？」

フンと鼻で笑う信虎。しかしゆっくりと事情を話し始めた。

「貴様は子供はおるか？・聞いたワシが馬鹿だったようだな。聞き流せ。」

すつと白湯を棒で押し込み信虎に届ける。扱いは猛獣扱いだ。

「貴様はこの国が古代にやまと御所の姫巫女さまが天上と御世の統治を弟の武将が人事の及ぶところを収めてきたことを知っているか？」

「それはまあ。」

「ならば勝千代にも戦乱とは関係のない公家や尼にでもなつてほしいと思つのが親というものだ。だが次郎が死んでしまい全てが変わってしまった。次郎に国を任せて孫六と勝千代には穏やかに暮らしてもらつたという計画がずれた。それまでもワシは悪逆非道な限りを尽くせるだけ尽くした。そしていつか次郎にワシを倒してもらい名君としてでも凡君でもよいからこの国を守つてほしかったのだ。だが途中から、いつからは分からぬがわしは完全に飲まれてしまったのだ、狂気というべき責任にな。ここから先はしつてのとおりだ。貴様のような小僧に次郎の名を使われるのは不愉快極まりないがそ

れなりに優秀なようなので仕方ないから認めてやろう。」

フフフと年相応の好々爺とした笑みを浮かべる信虎。先日までの同人物とはわからないほどの変化だ。

「さあ、ワシの首を持っていくのであれば急いで殺るがよい。このままにしておれば剛毅だが情けが深い勝千代がワシを放免するに決まっておろうぞ。」

「首をとる気はないが利用されてくれるか？」

「ほう、ワシに生き恥をかかせる上に利用しようというのか？」

「飯富殿との約束でもあるからな。信虎殿、京の都に上って朝廷工作をしてくれないか？それから先は好きなようにしてくれていい。」

「フツハツハツハ。そうか、この抜け殻の老体でも役に立てることがあるのか。よいぞ、よいぞ。その提案を受けてやろう。」

機嫌よく、とても上機嫌に笑いながら受け入れる信虎。

「そうか、そうか。では今すぐ行くか。」

「ちよつと待つてくれよ。勝千代に説明は要らないのか？」

「無用だ。このまま暴君の名を持って京へ行ったほうが勝千代も後腐れがあるまい。お主も説明するではないぞ。」

貴様からお主に格上げされた。ヤレヤレといった感じで牢から信虎を出すところを向いて

「そういえばお主は典厩と名乗っているそうだが本名は違うのであるろう？言わずともよい。ワシの子の名を受け継ぐのだその名に恥じた行為をしたらワシが殺しに行くから覚悟せよ！！あとはお主に渡すものがあるゆえに部屋に届けておく。ハツハツハ」

高笑いをしながら牢から出て行く信虎。そのまま数名の腹心を連れてあつという間に甲斐の国から出発したという。さすが親子だ。行動力の高さはとても高い。

「これで飯富殿も安心だろう。あと勝千代も安心して動ける。」

ヤレヤレといった感じで牢から出て自室に戻る典厩だった。

部屋に戻るとすぐさま信虎の小姓から二振りの刀を渡された。

「信虎様からでございます。和泉守兼定と宗三左文字とのことでございます。ではわたしは巻き込まれたくないので逃げます。」

あつという間に逃げようとする小姓の首根っこを掴み名前を聞く。

「お主、名は？」

「に、逃げられない?!」

じたばたと逃げようとする小姓を片手で持ち上げるともう一度名前を聞く。やってることがチンピラと変わりがない。ついにはビビッて泣き始めてしまった。義信としてはお礼を言いたいので名前を聞いたのだが聞き方に問題があるとは思っていなかった。

「どうした？」

ヒョッコリと勝千代がやってきて中をのぞくと泣いている小姓を首根っこを掴みため息をついている義信がいたので勝千代はすぐさま「せい!?!?!」

「ぶほ!?!」

腹に蹴りを叩き込んだ。盛大にぶつ倒れる義信。そして放り出された小姓を俗にお姫様抱っこという持ち方で救出した。

「あ、ありがとうございます。晴信様あ。」

多少話し方が変だがお礼を言ってくる小姓に対して名を尋ねる勝千代。

「私は信虎さまの付きの小姓で、春日虎綱と申します。は、恥ずかしいから逃げたいです。」

「かわいいな、気に入った。今日からあたしの小姓をやれ。そうとなれば早速部屋に行こう。」

「えええ!?!」

はっはっはと機嫌よさそうに虎綱を連れて部屋に戻る勝千代。部屋にはぶつ倒れて気絶した義信だけが残った。結局義信はちょうど一刻後にやってきた工藤源左衛門繁長に見つかるまで気絶したままだ

つたといづ。

後始末（後書き）

虎綱はそこのおいしくいただけられました。・・・って後書きに書くことがないな。前書きが後書きになっているな。

今後の展望・上洛へ(前書き)

投稿するたびエラーでパソが落ちる。業者に頼んでも機械に以上はないとのこと・・・なぜだ？久しぶりに任天堂64をやりたくなつたのでやったらカスタムロボにはまった。小学生以来だけど面白いな。

今後の展望・上洛へ

「……ん？朝か？そついやぶつ飛ばされたんだつたな勝千代に……」

痛む腹をさすりながら起き上がると同時にふすまが開き工藤源左衛門繁長が入ってくる。どうやら開放してくれたのは彼女らしい。

「典厩様、おはようございます。」

「今は何時だ？」

「まだ日が昇がったばかりです。」

源左衛門が水差しから水を入れて渡してくる。それを受け取り一息で飲み干すとお代わりを三度もらいそれも一気に飲み干す。相当にのどが渴いていたらしい。

「宗吾と八千代はどうしてる？」

「宗吾殿は晴信様から捕虜の待遇を伝えるようにとのことですがまだ夜明けなので寝ております。八千代殿は勘助殿に呼ばれて席をはずしておりますが。」

わたしは呼ばれませんでした。といじける源左衛門を慰めて刀を持つてきてもらおう。

「て、典厩様……、どれをお持ちすればよろしいでしょうか？」

「どれって……あ！！そうか……。」

源左衛門のほうを向くと四本の長刀を前にして戸惑っていた。仕方がないので全部持つてきてもらおうことにした。

「どうするかな？どれも目上の方からもらったものだし預かり物もあるしな。いつそ全部差すか。」

「ええ！！」

四本差した上に後腰に脇差を二本差す六本差しの状態で部屋から出ようとする典厩だったが珍しく源左衛門が呼び止めた。

「ん？どうかしたのか？」

「あの……もしかして戦功の発表終わりましたか？」

終わっていると告げると両手を突いて頂垂れて落ち込む源左衛門。

「どうやら呼ばれるどころかいることすら忘れられていたらしい。実を言うと典厩自体も忘れていたのだがさすがにそれをいっただら自害しかねないので濁して答えておいた。」

「じ、実は典厩様にお願ひがあるのですが。」

「どうぞ。といつても大きな願ひをかなえることはできないからな。」

「晴信様、御屋形様に取次ぎを願ひたいのです。」

「なんだそんなことか。と典厩は早速、晴信の寢所に向かうことにしたが源左衛門は夜明けすぐに御屋形様に目通り願うなど恐れ多いと戦々恐々だ。近くに寢所があるので数分も立たずに寢所に着く。取次ぎを頼もうとしたが周りを見渡しても誰もいない。」

「あれ？小姓がいねえな。どうしたんだ？まあ、いいか……。御屋形様、お休み中のところ申し訳ございません。典厩信繁でございます。少々お時間のほうはよろしいございますか？」

コンコンと部屋のふすまをたたき、声をかけて中にいるか確かめると中から

「典厩か。ちようどいいところに来た。さあ、入れ入れ。」

と、明け方とは思えないほどハキハキした元気な声が聞こえた。

「失礼いたしましたあああああ！！」

「て、典厩様。どしま　「源左衛門見るな！！」ええ！！」
とつさに源左衛門の目を着ていた羽織で頭から隠す。中には完全裸うまれたまの勝千代と春日虎綱がいた。さすがに典厩でもびつくりしてしまつた。

「源左衛門。少し外で見張りをしてくれ。誰も通さないでくれよ。」

返事を聞く前に部屋から追い出して扉につつかえ棒をして入れないようにした。そして勝千代に服を渡して着替えさせた。

「そんなにびつくりするなよ。初心な童ではあるまいに。」

カラカラ笑う晴信に対して典厩は頭をこぶしてはさみ締め上げた。

「いたたたたたた……な、何をする!!」

怒声とともに晴信が振り向くとどす黒い気を放ちながら腕を組む典厩が、義信がいた。さすがにビビる勝千代。ちなみに虎綱は熟睡しているため被害はない。

「どついうことが説明してもらおうか……。事と次第によっては拳骨を喰らわせて矯正してやるよ。」

「よ、義信。できればその怒気を収めてくれると話しやすいんだが……。」

「ほう……。説明はできないと?」

「い、いや、そういうわけじゃないが、なんて説明すればいいんだろつか?えっと、そうだな。うん、簡単に言おう。一夜をともしたつてやつだな。いった!!」

ガツンと頭をたたく義信。頭を抑える勝千代にさらに一撃を加える。

「いた、いたた。無言でたたくなよ。いたたたた……。」

「部下を寢所に連れ込んで艶事とは……。言い訳はあるか?」
バキバキとこぶしを鳴らす典厩に待ったをかける勝千代。どうやら虎綱が目を覚ましたらしい。

「この件はなかったことでもいいか?」

「しょうがないな。源左衛門が外で待っていることだし、今回はいいか。」

こぶしを下ろして物陰に隠れて腰も下ろす。声が小さいので二人の話し声は聞こえないが虎綱は何事もなく去っていった。入れ替わるように源左衛門が入ってくる。

「よ、よろしいでしょうか?」

「いいぞ、入るがいい。」

勝千代から晴信になったことにより厳格な声で源左衛門を中に入れる。

「それで何用か?」

「総長より申し訳がございませぬ。実は御屋形様をお願いしたき儀がございまして。」

「ふむ、それで？」

「私に内藤の家を継ぐことをお許しくくださいませ。」

晴信と典厩が顔を見合わせ不思議そうな顔をする。どうやら詳しい事情が分からないので源左衛門に説明を促した。

「実は私は先の戦いにて内藤家当主のおじさまと戦い。捕らえました。」

晴信が典厩を見ると典厩は首を振る。報告自体がなかったことになっっているらしい。地味ここに極まれり。だな。と目線で語り合う二人。

「それでおじ様は出家してしまい鎌倉に昨日行ってしまわれました。見送りの席で兄の工藤長門守昌祐とおじ様に内藤家を継ぐことを頼まれました。御屋形様にお問い合わせに来たのです。」

なんとなく場面が思い浮かぶ二人。たぶん。

「源左衛門よ。おぬしは限りなく地味で目立たぬから甲斐でも名門中の名門の内藤家を継げば多少は目立つであろう。」

「そうだな。昌祐の言うとおりであるな。わしが出家した後の内藤家はお主に任せよう。」

といった具合だろう。

「それはかまわぬが、それだけならばあたしに相談することもあるまい。」

「それが私の官職が修理亮となってしまうのでこちらの方を許していただきたいのです。」

「別にかまわぬ。好きにせよ。そうだな名も考えてやらねばな。．．．

．．．そうだな、昌豊でよいか？」
ありがたいことです。と頭を下げる源左衛門もとい修理亮。

「それで御屋形様。私より一つ提案が．．．源左衛．．．いえ、修理殿は優秀ゆえ直臣にしていたいただき六人組の一つに入れてはいかがでしょうか．．．さしずめ「林」あたりはどうかと。」

「おお、いいな。地味さもコレで消えるであろう。」

と納得して朱印状まで与える晴信。

「ええ！と、言うことは私は典厩様の部下を首と一つことごとくいただきますか？」

「なんだ？あたしの直臣は嫌なのか？」

「い、いえ、大変うれしいことなのですが。私は典厩様に認めてもらい部下にしてもらったのでさすがに不忠ではないかと。」

「別に気にしなくていいぞ。出世してくれば俺もうれしいな。」

「あ、ありがとうございます。で、で、では早速兄上に報告してきます。」

挨拶もそこそこに部屋を駆け出していく修理亮。よほどうれしかったらしい。

「さすがに朝からは疲れたな。おい、義信体を揉み解して・・・あれ？」

肩をもみながら後を振り向くと典厩こと義信はすっかり消え去っていた。仕方なくそのまま寝なおすことにした勝千代だった。ちなみに義信は四本の刀をもって毎日の鍛錬に出発していた。

ときは少ししたち正午。評定の間には各方面から挨拶が伺って来ていたがそれも終わったころ。

「・・・これにて甲斐国内の商人、有力国人、豪農、寺社からの挨拶は終わりにございます。」

「勘助、大議であった。次は？」

「はつ。続きましてはこれからの展望についてにございます。勘助がそう告げると小姓たちが地図を持ってきて評定の間の真ん中に広げる。」

「わが国においては信濃の豪族や大名は全て敵とっていいかと、

そして上野・武蔵に勢力を持つ上杉家とも敵対であります。駿河の今川に関しては敵でもなく味方でもない状況が続いておりますがこのたび正式に晴信様が御屋形様になられた後に北条と我が武田家の三家によって同盟を結ぶことを典厩殿が確約しておりますので問題はありません。」

「つまりは？正式に甲斐の守護になるのが最優先ということか？」

「そのとおりでございます。晴信様には京の都に上りいただき、やまと御所から正式に武田家の家督を継いだという許可をいただきくださいませ。」

「山本殿。よろしいか？」

「何でございましょうか？小山田越中殿？」

「そうは申されましても信濃全土を敵に回しておる上に甲斐も大規模な内乱があつたのです。いま御屋形様が甲斐を離れては危険ではないかと……。」

小山田越中守こと弥三郎の意見に頷く大半の武田家中。

「しかし、信濃を敵に回したまま北条と今川とも戦わねばならなくなつたのでは今の状況では負けるとは申しませんが勝つこともできますまい。」

こんな疲弊した状況でも勝つ可能性がある武田家。さすがは甲斐の狂兵とでも言うべきか。

「なればこそ御屋形様が自ら都に行くことが重要なのです。」

むむむむむ……。と考え込む家中を余所目にあくびをする晴信。

そして扇子を閉めて一言言った。

「勘助。都に上るとしても道は相模からか？駿河や信濃・美濃方面は考えないとしてだ。」

「さすがは御屋形様でございます。北条家には船を出すように要請しております。相模から尾張、伊勢と海路を取りその後、伊勢の北畠家は当家とは友好でありますので六角領をとおり京へ向かってもらいます。」

「共は？十名ほどか？」

「御意に。」

「よし！！爺達！！」

「はっ！！！！」

板垣・甘利・駒井の三老が答える。

「爺達には佐久地方の者ども特に志賀・小諸の小坂には気を張っておけい！！」

「御意！！！！」

「次に穴山・小山田。貴様たちは北条・今川の両家に備えておくがよい。いくら不可侵条約を結んだとはいえ口頭のことだ準備をしておいて損はない。今川には本栖湖・身延山みのぶを使い防げ、交代は西は奈良田、東は御坂までなら交代は無沙汰でよい。小山田は上野原・桂川（相模川）を前線基地にして防ぐがよい。勝山・古渡・浅間神社の三要衝を任せる。こちらは岩殿山で何とか防げ。」

「御意。」

「最後に勘助。お前は古岳・小淵沢に陣を敷いて若神子・能見・白山を最終防衛線にせよ。あの諏訪の頼重の事だ。攻めダルマくることだろう。好き勝手やらせるでないぞ。」

「御意。……共の方は？」

「逍遥軒、典厩、民部、三郎兵衛、えつと……修理、後は春日。以上の六名で行く。以上！！解散とする！！」

それだけ言つとさつさと自室に戻ってしまった。勘助が多少不満そうな顔をしていたがほかの者たちは内乱中には馬鹿にしていた態度が一変して素直に従っており晴信に従っていれば問題ないといった顔だ。これがカリスマというものだろうか？

「……え！！俺も同行すんの！！??？」

今後の展望・上洛へ(後書き)

本日ももう一回投降します。

上洛開始・相模〜尾張（前書き）

上洛編です。内乱編より短いと思います。プロット上ではですけど・
・・。

上洛開始・相模へ尾張

戦国時代。大きく上洛といっても三つに分かれる。

？・・・お忍びで少しの友を連れて行くもの

？・・・外交交渉で少数の（といつても数十名ほどの）兵を連れてのもの

？・・・力任せに一つ一つ粉碎して軍事的に上洛するもの

今回の上洛は？に当たる。危険度としては一番博打度が高いものだ。？なら軍があるので対応次第でどうにかなるし、？であるなら正式に通すことを認めているのだから暗殺や事故があれば許可した国が全ての責任を取らなければいけない。？は見つかつても身分を証明するものがあれば簡単な外交問題にはなるだろうが近隣国でなければ問題にはなりにくい盗賊に教わることもある。

「よりによつて片手が使えないのにかよ。」

頭を抑える典厩こと義信は現在、甲斐の名刹である恵林寺に武田晴信こと勝千代と後の武田四天王である馬場民部、山県三郎兵衛、内藤修理、春日虎綱（高坂弾正）と勝千代の妹である逍遙軒信廉と来ていた。逍遙軒は物陰で隠れて頭巾をしている。

「何か言つたか？義信？」

「いんや別に・・・。それにしてもその格好はどうにかならないのか？とても世俗を捨てた坊さんには見えねえぞ。というより尼の衣装の方がいいんじゃないのか？」

そこには黒い僧衣と編笠をつけた勝千代がいた。義信自身も同じ格好をしている。

「ここは女子禁制の寺だぞ？尼の服なんかあるわけがないだろう？・・・もしかして義信は尼の服に欲情したりするのか？」

「はあ・・・、しねえよ。それより一応編笠じゃなくて陣笠や女性用の市女笠（幅が広くて薄い布の付いた笠）や花笠（花や色つきの布でできた笠）でもいいだろう？さすがに女子禁制とはいえ近くの

笠屋や荒物屋にはあるだろう?」

「ん?花笠ならあるぞ。つけるぞ……。どうだ?」

「どうだじゃねえよ!獅子舞じゃないか!」

獅子舞の被り物も一応花笠の部類に入る。なぜ恵林寺にあるかは不明だ。

「……もう編笠でいいよ。それにしてもあいつらは遅いな。」

勝千代は金子と最小限の荷物を持つただけでいいので準備は早かったが、義信は刀を四本持ったうえに脇差をも持ったため背中に風呂敷でくりつけている状態だ。一応鍔や飾りをはずして仕込みにしてあるが……。傍から見れば義信は隻腕の荒法師といった格好だ。

「典厩様。」

「これは快川和尚。お騒がせしております。」

「いやいや、こう若い者が入ればこう陰気に満ちた気も陽気になりますのでこちらがお礼を言いたいほどです。それと典厩様。こちらをどうぞ。」

和尚は数本の錫杖を渡してきた。ただの錫杖ではなく黒檀できているに膠にかわで鉄鋌をとめている恐ろしい一品だった。

「これは?少々、寺の者が持つものには物騒な気がしますが。」

「いえいえ、拙僧の物ではなく昔、比叡山の僧兵が伊達で使ったものでございます。皆様の旅の無事を祈り、こちらを……と。」

「そういうことでしたら……ありがとうございます。」

「後こちらを……。」

馬の皮で作られた皮袋を渡してくる和尚。中を確認すると金の小粒が大量に入っていた。

「これは?」

「金は天下の回り物でございます。奈良や京の生臭坊主の様にためるのではなく活かしてこそその金でございます。いかようにもお使いください。では、拙僧はこれにて……。」

用が済んだとばかりにさっさと帰っていく和尚。どうも掴みようがない人物だ。

「ありがたくいただきますか。勝千代、ほれ。」

金の小粒を一掴み取り残りを勝千代に投げ渡す。

「ん？お前は要らないのか？・・・おっと、来たようだな。」

ゾロゾロと境内に通じる扉から五名の女性が入ってくる。逍遙軒は頭巾を脱いでいるが少し化粧をして顔をごまかしているためばれてはいない模様だ。

「お待たせいたしました。」

「ん・・・。」

「さすがに僧衣に華麗さを求めるのは無粋ね。」

「妙にしくりくるのですが・・・なんとも、余計地味になる気がいたします。」

武田四天王が勢揃い。男の四天王は見たことがないがこの華美さを無骨さに変えればなんとなく分かる気がする典厩だった。

「皆よ。これより我らは相模から尾張、伊勢と海路で向かう。食料や金子の用意はできておる。」

出発すると命を出すと礼をする四天王。と、いつでも北条領の相模までは馬での移動になるが・・・

岩殿 上野原 八王子 小田原と多少大回りの移動

「典厩殿！！！」

相模・小田原に入るなり一騎の騎馬武者がすごい勢いで典厩を呼びながら近づいてきた。

「典厩よ。あれなる者に見覚えは？」

晴信の要請に目を凝らして武者を見ると確かに見覚えがあった。

「おお！孫九郎殿！！！」

北条の武の要・北条孫九郎綱成だ。馬を飛び降り典厩の手をとって歓迎の意を伝える。

「孫九郎殿がいるということは、新九郎様も？」

「いいや、さすがに不可侵条約を結んでいるとはいえ非公式のことゆえ新九郎・・・いや、御本城様は箱根に視察に行っております。はっはっはと男の友情を確かめている二人に晴信が

「すまぬが船はどこに？」

「あ、もうしわけございません。武田の御屋形よ。相模の港に宇野屋が用意しておりますゆえ目と鼻の先でございます。」

「あい分かった。頼む。」

「かしこまりました。」

乗ってきた馬に晴信を乗せて典厩と話しながら港へ向かう綱成。話の内容も、

「宇野屋が船を？」「薬家業がうまくいき、今は北条家の御用商をやっておつてな。」

「そういえば山姥切には大層助けられた。」「やくにたつてなりよりだ。」

などと対等な話の内容だった。後ろにいる四天王も典厩の顔の広さに驚いているようだ。そのまま十数分ほど小田原城を回るかたちで港に到着する。

「大きいです・・・崩れるかもしれません。船に逃げましょう。」

「大きすぎて均等性がなくて華麗ではないわ。」

「おお〜き〜。」

「何だがすごく派手ですね。」

小田原城の大きさにさすがに驚いている四天王。そして晴信は

「これが総構えというものか・・・攻めるには・・・」

敵に回ったときのために攻め倒す方法を考えていた。

「武田の皆様。こちらが今回用意しました関船の三百石船でございます。・・・どうかしましたか？典厩殿？」

「さ、さすがに大きすぎないか？」

「身内にはやさしく、敵には全力で叩き潰すのが北条家の家風ですから。それに表向きは北条の船ではなく回船ですから問題はありま

せぬ。」

「そ、そうかな。そうなんだろうな。うんうん。」

荷物を運べ。と綱成がいうと北条の人足たちが次々に荷物を運ぶ。

晴信たちはもう乗っているのだが典厩は綱成にお礼を言い続けてギリギリまで陸にいた。

「皆様！！ご無事で！！」

手を振る綱成。相変わらずの好青年だ。船はそのまま相模湾にでて西に向かう。目的地は尾張の熱田だ。船は風にのり速度を増している。このままだと陸路では考えられない速度で到着するに違いない。しかし……

「うづう……うづぶ！！」

「………んうぐ！！」

まだ船が沖に出て十分もたっていないのに船酔いしている内籐修理と春日虎綱。右を見れば

「………おおおう。」

「………ぐ~~~~っぶ。」

船の縁に捕まって微動だにしない山県三郎兵衛と真つ青な顔をして寝ている馬場民部。史実でも、多分こちらの世界でも戦に内政にほとんど敵無しの四天王も初めての海に全滅していた。

「皆、だらしがないな。この程度の揺れで潰れるなんてな。天气が崩れればもつと強い波が来るぞ。」

そして甲板で仁王立ちをしている晴信と白湯を飲んでうしろを食べる逍遙軒。どうやら完全に無事らしい。それどころかはじめの海の体験に興奮気味だ。それより一番気になったのは

「どうしたんだ？その大量のうしろっは？」

「北条からの差し入れらしい。周りを見ってみる。水夫たちも食べているぞ。」

周りを見してみると水夫にしる、人足にしる大量のうしろっを酒や白湯と一緒に食べている。見ているほうが気分が悪くなるほどの量だ。たぶん四天王が駄目になったのは船酔いだけではないと思った典厩

だった。

船に揺られること丸一日と半日、そろそろ日暮れに差し掛かることにやっと尾張の岸が見えたと言水夫がみんなに告げる。

「岸が見えたぞ！！熱田の港だ！！」

「oooooooooooooooooooooooooooooo」

「岸につけるぞ！！綱を用意しろ！！碇と杭もだ！！」

「oooooooooooooooooooooooooooooooooooooo」

「え〜んや、こら！え〜んや、こら！！」

「oo」

船頭の音頭にあわせて水夫、人足たちが芸術的な手さばき、足さばきで船を港に横付けした。寸分の狂いもなくだ。そして荷物が次々に運び出される中で武田家の皆々は死屍累々となった四天王を戸板で運び出し近くの木賃宿で一泊することになった。

「oo」

「まさか初日から四天王が寝込むとは……………」

「大丈夫なのか？」

「一応針を打ったから。翌日には元気になっているだろう。孫六は？」

「孫六なら薬屋に薬を買いに行ったよ。まったく…………水軍のことをいずれ考えなければとっていたが…………さすがにこの状態じゃあな。」

「追々、なれるだろうよ。すぐに必要つてわけじゃねえしな。」

「それはそうだな。」

「気負いすぎんなよ。まったく……………」

八八八八八とわらってごまかす勝千代。数分後に孫六が帰ってくる。と典厩は孫六に

「ちよつと那古野から清洲を通って伊勢に行ってくるから。みんなは海路で向かってくれ。遅れても京都に行くから安心してくれ。」

「え、ちよ、ちよつと典厩殿。」

「ああ、あとでこの書置きを勝千代に渡してくれればいい。勝千代の許可はもらっているから。じゃあ、京都であろう。」
「でわでわ。といいながら駆け足で那古野方面へかけていった。」

追記・・・書置きを見た勝千代は怒った。何せ手紙には「自然豊かなこの時代、簡単な伊勢参りをしてみたい。この前の褒美はこれでもいい。この手紙を読んだら破り捨てるべし。」と書いてあった。原型に戻すのが不可能はほど破られたのはいうまでもない。

上洛開始・相模↪尾張（後書き）

本日中にできればあと一回投稿したい

上洛・尾張の小麒麟と未知なる恐怖（前書き）

原作主要キャラがやっと登場。といっても本編までは時間がかかるな。後今回は蛇足や余計な分が多いな。

上洛・尾張の小麒麟と未知なる恐怖

熱田の町からゆるゆると歩いて・・・といつてもあつちこつちをうろろろしていたため一日が経ち那古野にやつと着いた（実際は熱田那古野（名古屋） 清洲は目と鼻の先）。少し生えてきた髭をさすりながら町に入る。

「それにしても腹が減つたな。船は今日の早朝に出港だから伊勢への逗留予定も含めて三週間以内に六角領にいけば京都に出発する勝千代たちと合流できる・・・かな？」

服はボロボロでほこりまみれになっているが、ここに来る前に農家から灰と泥を借りてかぶつてきたためみすばらしいことこの上ない。「すまぬが飯を一杯くれぬか？」

むしろで作られた露店で食事を頼むが見た目のため金を先に要求されるがそこは商人、金を渡せばキッチンと食事を用意する。

「なんだか白湯みたいな飯だな。米屋で米を買って釜も買うかな。」
「やれやれと商人にお礼を言つて米屋と金物屋で買い物済ませる。どこでも先に金を要求されたが・・・。」

「世の中は無情だ。」

柄にもなく黄昏ていながら木曾川を越える。そのまま農路を兼ねた街道をすすむ。街道といつても舗装されているわけでもなければ一里塚や植木があるわけでもない。そのまま西に向かうと古びれたお堂があつたので本日はここで宿をとることにした。

（お約束の場所で野宿か・・・、まあ、いそぐ旅でもないからな。それにしてもゆっくりしすぎたかな？まだ三十キロも歩いてないはずだな。）

出発か夕刻かつ舗装されていない道だったので時間がかかりもう真夜中だ。廃堂の囲炉裏にまきを集めて火をかける。無論マッチなどないので火打石で火をつける。そのままんな変化もなく食事を終わらせて横になる。そのまま寝続けて異変が起きたのは夜明けだつ

た。

「でたぞ！！寺社泥棒だ！！皆の衆！！起きよ！！」

半鐘や打ち板だ鳴らされる。

「泥棒！！・・・まさか俺？」

勝手に廃堂とはいえ勝手に寝ているのである。泥棒と言われても仕方がない。と思っていると遠くではないがこの廃堂に言っているわけではないらしい。

「うっせーなあ。俺には関係ないしなっとおおお！！」

寝なおそうとした矢先に廃堂に数名の女性が入ってきた。虎や熊の毛皮に瓢箪など派手な伊達者、俗にカブキ者と言われる女性が中心の連中だ。

「僧侶・・・ぶつとばす？」

長槍を持った小柄な女性が槍を向けてきて物騒なことを言う。

「敵は先手必勝で倒すべきですが、まずは相手を確認してからです。四十五点。」

入って来たのは先ほどの女性とは違い知的な女性といった感じの典厩と同じ年ぐらいの女性だ。槍を持った小柄な女性を諷めているが片手で刀の鯉口は切っている。こちらが妙な行動をとれば即座に斬るつもりだ。

「何用でございなすかな？」

敵意がないことを示すため荷物と錫杖を立てかけてその場から離れる。それに大して槍と刀をしまう女性。こちらが片手に見えたのもよかったのだろう。

「少しかくまっていただけませんか？少しばかり失敗いたしました。」

「泥棒ですか？強盗ですか？」

「それは　「万千代！！何を言っているの！！強盗でも泥棒でもないわ！！あの集団詐欺師に正義の鉄槌を加えて年貢を返してもらっただけよ！」

この女性は万千代というらしい。万千代が説明をしようとする女

性を押しつけてカブキ者の女性が大声で言う。この時代ではとんでもないことをいった。

「鉄槌とは？」

「顔を墨だらけにしてふんどし一丁で逆さづりにしたのよ。」

「自慢げに胸を張るカブキ少女。」

「姫様。よく見てくださいませ。この方も法師でございますよ。」

「よく観察なさい。あの生臭坊主と違ってこの法師はいやらしい雰囲気がないでしょう。」

「ビッシ！と指を差すカブキ少女。ものすごい自信だ。思わず大爆笑してしまう典厩。」

「はっはっは……。いや、面白いな。くくく、どうぞどうぞ。拙僧のものではありませんせぬがどうぞお入りください。外のほうはお任せを……。」

そういつて中に女性たちを入れる典厩。そして自分は錫杖をもつて外にでて座り込む。少し時がたつと薙刀や槍で武装した僧兵が数名やってきた。

「そこもと、すまぬが不信心者を見なかったか？事もあろうに寺の倉庫から金銭を奪ったのだ。」

「ふむ、派手ななりをした若い女性でございますか？このお堂の中にでもいるのでは？」

「おおそうか……。ってそのような頭の弱い者どもではない！！見ているのかわらないのか！！」

「はっはっは。見たぞ。この街道を脇にそれて篠林に入っけていきましたが。」

錫杖をそちらに向ける。そして僧兵たちはまた走って篠林の中に入っけていった。カサガサと音が遠ざかっていくと中に入り安全になったことを告げる。

「ありがとうございます。さあ、姫様……。姫様？」

姫と呼ばれた女性がこちらをじっと観察するように見つめる。

「あんた、本当に坊主？やけにごまかすのが慣れていた気がするわ。」

「はあ、いまは坊主でございますが、見てのとおりボ口坊主といいましょうか。」

「ふうん。いまわね……。率直に聞いわ、あんたは問者？」

問者という言葉に身構える先ほどの二人の女性とほかの女性たち。

「いえいえ、問者ではありませんよ。これから京都の北にある大原の里に向かう途中でございました。」

「名前は？」

「一雲斎針阿弥ともうします。各国を見回って師のいる大原へ行く途中でして。」

頭に浮かんだ名前だが嘘がうまくなったことに自分自身がショックを受けていた。

「面倒で長い名前ね。雲とでも呼びましようか？あんた、しばらくこの清洲にいて諸国の事を聞かせなさい。正直によ。話してくれればこの清洲で諜報しようが妨害しようがかまわないわ。」

「そういわれましても本当に問者じゃないんですが……。まあ、知っている範囲ならかまいませんが。」

「そうそれなら犬千代。あなたの足軽長屋の隣がいていたわね。そこに案内なさい。時間が許す限り聞いわ。」

「……。わかつた。ついてくる。」

グイグイと引つ張る犬千代とやらは外見に似合わない力を持っていてたたらを踏んでしまふ典厩だつた。

（……。誰だつけなあ？知っている気はするんだけど……。誰だつけな？名前で思い出せないとは……。うん。たしか……。ああ、犬千代は前田利家か。というところの少女は信長つて所か。まあ、未来のことを微塵も出さないようにすればいいか。）

「ちよつと荷物、荷物。」

荷物を背負つて清洲の城下に連れ戻された。そして城の中にある長屋に入れられたしばらくここに逗留することになった。

それからというもの

翌日

「雲。今日は何か教えなさい。」

「何かとは何でしょうか？」

「面白い戯言や逸話でもいいわ。何でもいいから教えなさい。」

んな、無茶な。と思いながら自分が知っている話をした。話といつても戦国時代以前の話が主にだが。

「南北朝の時代ですが、楠木正成公は先方こそ合理的でございますが、人格としては清廉かつ一途過ぎる人間だったという逸話でございます。かの梅松論は尊氏公よりでございますが……（以下略）」

「ふん。勝ち方は選ばないのに人格で足を引つ張られるなんて褒め称えられる人物にしては欠点が多いわね。」

「そんなものでございますよ。英雄というものは……その時代にそぐわない画期的か、行動的な異常な人物をそういうのかもしれないませぬ。」

「そうなんだ。」

翌々日

「今日は何？」

「あ、話にございますね。では……」

「ちよつといい？英雄は変わり者って言ったけど暴君とはどう違うの？名君ってどういうこと？」

「それでございますら、見方の違いにございます。足利將軍の六代・義教は悪御所と言われるような暴君でございますが武家の力を上げて統治しやすいように比叡山や政教分離をいたそうとしました。三代の義満は素晴らしい將軍といわれておりますが実際は「強気を助け、弱きをくじく。」うえに傲岸と卑屈さが同居した性格といわ

れる逸話もございます。しかし、文化を保護し戦に勝ち続けた点で見れば武家として、武将としては名君でございましょう。」

「政教分離って?」

「やっちゃった。と思っても言ってしまったら説明しなければいけない。分からないでは済まされない。」

「政教分離とは・・・(以下略)」

「確かに筋が通っているわ。それにしても坊主のくせに坊主を批判するとは面白いやつね。」

さらに翌日

「あなたは話を聞くと政治や軍事にも詳しいみたいね。唐土は知らないの?」

唐土とは中国のことである。

「では光武帝の国取りなど・・・。」

「光武帝?なら国取りなんていいから雲台二十八将のことを教えなさい。優秀なのは誰なのか、頭がいいのが誰なのか。」

年相応の質問だが普通は誰がどうの、ここの。の前にそんな質問はしない。

「優秀というのであれば悩みますが・・・私が好きなのは一位のトウ禹、二位の呉漢、四位の耿エン、七位の馮異、十三位の耿純、十五位の馬武でございすか。」

「一位や二位は分かるけど残りは何で?理由は?全部教えなさい。」
聡明そうに見えるがやっぱり年相応の子供である。上の部分しか見
ていない。

「そうでございすな。耿エンはやはり引き際のよさでございす
かな?」

「引き際?」

「そうでございす。では姫様。あなたが常に高位にいて功績を立

て続ける人物がいたらどういたします？」

「きまつているじゃない。がんばれって結果を残したら褒美を上げるわ。」

「では功績を挙げすぎて他の者に功績を与えられないぐらい褒美を与えるような功績を挙げたらいかがします。」

たとえば。と小粒金を数個出して説明する。していると困った顔をして悩み始める。

「あげたらほかの人に不満がたまる、あげなかつたら功績をあげた人が不満がたまる。……うん。」

「困るでございますよね。ですからこの耿コウエンは一族と自身が一定の爵位をもらって少々の失敗でも処罰されない地位を手に入れてから裏方にしてするのは。ほかの人物に好機を与えるために。」

「なんで？もつとほしくなるじゃない。」

「そこが肝でございます。功績争いで内乱になることは多々ありますが功績を挙げ続けた人物は引けば大きな褒美を受け取り辛くなります。簡単に言えば自分は憎まれ役を引き受けて皇帝である主君に不満が行かないようにしたうえで後発の者にも手柄を立てやすしたのです。」

「まるで万千代みたいね。じゃあ、次は？」

「次は簡単でございます。馮フウイ異は大樹將軍。つまり征夷大將軍の元になるぐらいの功績を立て、信頼されて困難を覆したからでございます。この馮フウイ異も自分が原因で負けたことはありません。」

「頭のいい孫コウシユン六や父上のようなものね。」

「次の耿コウシユン純は貧乏くじを好んで引くような人物だからでございます。」

「そんな人物なんて嫌よ！」

「そうでございますか？たとえば嫌な役目を自分から引き受けていながら、困ったときに痒いところに手が届くような行動をとって周りから媚を売っているように見えながら周りに好かれるような不思議な人物がいたら重用しませんか？」

「????」

「そうですね、姫様の食事を食べておいてこの人物なら「まあ、いいか。」と思う人物でございますよ。」

「そ、そうならほしいわね。」

「最後に馬武は運の良さでございますかね。この者は一騎駆けや殿を好んで行った人物でございますが、その都度に援軍がきたり豪雨がきたり敵が突然撤退したりするなど可笑しな運がございます。無論この人物が有能であったのは疑いようがありません。」

「すごいよね。」

その後も説明が続き夜が更けたのにもかかわらず居座ることが多くなった。典厩。いや、義信自身もこの色々質問をしてきては納得し理解するこの少女に少なからずの弟子のような、妹のような感情を持った。そのまま、一週間がたち・・・少女の事を吉と呼ぶようになって次の日、夜明けもあけるかどうかの時間に吉がやってきた。

犬千代や万千代も一緒だった。

「どうかいたしましたか?」

「天下って何なのかな?」

「は??」

「父上がおっしゃっていたのわしは天下を取る器ではない。って・・・。」

「信秀殿が、ですか?」

「あの強い父上が取れない天下って何なのかな?天下を取れる人物っているのかな?」

義信は喧嘩にも機転にも自信があったが不確定要素の多いことや自信より弱い人物に頼られることに弱かった。自分自身でも自覚をしていた。

「さてどうするか?信長だしな、武田が天下を取るためにも適当に答えておくのが一番・・・だけどなあ・・・やっぱり俺は甘いなあ。」

ガシガシと頭を掻くと正座をやめて胡坐を掻いて正面に座る。

「そうですね。うまく説明はできませんが・・天下とは魅力的で面倒くさいものでしょうか。」

「魅力的で面倒くさい？」

「そうですね。天下とはこの国、日ノ本を統一することですが統一すれば好きかってなことができますが、そんなことをしたらまた内乱で平穩にはなりません。まあ、矛盾したモノですな。」

「父上は天下を取れないの？」

「そうですね。言っただけですが無理でございます。器用の仁と各国で言われている信秀様でございますがあくまで「器用」なだけで「天命」はもっておりませぬ。「天命」とは器だと私は思います。信秀様は器用な周りの評価を気にして使いどころや攻めどころを間違えることがあります。」

「じゃあ、天命を持っているのって誰？」

「・・・誰と申しましたも・・・」

「瞬ごまかそうと思ったが散々少女の父親をこきおろしたのだ。答えないわけにはいかない。」

「あえてあげるとしたら中国の毛利、九州の島津、甲斐の武田、相模の北条、阿波の三好、越後の長尾でございますか。」

「駿河の今川や越前の朝倉、近江の六角等ははいらぬのですか？」
万千代が質問してくる。

「いま、名をあげたものはあくまで天下を取る力があるものです。しかし、天下を取るという意味を知っているのはこの中でもおりませぬ。あくまでも朝廷の下にある幕府から執権として号令するといふものでございます。そして毛利、北条、長尾、三好は天下を取る力はある気はございますまい。あくまで私の意見でございますが。そしてそれ以外の言っただけでございますが名家の名を持つものなどあくまで名前に胡坐を掻いているだけでございます。」

（この世界の勝千代はわからないがな。）

「本当の天下って？」

「それは私事なので答えるわけにはいきません。地獄までもって行

きます。」

「天下に必要なものって何？」

「それも教えるものではなく学ぶものでございます。家臣や他の者の価値観を学びませ。」

「私が天下を取れば平穩が来るの？」

「可能性はなくはありません。しかし、このような片田舎で終わるような駄馬ではございません。あなたは麒麟として・・・天下・・・を・・・」

（何を言っているんだ。俺は、勝千代や源左衛門達に対する裏切りじゃないのか・・・これは？・・・でも信長が天下を取ったから俺の住んでいた日本はああなんだ。もしも他の戦国大名が天下を取っていたら・・・もし、勝千代。ちがう、武田信玄がとっていたらどうなっていたんだ？）

自分が思いつく考えが恐ろしくなつて震えだす義信。

（権威主義者の、あくまで仏教を抑えるだけだった信玄が天下を取っていたら・・・もしかしたら文明や思想はもどっていたかもしれない。・・・いやいや、勝千代は違う。でもそうなのか？違うのか？信長が楔をして日本を発展したから・・・権威的な迷信や無駄な宗教権力の排除、能力主義を発展させたから・・・。信長が壊し、秀吉が改め、家康が保つ。・・・信玄や謙信はあくまで仇花としての美しさでしかなかったのか？いやいや！！）

どんだん考えが深みにはまっていく。どんだん悪い方向に向かって考えが進む。

「針阿弥殿？お体でも悪いのですか？」

「い、いや。なんでも・・・。」

「その顔色や震え、汗でなんでもないとはいえませぬが・・・。」

「大丈夫でございます。無用にて・・・。吉様。ふうふう。」
大きく息を吐いて覚悟を決めた一言を述べた。

「麒麟として天に駆けるも、駄馬として地を這いずるもあなた次第でございます。あなたにはすばらしき部下が必ずできます。這うよ

うな人生はいたしますな。私はこれ以上はいえませぬ。」

（ここを出よう！！すぐにだ！！勝千代に会って・・・会って？何をすればいいんだ？今はここから離れることだけを考えよう！！）

「少々お待ちを・・・こちらをどうぞ。」

背負ってきた荷物から仕込みになった宗三左文字を渡した。気が動転していたのもあるがなぜか渡さないといけない気がしたので渡したのだった。

「これは？」

「宗三左文字と申します。どうか受け取りください。どうか！！」

「う、うむ。大義である。」

受け取るのを確認するとすぐさま荷物を背負い錫杖を持ち旅支度を終えて出発しようとする。

「どこか参られるのですか？」

「すぐさま大原の里に向かいます。数々の無礼と非礼。ごめんなさいませ！！」

制止の声が聞こえるが気にせず聞こえないふりをして駆け去る。体中の震えや汗はいまだに止まらない。すぐさま勝千代たちと合流しなければいけないとの一心で六角領に急いだ。勝千代たちがまだ伊勢の北畠にいることも忘れてただ、ただ、急いでかける義信だった。

上洛・尾張の小麒麟と未知なる恐怖（後書き）

へしきり長谷部を渡そうかとおもったけど持ってなかったためやめました。甘利世界観を壊してもいけないよね。

上洛・淡海紅裙（前書き）

なんとなく難しい題名にしたかった今日この頃。

上洛・淡海紅裙

「ふう〜・・・はあ〜・・・ふう〜・・・はあ〜・・・」

尾張・清洲城下を出発してそのまま一回も休まずに近江の入り口である坂田郡・佐和山に到着した。右手に見える堅城・佐和山城を見学しながら関所に入る。

「やっと南近江に着いたな・・・、何であんなに不安になったのかなあ？」

尾張・伊勢を過ぎたあたりから急に不安が解消されていつて平常心に戻っていった義信。今になれば何で不安になったか分からないほど理由が思い出せない。今に至っては不安は完全に消えて旅の楽しみが胸いっぱいだ。

「えつと・・・手形、手形。」

背負った袋から通行手形（発行元は恵林寺の確かなものだが身元や名前は完全に嘘の偽造品）を取り出し馬皮の袋から金粒を出す。それを握り締めて関所に向かう。これからの六角氏の領土は城と砦、関所が異常に多いことが有名なため常に手や腰に下げたおこうとしたのだ。

「それと・・・錫杖に包み紙を提げてつと。」

油紙に包んだ紙を錫杖に提げて関所の門をくぐる。そして顔を出すために肩には笠をかける。

（片手が使えないとつらいな。）

「次の者。入るがいい。」

「失礼を・・・。」

手形と通行料にイ口をつけて払う。通行手形に判を押ししてもらい手形を返してもらおう。

「お侍様。まだ地名が押されておりませぬが？」

通行手形には花押（特別製の判子）と地名をあらわす判子が必要なのだが地名の判が押されていない。

「すまぬな。・・・んんっ！」

咳をしてこちらをチラチラと見る代官。その思考が分かったのである。はじめ錫杖に提げた油紙を提げたまま差し出す。すばやく受け取り後に投げ捨てる代官。大体の重さで分かったのだらう。にっこりと笑い判子を押して手形を渡す。これぐらいの賂まいないは賄賂とはいえずに坊主相手なら当たり前にやっている。

「やれやれだ。ま、通行できたからいいか。」

関所を抜けると体を伸ばして錫杖を一回転。肩がこるような場面だったのでなんとなく行動してしまったのだ。六角の本城である観音寺城まではあと少しだ。実際は観音寺の北にある目加田城下の町だ。「すみませぬが御坊。通してはいただけませぬか？御上臈うづつち（身分の高い女性・主に公家の女性や大名や家老格の妻女に使う。）とそのご息女がおりまするので、失礼ながら。」

五十歳は過ぎているであろう外見だが荒武者の雰囲気を放つ武士が丁寧に後から声をかけてくる。

「こちらこそ失礼を・・・どうぞ。」

脇にそれで頭を下げて場所を空ける。何名もが通り過ぎていくが最初の駕籠かこがピタリと止まる。

「？」

何事かと顔を上げると駕籠の上をあけてこちらをのぞいてくる妙齡の女性がいた。

「な、何用で御座いますか？」

思わず引きつった声で答える義信。

「御坊様はどちらの御寺の坊様で？」

などといきなり質問をしてくる。困ったが答えないのは失礼かと思ひ答える。

「拙僧は恵林寺の快川紹喜和尚の弟子にて天救てんきゅうと申します。荒法師が故に和尚から各地にて修行をしてくるように命じられました。念仏は苦手なれど鍼灸の術は自信がございます。」

やっぱり嘘がすらすら出るようになってシヨックを受けながら答え

る。

「目的地はいかがに？」

「観音寺でございますが、知人達と合流するまで目加田の町に逗留いたします。」

「鍼灸の術とは？」

「体を揉み解し血の流れを良くし、針をツボにつつて血の病などを軽くすることにございます。」

「では、私達と一緒に行きませぬか？荒事にも慣れておられるようでございますし……。お医者さまならこちらも助かりますし、御坊様は侍方に守られているので道中安全でございますでしょうか？いかがでしょうか？」

「……。はあ。私はかまいませんが皆様方は？」

グルリと周りを見るとまた始まったといわんばかりにため息をはく面々。どうやら唐突なことが大好きな人物らしい。

「奥様、われわれはよろしいございます。御坊、どうか短い旅路なれどよろしくお願いし申す。拙者の名は赤尾美作守ともうします。」

「こちらこそお願い申します。」

(……。どういう星のめぐりをしてんだ？勝千代、もとい信玄はともかく氏康、信長に今度は浅井氏の宿老かい。元亀天正の英雄でもそろそろつてののか？)

元亀天正の英雄とは早い話が戦国無双やBASARAにでるような有名な武将達、戦国時代で一番盛り上がる時代の英雄です。

「失礼ですが隻腕で？」

「はあ、まあ、気にしないでください。」

「馬のほうは？」

「恥ずかしながら馬には乗れません。」

「こちらのほうこそ失礼を。では我々と徒歩にて、奥様方の話し相手になつてくださいませ。」

「わかりました。」

こうして少しの間だが浅井氏一行と旅路を共にすることになった義

信だった。

そのころの武田一行。

「神風の伊勢国度会の 山田の原の 底津石根に 大宮柱太敷立
高天原に千木高知りて 鎮り座坐す
外宮豊受皇大大神 亦の御号は保食大神とも 稻荷大神とも 申奉
て 蒼生等が 喰て生べき 五穀を始め諸の食物衣物に至る及に
生幸へ給ふ 広く厚き御恵みに報い奉ると 称辞竟奉て拝み奉る状
を平しく安けく聞食と恐み恐みも白す」

（御屋形様。いつまで続くのですか？）

（知らん。それにしても退屈だな。）

あくびをかみ締める山県三郎兵衛と武田勝千代晴信。三郎兵衛が横
を向くと立ったまま熟睡している馬場民部がいた。春日虎綱は風邪
ということであまく逃亡している。晴信もやる気はまったくなかつ
たが当主という事で仕方なく出たがこうも退屈だとイライラが募っ
ているのである。

（義信・・・覚えているよ！！逃げやがって！！）

と会ったらぶちのめすことを考えていた。

上洛・淡海紅裙（後書き）

今回はちょっと短いです。徹夜だと死にそうだけだと思います。書かないと物覚えの悪い作者は完全に忘れてしまうのです。では？

上洛・淡海紅裙 その2（前書き）

衝動買いで3×3 EYESを全部買ってしまった。懐に大ダメージ、心に軽い幸せを手に入れました。今回も短いです。・・・寒くて手がかじかんでしまって書けません。貧乏なもので暖房器具が一つもありません。さみ〜。

上洛・淡海紅裙 その2

「御坊様は色々な物事に通じておいでですね。」

「左様、左様。この美作守もおのれの不勉強を恥じるばかりでございます。」

「いえいえいえいえ……。」

（どうも典厩信繁こと三条義信です。ただいま近江街道を観音寺に向かっていたのですが同行者の思いつきでいきなり甲賀街道に行くことになりました。……あとなぜか孫子と呉子の違いを説明させられています。）

手に取れば分かる孫子・呉子・司馬法の違い。現代経営と古代の王者。なる本を読んでいてよかつたと思う義信だつたがまさか戦国武将にかかわりのある人物に説明するとは思わなかつた。

「それにしても申し訳ありませんね。いきなり甲賀街道を通りたいなんて言い出しまして。」

「別にかまいませんが、街道でいきなり反転されたのは驚きました。が……。」

ほとんど整備されていない街道が多いこの時代に異常なまでに整備されていない……と、いうより獣道よりひどい街道が多いのが伊賀の街道。こんなところを通るなんて犯罪者かバカしかいない。

「次のお話をお願いできますか？猿夜叉丸も楽しめるような。」

「猿夜叉丸ですか？」

「まあ、そういえばあの子はずっと駕籠の中で黙りっぱなしでしたわね。どうしたのかしら？」

（こんな駕籠か（・）き（・）もくたびれるような荒れ道なのだから間違いなくグロッキーだろうな。）

案の定駕籠の中の少女はげんなりと青い顔をしていた。すぐさま赤尾美作守清綱が気付けの薬と水を飲ませます。

「猿夜叉丸。御坊にご挨拶をしなさいね。」

「い、いえ、無理は止めさせたほうがよろしいと思います。拙僧も気にいたしません。」

十代前半の少女がぐったり、げんなりしているのに挨拶をさせるほど義信も礼儀知らずではないし鬼でもない。

「そうですか。ではお話を続けください。」

「で、では古代の唐土にあったという周の王朝の建国伝である『封神演義』などはいかがでしょうか？」

「『武王伐紂平話（元の時代の封神演義を元にした話。主人公や仲間がピンチになると仙人や神獣がやってきて敵を勝手に倒してくれるうえに敵から味方になるはずのキャラが全員集合した状態からスタートする道教色がかなり強いご都合主義物歴史小説。日本では名士たちには受けがよかつたらしい。現代の封神演義にキャラクター性を持たせたので有名。）』ではないのですか？もしや、『春秋列国志伝』ではありませんまいか？」

「いえいえ、聞いてみてからのお楽しみでございます。」

そういつて典厩もとい天救坊は自分の知っている封神演義を語り始めた。太公望が釣りをしているのが考えるため針がまつすぐであり風を操る道士だった。とか、蘇妲己が悪女でありながら聡明で花の香りをつけて王に対して健気な愛を求めた狐の化生であった。とか、黄飛虎が武芸百般を極めた武人でありながら感情を優先させる人間味ある人物であった。とか色々な人物に一短一長があるというこの時代の話にはない（この時代の主人公は悲劇から立ち上がる圧倒的才能を持つ完璧性格の人間が多い。）人物像を語って話を続ける。大体話の流れは現代世界で読んだものを自分なりにまとめたものだったので拙い部分も多いが周りの人はこれまでにない人間味あふれながら不思議な力を使う超人たちの話に聞き入っていた。

「？九公のくだりにはなかなか面白い話がございまして……」
武王と呂邑姜は……」

などと数時間近くしゃべり続ける。疲れてきたが周りが聞き入っているので止めるに止められない。甲賀の街道を越えて近江街道に戻

つても話は終わらない。周りからは次々に質問を問いかけられて答えていくのにも疲れる天救坊。そろそろ観音寺と目加田に分かれる街道に着くか着かないかというときに猿夜叉丸と呼ばれる少女が話しかけてきた。

「御坊よ。聞きたいのだが・・・。」

「どうかいたしましたか？」

「英雄というものは死にましたら天上へ上るのでございますか？また天上でめぐり合い蓮の葉の上で夫婦となると昔の上人は申したとありますが。」

空気が一瞬にして凍った。この世界の十代は恐ろしいことや大変なことをいうものだ。天救坊は思ったが自分の考えを言うことにした。「姫様よ。実際に天上の極楽やあの世の地獄を見たものは居りません。あえて言うのでしたらやはり生きてなんぼの人生だと私は思います。よく言うではありませんか。『死んで花実が咲くものか。』と。」

「では生きても意味のない人生であったら？」

「姫様がどういう意味で言ったのか分かりませんが、自分の人生も分からないのに相手の人生を語るのはおこがましいですが・・・」
「実際タイムスリップか世界移動が分からない人生を受けている自分の人生なのだ。何が起こるか分からないのが人生だとつくづく思った一ヶ月強だった。」

（・・・。。。。。。まあ、まだ一ヶ月ちよつとしかたってないのかよ。濃厚すぎる生活だな。）

「まあ、私、いえ、拙僧が言えるのは他人の人生を勝手に侵略するようなやつは・・・痛い目を見ろってんだ!!」

錫杖を構えて街道沿いの林に投げつける。数本の木々を吹き飛ばし、へし折りながら地面に突き刺さる。

（なんかまた身体能力上がってないか？）

林の中から数名の野武士が現れる。どうやら駕籠を狙う野盗かと思っただが武器や服が小奇麗なので野盗というより刺客といったほうが

正しいか。

「何やつだ。これを六角・浅井の関係するものと知っての狼藉か？」

「問答無用。」

首領らしき覆面の女性が手を挙げると弓が放たれる。少人数を狙うとしては恐ろしいほどの矢の数だ。

「またお約束か……！！！！これなら勝千代の方についていった方がよかつたわぁ！！！！！」

矢を次々はじきながら思いつきり叫ぶ。野盗対浅井使者団との戦いに巻き込まれた義信だった。

上洛・淡海紅裙 その2（後書き）

武王伐紂平話と春秋列国志伝（一卷）は小難しいけど面白いですよ。・・・疲れますけどね。藤崎竜の封神演義と話の骨組みはほとんど一緒です。見たのは高校生のときですけどね。史記や水滸伝も好きです。作者は三国志の劉備は大嫌いです。活字離れなこの時代に本を読むということだけで時代遅れといわれることもあるそうです。が本というのはいいですよ。作者は一日一冊以上本を読まないといライラする読書中毒者ですが・・・。前話の光武帝が一番好きです。

上洛・淡海紅裙 その3（前書き）

予定日を越えてしまったうえに、スランプというのだろうか？書いても書いても面白くない。・・・一応投稿しますが変更する可能性大。つなぎになってしまった話です。

上洛・淡海紅裙 その3

「錫杖系統は苦手なんだよ！！俺は・・ゴホゴホ・・拙僧は花和尚でも、豹子頭でもないわ！！どっちかっていうと行者じゃ。ってまんまじゃねえか！！」

花和尚は魯智深、豹子頭は林沖、行者は武松の異名で『水滸伝』登場人物である。魯智深は物凄く重い錫杖と怪力、林沖は棒術、武松は拳と刀を武器としている。ともに水滸伝の人気者であるが義信は長柄の武器は苦手の部類で電波が来たので思わず叫んだのだった。苦手といっても右肩上がり、うなぎのぼりの身体能力のおかげで苦もなく錫杖を振り回して矢をはじき野盗をふっ飛ばしている。

(・・・おっそろしいほどの上昇率だなあ、平時ではそんなに感じなかったけど・・・こう、非常時になると一気に上がる気がする。)
「どこの刺客か野盗かしらないが勝手に巻き込みやがって手足の二、三本は覚悟しやがれ！！ふっしやあああ！！」

唸りをあげて錫杖が覆面をかぶった刺客を叩きのめす。嫌な音を立ててたたきつけられた刺客がうめき声をあげているのもう一撃を加えて気絶させる。おとなしくなった刺客を連れて駕籠の裏に隠れた上臈と猿夜叉丸の前に刺客をつれてくると覆面を取って顔を見てもらう。

「知ってなさる顔で？」

ブンブンと顔を横に振る二人。赤尾美作守殿のところでも見せるがこちらにも反応は同じだった。刺客を盾にしてまた前線に躍り出る義信。出てきた瞬間を一斉射撃によって盾の刺客がハリネズミにされて絶命する。それを見て浅井使者団の面々は盾を出して陣を作ってもりながら矢を撃つだけなので前線には義信と赤尾美作守しかない。

「浅井の家臣はこんな臆病者しかいないのでございますか?!」

「すまぬがいまの浅井家にはこのような人物以外は重要地を守って

動けぬのだ！」

(どんだけ人材不足なんだよ!!)

と、言いたかったが流石にその言葉は飲み込んで敵をホームランし続ける義信。さすがに一本足はよく飛ぶ。

「ふふふっ・・・」

首領格の女性は小さな笑い声をあげるともう一度手を上げる。また大量の矢が襲ってくる。

「これはふせげないなっ!!」

錫杖を地面に刺し、先ほどハリネズミになった刺客を蹴り上げてもう一度盾に使う。赤尾美作守は片手に盾を持ち矢を防ぐ。

「おぬしは本当に御坊か？使者に対する礼儀と言うものはないのか？」

「そうはいいまして赤尾殿。死んだ人間が生きた人間の役に立てば仏も喜ぶというのが持論でして、このまま死んでしまえば意味はありませんゆえ。」

もう一度錫杖を持ち直すと首領格の女に錫杖を振り下ろす。しかし簡単に避けれたうえに、錫杖を踏まれ動きを封じられたところに流れような動きで短刀と振り下ろしてくる。

「わわわわっ!!」

錫杖をはなし転がって避ける。起き上がって前を見るが女はおらず後ろから風を切る音が聞こえ、すぐさま転がり避ける。

「ちよ、ちよ、ちよ、ちよ、坊主殺したら七代崇るぞ!!」って聞いちやいない!!」

次々に迫りくる短刀を転がり続けながら避ける。すっかりあぞまれている義信。

「あっ、そうだった。」

避けることすっかり忘れていたことを思い出ししゃがみからの上段回し蹴りを打ち込む。苦し紛れの攻撃と思って短刀で受け止める女。しかし簡単に短刀が叩き折られ頭上を蹴りが通り過ぎる。さすがの女も一瞬だけだが目を見開いて驚いた。

「いやはや・・・足にも脚甲を着けてたっけな。さつき行者がなんだってじぶんでいったのになあ。」

僧衣を捲り上げて紐でくりつけて構えをとる。女はこちらに笑いかけるように目を細めると文字通り飛ぶ様に林の中に入ると奥にいる大男に数言告げるとすぐに消えて行った。のこりの刺客がすぐさま刀を抜いて突撃してくる。

「ちよつと終わりじゃねえのかよ。」

錫杖を拾い上げるが先がボロリと崩れ落ちる。落ちた先を見るとボロボロに腐って溶けていた。さつき踏まれたときに何か仕込まれたらしい。

「どんな薬を使ったらこんなになるんだよ！！って来た来た来た！！」

ヒョイヒョイと迫る切っ先を避ける義信。幸い刀だけなので距離を取ればたいしたことはない。浅井使者団も弓で応戦を始める。先ほどの消極的な戦いではなく距離の優位をとったため積極的に打ち続ける。

「きゅ、急に好戦的になつたな。せいや！！」

変わり身にあきれたが迫る敵を次々に撲殺していく。足元には見るも無残な死体と血や色々な体液によつて彩られた脚甲が恐ろしさを放っていた。次々に増えていくそれは恐ろしさを増していった。

「・・・つかれないなあ・・・よつと、よく分からないから都に行ったら医者に見てもらうか・・・な！！」

ズバン！！と何かを引き抜くような鈍い音と同時に敵の首が吹き飛んだ。敵味方がこちらが見て固まる。義信もびっくりだ。

「・・・えつとこれで全滅だな。」

殺す行為にはなれないが作業と割り切るわけにも行かず嫌なものが胸の中にたまるが体を伸ばしてごまかす。ふと殺した相手を見るとふと気になり覆面をはがす。

「・・・これは？」

覆面を次々にはがすと原型をとどめている相手は死に顔が歪な笑顔

を浮かべていた。不気味だと思いつながら覆面を顔にかけなおして合掌する。戦時は使えるものは使うが平時になれば死人は仏、さつさと埋葬を始める。短刀を取り出して道の脇に穴を掘る。

「観自在菩薩 行深般若波羅・・・なんだっけ・・・うんたらかんなら・・おんたらこんたら・・。」

途中から知らないのでブツブツと誤魔化しながら念仏を唱える。気持ち次第だと思いつける。そのまま穴を掘っていると後から赤尾美作守が話しかけてきた。

「天救坊殿、たいへんにありがとうございます。荒事上手と聞きましたがここまでとは、細かなことはお聞きいたしませんがどうかこのまま道中お願いいたします。」

「・・・・・は？」

「まことに言い難きことなれど、先の戦いで家臣の一部が逃げたままつたうえに約半数が毒矢にやられて行動できぬ状態で・・・、猿夜叉丸さまも気絶してしまい、さらには・・。」

「まだ不備があんのか?!・・・いえ、ございますか？」

「駕籠のほうが一つ壊れまして・・・申し訳ございませんが、姫様の足になっていただきましたのです。」

つまりは猿夜叉丸を背負って観音寺まで行けと言っただこの爺は。

「いやです。拙僧は目加田にて待ち人がおりますので、あと戦は嫌いゆえさつさと退散させていただきます。」

「そう薄情なことを申すな。さあ、皆のもの天救坊がついていくつてくれるとの事だ。」

「そんな・・ちよつと・・おい!足を踏むな!」

喜びで一杯の浅井使者団にもみくちゃにされてみこしのように運ばれていく義信はそのまま仕方なく引き受けることになった。

上洛・淡海紅裙 その3（後書き）

うっくん。詰まったな。目の前のことができなくて多少いらだつてます。しかもガンダムAGEはやっぱ面白くないし、FF13も面白くなかった。さらに長釘を足で踏み抜く、連日の軽い喘息発作、炊飯器は壊れる。と、私生活でも踏んだりけつたりな作者です。一回お払いでも言ってくるかな？もしくは面白くないから尾もつと面白く書けという（女体化させられた）英霊のたたりかな？

上洛・淡海紅裙 その4（前書き）

おっしやくー！！気合入れなおして腑抜け解消やっちまうぜー！！三ヶ月ぶりに道場に行ってボコボコにたたきなおされて気合最大、青天井の作者です。やっぱり面白いですよ武道は！！・・・慣れなきや痛いんですけど。

上洛・淡海紅裙 その4

「ほっほっほっほ……。」

後の浅井長政こと猿夜叉丸（女性）を背負いながら近江街道を西へ。目的地の観音寺までは目と鼻の先だ。先ほどの野盗をよそおった刺客の死骸は体は近くに埋めて首だけを持って後々に首実検を行って身元を洗うとの事。

「猿夜叉丸どの。酔いはいたしませぬか？拙僧は不精ゆえいろいろと背中において粗相はありませぬか？」

さすがに走り回って汗だらけなうえに先ほどの襲撃による血糊もついた僧衣は臭いもすれば不潔でもある。大名家の一子が背負われる背中ではないが猿夜叉丸は何も言わずに背中に乗っている。後ろを振り返れば逃亡者がいたため出会ったころの半数ほどになった浅井使者団が駕籠を守っている。どうやら先ほどの襲撃から逃げずに傷らしい傷も負わなかったのを見ると精鋭らしい。

人通りも多い道に出ると天救坊こと典厩信繁こと三条義信は警戒心も薄れたのか鼻歌を歌いだす。平成の世にある、この世界では少し激しい音楽だ。

（いろいろあつたけど旅や知らない自然景色を見るのは楽しいな。

この世界なら平成みたいにポロポロの服を着て日本一周も兼ねたよ
うな武者修行をしてもおかしいなものを見る目ではみられない。）

この世界に来る前にとんでもない修行をしていたことを思い出し少しばかり懐かしさと悲しみを覚えた義信。きたときは「どうにでもなれ。」と強がっていたうえに、平成の世では「変人」「修行狂」とよばれ友達らしい友達もない義信だがやっぱり元は普通の高校生、戻れるどころか死ぬかもしれない事は不安で悲しく、恐ろしいのだ。しかしその感情を自分を助けて居場所を作ってくれた武田の当主や自分の同僚・部下。そして少しずつだが恐ろしいまでに成長

していく身体能力を思い出して追い出す。

「~~~~~」
自分をごまかす為に少し鼻歌を楽しげなものに変える。そして早足に観音寺に向かつていく。

「御坊！！そんなに急がれては！！・・・遅れるでないぞ！！
急げ急げ！！」

赤尾美作守が駕籠と共に急かして義信についていくが駕籠かきがへばって追いつけずに後ろから赤尾美作守が

「~~~~~！！姫様のことをよろしくお願いいたしますぞ。」
といてて駕籠かきに水を与えて休みをとらせた。

「~~~~~」
浅井使者団が見えなくなると猿夜叉丸が義信の鼻歌を真似て一緒に歌い始めた。後ろを振り向くと猿夜叉丸はそっぽを向いて視線をそらした。どうやら恥ずかしかったらしい。それから歌の合間に語りかけたのだが相槌を打つだけで鼻歌だけが続く道のりだった。

「ここが観音寺か。やっぱり六角氏の居城下だけあるな。」

六角の先代・江雲斎定頼公が日本で始め（・）て（・）楽市楽座を
行い、この観音寺は日本でも有数の商業都市とした。今代の左京大
夫義賢もそれを倣い商業中心の政策を採っている。さらにはこの南
には日野城があり蒲生三功勲と呼ばれる蒲生定秀・賢秀・賦秀の祖
父・父・息子がいる。さらにさらに観音寺城両翼には皆がありそこ
には「六角の二藤」と異名を持つ後藤賢豊・進藤貞治という政治・
軍事にさとい名将がいる。さらにさらにしつこいようだが観
音寺城はこの時代は難攻不落といわれ阿波の三好氏や伊勢の北畠氏
も落とすどころかあきらめて帰るようなとてつもない堅城である。
そして六角氏は近江源氏の血を引くという。まさに家柄・立地・財
力・軍事力・人材ともにすばらしい。まさに天下を取るか將軍を補

佐して号令できる国力を持っているが……とてつもなく、どうしようもない欠点があるのだ。それは……

「お侍様！……お客人に何をなさるのですか?!」

立派なつくりの旅籠はたご（木賃宿とちがつて食事もあれば女中もついて按摩も呼んでくれるこの時代の高級宿。）から主人らしき男が客の夫婦と一緒に数名の侍に連れて行かれる女子を必死に連れ戻そうとするがその三人を蹴飛ばし屈強な侍が

「黙るがいい!!御屋形様が欲したのだ。この南近江一帯を支配する六角の御屋形様の側女そばめとなれるのなら喜ぶのが普通であろう!!」
周りを見ると「まただ。」「六角様もこれでは……」などと聞こえる。そう欠点とは当主である六角定頼が恐ろしいまでの女好きかつ臆病……もとい慎重なのだ。しかも美しい女と見ればなりふりかまわず手に入れようとする暴君でもあるとの事だ。

「はあ……」

額に手を当ててため息をつきたかったが猿夜叉丸が背中にいるため手はつけず思いつきため息をつく義信。するとポンポンと頭がたたかれる。猿夜叉丸が自分から話しかけてきたのだ。これまでうながされるまでは一言もしゃべらず、こちらから話しても相槌しかうたなかつたところしか見ていない義信は驚きながらもゆっくり振り返った。

「どうにかできない?」

「下手に手を出すと首が飛ぶな。それに浅井家がここに妻子を連れてくるって事は浅井はかなり不利な状況か傘下って立場だ。傷物にするわけにもいかねえからここはおとなしくして……いった!!」
髪の毛を思い切り猿夜叉丸が引つ張る。さらには乱打乱打と頭をたたく。

「ちよ、ちよ、ちよ……まった!!」

「助けてくれますか?」

「あ、浅井家はどうなってもいいのかよ?おとなしくして……いったあ!!」

「自分の顔を見てみる。」

猿夜叉丸はスルリと背中から降りて近くにある水桶に義信を連れて行く。そしてもう一度背中に乗って頭を頭を下げさせる。義信が何事かと水桶を見ると眉のつりあがった自分の顔があった。

「絶えるときは絶える。今は動くとき。それに浅井の家臣ではなく御坊は旅の行者である。」

などと頭上から猿夜叉丸は言い放つ。どうやら気遣いは無用との事。年下の少女にここまで言われてはしかたがない。自分は笠をかぶりなおし、水桶の横にあった古着屋から羽織と網笠を買って猿夜叉丸に着せて背中に乗せたまま旅籠に近づく。後ろから古着屋の主人が小粒の金を渡されて「御釣りはいかがか？」と言ってくるが猿夜叉丸が「とっておくがよい。」というところをポカーンとしてしまった。その声に気づいた騒ぎの元凶たちがこちらを見て止まる。

「まあまあ、おやめなされ。」

ポンポンと侍の手を触れるようにたたく義信。

「何だ貴様は・・・どこの乞食坊主かしらぬが邪魔立っていたすと僧籍の者とはいえ許さぬぞ。」

などと三流以下の使い古されたせりふをはく侍に呆れながら猿夜叉丸を背中から下ろして荷物（仕込刀やその他諸々の物品入り）旅籠の主人に預ける。

「娘御は嫌がつておられるではございませぬか・・・いくらお侍といえ、いくら守護様とはいえ無体が過ぎれば滅びます。お慎みなされませ・・・」

「御坊様！お下がりがくださいませ。いくら御坊様でも斬られては何もなりません。娘はわれわれで何とかいたしますゆえ！！」

娘の父親が訴えてくるが笠を指であげるとにこりと笑みを浮かべ夫婦に

「いえ、いえ、拙僧は無体が許せぬ未熟者ゆえ・・・御安心めされよ。このような不心得ものは戒めるのも坊主の仕事でございます。・・・さて、その侍よ。金子をあげるゆえこの娘御はあきらめてく

れぬか？」

そういつと義信はジャラジャラと音のする皮袋を開いて投げ渡す。この中には小粒の金が詰まっている。もらった金子の半分は抜いてあるがそれでもこの侍達には数年分の給与となるほどの大金だ。

「この金子では不足か？この金子の半額でも上司に渡し娘御には逃げられましたかこちらを手に入れました。とでも言えばよいではありませんか？」

ジロリと侍を睨み付ける義信。侍達は金子を見て驚いているがそれでも娘を放そうとしない。やれやれと首を振ると残りの半金を放り投げる。侍達が生唾を飲み込み金の入った袋に視線が釘付けになる。「拙僧の全財産でございます。……いかがか？」

その金子を見ていた侍達が数歩下がると娘は放さないが相談し始める。小さい声なので聞こえはしないが目の色が変わって据わったのを見ると碌な答えじゃない。

「わかった……。娘を放そう。」

（お・・以外に物分りがいいじゃないか。読み間違いかな？）

娘をこちらに押し出すと娘は夫婦のもとに帰る。そして安堵の表情を浮かべ感涙をながす親子。それを見てほつと一安心する旅籠の主人と周りの住人。そして義信が後ろを振り向いて猿夜叉丸と合流しようとして一歩目を踏み出したとたんに

「伏せい！！！」

と猿夜叉丸が後ろを指差し叫ぶ。とっさに振り向くと抜き打ちの刀が義信の右脇腹を狙ってきた。

「ぬあ！！！」

ガイン！！と金属がぶつかりこすれる鈍い音がする。右手の鍊鋼手甲と刀がぶつかりあった音だった。

（猿夜叉丸の声がなかったらよくて背中がバサリだ！！伏せておけばよかつたぜ！！）

その一瞬の出来事に周りが凍りつき声すら上げられない。しかもこの糞侍は思ったより腕は立つようで基本にかなった抜き打ちだった。

「なにをいたすので．．！．．！」

「いや、貴様を斬り倒した後でも金子は手に入るからな。主君の覚えがいいほうがいからな。」

「この下種が．．．．」

ギチギチと音がして殺気が濃密さを増していく。後ろにいた侍達も刀や槍を鞘から引き抜く。

（六人、うち二名ずつは弓持ち、槍持ち．．．．どうにかできない数ではないが．．）

流れ矢がもしも回りの住人を巻き添えにしたらと気が気ではない義信に対して遠慮なく攻撃をする侍達。数を減らすのを先決とするために鏑迫り合いしているそこそ腕の立つ侍に対して左足で足払いを放つ。しかし読んでいたかのごとく下がる侍。そして足払いを打った状態の義信に刀を振り下ろす。

「往生せ．．」

言葉は鈍い音と言葉にならない空気の漏れ出る音でかき消された。左足払いが避けられるや否やにかかわらずに義信は右足で上段後ろ回し蹴りを顎下から叩き込んだ。多分この侍は何も気づかず即死したのだろう。

「いまなら金子を受け取ればこれ以上の恥上塗りせぬが？」

いかが？と尋ねるが欲と報復の念に一杯の侍達には届かず周りを囲もうとして動き始めた。義信ははたこのほうを見ると主人にすぐさま親子と猿夜叉丸を連れて雨戸を閉めるように命じた。肝が据わった店主なのだろう。すぐさま店主は小僧や手代に命じて腰の抜けた親子を店に連れ込み、猿夜叉丸を脇に抱えてすぐさま木戸と雨戸を閉じようとした。しかし、槍を持った侍が雨戸の間に鏑を突いて閉めるのを防いだ。その侍も義信の全力での右フックを腹に受けて足軽鎧ごと鈍い音を立てて血反吐を吐いてのた打ち回った後に絶命した。

「すぐさま閉めるのです！！」

「はい！！！！」

小僧達が槍を外に放り投げてすぐさま主人の号令によって雨戸を閉める。

「皆々も逃げよ！！時間さえ稼げば奉行や目付衆が来る。」

片腕と両足をうまく使い槍や刀を防ぎながら住人に告げると正気に戻った人々は蜘蛛の子を散らすように物陰に隠れた。それでもこちらを伺っているのはたいした野次馬根性としか言いようがない。

「ぬぐー！！」

右腿にもものすごい熱と痛みを感じて確認すると腿に二本の矢が突き刺さっていた。一本は貫通していた。

「もらった！！」

その隙を付いて槍を持った侍が付いてくるが右手でそれを掴み取り片腕の力で侍ごと持ち上げる義信。

「だああああっしゃー！！！！」

そしてそのまま振り回し投げ飛ばす。槍を一回転させて弓侍の一人に投げさす。しかし腕の付け根に当たっただけで弓を捨てて刀を引き抜いて迫ってくる。さらには投げ飛ばした槍持ちの侍もたいした怪我もなく同じように刀を持って迫ってきた。残りの刀侍とあわせ三方向より一斉にかかるつもりらしい。

「っち！！！！」

一斉にかかってきた侍達の正面から来た者に蹴りを浴びせひるんだところに必殺の右コメカミフックを叩き込む。すぐさまその死体を盾にして刀を防ぐが今度は左肩に矢が刺さる。

「ぐー！！」

「御坊！！！！」

このまま矢で射殺されるかに見えた義信だったが二階から猿夜叉丸がこちらを見て叫ぶ。それを確認すると猿夜叉丸に向かって

「すぐに荷物を投げてくれ！！急げ！！」

と大声で言う。すぐさま猿夜叉丸は義信に向かって荷物を放り投げる。

「甘いわー！！！！」

正面にいた二人の刀侍の一人が荷物を防ぐ。

「そのような幼稚な策を弄すとは・甘い場いっ、あ！！！」
荷物を防いだ侍に向かって金的を打ち込み。悶絶させた後に背中を切られ足に矢が刺さりながら頭を踏み抜く。荷物に注意を向かせて一人をしとめる考えだった義信。

「のこりは二人！！！」

その血だらけなのでありながら闘志や殺気を緩めない義信に周りの者は鬼を見た後に語る。鬼を見た・・・そう二匹の鬼を。

「てん・・・きやく??？」

「?!」

少し間の抜けて眠そうな声で間違えられた名前を呼ばれる。そちらを見ると長身の女性が義信と同じ格好の僧衣をまとって立っていた。馬場民部信房だ。

「民部殿？な、なぜここに?ぐう！！！」

思わず気がとられ刀は避けたが矢がまた背中に刺さる。

「・・・むむむ・・・ふあゝ。」

相変わらず眠そうな顔をしている民部信房。あくびをしながらキョロキョロと周りを見る。そして手を打つとユルユルと弓侍に近づく。「な、なんだ。貴様もこの坊主と同じ無礼者か！！！」

弓を持った侍は弓を構えながら民部信房に吼えるが気にせず近づくと民部。

「貴様も同類か！！！」

容赦はせぬ。と言い放ち弓を放つが錫杖の一振りですぐ弾かれ・・・返す刃・・・いや錫杖で横っ腹を打ち据えられた。そのまま弓なりになりながら旅籠の雨戸を突き破り土壁に突き刺さった。

「……………」

一同は本日二度目の時間停止を味わい義信とせり合っている刀侍を見もせず

「…………敵？」

などと聞いてきた。どうやら先ほど近づいたのは状況を聞きたかつ

ただけらしい。そして弓を撃たれたので体が反応した模様だ。

「・・・あ、ああ・一応敵対しているが・・・。民部殿？」

せり合ったまま固まったままの二人を見据えて民部は錫杖を振りかぶった。

「よけよ・・・ろよよ・・・うよ。」

「ちよよ！！！」

そして二人ごと吹き飛ばした。義信も腹に当たって吹き飛ぶ。そして先ほどの水桶に当たり水浸しになり刀侍は先ほどの弓侍のように別の商家の土壁をぶち抜いて崩れた瓦や木材の下敷きになった。

「????なんよ・・・で??？」

避けなかったのが不思議そうな顔をしながら首をかしげる民部。

「ゲホ!!ゲホ!!よ、避けれるか!!！」

水浸しになりながら血痰を吐く義信だが何とか脚甲で防いだ。しかし背中を強く打ち付けて息がしにくい上に矢が刺さった太ももからの出血により意識が遠退く。

「あれ?・・・あれ?」

フラリフラリと頭を抑えたまま義信はその場にぶっ倒れた。

「・・・ん?」

数秒確認して民部はゆっくりと立ち上がり医者呼んだ。

上洛・淡海紅裙 その4（後書き）

気合が空回り中の作者じゃ！…このテンションを下げないと勢いで欠きまくってしまうな。少し落ち着いて一眠りしよう。

上洛・淡海紅裙 その5（前書き）

なんだかんだでこの話も五回目に・・・もっとうまく、おもじろく
かければなあ。

上洛・淡海紅裙 その5

「おきんか!!」

「ぐぶおう!!」

みぞおちに物凄い勢いでナニかが突き刺さり息が詰まりながら痛みで目を覚ます。

「ぐおほ!げおほ!!」

咳き込みながら目を開けて前を見据えると自分の何倍は生きていよ
う年齢の曾祖父が木刀を片手に仁王立ちをしていた。

「え?え?え?ぐびよ!!」

よくわからず左右を見回していると頭に拳骨が振りぬかれてまた倒
れこむ。曾祖父は倒れこんだ義信を片手で無理やり立たせて木刀を
構えるように命じる。痛みと悲しさで目からは涙がボロボロと落ち
る。

「男たるものむやみに涙を流すな!痛みで流さず無念で泣け!!」

右わき腹に鋭い蹴りが叩き込まれ軽々と吹き飛ばされ道場の壁に叩
きつけられ、また倒れたところを無理やり立たされる。

「腑抜けるでない!!そのようなことでもしもの有事になって陛下
を、この国の未来を守ることが出来るか!!それでもこの大和の男
か!!」

叩かれ痛みで意識が飛ぶ。しかし曾祖父は水や打撃の苦しみで意識
を戻す。この繰り返しが毎度、毎日のことだ。両親も祖父祖母もこ
の狭気に近い考えを持つ曾祖父には逆らえない。父や祖父のように
一定の加減もない。怪我をしようが次の日に体が動けば繰り返しされ、
また、動かない程度には痛めつけない。

「どうした!!貴様自身はこの爺にあがなうこともできぬか!!」
木刀や手足の打撃も熾烈を極るが、やはり致命傷や骨折にならない
ようにうまく痛みを加えてくる。体中には痣や出血は数えきれない。

(この・・・いずれ殺して・・・やる!!)

「そつだ！！その殺気と悔しさを忘れるな！！」
自分自身の感情のすべてを込めてにらみつけるが曾祖父は一言述べただけで顎を蹴上げて意識を飛ばして去っていく。

「いった〜！！」

方から何かが引き抜かれた引き抜かれた痛みで目が覚め身をよじる義信。後ろを振り返ると刺さった矢を医者の方を向けた老人の男性が引き抜いて消毒を始めていた。

「・・・おき〜た〜。」

馬場民部信房がやんや、やんやといった感じでいつも通りの口調でゆったりと拍手をする。そこで気付いた。体中が汗と血で汚れに汚れている上に体中にねっとりとした脂肪が多量に浮かんでいた。

（子供のころの夢か・・・結局あの糞外道鬼畜馬鹿屑爺に何もできなかったな。いやな夢だ。もし今生きていたら・・・・コロス！！）

中学生の卒業式になくなった曾祖父のことをいつも義信は憎しみに近い感情しかなかった。血のつながった身内でもあの曾祖父が死んだときには小躍りをしたくなったほどうれしかった。なにせ、今思い出しただけでも頭に血が上り手のひらを握り締めて歯をかみ締め、体中に怒りと憎しみがみなぎるほどだ。周りにいる数名を除いて恐ろしい雰囲気をもった義信に震え上がっていた。

「・・・ん。」

ポンポンと背中を叩く民部によって少しばかり落ち着きを取り戻す義信。それでも怨念じみたものはなかなか剥がれなかった。

「お、お、お、落ち着いてくださいませ。て、て、典廐様。しゅ、出血が・・・。」

侍従がおびえながら背中を指差すと、背中からダクダクと血が噴き

出しているのを気付き、正気に戻るとクラリと頭が揺れるが一撃顔面に打ち込み治す。痛みで頭を空っぽにする。

「民部殿。ここはいずれで？」

「……ん？」

「えつと……この場所はどこで？」

「観音……寺……城……。」

(……俺はよく討ち取られなかったな。まあ、民部殿もだがな。)

なにせ理由はどうあれ六人も六角所属の武士を打ち倒しているのだから討ち取られても問題はないものだが……

「てん……きゅく……。」

「ん？なんでございましょうか。民部殿？」

「ん。」

スツと手紙を渡す民部。そこには『下』と書かれているだけだ。下知状れいしよということだ。封を切ってその場で読む。内容は……

『典廐。勝手な行動しやがって後々に埋め合わせしてもらうからな。民部が近いうちに観音寺から来るはずだ。さつさと合流して六角の親玉と挨拶しておけ。くれぐれも面倒を起こすなよ。』

と、要約すれば書いてあるのだがもう騒ぎは起きてしまいました。

「……それより民部殿は何であの場所に？」

考えるのは後にして民部に質問する。

「御屋形様の……使い……。あつたのは……偶然？」

「いや、聞かれましたも……。」

まあ、いいや。と話をなかつたことにして次の質問をぶつける。

「なんでここにいるのかな？」

「……連れて行かれた？」

要領を得ない。頭を左手で抑える義信。

「ん？あれ？左手……治ってる？」

右手でバシッと叩くが響かず痛みもしない。まさか半年も寝ていたわけでもあるまい。

「民部殿？あれから何日たちましたか？」

「約・・・一・・・日。そろそろ・・・昼。」

昨日の戦鬪まではまったく動かなかつた左手が起きたときにはこのように少しの鈍さはあるが思い通りに動くようになっていた。

「さて、典厩様。怪我のほうはよろしいですよ。御髪おぐしを失礼して・・・。」

パンパンと医者の手を叩くと数名の小姓はやって来てふけ（・・・）や血糊を櫛ではがしていく。多少痛みはあるが我慢する。取り終わると小姓の一人が義信の髪を触りながら四苦八苦していた。どうやら虎刈りのような髪型をどのように髷にするか迷っているようだ。

「かまいませぬ。組み紐ひもが手拭いがございますならいただけますか？」

義信が丁寧に告げると小姓が懐から紺色の手拭いを差し出す。

「かたじけない。」

頭を下げて手拭いを受け取るとそれを頭にバンダナのように巻いた。そして組み紐ひもを後ろの結び目に結んで解けないようにする。

「ではこちらの衣類を・・・。」

横に置かれた紺色の長着と同色の袴、そして桜染めに武田四菱が入った羽織に着替える。どうやら民部が持ってきたものらしい。着替えるとすぐさま医者を振り返って頭を下げる。

「ありがとうございます。さしたる支障もなくありがたいことでございます。」

「いえ、なんの。傷に分別はございませんが、この傷は話を聞く限りでは名誉の負傷でございます。なれど体をいとおしむ事も大事でございます。」

「この稼業なれば、それも難しいと思えますができるだけ行ってみます。」

「聞き分けがよい御仁だ。武士にしては珍しい。・・・ではこちらを。」

懐から紙を出して開くと親指より少し大きな黒いものがあつた。そ

してその黒いものを手渡す。

「どちらは？」

「それがしの長寿の秘訣でございます。けが人や病人が治療を終え
るとそれがしはこちらを配っているのでございます。」

渡されたそれを口に含むとほんのりと梅の香りと酸味がした。どう
やら薬ではなく飴のようなものらしい。

「どうぞでございますか？一里飴と名づけました。」

その名前を聞いて歴史マニア・もとい、歴史好きの義信は飴を嘔
き出して驚いた。

「で、では、あなた様は医聖・田代三喜殿でございますか？」

「それがしの名を知っておいででございますか？医聖とはおもはゆ
い。それがしはしがない旅の老医でございます。」

「失礼でございますが・・・御年は？」

「百を十ほど過ぎました。」

これには周囲も絶句。なにせ甲斐のいい男ホモこと永田徳本やうわさに
聞いた京の色好みへんたいこと曲直瀬道三はこの人物の弟子。曲直瀬道三は
六十をゆうに超えているとの事だ。年は納得できるが人間二十年と
この世界の敦盛に謡われるこの時代に生きていることがもはや仙人
のようだ。

「それでは・・・それがしは失礼いたします。典厩様。こちらの
一里飴の作り方を記した紙をお渡しいたしますので・・・いずれ、
また。」

民部以外が硬直しているなかでゆったりと去つていく田代三喜。半
刻ほど固まったまま時間が過ぎ、正気に戻った義信は典厩モードに
なって民部と一緒に六角氏の当主に挨拶に行くことになった。

「・・・・・・・・ぐ・・・・・・・・。」

応接の間に民部の小さな寝息がある以外に音はない。治療を終えて

この部屋に通されてから、かれこれ二刻半（約五時間）も待たされている。典厩は一里飴を舐めきり禅を組んで瞑想中。民部は睡眠中なので別に苦にもならないが、さすがにここまでされると呆れてくる。こちらに非があると思うなら理由を述べて叱責すれば良いのにと思う典厩だったがねつとりとした視線が数人分あるためこちらが焦れて問題を起こすか帰るのを待っているのかもしれない。

「……………眠くなってきたな。」

「……………す……………」

さらに四半刻（三十分）がたつ。横を見ると寝ていた民部は、先ほどまで正座のまま固まっていたが完全に熟睡してしまったのか時々、ビクンと体をゆらしたり、カクンと首が動く。六角の対応に呆れるより、こちらの動きを見て、「これが鬼美濃の馬場か……所変われば……。」と、ほほえましくなってくる典厩。自身も首を数度動かし関節を鳴らすと瞑想にも飽きたので、ただボンヤリと虚空を見つめてボくとして時間をつぶし始めた。

（あ……………勝千代が来たら、まずは謝って、帰りも脱獄して旅を満喫しようか……………）

などと思考の海に入りかけた途端に視線が消えて数名の人間がこちらにやってくる気配がした。姿勢を正して民部のほうを見るとそこちからも姿勢を正していたが見た目はまだ寝ているようだった。

「武田の使者殿。大変お待たせいたしました。当主・左京大夫義賢はただいま公務にて……………もうしばらくかかるかと。」

大変申し訳なさそうに入ってきた小姓が頭を下げる。かなりテンパっているようで上げた顔は青ざめ、脂汗は噴き出すようなさまだ。

（散々待たせたうえにこの対応か。ふう……………この様子から見ると無理やり命令されたようだな。）

頭を下げ続ける小姓に頭を抱えながら了承した意を伝えると小姓は手を叩き下女に御膳を持ってこさせた。

「このような粗食で申し訳ございません。し、失礼いたします。」
やる事を済ませて、さっさと部屋を出て行く小姓……………なぜか

ワンマン社長にいびられる役員を思い出した典厩だった。

「おなか・・・へ・・・った。」

グルグルと空腹を示す音が民部の腹から響く。はいはいと言った感じで膳をずらして布をはがして、碗のふたを開ける。

「粗食というから・・・残飯か、焦げ飯や塩抜きのおカズ・・・最悪の場合は毒入りの膳でも出ると思ったが・・・高菜飯と練り魚の吸い物か・・・。まあ、春子かすこ（鯛の稚魚）は流石に季節外れもいいところだが・・・。民部・・・どの？」

いい意味で予想が外れたことに喜びながら前を向いて民部をみるとガツガツと次々に腹に流し込んでいる。あつという間に高菜飯を食べきり、御櫃おひつの中身を食べ続ける。熟睡していたので小腹がすいている程度かと思っただが超空腹らしい。超だ。

「がっがっがっがっがっが。」

タメがないほどの勢いで食べ続ける民部に多少ひく典厩。自分は自分のペース食べはじめる。

「ふむ・・・なんか変な味がするが・・・毒じゃないな。」

「・・・うん。毒じゃ・・・ない。・・・味が変だけど・・・。」

民部が毒じゃないと太鼓判を押す。それを聞いて典厩も食べきるためにペースを上げる。相乗効果で速度が上がり半刻もたたずに食事を終える。そして食休みをかねてゴロリと横になる民部と瞑想に戻る典厩。そのまま日も暮れていき夜が完全にふけると先ほどやって来た小姓がやって先ほど以上の青い顔に滝のような汗をかきながら頭を下げる。

「も、申し訳ございません。当主・左京大夫義賢は・・・あの・・・実は、一日の公務により体調を崩され本日の
失礼
する。」

上座から初老の男性が入ってくる。小姓は青い顔を紫にしてひっくり返った。初老の男は手を上げると黒ずくめの集団が現れてササッと介抱していく。

（忍び・・・六角といえば甲賀衆か？先ほどの視線のやつらとは違

うな。」

「失礼ですがそこもとは？」

黒ずくめの忍び衆を観察しながら初老の男性に尋ねる。すると男性は頭を深々と下げて土下座をする。

「大変申し訳ございませぬ！」

「は？い、いきなり謝られても……さきほど申しましたが、そこもとは？」

いきなり謝られても驚くばかりなため理由を聞く。男性は頭を上げて「大変申し訳ございません。それがしは蒲生左兵衛大夫賢秀と申します。僭越ながら日野城の城主と、この観音寺の将を兼ねております。そちらは武田家の家中の馬場民部信房殿と武田典厩信繁殿ですな。」

うなずく二人。

「わが愚君と部下がご迷惑おかけいたしましたもうしわけありません。」

「い、いえ、こちらこそ御家中の方を……。本日の医者のもまことにありがたく。」

昨日の件と本日の件のことをいつているのだろう。ペコペコと頭を下げる賢秀をなだめてこちらも挨拶をする。なだめるまで時間がかかったが何とか納得してもらった。

「で、対面はいつになるのでございましょう。」

「明日は必ず。父とご家老・後藤様がお連れいたしますので茶室にて……。」

「かしこまりました。では、われわれは……。」

「城の一室に寢室を設けました。こちらにて……。」
座りながら熟睡している民部を担ぎながら賢秀の後についていく典厩だった。

上洛・淡海紅裙 その5（後書き）

十二月に入り、師走の名に恥じないほどの忙しさ。自営業のため多少更新が遅れ気味です。才能があれば小説で食っていけるのに・・・プロの作家がすごくうらやましい・・・と、思っつのは素人判断だなあ。

上洛・淡海紅裙 その6（前書き）

クリスマスは今月だ！・・・普通は商戦が忙しいはずなんだけど・・・ドイツもいつも不景気だと引きこもりやがって・・・。すいません。作者も仕事がなかったら引きこもってます。政治家の腐敗と足の引つ張り合いにマスゴミの利益主義もここまで来ればさすががしい。・・・作者の家族もいちど痛い目を見かけました。未遂ですけど・・・。

上洛・淡海紅裙 その6

部屋に連れて行かれた典厩信繁と馬場民部信房。特に問題もなく湯浴みや雑事を終える。

（・・・な〜んか、不気味なほど何も無いな。）

布団の上で腕を組み首をひねる典厩。蒲生左兵衛大夫賢秀は見たところ信用できそうだがこの部屋に入ってからまた監視するような嫌な視線がまた感じられた。最初はもしものために監視していると思つたが、監視や諜報の専門家である忍者しのびが多少武術の心得がある（自己判断）に見破られるような監視をするわけもない。と、結果が出たため不気味さも出てきた。

（でも殺気も害意もないような気がするから対応に困るんだよな。）
殺気や害意が有つたからといって手を出すわけにもいかないので受身に回っている状態が続く。典厩こと義信はどうも受け続けるのは苦手だ。考えていると、人の足音が聞こえ自分の部屋の前に止まつた。

「・・・ん？民部殿か？」

スツと扉が開き民部が顔だけをに入れて一言だけ言つた。

「・・・ね・・・る・・・。」

「あ〜・・・はいはい。」

おやすみなさい。と、言い合つて頭を下げる。それだけで民部は去つていった。自分も布団に横になる。武器を部屋の端において対角線上に布団をずらして横になる。もしものときに備えて一応短刀を布団の下にしまう。

「寝るか・・・。」

布団を掛けなおして目を閉じる。さすがにただ待つだけの一日だったが疲れが出たのかすぐさま寝てしまう。

「……ん？……ん？」

不意に目がさめる。時計がないためどれぐらい寝ていたのかわからないがどうも体がおかしい。

「んんん？？？」

グリグリと頭を振り回すとビリビリとした痛みとも痺れともとれな
い妙な感覚があり、体がやたらに熱い。息も荒い。まさかと思
い布を剥がすと一部分がいきり立っていた。

「……？？？？？？？？？？？？？？？」

（たしかにこの世界に来てそういうことはしてないからたまってい
ると思っただが……）

あれあれ？と冷静に考えている典厩だが、そんなことを考える時点
でおかしくなっているのだが頭がやっぱり熱にやられているらしい。
「……うむむむ。」

グビグビと水差しから水を飲む。一気に飲み干しても火照りは下
らずあがる一方だ。

「どういうこと……だ？」

歯をかみ締めるが歯の根が合わないほど興奮しているらしく口の中
を噛み切つて地の味がする。ここでようやく元凶にたどり着いた。

（高菜飯か？……味が変だったけど毒じゃないと言われたから問題
ないと思っただが……だったら。）

ふらふらとしながら袴と長着をきて数部屋先の民部の部屋に向かう。
一歩進むごとに頭の芯が痺れて熱があがる。途中で数度転ぶが這う
ように部屋にたどり着き戸を開ける。中を覗き込むと穏やかな寝息
を立てている民部が何事もないように熟睡していた。

（あれ???)

何もなかったので安心したが心のどこかに残念さがある。それに気
づくと近くにある柱に頭をたたきつけた。物凄く鈍い音がして柱が
ひん曲がる。出血によって多少冷静になり民部に近づく。

「……あれ？」

血を拭い、民部に話かけるが反応がない。数度ゆするが反応がない。最終手段で頭を小突くがこれまた反応がない。おかしいと思い失礼と脇と胸の中心に手を当てる。

(体温がぬるいな。やれやれ・・・睡眠薬か?)

小説から得た、にわか知識だが鬼美濃と後に伝わる戦国屈指の名将・武者者がまったく反応しないとなれば答えは限られる。

(六角~~~~!!民部殿に、他家の使者にまで手を出すか~~~~!!!)
聞いていたようにどうも、歪みきつた好色漢らしい。六角の当主はあくまで想像でしかないが女を行動できないようにして、民部殿はモデル並みの美人と、くれば先ほどと違い答えはひとつだ。

(しかたない。さつさと民部殿を連れて行くか。)

よいしょつと。と、背中に背負い部屋に連れて行く。頭から出血しているので現在は多少冷静に行動する。行きとは違いスタスタと部屋に戻り布団に寝かすと布団を掛けなおす。

「やれやれ…………。さつさと血を止めて血の滾りを鎮めるか。このままいると…………」

民部の方を見るとまた血がおかしなところに溜まりそうになるのですぐさま視線をずらして名刀である山姥切と八文字を入り口に十字に設置して入った者をぶった切る様にする。そして部屋を駆け出していく。

「やれやれ…………、俺もまだ未熟だな。」

などと仙人か老人のようなことを言いながら和泉守兼定を一本だけもって中庭にでる。頭には手ぬぐいを巻きつけて傷口をふさいでいる。

「どこの根性漫画だよ。性よ…………もとい、雑念を払うために素振りなんて。」

鞘が付いたまま振りまくる。さすがに抜刀するわけにも行かないので…………。

延々と素振り中・・・ 延々と素振り中・・・

傷口が塞がり出血が止まっても素振りをつづける。体中に疲労を感じ、息も切れ切れになっているがまったく血の滾りが収まらない。多分第三者が見れば酸素不足と疲労で体中が青く見えるはずだ。

(だったら・・・)

鞘と刀を地面に突き刺し根か庭の中心に移動して両手を前に出して構える。そして、

「・・・ひひよ・・・ごほっほ・・・ひよ・・・」

息をしているのか、空気が肺に入っているのかわからない呼吸をしながら武の型を続ける。そろそろ夜が明けるのか空が白んできた。

「ひい!!」「ひよう!!」

下女や従僕が夜明けになったので仕事を始めに動き始める。そして典厩を見るなり悲鳴を上げたり、道を変えて見なかつたことにする。鬼気迫るのか、単に不気味なのか。多分3：7で後者が多いだろう。

「・・・げふ!!」

間の抜けた咳をしてぶっ倒れる典厩。血が静まらないとはいえここまで行くとただの馬鹿だ。ほかに方法はあつただろうな。と、典厩は思ったが意味がないと考えるのをやめる。そしてゴロゴロと寝転がりながら刀の場所まで動く。刀に体あたり刀が倒れるとそれを手探して拾い胸のうえに乗せると完全に力が抜けて目を閉じる。血の滾りが静まらないので意識はあるが体が動かないので問題はないと納得すると下駄置きの上に頭を乗せてひんやりとした感覚に心地よさを感じながら動けるようになるまで休むことにする。

（息苦しいし体が動かないが・・・なんか気持ちがいいぞ・・・）
多少まずい状態なのだがぼんやりし続ける。頭で数字を数える。そして一万を超えると

「ぐゅむ!!」

頭を踏まれた。そして担架のように両手と両足をもたれると運ばれていった。そして水の中に投げられる。ブクブクと沈んでいく典厩鼻から生臭い水が一気に入り込みとてつもない痛みが襲う。疲れを無視して一気に火事場の馬鹿力で水上に手を出して縁をつかんで起き上がる。

「げっほげっほ!!」

疲れも何のそのといった感じで水を吹き飛ばして水を吐き出す。そして周りを見渡すと一人の少年が、甲斐にいる部下の三枝宗吾昌貞と同じ年ぐらいの少年がいて不思議そうな顔をしながら、

「・・・生きてましたか？」

などというのでお決まりのごとく大声で

「生きてたわ!!殺す気か!!」

と、返すと口だけを吊り上げてニヤリと笑う少年。嫌な笑いなのに嫌にならない雰囲気をもとって寝ぼけた様な眼をした不思議な少年だ。

「鯉の餌か・・・まあ、冗談ですが。」

笑えない冗談だな。と、思ったが気付けになったとお礼を言うと不思議そうな顔を不思議そうにして

「お兄さんは受身な人間ですか？攻められるような痛みに快感を覚えるという・・・鞭などいかがでしょうか？」

「違うわ!!完全に血の滾りが静まったからお礼を言ったんだよ!!」

「なるほど、お兄さんは受身の人間ではなく常時変態の人種でしたか・・・これは女中や下女に伝えなければいけません。」

「違うわい!!まともに話を受け止められないのか!!」

先ほどから大声を上げてばかりいる典厩モードからさめた義信。どうも相手のペースも巻き込まれているが居心地は悪くない。

「鶴めはまともにも相手をしておりますが？お兄さんは思ったより狭量ですね。子供のたわごとでしょう。」

「……ここまで言われているのに頭にはこないな。」

馬鹿にしているのではなく楽しんでる感じがするので本気で頭にはこない。頭を二、三度搔くとふと思ったことを質問してみる。

「そういえばどうやって俺をここに叩き込んだんだ？」

どう見ても一人で運べるほどの筋力があるとは思えないし、両手両足をもたれたのだから一人ではない。

「お兄さんはもう一度この池に投げ込まれたいのですか？ふむ、生臭い場所がすきなのでしょうか？」

「違うわー！もう、何度も言わせるなー！」

「ぶくく……、鶴めはある方法を使っただのです。」

パンパンと手を叩く、拍手かしわてを行うとボンという音とともに二対の鎧武者が現れる。さすがにこの世界の不思議にも慣れたと思った義信にもびつくりだ。

『『お呼びにございますか？？』』

「鶴めの式神・舎やしと頼たののです。ぶくく……お兄さんもびつくりですね。この二人に苦労してもらったのですよ。」

『『もつたいたいお言葉にて……』』

「ではお兄さん。行きましようか？」

「は？」

「どこの家来かは知りませんが、さすがにその臭いで城内を動き回られても迷惑です。湯屋に向かきましょう。二人とも……。」

「お願いしますと言うと二対の式神は

『『失礼いたします！』』

右脇に丸太のように義信を担ぐと前方の舎が少年を左肩に乗せて湯屋のあるであろう方向に向かって発進した。一気に最高速度に達した式神は屋根伝いに一直線に進み続ける。そして本丸の一室に、昨

日通してもらった対面の間に程近い部屋に扉を高速で開け閉めして中に入る。

「では二人とも鶴めは用意があるので任せましたよ？」

『御意に！！』

少年は一人土間に向かう。そして義信は式神に湯屋の扉ごとかなり広めに作られた風呂に叩き込まれた。

「さむう！！つめてえ！！」

どうも湯は溜まっておらず水を張っただけのようで水風呂に叩き込まれて体が凍りそうになる義信。

『おお！！これは行かぬ！！』

『うむ！！勢いをつけすぎてしまったようだ！！』

ガハハハと反省しながら豪快に笑う式神たち。凍えている義信を引き上げて服を脱がすと布団を持ってきて簀巻き状態にして囲炉裏の近くに放り出す。

「あつっ！！」

暖かいが足元がパチパチと火花を立てているのでたまに火が当たって足が焼ける。

「あつっ！！あつちい！！」

『はははははっ！！お主は幸運じゃな！！なにせわが主が風呂を用意しているのだからな！！心行くまで温まるが良い！！』

式神たちはそういうと霧のように消えていった。

「ちよつとまで！！足が焼ける！！ちよつと・・・あつっ！！」

打ち上げられた魚のようにビタンビタンと跳ねる義信。このままでは足が水ぶくれだらけになってしまうと何度も跳ねて位置をずらす。なんとかちよつとどいい場所に移動し終えて外を見ると完全に日が昇っていた。

（・・・完全に夜が明けちゃったよ。体調は元に戻ったからいいけど・・・どうしょ・・・）

うんうんと唸っている少年が入ってくる。そして簀巻きをほどいて手ぬぐいと着流しを用意して渡してくれた。

「どうぞ。良い湯加減ですぞ?」

「何で疑問を持つて言う?」

「ぶくく・・・鶴めは早めの元服を迎えたとはいえ、まだ未熟な身、お兄さんのように大きくはございません。」

「どうぞどうぞ。と手を引つ張つて風呂に案内する。そして失礼します。というたとさつさと出て行つてしまつた。」

「まあ、用意されたんなら入るか・・・。」

「通り体を洗うと湯船に入る。心地よさが体に染み渡る。」

「ああ・・・。」

思わず声が出てしまう。

「お兄さんはおじさんのようですね。」

「は?」

声のほうを見ると外から少年が覗いていた。

「なにやつてんの?」

「風呂を沸かしています。どうですか?湯加減は?」

「あ?うん、少しぬるいかな?」

「そうですか。と言うと外から薪をくべる音とともに鞆ふいで空気を送る音も聞こえる。不思議に思い外を覗くと少年が一生懸命に空気を送つて風呂を沸かしてくれていた。

「お兄さんには外を覗く趣味があるのでしょうか?」

「い、いや、普通これは下男がやるもんじゃ?」

「いえいえ、風呂と言うものは茶と並んで最上のもてなし。自ら行わないとは何事ですか?」

「はあ。」

「お兄さんはどうぞ、どうぞ。ゆっくりお入りください。」

言葉に従いゆっくりとはいることにする義信。心の中は驚きで真っ白になっていた。

上洛・淡海紅裙 その6（後書き）

本日中か明日の明朝に一話投稿予定。中途半端でいけないとはおも
うのですが、仕事の時間が来まして書ききれませんでした。

上洛・淡海紅裙 その7（前書き）

不眠症再発？・・・と思ったがなんか熟睡できてんに恐ろしい眠気がたまに襲う。本日は気が付いたら床に寝ていた。病院行くかなあ？

上洛・淡海紅裙 その7

ホカホカと体中から湯気を出しながら新しく出された羽織袴を着て湯屋の外に出る典厩モードが解除された義信。

「どうかどうか・・・などと言いました。」

「は？」

土間にいた少年　前は知らないが風呂を用意してくれて吹くまで用意してくれたいい人　はなその言葉を言うとチョイチョイと指だけを動かして義信を呼ぶ。

「どうぞ。」

近寄った義信に井とんぶりになみなみと注がれたなぞの黒緑液体を渡す。

「は？」

「飲みなさい。」

「何ゆえ？」

「飲みなさい。飲みなさいったら飲みなさい。」

有無を言わせないようにズイズイと井を顔に押し付けてくる少年。対応から見ても毒や害になるものではないがこのようなものはできれば飲みたくない。

「せつかくけど・・・不味そうなのでいらない。」

「ええ!!」

シヨックを受けたように大声を上げると青い顔をしてうなだれながら「それもそうですね。」

同意した。

「ならこちらをいかがでしょう。お水ですが・・・。」

今度差し出したのは何の変哲もない水だ。風呂上りにのどが渴いたのでありがたくいただこうと受け取り飲むとする。唇に井を当てて一気に飲むと一息いれて井を傾けた。その瞬間・・・

「だばあ・・・と。」

少年は跳びあがると杯ちかに移した先ほどの液体を擬音を口にしながら

飲んでいる井の中に流し込んだ。一気飲みをしているため止めることもできず液体が喉の奥に流し込まれる。

「ぐっ……」

めまいがするほどの不味さが舌に残り、胃の中から臭みが上ってきてむせた。

「やっぱり効きましたか。……気分はどうですか？」

不味さにむせていたため反論も何もできなかったが先ほどまでの落ち着けたと思っていた気分が一瞬だけ、感じるのも一秒にもみたない時間、頭に血が上って一気に落ちていった。その血が体全体に移動して広まったことがわかる。

「どうですか？つかれありませんでしょう？」

少年が言うようにやけくそのように朝まで行った運動の疲れもない。

「どうということ？」

「お兄さんに鶴めが説明しましょう。これはある薬の解除薬です。

その薬によつて起こった疲れを完全に癒すことができます。まあ、その薬だけで、治るのは疲れだけです……」

「薬？」

「そうです。二人とも！！」

パンパンと手を叩くと式神の舎やしと頼たのが現れて前方の舎とつくりが徳利を出す。何も入っていない杯に注ぐ。それを義信に渡す。

「あ、お兄さん。口に含んで味だけを見てください。味を見たらすぐさま吐き出してください。」

少年は水の入った井を渡す。

「吐き出したらよく口の中を洗ってください。」

注意をされると義信は杯にある液体を口に含む。舌でまわすように味を見るとすぐさま吐き出す。

「な、なんだこりゃ。口に含んだだけなのに……」

（頭の中が痺れて目の前が暗くなった。体も熱くなりかけた。）

「それは淫蕩の禁薬です。多分お兄さんはそれを飲まされたのだと思います。」

「そんなことがわかるのか？」

「臭いでわかりますよ。かすかな臭いでも鶴めが作ったものならわかります。この禁薬は我が家が保存していたものですが御屋形様が勝手に持って行ってしまったのです。まったく困った人です。」

「おいおい、そんなことを馬の骨ともしれない俺に言っているのか？不忠とやらで無礼討ちや上意討ちなんてこともあるぞ？」

「ぶくく・・・、お兄さん。そのようなことを胃つても無駄ですよ。さきほどお兄さんが湯に入っている時に二人に頼んでいろいろと調べてもらいましたから・・・こう見えても鶴めは頭はいいらしく、このお城にいる人は全員おぼえておりますので。」

もうしわけありません。と頭を下げる少年と二対の式神。

「やれやれ・・・、別にかまわないけどな。で？何がわかった？」

「あまり時間がなかったのでお兄さんが甲斐の使者である武田典厩信繁ということだけです。しかし、これだけわかってこの禁薬を飲まされたのなれば、あの御屋形様が何かろくでもなく、くだらない事をしたに違いないです。このことは先ほど父上に報告いたしましたのでお爺様がどうにかするでしょう。これにとゆるしてくれますか？」

「確かにろくでもないことだったな。まあ、気にしてはいないがな。」

「なにせ性欲に頭と感情を満たして何をさせたかったのか？と頭を抱えてうんざりする義信。気にしてないといったが馬場民部信房を巻き込んだこと。いや、同僚に手を出そうとしたことに、いずれ自身の手で痛い目をあわすと誓った。表にはおくびにもださないが。」

「そうですか？話を続けます。実は鶴めはお兄さんをお願いしたいことと、お願いされたいことがあります。」

「なんか漠然と、つゝか変な言い方だな？言ってみ？」

「お願いしたいことはこれからお兄さんはどこかに行きますか？」

「は？そりゃ、用を済ませたら甲斐に戻るが？」

「こちらが悪かったです。えっと、このあと京に上るのですか？」

まあなあ。と頷くと少年は

「是非とも鶴めを連れて行ってください。」

「別にかまわないよ。」

すんなり通ったので少し時間が止まる少年だが正気に戻ると式神たちを駆け寄り三人で万歳三唱をして戻ってきた。

「それでですね。お願いされたことは浅井家のことです。」

あゝ。と声を出す義信。なにせここに着てから典厩モードになっていたため今の今まで完全に忘却のかなただった。

「……お兄さんも大概ですね。まあ、いいですが。」

やれやれと首をすくめる少年。恥ずかしくなつた義信は理由を聞く。「浅井のお姫様ですがあのままでは間違ひなく御屋形様に食われます。これは断言できます。間違ひなくです。」

ここまで言われるとは間違ひた意味で信頼されているな。あの六角の親玉。と思つた義信。

「たしかにあと五年。いや、三年もすれば美女といつても差支えがない女性になるだろう。」

「つまりお兄さんはあのようね女性が好みなので？」

「……で？」

まじめな話ではなかったか？と言うとペコペコ頭を下げる少年。どうも憎めない。

「す、すいませんです。それでお兄さんには鶴めに。いえ、武田の使者なら御屋形様に目通りするはずです。そのときに釘を刺したうえに鶴めに世話をお願いしてほしいのです。」

「なにゆえ？」

「実はさきほど一言言ったかもしれませんが御屋形様はお爺様と後藤様、進藤様を苦手に行っているのです。しかし後藤様も進藤様もしばらくは動けない。そしてお爺様と父上は城に詰めておりませんのでいざというときに抑止力になる人間がおりません。もし浅井の姫が手を出されたとなれば浅井だけではなく六角に恨みを持つ各大名や豪族、国人につけこまれます。とくに大和を治める三好家の松永

弾正はクセ者ですし……。」

「なんだかんだいっても忠義心があるんじゃないか？」

言ってることが違わないか？と問うと少年は手を数度振り

「今滅んでもらうては困るのです。あの御屋形様が死ぬ分には自業自得ですみませんが、ほかの家臣や従者たちが巻き込まれてはたまりません。なので最低でも三年時間を稼がないといけないのです。」

「三年たてば浅井なんてどうでもいいと？」

「い、い、いえ、三年もたてばあの姫も相当に優秀に思えます。つまり姫大名となつて六角に対して敵対いたします。それまで恩を売る……というより時間稼ぎをしたいのです。」

「浅井の保護は猿夜叉丸……いや、姫だけか？」

「無論、清和源氏嫡流の武田家に釘をさされて同じ源氏、なおかつ格下の佐々木源氏なので頭から水が沸騰するぐらい怒るはずですよ。間違いなく姫の母親。つまり浅井久政の妻に手を出そうとすといつた具合なのです。常に式神を見張らせておきます。何か起こる前に鎮圧いたします。」

「わかった。」

「いいのですか？」

「はあ……。」

ふん。と唸ると頭を二、三度掻いて考える義信。

「で？」

「はい？」

「それでどうなるんだ？」

「どうとは？」

頭をひねる少年。

「六角を滅ぼすのか？」

「いえ、家は残します。あくまでこれは後藤様、進藤様、お爺様の三家老が共謀しておりますので。六角を滅ぼすのではなく危機に對して、あの御屋形様は対応できません。最悪の場合逃げ出します。」

そこで六角当主への幻想が消えて現実が残ります。そこで新たな当主を置いて……」

「……六角を立て直す。と?」

「はい!!六角十八城と呼ばれた多量の兵や民を家の自壊で路頭に迷わせるわけには!!」

はつきりとした意思を持って不思議な感をなくして少年は宣言した。

「わかった受けたまわる。」

『よかったですな。』

「お兄さんが受けてくれてよかったです。」

「まあ、こちらもお前に世話になったしな。道中では浅井に迷惑もかけたみたいだし、特に猿夜叉丸には特にな。このまま知らん顔するわけにはいかないな。」

照れ隠しに顔を手のひらで擦る。

「そろそろ部屋に戻らないといけねえか。じゃ、またあとでな。」

「お兄さんもまた後で。」

頭を下げあう二人。そして土間から上がるうとしたその瞬間

「あつぎゃあああああああああああああああああああ

あああああああ!!!!!!」

という恐ろしい大声が響き渡った。声は中庭のほうから聞こえた。

少年は式神に乗って行動に移しており義信も刀を左手に持つと駆け出した。

上洛・淡海紅裙 その7（後書き）

今回は少し短めなうえにまた半端。時間がほしい。才能がほしい。金がほしい。……。ほしいものがたくさんありますよお！！まあがんばります。

上洛・淡海紅裙 その8（前書き）

ヤッホーイ！！ユニーク一万ヒットだぜコンチクシヨウ！！まさかこんなに見てくれるとは・・・ありがたや・・・ありがたや。贅沢を言わせていただければ御意見・御感想をおねがいます。

上洛・淡海紅裙 その8

叫び声が放たれたらしい中庭についた二人と二体の式神。警戒しながら周りを見渡すが周りには同じように叫び声を確認しに来た武士や下女や女中がいるだけだった。

「おかしいですね？確かにこのあたりだと思つたのですが……。」
『周りの者に聞いても怪しき人物は見えていないとの事です。』
『では、いずこに？』

キヨロキヨロと周囲を見渡す少年と式神たちを義信は見向きもせず
に床に向かつて一直線に進む。

「んん？この伸びた染みは何だ??」

這い蹲りながら指で染みをこする。手に付いたそれを嗅ぐと鉄錆の臭いがした。

「血？」

かすかな染みの跡を周りにいる人々の足元を匍匐前進の要領で進んでいく。

「こつちか？」

床に鼻を押し付け臭いのするほうへ犬か虫のように進んでいくと

「あた！」

思い切り戸に頭をぶつけた。頭をさすりながら扉を開けて中に入ろうとするとスパンと鼻の頭が皮一枚切れた。

「……自分の仕掛けた防衛用の罫で首が落ちるところだった。」

一歩下がって刀をしまおうとしたが刀を触ると少量ではない血が刀に付いていた。自分の血ではないためすぐさま刀越しに馬場民部信房を確認するといまだに寝息を立てて気持ちよさそうに熟睡していた。

「……まあ、刀は部屋の外を向いているから民部殿が引っかかる訳ないな……。あれだけ熟睡しているのなら問題ないか。」

無事が確認できたので鼻を止血しながらゆったりと山姥切をしまう。無論、刀に付いた血はきれいにふき取っている。二本目を拭いていると少年がやって来た。

「お兄さん？いきなり這いつくばっていったいどうしたのですか？まさか急に何かが憑依したのですか？」

「ちがわい！！血の跡があったから這いつくばって臭いを嗅いでいったんだよ。」

「ふむ。では犬に変化したのですか？」

「……突っ込むのに疲れたな。……もう好きなようにしてくれ。」

憎めないが、さすがに朝から何度もツツコミを全力で入れていればさすがに疲れてくる。先ほどの薬で回復したとはいえうんざりはしてきた。

「つれないですね。まあ、鶴めも男のお兄さんにつれなくされないでべたべたされても……つらいものです。」

義信がべたべたしながら対応するのを想像したのか青い顔をしてげんなりする少年。

「で、お兄さん。なにか成果がありましたか？」

「特に。刀によって切り殺されかけたぐらいだな。……自分で仕掛けた罠で。」

「ふむ、やっぱりお兄さんは自ぎや　「そこ！！止め！！」「すいません。」

頭を何度も掻き毟る。やれやれと刀をしまい、手ぬぐいを確認すると動きが止まる。

「なにかありましたか？」

「驚いて忘れていたが……この血はなんだ？」

実際は血に驚いて民部が無事なのを確認したため、どうでもいいかと思っただけだが正気に戻ると何もないのに血が付くわけがないとおかしさに気が付く。

「ほうほう。お兄さんの鼻からすごい量の血が出ましたね。」

「いやいやいや。流石にこの量が出たらこんな浅手ではないだろう。」

「それもそうですね。つまりこの血は先ほどの大声の主が怪我をしたものですか？」

「まあ、そうだろうな。」

万が一に備えておいてよかったぜ。と安堵しながら民部に近づく。そして体をゆすって起こそうとするが……まったく起きない。

「み〜ん〜ぶ〜ど〜の〜!!!!」

ゆすりにゆする。それでも起きないので額をバシバシと叩き始めた。

「み〜ん〜ぶ〜ど〜の〜!!!!の〜!!!!の〜!!!!の〜!!!!の〜!!!!!!!!!!

!!!!」

叩き続けて額が真っ赤になっているが身じろぎもしない。寝息をしているので生きてはいるがここまで起きないとなると流石に困る。

「どうするか？」

ため息をしてあきらめかけた義信だが後ろから少年が

「鶴めにお任せください。ではこちらに……。」

さささつと言いながら先ほどの土間の方角に向かって進み始める。

「……運ぶか。」

手で救い上げるように胸の前に持ち上げる。俗に言うお姫様抱っこという運び方だ。肩に担ぐのが一番楽なのだが流石に寝ている美女を肩に担いでいる城内で見ず知らずの男性がいたら間違いない人攫いだと思われるだろう。なのでこの運び方で少年についていくことにした。結果だけ言えば誰にも見つからなかったのは行幸だった。

土間に着くと少年は薬棚に頭を突っ込んで色々と探しているようだった。式神たちはどこに行ったのか、部屋の中にはいなかった。

「お兄さん。どこでもいいので寝かせてください。でも土間はやめ

ておいたほうがいいですよ？」

「わかつてらい。」

民部を座布団の上に頭をおいて板の間に寝かす。

「ああ、ありました。これです。」

薬棚から手のひらより少し大きな壺を出す。そしてその中に入った粒の薬を民部に飲ませようとする。が・・・

「どうやって飲ませましょう？」

寝ている民部に飲ませたら水で窒息するかもしれないため慎重になる二人。

「……………砕いて粉にしたのを水で喉に流し込むのは？」

「……………それしかないですね。やってみます。」

ゴリゴリと薬をつぶして粉にする少年。それを井に流し込んでよく溶かす。そして民部の口をあけてそこに漏斗を入れると流し込んだ。

「……………おきませんね。」

「おきないな。これ効くのか？」

飲んでみます？と差し出した薬を飲む。すぐさま効果が現れ、目が冴えてくる。効果も強すぎるのか頭が痛くなるほどで即効性も高い。しかし民部は起きない。

「どうしたことでしょう？」

「いつそぶちかましてみるか？」

鐸鳴りをさせながら鞘を構える義信。これで叩いてみようと考えたのだ。

「やめておいたほうがいいですよ。打ち所が悪ければまずいですし。」

少年が静止したのでやめる。もとより行うつもりはさらさら無かったが・・・本気に思われたらしい。

「ふむ。起きませんね。」

「これだけゆすつても、叩いても、逆さにしても起きないとなると・・・」

あれから約一刻（二時間）ほどいろいろな方法を試して起こしてい

るがまつたくウンともスンともいわない民部。しかたがないので自然に起きるまで放置の方向で決まったが昼には六角の当主との会談が確実に行われるため根いていましたでは済まされない。

「あと一刻もありませんね。お兄さんは準備をお願いします。いざという時は鶴めが民部殿をかくまいます急病ということでも……。」

「やれやれ……、なんか一人旅しなけりやよかつたかもしれん。苦勞を背負つてばかりだ。」

「はあ。とため息をついて部屋に戻ると昨夜とは違う長着に袴を着て羽織は桜染めの物をはおると腰に和泉守兼定と山姥切を差す。一応両足には脚甲を付けておく。音がしないようにしっかりと布で縛る。」「やれやれだ。」

頭を抱えながらしつかりした足取りで対面の間に向かう。途中で式神・舎が横から現れて民部がおきないことを告げられるともう一度頭を垂れてため息をひとつ。

「はあ……。勝千代はまだなのか。」

自分で勝手に出ておいて我ながら勝手な言い分をつぶやく義信。

「こちらにてお待ちを……。すでにご家老様がお待ちにございませす。」

「失礼。」

典厩モードに切り替わり刀を小姓に預けて扉を開けて中に入ると三名の家老筆頭である後藤但馬守賢豊を上座にして進藤近江守貞治・蒲生左兵衛大夫賢秀とならぶ。その対面にも同様に三人の男性がいる。

（…………ふうん。これが歴史にそれなりに名高い六角の六家老か。

などと失礼なことを考えながらも礼儀を整えて挨拶を行う。六名の家老は好意的に挨拶をしてくれた、どうやら敵対の意思や害意はないようだ。さらに一礼をして左に置いてある敷物に座る。後は待つだけ・・・と思っていると蒲生左兵衛大夫がこちらに話しかけてきた。

「昨日は申し訳ございません。」

「こちらこそ・・・えっと、まことに聞きづらいことなのですが、私に罪状とかはございませんので？」

「?・・・。ああ、城下での事ですな、昨日も申したようにこちらが迷惑をかけたのです。罪状などございません。むしろわが領内の不備を片付けたことに謝礼を送りたいほどです。」

「・・・はあ。それならば良いのですが。」

そのままにこやかとまではいかないまでも好意的に六家老と話を楽しんでいると典厩が入ってきた扉が開き三名の気配が入ってきた。

「失礼いたします。浅井が家臣・赤尾美作守清綱と申します。失礼を・・・。」

身分どころか名前まで隠して道中一緒だった人物が入ってきた。残りの人物も・・・

(浅井家だ~~~~!!!!)

思わず首がおかしな音を立てる速さで顔を背ける。首の痛みも感じるより精神的圧迫感のほうが強い。

(どうすつか?どうしよつか?)

必死に考えている典厩をあざ笑うように御簾がかけられて六角の当主が入ってくる。

「・・・・・・・・・・六角左京大夫義賢である。」

ねぎらいの言葉も礼もなくただ不機嫌な声で答える六角左京大夫義賢。非礼や無礼にもほどがある対応だ。六家老も後藤・進藤の二名はムツとした顔で当主をいさめる。蒲生はどっちつかず。残りはあきれ何もない。

(こりゃあ末期に近いな。・・・そんなこと言ってる場合じゃないな！！)

ごまかす方法を考え続ける典厩について・・・

「これは甲斐の大名・武田家の方ですか？」

赤尾美作守が話しかけてきた。

上洛・淡海紅裙 その8（後書き）

六角氏を楽しく学ぶのなら「嗚呼！ 戦国奇瓢伝 八角軍団」を読めば笑いながら学べます。あといまさらですが官位や官職については作者調べなため間違っている可能性もあります。すいません。年末始で更新速度が少し落ちます。それもすいません。

そのころの・・・部下達(前書き)

今回は短めなのでごまかし・・・もとい短編収録しました。

そのころの……部下達

? 甲斐の国・三枝宗吾昌貞の一日

三枝宗吾昌貞。三條義信こと武田典厩信繁が直接選んだ直臣第一号だ。性格はいたって素直かつ実直なため色々と苦勞を背負う気質でもある。

「おはようございます。」

朝は早く夜が明けるとすぐに行動すると武田の生命線である騎馬に餌を与えることから一日が始まる。下男や馬番と一緒に行うのだが最初は驚かれたり、陰口を叩かれたりしたが今は性格や人柄によりいたって好意的に対応されている。

「宗吾様。本日も早朝からご苦勞様です。あとは任せてください。」

「よろしくお願いします。」

では。と、挨拶をすると直屬の上司である典厩の留守ででた仕事を片付ける。出発前に引きつぎを終えているためたいした量ではないが責任重大と一生懸命対応する。

「いや……典厩様でよかったですよ。……内藤様の部下なんて……。」

内藤修理こと旧名・工藤源左衛門繁長の部下はいつ自分の主君が旅に出たか分からずにあたふたしている。毎日行っている事務処理を終えると領内の視察を行う。

「と、言ってもたいした面積ではないのですが……。」

「宗吾様？なにを言っておられるのです？」

「いえいえ、なんとなくです。」

日暮れと同時にすべての作業を追えて典厩宅に戻ると典厩の自室を整理と掃除をおこなう。いつでも帰ってきてもいいようにとのこ

とで……。それを終えると自身の時間が始まる。

「せい!!せい!!」

自身の鍛錬を行い、躑躅ヶ崎館を一周して自分の部屋に戻り一日を終える。

「おやすみなさいませ。」

?望月八千代信永の一日

望月八千代の一日は三枝宗吾の一日よりは早い。夜明けの一刻(二時間)まえにはもう意識を覚醒させている。そして部下達である下忍達に朝駆けによる奇襲を仕掛けて

「……ぎえええええええ!!!!」

全滅させる。そしてすぐさま池に叩き込んで無理やり起こすと飯や衣服の準備を行わせる。自身は忍犬や伝書鳩の世話を気分しだいでおこなう。……大抵は怠けているか寝ている。

「夜明けじゃ。皆々たのむぞ!!」

「……へい!!」

部下に自身の警戒地区である甲斐南部を部下達に命令して視察させる。やっぱり自身は怠けるか、寝ている。その合間に食事をつくり部下達の風呂や衣服の準備をする。これも気分しだいだが……。

「……ただいま戻りました。」

「ふむ。飯の用意と風呂も用意している。自由にするがよいのじゃ。」

「……了解!!」

三々五々よ分かれる部下達をみてほくそえむ八千代。そしてしばらくすると……。

「くっくっく。」

死屍累々と倒れている部下達。八千代が食事に痺れ薬、風呂に落と

し穴、衣類に重りと仕掛けて全滅させる。上忍である上司に何か言われたら目を潤ませて猫なで声で

「部下達がたるんでいたの……」

と言つてごまかし自身の評価を上げることも忘れない。そのまま自身の気分で行動し部下を痛めつけるが部下達には「さすが八千代様」と尊敬とちよつとオカシイ目で見られる。……なんだかんだで部下には好かれて……好かれているのか？

「そろそろ日をまたいたようじゃな。皆々後は自由にするのじゃ。」

パンパンと手を叩くと部下達は四散して去っていく。そして自身は「そろそろ仕事をするのじゃな。」

腰から布と小太刀を出して文字通り人間離れた身軽さで目標に向かっていく。そのさきには

「がは！！や、八千代様！！なにを……」

先ほど視察から帰ってきた部下の一人がいて組み伏せる。大男といつていい男がいたつて小柄な八千代に背中に乗られてまったく行動できないようになってしまった。

「なにを……ではない。おぬし……何者じゃ？いくら若いとはいえワシは中忍じゃ。部下の面ぐらいおぼえておるわ……」

普段のお転婆か、尊大かとも取れる雰囲気を感じ取り機械のような硬質の雰囲気をもとい小太刀を首筋に突きつける。

「……」

「だんまりか……何者かと聞いたワシが馬鹿だったようじゃな。では……」

ズン！！と首に小太刀を突き刺し絶命させると先ほど出していた布で小太刀の血をふき取り、その布を相手の顔に巻きつけると相手の刀を抜いて首を切り取った。

「やれやれ……南部にあるのは駿河と相模、水面下で友好を結んでいるとはいえ一枚岩ではないようじゃな。……すこしばかり駿河訛りがあったの。」

首だけを脇に挟むと体を火で焼き尽くす。首、つまり顔が分かれば

大体分かるので上忍に届けることにした八千代。

「やれやれ・・・甲斐の国も一枚岩ではないのじゃがな。」
それだけつぶやくと木の上にとそこを足場に移動していった。

？武田勝千代晴信一行

「ははははは・・・！！晴信様は・・・ナンタラカンタラ・・・」
美辞麗句を並べる伊勢の国主・北畠右近衛中将具教。その人物を見て、剣術家として有名な人間だが・・・大名としては二流。と言いつのが武田勝千代晴信の評価だった。なにせ初日の伊勢神宮の参拝から延々と丸一日をかけて伊勢神宮の歴史と北畠家の自慢が続き、ろくな睡眠もとれずに翌日の朝から剣術の講義と自慢、そして自分の技を見学させる。といった内容だ。

「やってられっか！！！」

厠に行くと言つて中庭に出るなり松を蹴飛ばして粉碎する。延々と続く自慢に我慢も限界なのだろう。八つ当たりで少しイライラと飛ばしたのだがいまだに顔が引きつり手を握り締めている。

「民部を先に行かしたのはともかく・・・義信！！覚えていろよ！！！」

時刻のそこから上がる声でつぶやくと屋敷の床を踏む。グラグラと屋敷全体が揺れる。少し騒ぎになったが我関せずと宴に戻ることにした勝千代だった。

後に分かったことだが屋敷全体が少し傾いたのは勝千代の知らぬことだった。

そのころの・・・部下達（後書き）

ごまかしお疲れ様！！つと自分をさらにごまかしてみました。・・・
・むなしくなっただな。がんばって勉強と投稿しないと。

上洛・淡海紅裙 その9（前書き）

投稿する日にちを少し過ぎてしまった。サンタを脅す子供が現れたと聞いて調べたら本当だった。・・・どうコメントしていいものやら。自分の弟たちがそうでないことを祈る。いまさらだが俺の屍を越えてゆけ p s p を買った。ガンパレードマーチもでないのかな？

上洛・淡海紅裙 その9

話しかけられて無視はさすがに礼を欠くと思ひ開き直つて目を合わせないようにながら頭を下げて

「お初にお目にかかります。拙者は武田家家臣・武田右馬頭つまのかみ信繁と申します。」

と典厩の名を伏せて名乗る。偽名ではないので礼には反していない。ただごまかしているだけという言い訳でお茶を濁す。

「丁寧に・・・、それがしは浅井家家臣が筆頭家老を務めます。赤尾美作守清綱と申します。」

二人ともが頭をペコペコと頭を下げあう。そして赤尾美作が着飾つた少女とその母親を前に出して挨拶をさせる。

「お初にお目にかかります。浅井猿夜叉丸と申します。」

「名のほうは伏せさせ、浅井久政が妻さいにて、この嗣子ししの母でございます。」

母親の方は名乗らなかつた。姫武将でも男性でもないため、ここで名乗れば角が立つと考へたのか。もしくは名をはばかるものだったのか。

（比叡山の近くだもんな。・・・勝千代から聞いたときは・・・まあ、うん。）

甲斐を出立する前にこの世界の宗教や勢力関係のことを叩き込まれた典厩は頭を抑えながらそう思った。

「こちらこそ。」

もう一度頭を下げる典厩。向こう側では自分の君主をいさめる後藤但馬守賢豊と進藤近江守貞治。いさめられている六角左京大夫義賢は御簾で隠れてよくわからないがとてもじゃないがいい感情を持っているとは思えない。一通りいい終えたのかこちらに向かつて深々と頭を下げる二人。そしてまず感謝の言葉を述べる。

「御方々、遠路はるばるのご足労ありがたく存じます。」

「われら六角の主・左京大夫にかわりお礼申します。」

もう一度頭を上げる二人。その後ろからあくびをかみ殺す気配がはつきり聞こえる。頭を下げていた二人の気配が硬くなるのも感じた。「まあ、まあ。」

おもわず他家の家臣である典厩が落ち着かせる。二人そろって息を吐き出して続きを行う。

「まずは武田家の要望である領内の通過であるがこちらのほうは我らが威信にかけて安全と路銀の用意をいたしましょう。」

「あ、いえ。あまり仰々しくやっていただかれても……一応対外的に見れば父親を追放して守護の座を奪った‘孝’に反してますから……。」

両手を前に出して固辞する典厩。

「しかしながら、何もしないとすればわが六角に汚名がかぶります。遠縁とはいえ同族である武田家が筋を通したのですからこちらも何もしないわけにはいきません。どうか……。」

やれやれと頭を抑えて考える典厩。さすがにここまでいわれて何もしてしてもらわないのは筋が通らない。すこし時間がたつと頭から手はずして

「では、数名の若者を若党としてお借りしてもよろしいでしょうか？」

「その程度でよろしいのですか？無論そちらで人選は任せますが……。」

「かしこまりました。ではそのように……。」
頭を下げる典厩。どうやら穩便に話はついたらしい。中腰になり浅井家の後ろに移動する。

「では、浅井の嗣子である浅井猿夜叉丸殿。このたびはわが六角と貴家の同盟更新を含めた各条約を結ぶためご足労をおかけします。」
猿夜叉丸が頭を下げると隣から赤尾美作守が一步前に出て口上を述べる。

「御恩情ありがたく存じます。拙家に対しての同盟強化について本

日より意見を承りご検討したいと思えます。」

「そのように卑屈にならずとも。貴家があるおかげで美濃の斉藤や越前の朝倉と事を構えずにすむのだ。」

「そういつていただけるのであればありがたいことです。」
深々と頭を下げる赤尾美作守。

「では本日は　失礼いたします！御注進でございます！」
これから小さな宴を行おうとしていた矢先に対面の間に軽装の兵が数名なだれ込んできた。その形相を見るに急を要するものだろう。

「御注進にございます！！大和の三好家重臣・松永久秀が南部より急襲。現在日野城を中心とする迎撃部隊が戦闘を行っております。しかし敵軍は我がほう三千に対して約七千強。ただちに援兵を！！」

「こちらは西から宇佐砦、大津関城、を攻略し朽木城を包囲。北は大溝湖城、東は日向城まで進軍。こちらは三好の本隊らしく総勢三万八千！！」

「東にて本猫寺と伊勢の北畠旗下の豪族・神戸氏かんべが合同で甲賀方面と岳登山の黄和田城を攻撃中。こちらは総勢七千。」
三方面からの総攻撃の報告に驚きが支配する。

「御屋形様！！迎撃の対応を！！」
後藤・進藤の二名が問いかけるが蒲生は立ち上がり身構える。残りも似たようなものだ。

「落ち着くのだ。近江の守護である六角の十八城がある。そこから兵を出して迎撃させよ。」

まったく発言をしなかった六角当主が発言をする。いたってまともな対応だ。これには先ほどと違った驚きがこの場を支配する。後藤と進藤は殿が目覚めたと感涙している。蒲生も目を丸くしている。残りの家老も目覚めた。とか、大丈夫なのか？とつぶやく。

「両藤の二名は観音寺にある兵力七千を率いて西の三好の本隊をただけ。琵琶湖を縦断すれば北の大溝も間に合おう。各城の兵を引き入れば二万はいかなくとも一万八千ほどにはなる。」

「はは！！！」

急いで身支度をするべく間を飛び出す両藤。

「蒲生は南部の日野あたりはおぬしの庭だ。七千程度なら十分対応できよう。あの毒婦に一撃を加えてくるがよい。」

「は……はあ。」

納得いかないが納得するような戦術を持ってきたためおかしいと思いつきながら出て行く蒲生。

「残りの三老は齊藤と佐和山の浅井に援軍を要請。お主らは手勢を率いて向かうがよい。」

「……は……は……」

どたどたと部屋を出て行く残りの三人。その対応をみながら典厩は軍事的にはまとも何だなと思ひ多少見直す。浅井の面々も同様らしい。

上洛・淡海紅裙 その9（後書き）

寝過ぎして投稿時間がずれた上に半分しか投稿できなかつた。残り
は明日にか習う投稿します。

上洛・淡海紅裙 その10（前書き）

仕事やその他が忙しくて休む暇がない。更新ペースが落ちる一方だ。
……これで景気がよければうれしいんだけどな。

「やれやれ・・・、本日はこれでお開きか？」

頭に手を当てながら近くの小姓に尋ねると小姓の代わりに御簾の向こう側にいる六角左京大夫義賢が話してきた。先ほどとは違い機嫌が良いのか声に弾みがある。

「右馬頭殿、浅井の方々も友好を深めるためにご膳を用意している。二家共々客間にてお休み下され。」

それだけ言つと御簾の向こうから人の影が消える。小姓も一名だけいるのを見ると退室したらしい。

「みなさま。こちらに・・・。」

うやうやしく頭を下げると小姓は典厩を先頭にして案内をはじめた。これは国力や家柄の表れでもある。武田家は源氏の名家で甲斐一國支配の約十五万石。浅井家は藤原氏分家の家系で北近江の一部支配で約十萬石。そのままある一室まで通される。聞くところによると武田と浅井の客間の中央に当たる部屋らしい。

「さすが堅城・観音寺といえはいいのだろうか？城が迷路のようになつてゐるな。」

バリバリと昨日のことを思い出して苛立ちながら頭を掻く典厩。それを見て小姓が部屋から立ち去り際に加減を聞いてきたがなんでもないとごまかしておいた。

「では改めて挨拶を・・・それがし、武田家使者を務めます。武田右馬頭信繁と申します。付添役でもう一名おりますが気分が優れず休んでおりますのでその点はご配慮願いたい。」

膳を横にずらすと頭を深々と下げる典厩。頭を下げてばかりだと思つたが気にすることをやめた。

「これは・・・それがしは赤尾美作守清綱と申します。・・・昨日以来と申すべきでしょうか？天救坊殿？それとも右馬頭殿と呼んだほうがよろしいか？」

ニヤニヤとした顔で赤尾美作は言ってくる。さすがにごまかすことは無理だった様だ。頭を二度掻いて典厩は一息入れる。

「さすがにばれない訳がございませんな。まあ、天救と典厩の掛けですので典厩でかまいません。武田家でもこう呼ばれていますので。」

「まったく、肝が冷えましたぞ。猿夜叉丸様から典厩殿が大柄の男装坊主に連れて行かれたと聞かされたときには……まったく、お人が悪い。」

「いやはや。ともう一度頭を掻く。そうして前の三人に許可を取るとあぐらを崩して右足を立てて腕を乗せる。」

「それに関しては謝罪の二辺倒ですな。すいませぬ。」

猿夜叉丸を見て頭を下げると彼女はあたふたと周りを見回した。どうやら他人に謝られるのは慣れていないらしい。母に注意されると背筋を伸ばして口上を述べる。

「こちらこそ申し訳ありません。わがままを申ししてしまい。」

「いやいや、猿夜叉丸殿はそれがしが急ぎすぎてしまったため勝手に連れて行かれたようなものです謝罪するべきはこちらです。」

もう一度深々と頭を下げる典厩。

「まあ、領主の子たるものあれだけの正義感や領民への愛情があるのであれば良い領主となりましょう。慢心せずにかんばれば天下に勇名をはせる武将となりましょう。」

正史の浅井長政の事を思い出しながらほめる典厩。

「武田家の副将と名声高き典厩殿にほめられましては恐悦至極に存じます。この赤尾美作、猿夜叉丸様の守役をしている事を光栄に思っています。」

「ありがたき幸せです。」

「猿夜叉丸。よかったですね。」

向こうでは胴上げをしそうなほど嬉しさゲージ上がっているが典厩は聞き捨てならない一言に突っ込んだ。

「すまぬが……それがし、いえ、私はそんなに有名なのですか？」

その質問に何を言つてんだ？という顔をして代表して赤尾美作が答える

「有名も何も・・・東海から近畿にかけて外交・武略・武勇にかけては武田の副将の名にふさわしく、人格としても甲斐有数ですばらしき慧眼を持ちえる人物。と・・・。」

聞いていて顔が熱くなつてきた。たぶんこの鼻頭から手のひらはずしたら顔は真っ赤であろう。

「ちょ、つと、お持ちください。だれからそのような事を？」

「誰と申されましたも・・・よくわかりませぬが。あくまで商人や浪人が話していたのを城下や街道で聞いたのでございますが？」
ご謙遜を。といつてくる猿夜叉丸の母・小野殿。余計顔が熱くなつてきた。その典厩を救うように小姓と女中が酒と湯冷ましの水を持つてくる。

「どうぞ。ごゆっくり。」

それだけ言つとさつさと出て行く六角側の人間。赤尾美作が早速一献と徳利から酒を湯飲みに注いで渡してくる。

「どうも、ありがたく。」

湯飲みを掲げて酒をあおる二人。

(これには・・・入っていないな。)

どぶろくに近いアルコール度が低い酒なので酒宴の雰囲気は好きだが酒があまり好きではない典厩も我慢すれば飲める。舌で混ぜるように味わうが昨日のように甘いような、苦いような異物が入っている感じはしない。典厩の向こう側では赤尾美作が毒見を終えて食事を始めた浅井母子。

「猿夜叉丸。これはいかがです？」

「母上・・・、瓜が苦手なのはわかりますが、私の膳にのせないでください。・・・まあ、いいですが。」

「奥方様、ではこの練り物は奥様に差し上げます。確か好物でありましたな？」

「ありがとうございます。爺。」

「いえいえ、さすがに嫁いできた時よりお世話をしておりますね。」
などといって家族団欒をしている。典厩はほほえましいと思いつつも油断しないで一品ずつ噛み締めて味わう。さすがに昨日と同じものは出ていないのか妙な味はしない。

(・・・最後の手段で厩で吐いてくるか。)
最終手段を考えながら緊張した食事を行う。昨日感じた視線も今回はない。警戒しすぎかもしれないが前科があるため油断は絶対で
きない。

「典厩殿？顔が御暗うございます。なにか？」

「いえ、猿夜叉丸殿。甲斐の田舎育ちなので一品ずつ味わっている
のでございます。」
ふと箸をおく猿夜叉丸。

「典厩殿。質問をしてよろしいでございますか？」

「そう固くならず気楽でよろしいかと。」
こちらも箸をおいて質問に答える体制に入る。

「では、甲斐の、武田の副将と呼ばれる典厩殿の主君・武田晴信様
はいかような人物でございますか？」

どうやら真剣にものを考えるのは性分らしく気楽にといったのに足を崩す事もしない猿夜叉丸。

「勝・・・御屋形様でございますか？」

「左様でございます。」

首ひねりながら頭を掻く典厩。

「そうですね。剛毅かつ奔放で力強く、真つ直ぐな武将・君主であり
ましょう。」

言つててまた恥ずかしくなった典厩だが真剣に問われた今回は顔を
隠したり顔色を変えないように努力する。

「そのようになるためには、いかがすればよろしいでしょうか？」

「わが君主のようになりたいと？」

「いえ、参考にはいたしますが・・・私は、浅井家を強くしたい。」

さきほど典厩殿が言ったように近畿の、天下の一雄として浅井家を盛り立てたい。」

思わず立ち上がり述べる猿夜叉丸。

「強くなり父や母を守るためにはいかがすればようございますか？」
（気負いすぎだな。素人の俺にもわかるな。これじゃ、潰れかねない。ここは知らぬの一手が一番いい。じっさい俺は努力と経験でこ
うなっているが・・・勝千代は勘助や三家老たちが育てたんだ。細
かい事は知らないし、余計な事はいえない。）

「しからば、正直に申し上げれば・・・わかり申さぬ。」

「誤魔化し召されるな！！武田の副将と言われ主君の片腕となれば
ば　「知らんもんは知らん。」

赤尾美作と母がいさめようとするが典厩を問う猿夜叉丸に対して一
言で切り捨てる。

「典厩殿・・・。御気分を損ねたのであればこの赤尾美作、伏してお詫び申します。」

土下座する赤尾美作をなだめて頭を上げさせる典厩。そして猿夜叉丸の眼を見て

「正直に申せば私は武田の姓、典厩の官職を名乗っているが武田家とは血縁はおるか、縁もゆかりもあり申さぬ。なにせ生まれはここ
かも知らぬ放浪の身、さらに言えば行き倒れになっていた所を晴信様に救われたので武田家に仕えて実質二、三ヶ月しかたっておらぬ。」

「それは・・・。」

「武將の心得といわれても私は知らん。なにせ死にたくない・居場所をなくしたくないの心で一生懸命行ってきただけでございます。」
頭を強く掻き筆ると左ひざを立て右ひざを倒して頼杖を付く。落胆した表情の猿夜叉丸が

「では、どうすればいいか、わからぬと？しかし、典厩殿は戦えば一騎で敵を翻弄し、策を立てれば有数の知を誇ると聞きます。」

「それがおかしいのだ。失礼だが私は一人で十数名を打ち倒した事

もあるがそれは順番に順序を立てて行つたのだ。そして策に関してだが私は一切かかわっておらん。」

「・・・なれば参考になる事はござらぬと？」

ペタンと尻餅をつくように座る彼女を見て

(何やってんだ・・・こんな子供に感情的に・・・)

大人気ないと思ひ自分ができる範囲を教える事にした。

「失礼した。どうも・・・大人気なかつたようだ。」

「こちらこそ失礼をいたしました。」

頭を下げる浅井の面々。それを手で制して語る典厩。

「あえて言うのであれば・・・臆病になる事でございます。そして他人の失敗や経験を学ぶ事でございます。」

「臆病や失敗でございますか？」

「そうです。臆病であれば考え、慎重になる。失敗を学べばどうすれば失敗しないか学べます。孫子や呉子もあるように戦に勝つ理由はないが、負ける理由はある。と・・・。」

「負けない事・・・ですか。」

「さらに言えば『誰かのため』ではなく『自分のため』に行動なさいませ。そうすれば自分自身に責任を持ち物事がきちんと行えます。いざという時に他人に逃げを打つ事で人望を失う事もありますまい。無論、言葉には出さずに行う事です。」

(・・・自分自身でもできていないのに・・・何を言つてんだか・・・)

「その言葉胸に残します。」

頭を深々と下げる猿夜叉丸。それを見て自分自身に頭にくる典厩。スツと立ち上がると礼を言つて部屋を立ち去る。そして一気に中庭に出ると城壁に向かって渾身の力を込めて拳を打ち込んだ。城壁は文字通り吹き飛び粉々に砕け散つた。

「未熟者で臆病者の俺が何を言つてんだ！！ちくしょうが・・・！！」

自分自身が一番自信がもてない典厩。いや、三条義信は怒りを溜め

込んだまま部屋に戻るのだった。

上洛・淡海紅裙 その10（後書き）

・・・うまくかけない！！仕事は忙しいが儲からない！！疲れが取れない！！三重苦だ！！・・・すいません。愚痴を言いまして皆さんはクリスマスはいかがお過ごしでしょうか？作者は仕事で正月は寝正月です。なんとも無作為な・・・。

夏桀殷紂（前書き）

仕事が忙しくてまったく自由な時間がない。行って帰って寝て行って帰って寝て……（略）書き貯めもないし、ゆっくり書いていきます。今回は短いです。さらに言えばわけがわからなくなつて何度も書き直してプロットどおりに書けやしない。

夏桀殷紂

イライラしながら与えられた部屋に戻る典厩信繁こと三条義信。部屋に入るとすぐさま畳の上に横になる。太刀が邪魔だが気にすることもなく横になる。

「……またこの視線か、これは……肌触りがいやな方か、ねっとりとした嫌だが無視できる視線ではなくスッキリとはいえないまでもチクチクと無視できない程度視線だ。そして義信は今ばかり機嫌の悪い状態だ。上半身をゆっくりと起こして首を一回まわす。そして視線があるであろう場所に向かって太刀を鞘ごと引き抜き投げつけた。抜く・構える・投げるの三拍子から抜きながら投げるの一拍子半に短縮された行動は監視者の予想を裏切り反応する前に屋根板をぶち抜き、突き刺さった。

「出て来い。あたつてはいないだろ？……たぶん。」

底冷えするような声で警告していながらどこか間抜け田対応をする典厩モードになった義信。脇差に手をかけているので得物の長さで先ほどより早く投げれるうえ、今度は刃が付いているので得物の長さのように鞘が突き刺さった屋根裏の板をはがし、刀を屋根板から抜いて翁の面をつけた監視者が降りてきた。体の線が細いが女性ではない、子供のようだ。

「……」
降りてきた監視者は典厩を見るなり覆面と仮面をはずし

「湯舟の万川集海。」

と一言だけ言うのと腰から短刀を抜いてのどに付きたてようとす。

「ちょ……おま……待って！！」

バツタのように下半身のばねで一気に飛び掛ると拳ではじく。はじくときに痛みを感じたので切ったらしいが今は、

「はぁぁぁ……」

と安心して息を吐く。が次は口の中でモゴモゴとし始める。

「次は毒かあ！！」

呵責のない右フックを打ち込む。そして左手を口の中に突っ込み拳を握って口を閉じれないようにする。

「ちよつと待て。少して良いから、寸単位でも良いからまってくれ！！」

そして奥歯に仕込んだ毒袋を慎重に的確に引き抜くと畳をあげて、その下において押しつぶした。もう一度安心して開放するが、次は舌を噛み切ろうと口をあける。

「たのむから話を聞いてくれ！！なっ！！なっ！！」

典厩はとっさに拳を相手の口に詰めこんで前後に揺らす揺らす。そのまま相手の目がグルグル回るまで揺らし続ける。ぐったりしたのを確認すると自分でもどう結んだのかわからないほど縄や紐で結びまくる。そして鴨居に逆さづりにして思い切り叩いて起こす。

「起きたな。・・・絶対に舌を噛み切るなんてまねすんなよ？」

「ほうはももはへひはげむ。」

(やべ・・・強く殴りすぎたか？)

万川集海は口周りが衝撃の痺れと腫れで話をする以前に口が閉まらない問題が発生していた。癖になっている口癖とともに自身の頭を手をおく典厩モードから解除された義信。最初の怒りもこの一瞬の事件で忘却のかなたに飛んでいった。

「自分でやったこととはいえ・・・やれやれだ。お前の命をとるつもりもなければ、後ろ盾とか指令者を聞くつもりはまったくないから安心しろ。」

不信の目を向ける相手だったが観念したように頷く。

「聞きたいことは三つだけだ。後は好きなようにしてくれ・・・」

「

また頷く万川集海。

「まず一つ目、俺の監視か？それとも暗殺か？」

だんまりと目を閉じて動かない万川集海。

「ちがうってことか？」

首を縦に動かす万川集海。

「じゃあ次だ。・・・ん？何を騒いでる？それだけかって？聞くことは聞いたし暗殺でも監視でもないなら妨害か足止めだろう？普通。」

口を開いたままあきれ顔の万川集海。どうもあっさりしすぎていると思われたらしい。気にせず二つ目の質問を行う義信

「二つ目・・・まあ、質問っていうより要求だが、強力な睡眠薬つてあるか？無味無臭なら少し弱くてもいいから。」

「まあ！！」

「ああ、気にしなくてもおまえたちに使うつもりはさらさらないぞ。」

信じられないといった目で見る万川集海を無視しつつ結果を聞くと頷いたためあるのだろう。

「それをくれないか？さつきも言ったとおりお前たちには絶対使わないから。」

数度視線を動かす万川集海。そして頷き了承する。

「よし！！じゃあ、最後の質問だ。俺に仕えないか？給料も待遇もそっちの要求に答えられる範囲はこたえるから。なにせこの乱世。」

乱世じゃなくても一に人材、二に政治、三に武力か財力だからな。」

勝千代こと晴信が居たら「二は武力だろう！！」と言ってきたに違いない。それでいて政治力も高いのだから虚実が入り混じった完璧な戦国大名だから始末が悪い。

（まあ、人間味があるから悪友のように取っ付きやすいとは思うが・・・、）

「で？どうだ？って口が利けないんだっとな。やれやれ・・・」やりすぎだな。と思ったが筆と紙を取り出して万川集海に筆をくわえさせて書いてもらうことにした。

「じゃ、要望を書いてくれ。」

逆さづりにされながら首を器用に動かしながら文字を書いていく万

川集海。

『忍びはいるのか』

「一人いるぞ。お前と年は変わらないやつが。」

『ならいらないだろう?』

「いや、一人だと応用が利かないし、なにより私的に使える部下がほしいんだよ。」

『使いつ走りつて事か』

「その分つて言ったら何だが・・・自由は利くぞ?やめたくなくなったらさつさと置手紙さえおいてくれればやめていい。」

『正気とは思えないな。それに使者を務めるとはいえ甲斐の国だ。それほどの給与も出せない。』

その一文に義信は、いくらもらっている?と問う。すると相手は『五貫だ。』

「ならその五倍払おう。つまり二十貫だ。出来高で上げてもいいぞ。」

『・・・たかが忍び風情に・・・正気か?』

おうよ。といわんばかりに胸を張ってうなづく義信。それを見て啞然として筆を落とす万川集海。落ちた筆を拾おうとする義信だが筆を取ったその瞬間。スパーンと気持ちのいい快音を立ててふすまが開け放たれて式神の舎が入ってきた。

「どうした?」

『た、大変で・・・、これは何事で?』

あわてて何かを言おうとしたが忍びが逆さづりにされた状態を目にして何事かと聞いてくる。

「ああ、気にしなくても良いぞ。ちょっと勧誘しているだけだからな。で?」

『で?とは・・・』

「・・・何か用があつたんじゃ?」

首をひねる舎を見て大きなため息をついて頭に手をやる義信。

「やれやれ・・・あわててきたんだから何か用があつたんだろ?」

『おお！！そうでした。主が呼んでおりますので至急お越しく
ださ
いませ。』

腕を引いて思いつきり引つ張り自身の主の場所に連れて行く舎。

「ちょ、ちよっと。」

あっという間に部屋から連れ去られる義信。そして万川集海だけが
部屋に残された。

夏桀殷紂（後書き）

年末年始・・・休みがないぜ。こん畜生が！！と、言うわけで仕事
事がひと段落着くまであまりかけません。・・・かけなくなると調
子に乗らないんだよなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3434x/>

武田信玄の欲望

2011年12月29日04時50分発行